



永遠の心 -The Heart of Eternity-

著: 焰火 紅  
ほむらび  
くれない

目次

Prologue.....	5
第一章 天界.....	6
第一節 歪曲 <small>わいぎく</small> .....	6
第二節 月舞 <small>つきまい</small> .....	8
第三節 知友.....	9
第四節 史籍.....	13
第五節 僅少.....	15
第六節 紅月 <small>こうげつ</small> .....	18
第七節 奔競 <small>ほんきやう</small> .....	23
第八節 狂騷.....	25
第九節 密語.....	28
第十節 格子.....	29
第十一節 懷矜 <small>かいきやう</small> .....	32
第十二節 愚直.....	34
第十三節 欺瞞 <small>ぎまんと</small> .....	35
第十四節 神意.....	39
第十五節 恋闇.....	40
第十六節 墮天 <small>だてん</small> .....	43
第二章 人間界.....	45
第一節 追懷.....	45
第二節 雷霆 <small>らいいてい</small> .....	45
第三節 純真.....	47
第四節 邂逅 <small>かいこう</small> .....	48
第五節 脆弱.....	51
第六節 葬列.....	54
第七節 思惟 <small>しゆい</small> .....	57
第八節 明眸 <small>めいぼ</small> .....	57
第九節 返照.....	58
第十節 花葩 <small>かば</small> .....	60
第十一節 死毒.....	62
第十二節 狡猾.....	65
第十三節 饗宴.....	68
第十四節 零雨.....	71

第十五節	相違	74
第十六節	慟哭	77
第十七節	昇陽	79
第十八節	漂揺	81
第十九節	際涯	84
第二十節	懷抱	87
第二十一節	纖手を取って	89
第二十二節	至幸の協奏曲	91
第二十三節	閃光	92
第二十四節	星奔	95
第二十五節	決然	97
第二十六節	光翼	101
第二十七節	澄月の恋舞	105
第二十八節	寒花	107
第二十九節	星石	112
第三十節	華兄	116
第三十一節	永遠の約束	120
第三十二節	残夢	122
第三十三節	欠片	123
第三十四節	憎嫉	124
第三十五節	無音の狂奏曲	126
第三十六節	The last smile	131
第三十七節	光芒	134
第三十八節	薄明	138
第三章 獄界		140
第一節	深淵	140
第二節	抹滅	140
第三節	智慮	143
第四節	驕恣	145
第五節	灼紅	146
第六節	苛烈	147
第七節	老獍	149
第八節	血脈	152
第九節	觉醒	155
第十節	宿世	158

第十一節	默示	160
第十二節	交睫	161
第四章	新世界	164
第一節	流転	164
第二節	蠟書	166
第三節	幻夢	168
第四節	籌策	171
第五節	傾慕	174
第六節	錯綜	176
第七節	蕩揺	179
第八節	樹下	179
第九節	雪華舞う	181
第十節	永続	183
第十一節	耳語	185
第十二節	蹶起	186
第十三節	磔柱	187
第十四節	末裔	189
第十五節	英傑	191
第十六節	蒼の輝耀	193
第十七節	奔星	196
第十八節	雫	199
第十九節	霹靂	200
第二十節	慧智	203
第二十一節	氷華	206
第二十二節	皎月	208
第二十三節	孤高の双極	211
第二十四節	始終	215
第二十五節	心魄の衝撞	219
第二十六節	The Heart of Eternity	224
Epilogue		228

## Prologue

「雪が降りました。貴方達を喪ってから、初めての……」

焰のように赤い髪と、揺るぎ無い信念を宿した碧眼を持つ青年が、ゆつくりと、流れるように言葉を発した。

「私達は幸せです。貴方達がいてくれたから」

滑らかで光沢のある金髪を風に靡かせ、この世の闇を超越したかのような、気高い目で空を仰ぐ少女が青年の言葉を継ぐ。

彼等は、粉雪が舞う夕刻の丘で寄り添い、大切な人達へ言葉を届けているのだ。今は居ない、しかし、心の中で生き続ける人達へ。

二人はギュッと手を握り合い、丘の麓の街に目をやった。良質な鉱石の採掘、加工を生業とする、少女の生まれ故郷に。

懐かしさ、愛おしさ、哀しさ、入り乱れた感情が彼等の顔を彩る。それらの一つ一つが、彼等の歩んだ道の記憶。そして心に刻まれた想い。

二人は、心中で祈りを唱えた後、互いに目を合わせて頷いた。

「私達は誓います」

「永遠が始まったこの丘で」

青年と少女の言葉に相槌を打つかのように、青白く輝く月に照らされた雪華が、彼等をそっと包むように舞い落ちる。透き通るような静謐が、世界を覆った。

そして、彼等は喪った人達を思い浮かべて、声を揃えた。

「貴方達が願った夢を、永遠に紡ぎ続ける事を」

星が煌き始めた。あの人達が居た頃と何も変わらない、淡い光を放つ数多の星々。

『The Heart of Eternity』

始まりは、二百一年前に遡る。

第一節 歪曲<sup>ひんまぐ</sup>

第一章 天界

「判決を下す！」

十二月三日。冬の始まりを告げる冷たい風が肌を刺す、午後九時。狂気染みた甲高い声が、広大な室内に響き渡った。

此処<sup>ここ</sup>は、神が統括する「天界」の中核、「神殿」の一階にある大礼拝堂。埃一つ無く磨かれた大理石の内壁、風に靡かない特殊な「神術<sup>しんじゆつ</sup>」を施された燭台<sup>しゆたい</sup>が特徴的である。神術とは、天使が精神エネルギーを用いて使うあらゆる術を指す。

そして、声の主は、神官ハーツ。神が天使の前に姿を現さない現在、実質的にハーツが天界の最高権力者である。天使の寿命が平均一万年という現代、七千五百九十九歳という高齢でありながら、肌と声には張りがあり、衰えを感じさせない。

自己に陶醉している、神官の歪んだ顔を一人の青年が睨み付けた。鋭さと温かみが並存した、端正な顔。コバルトブルーの大きな瞳。そして天界で唯一の、真紅に染まった滑らかな髪。一見すると、髪が少し短めの女性と見紛う彼は、一万席ある観客席の最前列に座り、強く拳を握り締めている。

「(神官ハーツ……、お前はどれだけ罪深い裁判を行えば気が済むんだ)」

彼は激しい怒りを噛み殺していた。そうしなければ、今にも立ち上がり、神官に剣を向けるだろう。自分の爪が掌に当たり、血が滲み出る。自分の髪の色と同じ鮮紅。その時、神官が言葉が続けた。

「被告クロムは、聖歌隊の隊長という輝かしい身分でありながら、神への忠誠を忘れ、そればかりか神を冒瀆<sup>ぼうとく</sup>した罪により、『魂碎断<sup>こんさいだん</sup>』に処す！」

クロム。彼は青年の育ての親である。その親が今、理不尽な裁判により、魂を砕かれようとしているのだ。魂を砕かれた者は転生が出来ない。天使達は例え死んだとしても、魂がある限り、記憶は失うが何度でも生まれ変わる。転生は天使の権利であり、幸福であると考えられている。よってこの刑は死刑よりも重い刑で、「墮獄<sup>だじやく</sup>」という魂を「獄界<sup>ごくかい</sup>」へ随とす極刑の一步手前の刑である。青年はこの言葉を聞いて我慢が出来ず、立ち上がった。

「待って下さい！ クロムさんは、神への賛美歌の歌詞を『一言』間違えただけです！」

青年の声で、神官の顔に戸惑いが浮かんだ。だが、それは直ぐに消え、冷徹な微笑が浮かぶ。ゆっくり、だが迷いの無い声で、神官は語りかける。

「ルナリート君、君は天界一優秀な生徒であるというのに、口答えとは感心しませんねえ。君の頭脳なら、私の裁きが正しい事を瞬時に理解出来る筈<sup>はず</sup>ですが。まさか、君も死にたいのですか？」

私を見据えて、ニヤツと笑う神官。頭に血が上り、私は無意識に剣の柄へ手を伸ばす。

「やめろ、ルナ！ 俺に構うな」

クロムさんの声が礼拝堂に響く。彼の目は、私に強く訴えかけていた。生きる、と。

「ルナー、座って！」

金色の、腰まである長髪を首の辺りでシルバーのバレッタで留め、蝶のような羽を震わせる、「天翼獣」のリバレス。彼女も、私の右肩の上で労わりと強さを湛えた蒼い双眸を見開きながら、私を落ち着かせようと声を上げた。

言いたい事も言えない、束縛された世界なら神官に逆らって殺された方がまだ、と思う事もある。だが私は……、此処で殺される訳にはいかない。私には為すべき事があるからだ。悔しさに齒軋りしながら、私は席に座った。

「神官ハーツ様、天使ルナリートは、勿論貴方の教えを理解しています。その証拠に、彼は着席しました。どうぞ、裁判を継続して下さい！」

透き通るような白い肌、上品にウェーブがかかった髪、そして誰もが羨望する美しい顔のジュディアが、私に責任が及ぶのを恐れて裁判の続行を促した。

「そうですね。聡明なるルナリート君が、私に逆らう筈がありません。裁判を継続します！ 宜しいですね？ ルナリート君」

満足そうに、薄気味悪い笑みを浮かべ、こちらを見るハーツ。彼を止められる者は誰もいないのだ。私は涙を浮かべて、頷いた。

「善良なる天使の皆様、判決は即座に執行されます！」

そう叫ぶや否や、白い甲冑を着た、神官の親衛隊八人が、クロムを透明な球形の拘束具に押し込めて、神術による封印を施した。

クロムは拘束されながらもルナや、自分の家族に微笑んだ。自分がこれから消える事を恐れていない訳では無い。唯、彼は自分の大切な人に笑って生きて居て欲しいだけなのだ。

ルナは彼を直視出来なかった。身寄りの無かった彼を、三百年間育ててくれた彼の死を目の前で見る事に耐えられなかったからだ。

そして、刹那の間を置いて、ハーツが声を張り上げた。

「神よ……、この不浄なる者の魂を、『永遠に』滅します！ 怒りを鎮めたまえ！」

ハーツが、その言葉と共に、純金と寶石が散りばめられた豪華な杖を振り上げた。その瞬間、杖に凄まじい光熱が集まる。大礼拝堂そのものを焼き尽くせそうな程の。

そしてハーツは、冷笑と共に杖を振り下ろした！

「うわああ……！」

耳を塞いでも聞こえて来る、痛烈なクロムさんの最期の声。私は、彼の痛みを忘れない為に、顔を上げた。

拘束具ごと、光熱の刃に裂かれ、少しずつ彼の体は蒸発していく……。その後には、破

片も血液すらも残らない。彼の全てが爆音と共に消えた時、魂も消滅した事を知った。

「(クロムさん……、貴方を救えなくてごめんなさい。貴方の為に、今まで無念の中で殺された天使達の為に、私は誓います。勉強を積み、『神官』となり、この世界を変える事を!)」

私は、流れる涙を拭う事も無く、クロムさんの最期を目に焼きつけ、誓った。自由を許されず、神官の気分一つで命が奪われる、誤った世界を正しく導く事を。

処刑の余韻が消えた後、上機嫌のハーツが、高らかに叫ぶ。

「善良なる天使の皆様、罪人は葬られ、私達には再び安息が訪れました! 神への賛美の歌を歌いましょう!」

その掛け声の直後、聖歌隊が一音の狂い無く歌い始める。だが、その声には一切の感情が籠もらず、譜面通りの音を出しているだけだ。彼等の顔に浮かぶのは、唯、恐怖。

「神を称えよ 神を崇めよ 我らが絶対なる神を

神は光 神は全てを創られた

我々には神を除いて何も必要ない

全てを捨てて神に従え……」

虚しく響く旋律と声。天界は奏でる。潔癖なまでに定められた法通りの日常を。そして、不変の明日を。

## 第二節 月舞

先刻の裁判を終え、ルナとリバレスは部屋に戻った。

彼等は同室で暮らしている。通常、学校に入った天使は一人で暮らすのが、ルナはリバレスの保護者なので、同室なのだ。リバレスは生まれた時から二百二十四年間、ルナと一緒に暮らすのは、神殿の四階南側、特待生宿舎の一室である。天使達の住居は、全て神殿の中にあり、総戸数は八千戸。その内、特待生宿舎は五百戸であり、学校や仕事に於いて成績が優秀な者しか居住を許されない。ルナは、千歳の誕生日に学校に入学してから八百二十六年間、常に成績がトップであり、特待生宿舎以外に住んだ事は無い。

隣室には、ジュディアが住んでおり、今日も彼女が弾くピアノの旋律が響いてくる。

時刻は夜の十時半。ルナは無言で、窓の外で燦然と煌く、月と星々を見ている。数分後、彼は振り返り、物憂げな表情で呟いた。

「……クロムさんは、何も悪くなかった」

その言葉を聞いたリバレスは、部屋を飛び回り、ルナの眼前で止まった。

「ふー……。ルナの気持ちは解るけど、殺されるような無茶は止めて欲しい。ルナは、わたしの親も同然なんだからねー」

確かにそうだ。彼女の声には、心の奥底から響く心配が込められている。私は、彼女を捕まえて、肩の上に乗せた。そして、泣きそうな顔をしている彼女の頭を撫でて言う。

「ごめん。心配かけて悪かった」

「ルナが死刑になったりしたら、わたしの居場所が無くなる事も忘れないでねー！」

「ああ、忘れない」

正直自信が無い。

クロムさんにも誓った通り、私は神官になるつもりだ。だが、再び自分の大切な人がハーツによって殺されるなら、私は自分を抑えられないだろう。

しかし、私が死ねば身寄りの無いリバレスは天涯孤独となり、生きてはいけない。彼女は、この世界に生を受けたと同時に、母親を失っている。父親は消息不明だ。彼女の存在のお陰で、私は今まで感情の奔流ほんりゅうを止める事が出来たのだ。

生まれた時に草叢くさむらで大泣きしていた彼女、今も変わらず泣き虫な彼女、だが私を支え理解してくれる彼女。そんな彼女を苦しめたくは無い。

そんなルナの葛藤を見透かしてか、リバレスは努めて明るく振舞う。

「ふわあー……。今日は疲れたし、もう寝ましょーよ」

「そうだな。その前にE S Gを飲まないとな」

E S G (Energy Sphere of God) は、天界で生きる者全てのエネルギー源で、直径1cm程度の透明な球体である。彼等は祭事の酒を除いて、E S Gと水しか摂取しない。

二人は、その二つを摂取した後、それぞれのベッドに入った。

リバレスは即座に眠りに就いたが、ルナは数時間、寝付けなかった。

### 第三節 知友

「眠い……。眩しいなー」

やっぱ朝は苦手。薄目を開けると、ルナは既に学校へ行く準備を終えていた。ああ、もう直ぐ起こされる。わたしがルナより早く起きたのは、今までの人生で数回しか無い。

ルナは、窓辺に置かれたルナ草に水をやっている。満月の夜には白い花を、蒼い月の日には蒼い花を、そしてレッドムーンこうげつ(紅月)の日には赤い花を咲かせる事から、その草はルナ草と呼ばれるようになった。ちなみに、このルナ草には、「フリーダム自由」っていう名前が付けられている。ルナらしいわ。

朝陽に照らされる、ルナの赤い髪と、背中に畳まれた純白の翼、そして右手中指に光る「天使の指輪」が眩しい。天界で赤い髪を持つ天使はルナしかいない。その事を彼は気にしている。ううん、それだけじゃない。ルナは、記憶力も、運動能力も他の天使と全く違う。おおよそ「力」と名のつくもので、ルナが他の天使に負けるものは無い。彼の能力は文字通り「桁外れ」なのだ。

ルナがチラチラこつちを見ている。そろそろ諦めて起きよう。

「おはよー。ルナは相変わらず早いのねー」

彼は時計を指差した。うわっ、もう八時！

「早くしないと、ジュディアが迎えにくるぞ」

その言葉の直後、本当にジュディアの呼ぶ声が聞こえた。

「ルナ！ 早くしないと遅刻するわよ」

「解わかってる！ 一分待ってくれ！」

わたしを注視するルナ。言いたい事は解わかってるわ。

「一分で支度をしろと……。ルナはわたしに、なかなか酷な要求をするわねー」

「あと五十五秒……」

そう言われたリバレスは、大急ぎで自分専用の、直径三十cm程の丸鏡に全身を映し、着替え始めた。

「ルナ！ あっち向いてて！」

「はいはい」

顔を洗い、髪を梳とかし、いつものシルバーバレッタを留めた彼女は、ルナの肩に飛び乗った。

「はあはあ……。どう間に合ったでしょー？」

「ああ、何とかな。行くぞ」

二人は部屋を出て、ジュディアと合流する。

「相変わらずね」

ジュディアはルナに微笑んだ。ルナに会った彼女は嬉しそうで、今にも腕を組み出しそうな勢いだ。ルナと彼女は、千百年からの付き合いだ。彼女は、現在千九百四十四歳。ルナより、百十八年ばかり年上である。

当時、二人には友達がいなかった。ルナは、その能力故に周りの天使に恐れられ、ジュディアは、両親が高い地位にいた為、他の親が彼女に怪我をさせたりする事を恐れて遊ばせなかったからだ。二人は自然に友達となり、その関係は今も続いている。

「早く行きましょ。今日はテストの結果発表よ」

「そうか。そう言えばそうだったな」

「ルナは当然一位でしょうねえ。私も一度でいいから一位の座を奪ってみたいわ。でも、相手がルナじゃ、仕方ないわね」

ジュディアの眼差しには、憧憬とどろけいと少しの皮肉が混在している。わたしは正直、ジュディアを怖いと思う事がある。特に彼女の、自分より能力が低い者を見下す視線はゾツとする。彼女は容姿にも学業においても、絶対の自信を持っているからだろう。

わたし達は、いつも通り取り留めの無い話をしながら、二階の教室へ向かう。その途中、

一人の天使が駆け寄ってきた。精悍な顔で、体に贅肉は殆ど無く、鋼のような筋肉で覆われている彼の名はセルフアス。千八百六十六歳だ。

「ああ……。今日はテストの発表だぜ！一年の内、これ程不幸なことはねーよ！」  
諦めに満ちた痛々しい声。しかもその声は大きいので、周りの天使の注目を浴びる。

「相変わらず大袈裟だな。そんなにテストの結果が思わしくないなら、ちゃんと勉強しろよ」

ルナがセルフアスの肩を叩いて励ます。でも、セルフアスの表情は曇ったままだ。

「ルナはちつともわかっちゃいねえ！俺の心の痛み、勉強の辛さを！」

「も……。セルフアスは勉強になるといつもそれなんだからー」

わたしは苦笑しながら両手をひらひらさせた。そして、ジュディアが氷のように冷たい声でセルフアスに言う。

「あなたは、少しぐらい懲りて反省すべきね」

しかし、彼女の声を聞いた途端、彼の表情が明るく変化した。

「おお！ジュディアがそう言うんなら反省するぜ。よし、次のテストはルナに勝つ！」

何て解り易い天使なの。わたしは再び苦笑した。その心構えが次のテストまで続いてくれたらいいけど。

「まあ、私に勝つのもいいが今日のテスト発表を乗り越えてからだな」

ルナが意地悪に微笑んでいる。ルナがそんな事を言うのは仲の良い証拠。

「オーマイガッ！」

全身を震わせて、大袈裟に悲しみを表現する。本当、見てて飽きない。

セルフアスは、私達に続いてトボトボと歩き始めたけど、立ち直りも早かった。

「ルナ、俺は過去なんて気にしねえ。前進あるのみだ！次のテストを見てろよ！」

「解った。楽しみにしとくよ」

今度は意気揚々と私達の前を歩き始めたのだった。

二階には、教室が東西南北に五十ずつある。彼等は三人共、高等学部なので、北の教室である。学校は、初等学部・高等学部・学究院・天学院に分かれており、千歳の入学時から五百年毎に上の学校に移るのだ。高等学部は、千五百歳から二千歳までの天使が通う学校である。

神殿は一辺が5kmの建造物であり、中央が吹き抜けである。吹き抜け部分は空中回廊で繋がっており、ルナ達は三階から二階に降りる時は階段で、其処からは空中回廊で教室まで移動する。空中回廊は、随所に「転送」の神術が施されており、天使を特定の地点まで転送する。そのお陰で、神殿の南から北までの所要時間は約五分で済む。

三人は、いつもの教室の前に辿り着いた。人だけが出来ている。教室の前に、テストの結果が掲示されているからだ。

リバレスはルナの肩を離れて、掲示板を見に行った。すぐさま彼女は全員の名前を見付けて帰って来る。彼女がこんなに気楽なのは、彼女はテストを免除されているからだ。リバレスは、ルナと共に授業を聞いているだけである。

「みんな、心の準備はいい？」

場の空気が張り詰めるのを感じる。本当に、自分が天翼獣で良かったと思う。皆が頷くのを確認してから、わたしは発表を始めた。

「まずルナからねー。ルナは八百人中、一位！ 千点満点中、九百九十九点ね」

ルナは無表情で頷いた。神官を目指すルナは、一位以外許されないし、ルナが誰かに負ける所をわたしは想像出来ない。

「ジュディアは三位で九百五十五点！」

肩を落とすジュディア。この前は二位だったから仕方無い。

「セルフアスはー……、言っ方がいいの？」

「大丈夫だ、覚悟は出来てるぜ！」

「セルフアスは、八百位。百四十三点よー」

セルフアスはわたしの言葉の直後、前のめりに倒れた……

彼を担ぐルナ。教室へ入ろうとしたその時、後ろから声が響く。

「ははは、みなさんご機嫌よう。ジュディアさん、三位への転落……、残念です。そして、セルフアス君は相変わらずですねえ！」

満面の笑みを浮かべての嫌味。細身で病的な程色白く、黒縁眼鏡をかけた、男にしては長髪の彼はノレッジ。彼の成績は二位で九百六十八点だ。

「ノレッジ、てめえ！ テスト発表の日だけは強気になりやがって！ チキシヨー……」

セルフアスはルナから離れ、逃げるように教室に入った。それを見届けて、ノレッジはこちらに視線を移す。

「普段僕は目立たないんだから、この場くらいはいいでしょう？ ルナリート君には、また完敗ですけど」

彼は溜息を吐きながら、眼鏡を右手人差し指で押し上げた。

「私がこんな奴に負けるなんて……。ルナなら許せるけど、ノレッジは許せない！」

彼女はノレッジをキッと睨み付け、そう叫んだ。

「こんな奴とは失敬な。僕が君に勝ったのはね、実力ですよ！ じ・つ・りよ・く！ いずれは、ルナリート君にも勝ちますけどね」

「くっ……。覚えてなさいよ！ 次は絶対に……、絶対に負けないから！」

ジュディアは、そう捨て台詞を吐いて、悔しそうに教室の中へと消えていった。

わたしは、この険悪なムードを打破する為に、ルナに耳打ちする。

「放っというていいのー？」

「一位の私が何を言っても、余り説得力が無いだろ？」

確かにそうだ。火に油を注ぎかねない。でも、ルナはゆっくりとノレッジに近付いた。

「ノレッジ、言い過ぎだぞ」

「確かに今回は僕の言い過ぎかもしれないね。でも、年に一度くらいは良いじゃないですか？ 僕の取り柄はテストなんだから」

悪びれた様子もなく反論するノレッジ。ルナは、そんな彼を睨む。

「自慢するのは構わない。でも、相手に不快感を与えるのは駄目だ。私達は友達だろ」

「……そうですね。後で謝っておきます」

「よし、そろそろ授業が始まるし、教室に入ろう」

ノレッジは理知的な天使なんだけど、たまに言う趣味がねー。

授業は、午前九時から、午後八時までである。一日に十教科の授業があり、昼以外に休憩は無い。教科は、「神学」、「歴史学」、「生活学」、「神術学」、「聖歌学」、「言語学」、「法学」、「統治学」、「兵法学」、「戦闘実技」で科目は高等学部には在学中は同じだ。

全ての授業は、「神」への忠誠心を養う事が最重要課題であり、次に重要視されるのが思想の画一化である。思想の画一化には、生活方法や思考方法までもが含まれる。

ルナはこれらの授業を嫌う。現存するかどうかも怪しい神を信仰し、思想までもが統一される教えは、生まれ落ちた一つの生命として求める自由に反しているからだ。

理由無く学校を休めば、神官に処刑される。ルナが学校に行くのは、自分が神官になる為の手段に過ぎないのだ。自由を拒絶される世界を変える為の。

#### 第四節 史籍

授業の二時間目、「歴史学」。もう直ぐ、いつもの合同朗読が始まる。ルナは一言一句暗記しているので、教科書を開いていない。

教師の合図と共に、ルナは目を閉じて暗誦を始めた。

遙か……、それは永劫の狂気。否、深淵なる久遠の闇。

光は色を持たず、物は形を持たず、唯、闇に浮かぶ一つの「存在」。内に、あらゆるものを秘め、止まったままの「存在」。それが動き出したのは、僅か百億年前の出来事だった。

百億年以上前には、「時」という概念は通用しない。何もかもが「無」であり、その「存在」だけが静かに胎動し、動き出す「時」を確実に待っていた。

そして「時」が始まった。

「存在」に亀裂が入り、「光」と「物質」が止まっていた「時」を取り戻す為に、また闇を

拭い去る為に、無限に加速し「存在」から広がっていった。

「時」の始まりは此処からで、全ての「モノ」の原点が、生み出される事となった。

九十億年前。「存在」から生まれた「モノ」は宇宙を形成し、その破片の物質は眩い星々になったが、常に超高温の炎に覆われていた。その炎は、暗黒だった宇宙を照らす。まるで暗闇を恐れ、悲しき「無」の世界を忘却へ押し遣ろうとするかのように。

そのような状況の下、この星、つまり「惑星シエファ」も誕生した。

シエファは、現在の規模に至るまでの二十億年間、無数の星屑と、真紅の大气を取り込んだ。激しい悲鳴を上げて衝突する星屑と、真紅の衣に似た大气が当時の光景だった。

七十億年前。この頃、シエファは現在と同規模に至り、厚い大气によって、恒星S・U・N (Super Ultimate Nuclear star) からのエネルギー放射を遮り、表面温度を下げしていく。

無数の火山が、血の涙とも言える溶岩を流し、大地を形成した。厚い大气からは雨が降り、それが海を形成する。だが、星はまだ高熱な為、その海は常に沸騰していた。だがこの時点では、生物は存在不可能だった。

六十五億年前。時が満ち、世界の始まりとも言える、「運命」の瞬間が訪れる。

不毛の大地からは後に「神」と呼ばれる生命が、灼熱の海からは後に「獄王」と呼ばれる生命が同時に生まれたのだ。

「神」は周りの物質と、S・U・Nからの「光」を取り込み、驚くべき速度で成長と突然変異を繰り返し、やがては独自の意志を持つようになった。

「獄王」は、灼熱の海の成分を吸収していったが、「神」とは違い、「闇」を増幅させながら「神」にも匹敵する速度で進化し、やはり独自の意志を持った。

それでもこの時点では、両者はお互いに干渉される事もなく、「支配」という高度な知能までを発達させるには至らなかった。

二十億年前。星は温度を更に下げ、神と獄王以外の生命体も、次々に誕生する。大地には植物が生い茂り、海には多種多様な生物が生まれた。空は青く澄み渡り、海は透明な青色で、空と同化するかのようだった。

神と獄王は、究極ともいえる進化を遂げる。両者は、単体で子を作ることが可能で、誕生してからの四十五億年間、他の生物の干渉を受けず、二万回にも及ぶ世代交代と突然変異で、他の追従を許さない「力と知能」を身に付けたのだ。その知能は支配欲も生み出し、対立は此処から始まる事となる。

星の統治権を巡り、神と獄王は争った。その波紋は大地を裂き、海を割り、犠牲となった生物が世界を血で染め上げた。

戦いは数万年に及んだが、五角の両者は、力を削られただけであった。その後神は「天界」を、獄王は「獄界」を創り、離れて静かに生きるようになる。天界は、星の大地を削り空高く浮かべたもので、獄界は、星の大地と海を削り星の内部の空洞に沈めたものである。

元々彼等が暮らしていた星の表面は、「中界」と名付けられ、不可侵領域とされた。

五億年前。「天界」には「天使」という生命が創られ、「獄界」には「魔」が創られた。

天使は、神に似せられて創られたが、魔は獄王の思惑により、多様な形で創られた。

神や獄王には及ばないにせよ、高い知能を持つ天使と魔の一部は、未知の領域を開拓する為、中界への侵攻を企てる。だがそれらは全て阻止され、大きな問題には至らなかった。

百万年前。長らく続いた平和を、終焉しゆうえんに導く事件が起こる。

突如神が「戯れたわむ」で、獄王に断り無く、中界に「人間」という生命を多量に創ったのだ。当然、獄王は激怒し、「中界」を制圧する為、魔を送る事となる。

現在。魔の攻撃にも関わらず、人間は数を増やし続け、その数は天使と魔の総数の数倍にも及ぶようになった。人間に満ちた中界は、「人間界」と呼ばれている。

天使の役目は、天界を守る事である。天界に、人間や魔の侵攻を許してはならない。また、有事の際は神に従って戦わねばならない。

## 第五節 僅少

午後八時十五分。ルナ達は授業を終えて、神殿の北五百mにある噴水広場の前に集まった。メンバーはいつも通り、ルナ、リバレス、ジュディア、セルフアス、ノレッジである。

ノレッジは昼休みに、ジュディアとセルフアスに朝の事を謝った。そのお陰で、五人に険悪な雰囲気は無い。

「それにしても、今日も一日長い授業だったよなあ」

セルフアスは遣る瀬無い様子で溜息をついた。苦笑するノレッジ。

「セルフアス君、君は毎日同じ事を言って飽きませんか？」

「そんな事言ってもよお、毎日そう思うんだから仕方無いだろ？ 勉強は嫌いだぜ」

「セルフアス、次のテストはルナに勝つんでしょ。もう撤回？」

諦め顔をしているセルフアスに、ジュディアは微笑みつつも即座に喝を入れた。

「おう！ 次は頑張るぜ！ 俺がルナに勝ったら少しは見直してくれよな！」

「勝てたらね」

拳を振り上げるセルフアスと、笑うジュディア。セルフアスは益々調子に乗る。

「よし、次こそは俺の時代が来る。次のテストは満点だぜ！」

そのプラス思考と元気は、何処から来るのだろうか？ 羨ましい限りだ。

それにしても、セルフアスは、余程ジュディアに気に入られたらしいな。今の所、報われていないが。確かにジュディアは美しいし、私達には愛想も良い。だが、彼女は自分が見下している天使には冷たく、殆どの場合話そうともしない。もし、私の能力が彼女より下になる事があれば、私は彼女にとって友達では無くなるだろう。セルフアスは、唯一の例外である。彼のプラス思考を、ジュディアは評価しているのだろう。

「今日はどうする？ 十時まで」

私は皆の顔を見ながら、そう言った。私達の自由時間は、学校終了の八時から十時までの二時間だけだ。この貴重な時間は大切に使わなければ。

「ふっふっふ……。決まってるじゃねえか。四間巡りだぜ」

四間とは、力を司る間、神術を司る間、命を司る間、死を司る間を指し、それぞれに、力、神術、生命力、余命を測る装置がある。その装置を巡る事を四間巡りと言うが、厳密には余命を計る装置は使用禁止となっているので、四間では無い。

「成績が悪かったから、力と生命力で僕達に勝ちたいんですね」

「ははっ、まあそんな所だ！」

四間巡りか……。『憂鬱』だな。まあいい、間に辿り着くまでの飛行を満喫しよう。

五人は、背中にある翼を広げ空へと舞い上がった。彼等の目に映る、神殿や下を歩く天使はとても小さい。空には、「紅い月」が浮かび、五人の翼を淡く照らしている。空を飛ぶ。この時が一番幸せだ。空に包まれていると、『心』は穏やかになり、解き放たれる。窮屈な世界の中で、私が生きている喜びを一番享受出来るのは、この瞬間なのだ。

私達は、噴水広場から北西に十km程飛行し、目的地に着いた。此処は、力を司る間。

大理石の外壁と柱、正門には天翼獣の一種である、獅子を象った彫像がある。

「まずは俺から行かせて貰うぜ！」

内部にある、測定装置へ駆け出すセルフアス。

「やれやれですね、セルフアス君は」

私達はゆっくと、内部に歩を進める。全員が間に入った、その時だった。

「ドーン！」

思わず耳を塞ぐ。まさか……。十本も倒れるとは！

此処の測定装置は、部屋の中央にある測定部位を殴り、その衝撃で倒れた大理石の柱の数を測定する。その結果が神術によって、空中に数字で表示されるのだ。今回表示された数字は十。一般の天使は二〜五なので、セルフアスの力の強さがよく解る。

「見たか、ジュディア、ルナ！ 力は俺がトップだろ？」

「ふうん、凄いわね」

ジュディアが悔しそうに舌を出す。確かに、私の前回の記録は、「力を抑えて」九だ。その後、ジュディアは六、ノレッジは二、リバレスは一という記録を出した。まさか、私の記録を超えられるとは。仕方無い。一度、本気を出してみるか。

「ルナ、怖気付いたんなら止めてもいいんだぜ！」  
「まさか」

目を閉じて右拳に力を集中する。熱い！拳が、否、腕全体が熱を持っている。目を開けると、右腕全体が神術の炎に包まれていた。私は、恐ろしくなり、拳を前に押し出す！

「ドゴン！」

耳を劈く轟音。そして、衝撃波！この部屋にいる天使は全て、床に倒れた。柱は全て倒れ、五十という数字が浮かぶ。つまり、測定限界値だ。

私は……、一体何者なんだろう。全ての天使の髪は金色なのに、私は赤色だ。テストだってそうだ。皆は勉強で苦戦するが、私は何もせずとも、千点満点を取れる。今回は、天界の教えにささやかな反抗を示す為に、わざと一問解かなかっただけだ。

その後、命を司る間と神術を司る間に行ったが、結果は同じだった。私だけが並外れている。まるで、違う生物かのように……。皆より高い能力が一つなら、それは取柄になる。しかし、全てなら孤独感に苛まれるのだ。

「もう帰ろう。やっぱり私は皆とは違う」

私は力無く笑った。

だが、束の間の沈黙の後、ジュディアは歓喜の声を上げた。

「流石はルナね！私が見込んだだけはあるわ。でも、神術はいずれ追い越すからね」

それから一呼吸おいて、セルフアスも口を開く。

「また目標が出来たぜ。俺も、次には力で測定限界を出す！」

「僕だって、テストで満点を取ればルナリート君と並びますからね」

友達はいいいものだ。私は心の中で、「ありがとう」と言う。

「みんなー、頑張ってルナを超えてよねー」

嬉しそうに、皆の周りを飛び回る。皆は強く頷く。私を超える事を困難と知りながら、これからも挑戦し続けてくれるのだろう。帰路に就こうと翼を広げたその時、セルフアスが叫んだ。

「あっ！俺は、ルナを超えられる事を一つ思いついたぜ」

「何だ？」

「あの噂、知ってるか？外出禁止時間の夜中に、『封印の間』正門前の泉から、コップ一杯の水を汲んで帰り、それを飲むと強くなれるっていう」

聞いた事がある。恐らく、高等学部の生徒で知らない者はいないだろう。だが、その噂

は出所が不明で、信憑性しんぴようせいに欠ける。もし、それを実行した者がいたとしても、決して他人には言えない。それがハーツに知られると、処刑されるからだ。外出禁止時間の外出は「死刑」、神が住まうとされている封印の間に近付くと「魂砕断」である。二つ同時だと、恐らくは「墮獄」……

「ああ、その噂は知ってる。誰も達成出来ていない事もな

「なら、話が早いぜ。ところで、今日は何の日だ？」

「レッドムーンですね」

「そうだ。レッドムーンの日是不吉だから、十時以降は「全ての」天使が外出しない。これが意味する所は？」

「警備兵も居ないって事を言いたいよね」

「正解！ ルナ、『勇氣ある』俺は、今夜『水を汲みに』行く。お前は、どうする？」

ニヤリと笑みを浮かべるセルフアス。つまり、度胸勝負という事だな。

「ルナ、止めて！」

「ルナの負けでもいいからダメよー！」

心配してくれる、ジュディアとリバレス。そして、ノレッジは……

「な……、何て恐ろしい事を……。ぼ……、僕は此処で失礼します！」

一目散に帰っていく。それも無理は無い。こんな事を話し合っているだけで、罪に問われても可笑しくないからだ。だが私は、セルフアスの真剣な眼差しを見て決意した。

「私は、勝負を受ける。セルフアス、命懸けの勝負になるな」

## 第六節 紅月こうげつ

午後十一時。神殿の北にある噴水広場から、封印の間の方向に走る三人の天使。一人は瘦身そうしんの男、一人は体格の良い男、そしてもう一人は華奢きゃしゃな女だ。彼等は、天使服の上に黒い外套そうしんを着ている。夜道で、遠くから発見されないようにする為だろう。天使服は目立つ。男用の天使服は、白いカッターシャツにグレーのズボン。女用の天使服は、白いブラウスにグレーのスカートだからだ。更に女用の天使服には、胸元に大きな白いリボンが付く。外套せたいの所為で解りにくいのが、良く見ると瘦身の男の髪は赤色。女の胸元のリボンも特待生の証である「赤色」なので、この二人はルナリートとジュディアだという事が解る。また、彼等と共に行動する体格の良い者はセルフアスしかない。

「付いて来る必要は無いのに」

ルナが、ジュディアと、彼女の「右手薬指の指輪」に話しかけた。

「私は、ルナが心配だから……。あと一応セルフアスもね」

「(わたしもー！ 保護者のルナがいないとわたしは生きていけないわよー！)」

リバレスは、天翼獣のみが使える神術「変化」で指輪の形状に変化し、ジュディアの右

手薬指に嵌められている。この状態の時は、言葉を喋れない為、「転送」の神術で言葉を直接相手に転送しなければならぬ。

「ルナ、間を取り囲む『森』から二人で競争して、先に水を汲んできた方が勝ちだ」

「了解。スタート地点は、今走っている石畳が、森に入る地点だな」

空には真紅の月。私の髪と同じ色だな。辺りは、不気味な赤色に染まり、他の天使は一人もいない。当然だ、皆命が惜しい。

百年に一度、十二月四日にレッドムーンは空に上る。この日は古来より、外に出れば災いが降りかかると言われている。しかし、私達は子供の頃、レッドムーンの日には遊んだ事があるが、「私達には」何も起こらなかった。寧ろ、五月蠅く注意する神官や、大人の天使が居ないので楽しく遊べたものだった。だが、あの日の事を私は一生忘れる事は無い。

千百年前の、十二月四日。あの時、私はまだ七百二十六歳だった。

今日も、「僕」は朝の八時に起きた。僕は、三百歳まではクロムさんの家で、それからはハルメス兄ちゃんと共に暮らしている。兄ちゃんも、僕と同じ孤児で、二千五百四十七歳。天界で、親が解らない孤児は僕達二人だけなんだ。

兄ちゃんの髪は、珍しい「銀色」。天使は年老いたら「灰色」になるけど、兄ちゃんの色はそれとは違う。僕と同じで、変わった色の髪を持つ兄ちゃん。それだけじゃない。兄ちゃんは、凄いい力を持っていて、四間巡りの測定装置全てで、測定限界値を出すんだ。僕も、他の天使よりも凄いい値が出るから、兄ちゃんの事は、本当の兄ちゃんだと思ってる。それに、勉強も天界でトップだから尊敬している。

「ルナッ！」

部屋の外で、二年前から友達になった、ジュディアの声が聞こえる。

「一緒に遊ぼう！」

「今行くよ！」

「気を付けて遊んで来いよ」

ハルメス兄ちゃんの声を背に外に出ると、顔一杯の笑顔のジュディアがいた。ジュディアのお父さんは、命を司る間の司官、お母さんは神術を司る間の司官らしい。彼女は「えりーと」って皆に言われていて、本人はそれを気にしてる。でも僕にはそんな事は関係無い。ジュディアは、僕の初めての友達だから。

神殿の南に五百m行った所には、「遊び場の森」がある。僕達がいつも通り其処で遊んでいると、突然意地悪そうな男の子に声をかけられた。

「何だ、お前男のくせに、女と遊んでやがるのか！ ノレッジ、どう思う？」

「ハハハッ！ 可笑しいですよ、セルフアス君！」

年の割にちよつと大柄な男の子、そしてそれに付き添う眼鏡をかけた細身の男の子。

「何よっ！ 私がルナと遊ぶのが、そんなにいけない事なの？」

ジュディアが僕を守ろうと、強気に二人の前に立ち塞がる。

「お前も女なら、他の女の子と遊べよ！ 俺は後ろの男に用があるんだ。どけ！」

セルファスっていう男の子が乱暴に、ジュディアを手で押しつけた。

「キャッ！ ルナ、逃げて！」

押しのけられて転んだジュディアが、僕を逃がそうと叫ぶ。でも、僕は何もしていない。ジュディアが、傷付けられるのが許せなかった。

「喧嘩は止めて仲良くしようよ！」

僕が叫んだのにも関わらず、僕はセルファスとノレッジに囲まれた。

「男のくせに、だらしのない事ばかり言いやがって！ その根性叩きなおしてやるぜ！」

そう叫んで、二人は僕に殴りかかった。でも……

「僕はみんなと仲良くしたいんだよ！」

僕は二人の拳を指一本ずつで止めた。僕には、皆と違って凄い力がある。それで、みんな僕を恐がって友達になつてくれないんだ……

ジュディアは親を、僕は僕のを恐れられて、ずっと一人ぼっちだった。きっと、この二人も僕を怖がるだろう。ところが……

「お前、強いな！ 友達になろうぜ！」

「セルファス君！ まあ……、セルファス君が言うんなら友達になりましょう」

「えっ、うん！ 友達になろう。でも、その前にジュディアに謝つてからだよ」

この後、二人はジュディアに何度も謝った。それで、僕達は仲良しになったんだ。勿論その事は、ハルメス兄ちゃんが学校から帰ってきてすぐ伝えたよ。

「ハルメス兄ちゃん、僕今日友達が二人も増えたんだ！」

「おお、ルナ！ それは良かったなあ！」

兄ちゃんも自分の事のように喜んでくれて、僕の頭を撫でてくれた。

「兄ちゃん、学校は大変なの？」

僕は、いつもより疲れた表情の兄ちゃんを見て、そう訊いた。

「そうだなあ、勉強は難しくないんだけど。やっぱり、自由を奪う教えは間違ってると思うんだ」

兄ちゃんは、いつもの通り僕に自由の在り方について教えてくれた。僕はそんな兄ちゃんの考え方が好きだ。話し終えた兄ちゃんは、ふと真剣な顔をした。いつもの優しい顔とは違った、迷いの無い顔。僕は思わず、背筋をピンと伸ばした。

「ルナ、この本と時計をお前にやるよ」

本の表紙には、「自由と存在」と書かれていた。兄ちゃんの書いた本。それに、大事に使

つっていた懐中時計。

「えっ、突然どうしたの？」

「……友達が増えた祝いだよ。そうそう、今から俺は出掛けるから、留守番を頼むぜ」

兄ちゃんの顔に、笑みが浮かんでいないのが気になったけど、僕は素直に喜ぶ。

「ありがとう、兄ちゃん！ 一生大事にする！」

兄ちゃんが出て行った後、僕は眠ろうとしたけど、友達が出来た嬉しさと、遅くまで帰って来ない兄ちゃんへの心配で眠れなかった。

懐中時計が、十一時を指していた。

「コンコン……」

微かにドアを叩く音がする。僕は、兄ちゃんが帰って来たと思ってドアを開けた。すると其処には、驚いた事にジュディアとセルフアスとノレッジが居たんだ。

「しいー……」

ジュディアが、口に指を押し当てて黙るよう、僕を促す。僕が頷くと、セルフアスが無言で手招きをした。僕達は足音を殺して、神殿の階段を下りる。

遊び場の森に着いて、ようやくセルフアスが口を開いた。

「今日はレッドムーンの日。外には誰もいないから、こんな時間でも遊べるぜ！」

「僕達はまだ学校に通っていないので、見付かっても裁きは受けませんしね！」

セルフアスとノレッジが笑う。ジュディアは胸を押さえて、深呼吸した。

「ああ、怖かった！ でも、夜に出歩くなって初めてだから新鮮ね！」

「うん、楽しかった！」

僕は、緊張感で兄ちゃんの事をすっかり忘れてしまっていた。

「ところでセルフアス、何をして遊ぶの？」

ジュディアが、目を爛々と輝かせてセルフアスに訊く。

「うーん……。せっかく大人達もいないし、『術比べ』をしようぜ！」

術比べは、森の外れにある、恐い姿をした「魔」の彫像に、「神術」をぶつける遊びだ。

「でも、僕は『神術』なんて使った事がないよ？」

僕は首を傾げる。神術は学校に行つて習うものだから、子供は知らない筈なんだけど。

「ルナリート君。神術は、精神力を集中して『結果』をイメージするものなんです。例え

ば、炎の初級神術である『焦熱』を使う場合は、集中して頭の中に炎を思い浮かべて、それを対象にぶつけるイメージと共に『Flame』って術式を描くんです」

と、ノレッジは得意げに語った。

「ノレッジは物知りだなあ。そんな事、全然知らなかったよ！ 皆は、神術を使えるの？」

「おう！ 俺は、初級神術の『落雷』を使えるぜ！」

セルフアスは自信満々で、自分の鼻をこする。

「私は、『氷結』の神術を使えるわよ！」

ジュディアも使えるんだ！ 名前からして、氷の神術だろうな。

「ふふん、僕は『衝撃』と『焦熱』の神術を使えますよ！」

ノレッジは、嬉しそうに笑みを浮かべながらそう言った。

その後、術比べが始まった。セルフアスの『落雷』は、魔の像から外れて地面に落ちたけど、二十cmぐらい抉えくれていた。

ノレッジの「衝撃」は像に命中して、コーンツ、ていう軽い音が鳴った。「焦熱」は、空中に握り拳の半分ぐらいの火の玉が出てきてびっくりしたなあ。

その後の、ジュディアの「氷結」。これは芸術的に凄かった！ 何せ、高さ二mもある像の全体に均一な薄い氷を張ったんだ！ きっとジュディアは、天界で一番の「氷使い」になれるんじゃないかな？

そして、僕の番がやってきた。生まれて初めて使う神術……。大丈夫かな？

僕は、頭の中に炎を浮かべてみる。すると、何だか不思議な感覚に襲われたんだ。その炎は、初めは蝟燭ろうそくの火ぐらいの大きさだったのに、目の前まで真っ赤になるくらいに凄いや炎になった。その後、像にぶつけるイメージを作ると、勝手に術式が浮かんできたんだ。

「Deadly Flame」

その式が浮かんだ瞬間だった！

「ゴオオ……！」

大人の天使よりも大きな火の渦が、魔の像に直撃する！

「ルナ！ それは、高等神術の『滅炎』よ！」

みんな驚いて黙ってた。何で僕は、いつもこうなんだろう？ もっと、普通の天使に生まれたかったな……。僕が涙を浮かべていると、ジュディアが声を上げた。

「もう、ちよつとルナが凄かったからって！ 私だって、もう少し大人になったら高等神術ぐらい使うんだから！ ううん、究極神術だって覚えて見せる」

僕の事を思ってたかな？ それとも、神術で僕に負けたのが悔しかったのかな？ どっちか解らないけど、嬉しかった。

「そうですね！ 僕だって、大人になったら神術を極めますよ！」

「私は、ルナにもノレッジにもセルフアスにも負けないもん！」

その後、僕達はかくれんぼをして、朝陽の昇る前、外が真っ暗な内に帰った。皆と別れて、僕は自分の部屋の扉を開けようとすると、上の階から大きな声が聞こえてきたんだ。

此処は特待生宿舎で四階。五階は、神官と四間の司官の部屋の筈だけ……

「ですから……、なのです！」

ハルメス兄ちゃんの声だった！ 誰かと言い争ってる。僕は息を殺して、階段を上がる。

「成績が最优秀的な貴方が戯言ざれごとを……。『神の教え』が気に入らないと言うのですか？」

もう一つの声は、神官ハーツ様！ こんな時間にどうしたんだろう？

「私は、神の存在を否定しているのではありません！ 自由を奪い、思想の画一化を推し進める、『貴方が作った教え』が間違っていると云っているんです！」

兄ちゃんは、神官に反抗している！ 神官は一番偉くて、逆らっちゃ駄目なのに。

「いい度胸ですねえ。私に其処まで齒向かうとは。そうです、あの教えは『全て』私が作ったもの。迷える愚民を統制するには、自由を無くし、厳格な掟に従わせるしか無いのです。しかし……、この事実を知った貴方が、どうなるかは解っていますね？ 精々せいぜい、余生を樂しむ事だ」

不気味な笑い声を上げ、神官は去っていった。

神官の言葉の意味を、半分も理解出来ない僕は、直ぐに青褪あおざめた顔の兄ちゃんの元に泣きながら駆け寄る！

「兄ちゃん！ どうしたの？」

「ルナ、最後にお前に会えて良かった！ 俺は、居なくなる。多分、帰っては来れない」

「何処にも行かないでよ、僕には兄ちゃんが必要なんだ！ お願いだよおお……」

僕は、必死で兄ちゃんに抱き付く。兄ちゃんは僕の頭を撫で、ゆっくりと言ひ聞かせるように、話し始めた。

「よく聞け、ルナ。俺は明日からもう居ない。でも、俺はちつとも悲しくない。それはルナ、お前が居るからだ。お前は賢く、真実を理解出来る。だからお前が、いずれこの世界を変えてくれる事を俺は信じてる」

「やだよ！ 兄ちゃん、兄ちゃん……」

ハルメス兄ちゃんは、泣いていた。僕が見た、兄ちゃんの最初で最後の涙。

「ルナ。俺は……、お前を『本当の弟』だと思ってる。後はお前に任せるからな……」

それが、僕の聞いたハルメス兄ちゃんの最後の声だった……

## 第七節 奔競ほんきょう

「大丈夫だ。やっぱり今日は誰も居ない」

セルファスがルナ達に手招きした。彼は先頭を歩き、先の様子を調べていたのだ。いつもなら、石畳と森の接点にある監視台に兵が居るのだが、今日は不在である。

「勝負は此処からだな」

「おう、俺はいつでも準備OKだ」

彼等は顔を見合わせて頷く。ピリピリと空気が張り詰めている。

「私達は、此処で待ってるから気を付けて行ってきてね。特にルナ、お願いよ……」

ジュディアは美しく長い金髪を風に靡かせ、大きな瞳を不安に染めながら言った。

「解ってる。それに、私は負けるつもりは無い」

それに過敏に反応したセルフアスは、小声だが興奮しながらジュディアに言う。

「ジュディア、俺はこの勝負でルナに絶対に勝つ！ そしたら俺の事を認めてくれ！」

「はいはい。もしあなたが勝てたらね。万に一つも無いでしょうけど」

だが、ジュディアの反応は、いつも通り冷淡なものだった。そんな返事に対しても、セルフアスは嬉しそうに微笑む。

「よし、これでルナに勝って、ジュディアに褒めて貰うんだ！」

やる気が漲みなっているのが感じ取れる。そしてもう一人、私を心配するリバレス。

「負けてもいいから、無事に帰ってきてねー！」

私にとって、娘のようなリバレスの言葉が、一番励みになる。この勝負で一番大切なのは、無事に戻る事だ。途中、誰かに見付かつてはならない。

「それでは、二人共準備はいい？ ……スタート！」

ジュディアが叫ぶ！ 私達は同時に駆け出した！

森の入り口から泉までは、大体五百m程度ある。私達は、足場の良い石畳を走っている。三十秒あれば泉に着くだろう。左右には鬱蒼うつそうと茂る森。上にはレッドムーン。光は殆ど差し込まない。私はセルフアスの真後ろを走る。想像以上に速いな！

「セルフアス、いつからそんなに速くなったんだ！」

私の言葉など聞こえていないかのように、彼は更に加速する。私は、全身に力を込め、全力で石畳を蹴り始めた。バキバキツ、一歩踏み出す度に、足元が罅割ひびわれる。私はセルフアスを追い抜いた！ 付いて来れまい。

「うおお……！」

振り返ると、彼の顔は真っ赤で全身が熱を発している。熱気がこちらまで届く！

「負けられねえんだ！ 俺は、ジュディアに、認めて貰うんだ！」

彼は問いには答えず、息を切らせながら、呪文のように叫んだ。

距離が離れないまま、泉が目の前に迫る！ 私とセルフアスは、ほぼ同時にコップを泉に沈めた！ その瞬間だった。

「カツ！」

泉が光り、水が触手のように変化した！ それが、私達を絡め取ろうとする！ 「ガシヤン！」、私はコップを落としたが、触手は上手く回避した。セルフアスも……、避けきれ

たようだ。

「ルナ、これは罠だ！」

「解ってる！ 恐らくは……」

「神官ハーツ！」

「逃げるぞ！」

全く、とんでもない。泉の噂を流したのは、「神官ハーツ」だったのだ！ 規則違反者を捕える為に。考えて見れば、「強くなれる水」は学生好みの餌だな。

「ちっ！ しつこい罠だな」

セルフアスが舌打ちする。泉から百mは離れたのに、まだ水が追って来るからだ！ だが、私達の方が速いので、このまま逃げ切れそうだ。

「セルフアス、勝負はどうする？」

「ふっふっふ！ これを見る」

彼の手にはコップ。しかも、ちゃんと水が入った。

「恐れ入ったよ。私は落としたからな。お前の勝ちだ。だが今は……」

「ジュディアに報告！ じゃなくて、捕まったら終わりだ。全力で行くぜ！」

私達は更に加速し、スタート地点間際まで戻って来た！

「ジュディア、飛べ！」

私は叫びながら、後ろを指差した。直ぐに状況を察した彼女は、即座に翼を開く。私達は一斉に飛び立った。

## 第八節 狂騒

「ふう……。此処まで来れば大丈夫だろ」

セルフアスが溜息を吐いた。神殿までもう、歩いて数分の距離だ。

「ああ、心臓が悪かったな。下りよう」

三人は翼を畳もうとする。だが、思うように体が動かない。

「あれ、何だか体が重くない？」

「俺の気の所為って訳じゃないみたいだな」

彼等は今、通常の十倍の重力を受けている。究極神術「重圧環じゅうあつかん」によって。彼等は地面に落ち、リバレスは変化を解除された。彼女は空を見上げ、叫ぶ。

「う、上！」

彼等は重い首を上げた。そして、最も望まない光景を目の当たりにする。

「さて、餌にかかった愚者は誰でしょうねえ……」

歪んだ笑み、突き刺さるような冷徹な声。「神官ハーツ」！  
全てが終わった……。私は、自分の心が絶望に満たされるのを感じた。

「この凶日に出かけるばかりでは飽き足らず、まさか『封印の間』に近付くとは。ねえ、ルナリート君、ジュディア君、セルファス君、そして天翼獣リバレス」

皆、俯き沈黙。それを破ったのはリバレスだった。少しでも罪を軽減する為に。

「……わたし達が、規定時間外に出歩いている罪は認めます。でも、『封印の間』に行ったとは断言出来ないんじゃないでしょうか？」

しかし、ハーツは不敵な笑いを浮かべて、セルファスの手元を指差す。

「セルファス君、君の持つコップの水は普通の水だと思えますか？」

コップの中で蠢く水……。それには、ハーツの神術が宿っているのだ。セルファスは蒼白な顔で、コップを落とした。……。どれだけ良いように考えても、死刑は免れないな。

「神官ハーツ様、どうかお許し下さい！ 私達は唯、神に祈りを捧げたかっただけです。

『封印の間』に近付いたのも、神のお近くに寄りたいが為です！ 全ての行動は私達の信仰心の顯れなのです！」

上手い事を言うものだ。それでも、ハーツの心が動くとは思えない。こうなったら仕方無い。私は……。もう、自分の大切な者を喪うのは……。嫌だ！

「神官ハーツ様、全てはこの天使ルナリオの責任です。皆を誘ったのは私です。どうか、私だけを処罰して下さい！」

「えっ？」

三人が一斉に、私の顔を見る。

長い沈黙……。考え込むハーツ。そして無限に思える時間の後、ハーツが口を開いた。

「……成る程、事情は解りました。全ての天使の中で、最高に優秀なルナリオ君の誘いで出歩いたのなら、規則違反はあっても、天界の秩序を乱す事は無いでしょう。だから、今回は特別に見逃してあげましょう。しかし、次は無いと思いなさい！」

重圧環を解かれ、意外な言葉に顔を見合わせながらも、私達は歓喜の声を上げた。

「はい、ありがとうございます！」

ハーツは呆気ない程早々に立ち去ったが、死ぬ思いをした私達は無言で帰路に就く。まだ皆は恐怖に震えているようだ。私は……。安堵と共に、無念を感じていた。あのまま、私だけが捕まっていれば……。暫く歩いていると、前を歩くセルファスが振り向く。

「おい、ルナ！ あんな事を言っただけで、どうするつもりだったんだ？」

彼は、顔に怒りを滲ませ、私の肩を揺すった。

神官になって、世界を変える。それは、皆にも言ってきた事だが、その根底にある私の

思いの全ては、話した事が無い。今が……、話す時だろう。

「私はお前達を信頼している。だから、全てを話そう。何も言わず、聞いてくれ」  
皆、ゆっくりと慎重に頷く。私も頷き返し、全員と目を合わせてから口を開いた。

「私はこの天界に疑問を持っている。『神』という見えない観念に縛られ、全ての天使が自由を奪われているからだ。神官や学校の教師達は、『神官の造った規則』で私達を縛り付け、それを一つでも遵守出来ない者は容赦なく処刑される。それが果たして幸せだろうか？ 私は決して、そうは思わない。『全ては神の教え、全ては私達の幸せの為』、それは偽りだ。

『全ては神官の教え、全ては神官の幸せの為』なんだ」

今まで押し殺してきた感情が激化する。私は全身が怒りに震えた。

「私と同様な思想を持った者は全て殺された。だが私は、自由な一生が欲しい！ 自由に考え、発言し、何者にも脅える事無き日常が！ その世界が実現しないのならば、私にとってこの世界は、生きながら死んでいるようなものだ！」

私を見詰める瞳が、驚きに染まって行く。

「さっき私が皆の為に犠牲になるような発言をしたのは、裁判の場で全ての天使に『自由の幸せ』を理解させたかったからだ。其処でもし、私が殺されても、必ず私の考えを継ぐ者が現れる。そして、いずれは天界に生きる者全てが、真の幸せを享受出来る時代が来るだろう！ それが叶うならば、私一人の犠牲など軽いものだ。そもそも、私は『神』の存在を認めていない。本当に存在するならば、こんな世界にはしない筈だ！」

私は、興奮を抑える為に深呼吸を繰り返す。苦しい程の沈黙が皆を包んでいる。

最初に反応したのは、ジュディア。紅潮した顔が震えている。

「ルナ！ 何を言ってるの？ 貴方はどんな天使よりも優秀で、容姿も頭脳も完璧なのに。唯一、私が認めた存在なのに。それをあなたは裏切るの？」

彼女は首を振りながら、自分の髪を掻き乱す。

「私はジュディアが思っている程、素晴らしい天使じゃないさ。解って貰えないなら……、それでいい」

突き放すような言い方だったが、仕方無い。私は、人の期待に応える為に生きているのでは無い。しかし、セルファスまで私の胸倉を掴む。

「俺もジュディアと同じ考えだ。お前は俺の友達だ。友達が、一生を無駄に散らせるなんて許せねえよ。お前は俺の目標だし、皆にも必要なんだ！ お前が死のうとするなら、俺は力づくで止めてやる！」

激しい口調。彼は本気だ。だが……、私も本気なんだ。

「セルファス、気持ち嬉しい。でも、私は自分の考えを曲げるつもりは無い」

私は、セルファスから視線を逸らさない。譲るつもりは無いからだ。

「リバレス！ お前も何とか言っつてやれよ！」

「……わたしには、ルナが大事な親だし、ルナの考えは尊重する。でも、死なせたくないのは一緒よ！ 今日はもう遅いし、わたしが部屋で説得するから、皆はもう帰って」「でも！」

セルファスとジュディアは同時に叫んだ。しかし、リバレスは態度を変えない。

「お願い！ わたしは、生まれた時からルナと一緒にだった。だから、ルナの事はわたしが一番よく解つてる！ 絶対、ルナは死なせないから！ 今日は……、ね？」

リバレスの言葉で、二人は渋々自分の部屋へ帰って行った。ジュディアは部屋へ入るまで、物言いたげに、何度も、何度も振り返っていたが。

「リバレス、ありがとう。お前だけだ。私を解つてくれるのは」

私は彼女の頭を撫でた。いつもは喜ぶ筈の彼女だが、しかめっ面のままだ。

「も……、普段は滅多に褒めない癖に。ルナの考えはよく解つたけど、それが神官に知れたら死刑じゃ済まされないのでよ！ 危険な行動は、ルナが神官になるまで我慢して」まるで、リバレスが私の親みたいだな。

「解つたよ、もう無茶はしない。ゆつくりと天界を変えていくさ……」

一朝一夕では変えられない現実。だから、生涯をかけるのだ。

そう、この時は本気でそう思っていた。

## 第九節 密語

午前二時だというのに、五階の「とある部屋」からは光が漏れている。真夜中過ぎの来訪者を迎えたからだ。この部屋を除いて神殿内は、静寂と暗黒に満ちている。あらゆる者が眠りに落ちている中、その一筋の淡い光は眩い。

耳を澄ませば、その部屋から押し殺した声が聞こえて来る。無音の静寂の中でその声は、何らかの強い意図を響かせている。

「それは……、本当なのですか」

興奮を抑えた声。だが注意して聞けば、その声には深い怒りと失望が込められているのが解る。

「はい。彼は天界の教えを否定しています。自由を束縛する教えに意味は無いと」

集中して聞かなければ、この声に逡巡しんそんが滲しみんでいる事には気付かないだろう。それ程、はつきりと迷いの無い声だ。

「成程……。非常に残念な話ですねえ。それで、君は私に何を望むのです？」

「彼を、処刑するのでは無く、ハーツ様の力で正しき道にお戻し下さい。彼は非常に聡明な天使。ハーツ様に指導頂ければ、彼は直ぐに目を覚ます筈です」

束の間の沈黙。神官ハーツは、頭脳をフルに回転させて、思索を巡らせているのだろう。「君の思考速度は大したものですな。恐ろしい……。君は、私が彼を殺すつもりが無い事も、いずれ私が『自分の側近』として彼を迎えようとしている事も見抜いている。そうでも無ければ、『君』が私にこんな話を出来る筈が無い」

聞く者を不快にさせる笑い声が響く。密告者は、自分の心中を読み取られた事に驚きながらも、安堵の溜息を吐いた。

「……ありがとうございます」

そう言っ、密告者はハーツの部屋を後にした。

ハーツは一人薄ら笑いを浮かべる。神官用の杖に埋め込まれた、宝石を指先で弄びながら。この宝石は「虹色の輝水晶」で、神術の効果を数倍に高める力がある。彼は、杖を翳し硝子の置物を空中に浮かべた後、炎で焼き尽くした。

「さっきの話が、本当でも嘘でも……。どちらでも構わない。ルナリート君が私のものになるという結末は変わらないのだから！」

歯を剥き出しにしての高笑い。彼は勝利を確信している。「学生」の知恵など浅はかなもので、先を越されるなど有り得ない。絶対的優位である。立場も、知恵も、力も。

その後、彼は眠りながらも、笑みを絶やす事は無かった。

## 第十節 格子

「ドンドンドン……!!」

乱暴にドアを叩く音。朝の静寂を打ち破るその音は、眠っているルナとリバレスを叩き起こした。時刻はまだ午前六時。格子窓から差し込む光は弱々しい。

「んー、何事ー？」

寝惚け眼のリバレスが呟いた。

「此処を開ける！」

暴力的な声が響き渡る。無視すれば、今にもドアを蹴破られそうだ。ルナは、十五秒で寝巻きから天使服に着替え、ドアの鍵を開いた。

「天使、ルナリートだな？」

白い甲冑の軍団。ハーツの親衛隊だ！ しかも全員揃っている。親衛隊は、剣術、徒手空拳、神術を極めた者達の集まりだ。下手に反抗すれば殺される。

「はい、私がそうです。何かご用でしょうか？」

「神官ハーツ様の命により、お前を連行する。いいな？」

神官ハーツが何故私を？ 思い当たるのは深夜の出来事だけが、それに関しては不問となった筈。

ルナは首を傾げていたが、有無を言わずに親衛隊の一人が、「拘束」の神術でルナの上半身を動けなくする。それとほぼ同時に、他の親衛隊がルナに剣を突きつけた。

「ちよつと待ってよー！ ルナが何をしたっていうの？」

「黙れ、天翼獣！ お前如きが親衛隊である我々に話しかけるな！」

くっ……。全く上半身が動かない。何て力だ。そして、何と言う傲慢さだ。ハーツの意図は解らないが、怒りが込み上げて来る。

「さあ、来てもらおうか？」

私を連行するだけならいい。だが、リバレスを傷付けたら許さない。そう心に決めた。

「リバレス、部屋で待ってる。これは何かの間違いだ！」

「嫌よー！ ルナが心配だから付いて行く」

リバレスは指輪に変化し、ルナの右手薬指に収まった。親衛隊は、天翼獣の挙動など気にはしない。天翼獣が何をしようが、即座に息の根を止められるからである。

神殿の地下一階。其処には、千人を収容出来る巨大な牢獄がある。普段、地下への入り口は閉ざされており、神官と親衛隊以外が地下に下りる事は出来ない。入り口を開き、階段を下りると、「取調室」があり、取調室奥の扉を開くと、其処は広大な牢獄である。

ルナは、親衛隊に囲まれ階段を下り、格子状の居住区を抜け、更に三階層の階段を下りた後、取調室に辿り着いた。

取調室には大理石のテーブルを挟んで、椅子が二つ。広さは五m四方と言ったところだろう。壁には剣や鞭などの武器、更には拷問器具までもがある。それらの共通点は、「どれも使用した形跡があり、夥しい血液が付着している事」だ。

薄暗く冷たい空気が流れる部屋で、ルナは背筋が凍る思いをしながら椅子に座った。向かいにはハーツが座り、二人を親衛隊が囲んでいる。

「さて、ルナリート君。君が此処に呼ばれた理由を知っていますか？」

感情の読めない目。狂気染みた口元……。ハーツの真意は解らない。ならば、下手に答えるのは得策では無い。私は、神官の考えを探る事にした。

「いいえ。こんな朝早くに、このような場所に呼ばれる覚えはありません」

その瞬間、ハーツは大きく目を見開いて、テーブルを「ドンッ！」と叩いた。

「嘘を……。吐いてはいけませんねえ。貴方は昨晚、「神の存在」と「神の教え」を否定した！ そうでしょう？」

一体誰が？ 確かに私は昨日、それをセルフアスとジュディアに打ち明けた。だが、二人が密告する事など考えられない。ハーツの血走った目は、私から目を逸らさない。彼が怒りに震えているのが解る。情報が少ない今、私は沈黙する事にした。ハーツの目を、誠意を込めて見返す。これが、現状私が実行出来る最善策だ。

物音一つしない取調室。だが、張り詰めた空気は変わらず、息を吸うのも苦しい。額の

汗が一滴、床に落ちた。その時、ハーツは突如満面の笑みを浮かべて、立ち上がった。

「そういう事ですか！ ルナリート君、『やはり君は』罪を犯していいのですね。私へ密告した者が、優秀な君を陥れる為に嘘を吐いたのでしよう！」

ハーツの豹変振りは異常だが、密告者が裁かれて、私が釈放されるなら問題は無いだろう。沈黙は正解だったという事だ。

「密告者を此処へ連れて来なさい。牢獄へ入れ、今晚処刑します」

親衛隊の一人が消えた。「転送」を用いて自分の肉体を密告者の所へ転送したのだろう。一体、誰が昨日の私を目撃したのだ？

「連れて参りました」

親衛隊が連れて来た天使は……、まさか！

非の打ち所の無い美しい容姿を持つ、完璧主義者の女天使……

「ジュディア！ 何故だ……！」

私は、驚きと失望の余り眩暈がした。辛うじて、机に伏せるのを堪える。

「貴方は間違ってる！ 天界で最優秀な貴方が、天界に背いてどうするの？ 貴方が『今の枠組み』さえ守れば、司官にだって、神官にだってなれるじゃない！ だから、ハーツ様に指導して貰おうと思ったのよ！」

紅涙と、悲痛な叫びが私の心を揺さぶる。私は……

「さて、ルナリート君。君はもう部屋に戻っていいのですよ。君は『何も言っていない』のですからねえ。君を陥れようとした、ジュディア君の最期……。お楽しみに」

ハーツ、そういう事か……。お前は、私がジュディアを見殺しに出来ない事を知っている。だから、私は自分の罪を認めるしか無いのだ！ 昨日まで、お前は私を殺す気は無かった。だが、私の発言は最早看過出来ないものとなり、殺す事にしたのだろう……

もし、此処で彼女を犠牲にすれば、私は放免される。だが、私はもう二度と胸を張って生きる事など出来ない。そして、私は神官に監視され続けるだろう。深い罪を背負い続け、今以上に自由を奪われる。

もう、「心」を否定されながら生きるのは嫌だ！

「神官ハーツ様！ 私は、神の存在と『貴方の教え』を否定しました。それは、紛れも無い事実です」

「(ルナー、何を言ってるの！)」

リバレスの声が脳裏に響く。だが、私はもう、真実に従うのみだ。迷いは消えた。最期の時まで、自由を叫び、戦ってやる！

紅潮するハーツの顔。その顔が、私の言葉の信憑性の高さを裏付ける証拠だ。

「失望しましたよ……。天使ルナリート君。其処まで、君が毒されているとは。憎きハル

メスの影響でしようねえ」

「ハルメス兄さん……！ 私は怒りの余り、目の前が真紅の炎に包まれているような感覚に襲われた。」

「貴様！」

私は神官に掴みかかろうとしたが、「ドガッ！」という音と共に、親衛隊の「衝撃」の神術で、壁に叩きつけられただけだった。私は、神官を睨み立ち上がる。しかし、直ぐに親衛隊が私を拘束した。

「君の裁判は、今夜九時より行います。それまで、自分の愚かさを精々呪うがいい！ 彼を牢へ」

言葉にならない、ジュディアの絶叫を背後に聞きながら、私は鉄格子の中へ放り込まれる。だが私は、取調室の扉が閉じられても尚、睨むのを止めなかった。

## 第十一節 懐矜

牢獄は凍て付く冷気で満たされている。この日、十二月五日は天界での冬に当たるので、寒いのは当たり前だが、牢獄の空気は「神術」によって冷却された人工のものである。牢獄には百の独房が存在するが、囚人は疎らである。ルナは、入り口に最も近い独房に入られた。今宵の裁判で、親衛隊が彼を直ぐに連れ出す為だ。

独房の入り口は鉄格子、周りは壁で、破壊されぬようどちらにも神術が張り巡らされている。どんな天使でも、これを破る事は出来ない。

薄汚れた灰色の壁には、黒く固まった血の爪跡が残っている。投獄された者は此処で拷問と暴行を受ける。その苦しみから逃れようと、壁に爪を立てるのだ。

ルナは無言だった。だがその瞳には、「決意」が燃え滾っている。

「……ルナのバカー！ バカバカバカ！」

リバレスが元の姿に戻り、全身を震わせて泣きながら叫んだ。まるで、体全体から感情と声を迸らせているかのようだった。

「お前には……、本当に濟まないと思ってる。だが自分の近しい者を犠牲にして、自由を完全に奪われてまで私は……、神官に従う事は出来ないんだ」

リバレスは私を必要としてくれていて。育ての親では無く、本当の家族として。彼女には親も、天翼獣の友達もいない。私が死ねば彼女は一人ぼっちだ。身寄りの無い世界で。

「それでもわたしは、ルナに生きて居て欲しいの！」

私の肩に顔を埋めるリバレス。私は右手で左の上腕を握り、下唇を噛んだ。幾らお前が泣いても……、私はもう後戻り出来ないんだ。

「……ごめんな。お前には酷な話だが、私は今夜死ぬだろう。驕りかも知れないが、私はお前の親として生きたつもりだ。そして、私はお前のお陰で楽しく生きる事が出来たと思

つてる。……ありがとう。私の最期の願いは、お前が『元気に生きる』事だ。生きてくれ、私の生き様を見届けて」

リバレスの泣き声が独房一杯に響く。私も……、涙が零れた。彼女の頭をそつと撫で続ける。それが今、私が唯一出来る事だから。

言葉も無く時間が流れる。私は懐中時計を取り出す。正午を十分回った所だ。普段なら昼休みだな。「ギイ……」、取調室の扉から光が漏れた。三人、こちらへ向かってくる。ジュディア、セルフアス、ノレッジだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……！」

号泣しながら駆け寄るジュディア。彼女の顔は、悲嘆と後悔に歪んでいる。

「何でだよ……！ 馬鹿野郎」

鉄格子を握り締め、その場に崩れ落ちるセルフアス。その瞳からは雫が溢れている。お前は……、私の誇れる親友だ。

「ルナリート君、僕は失望しましたよ。君は僕の目標だったのに、まさかこんな事になるなんてね」

私を見下ろすノレッジ。その顔に浮かぶのは侮蔑のみで、心配は無い。私が囚われた事に優越感でも感じているのだろうか？ 彼は常に私を目指し、勉強を積んで来た。目標である私が転落した事で動転しているから、と信じたい。

私は、三人を静かに見詰め、口を開く。

「私がこのような状況に置かれたのは仕方の無い事だ。誰も悪くは無い。悪いのは、個人から自由を奪う天界を造り上げた神官だ。私は裁判で、全ての天使に対して『自由の尊さ』を叫ぶ。それで、私の遺志を継ぐ者が一人でも現れれば、悔いは無いさ」

鉄格子が激しく揺さぶられた。髪を掻き乱すジュディアによって。

「ルナ……、貴方が居ない世界は、意味が無い！ 私は裁判で、何とか貴方を守って見せる！ それが私のせめてもの罪滅ぼしだから！」

「止めるんだ！ それで、罪がジュディアにまで及んだら、私が真実をハーツに話した意味が無いだろ？ これは私の戦いだ、自由な世界を勝ち取る為の！」

「でも、でも！ こうなったのは私の所為なのよ！」

「気持ちだけ受け取っておく。ありがとう。だが、黙って私を見守って居て欲しい。それが、私にとって一番嬉しい」

それでもジュディアは、何かを言おうとしたが、言葉にならないようだった。

死ぬというのは、どのような感覚なのだろう。ジュディア達が帰った後、私は考えていた。命を奪われた天使を、私は何度も見てきた。だが、当然の事ながら私は死んだ事が無い。命を奪われた者は、その感覚を他人に伝える事が出来ない。だから、死は未知だ。

震えている。寒さからでは無く……。死ぬのが怖いのだ。死ねば、私はどうなるのだろう。この思いは？ 死にたくない！ でも、天界を変える為には、死ぬしか無い。

私は愚かなのか？ 神官に従って生き、長生きする方が幸せだったのではないか？ 否、何も考えず惰性で生きる事など無意味だ。自己の考えを主張し、その結果待つのが「死」だとしても、その生には価値があるのだ。私は、死の恐怖を払い除け、決意を新たにしたい。

無心に時計の針を見詰める。すると、何故か今までの人生が最初から思い浮かんだ。

私は「封印の間」の正門前に捨てられていた。だから、両親を知らない。だが、私を包んでいた毛布に「ルナリート」と書かれていた為、私の名はその通りになった。その文字は、現在では使われていない「古代語」だったと言う。

生まれてから三百年、クロムさんに育てて貰い、その後はハルメス兄さんと一緒だった。

ジュディア達と友達になり、四人で遊んだ日々。自分が他人と違う事に悩みながらも、楽しい日々を過ごした。だが、兄さんが裁かれた後、私は天界を、神官を憎むようになる。

兄さんの考えを受け継ぎ、学校に入学した。そして、リバレスと出会う……

ふと肩を見ると……、リバレスの真っ赤に腫れた目が、こちらを見ていた。

「わたしは生きる。ルナに貰ったこの命を大切にして……」

「ありがとう……」

私達の間にはもう、言葉は必要無い。私は、彼女に微笑んだ。

後は、自分の命が尽きる刻まで、戦うのみ。

## 第十二節 愚直

「そろそろ来る頃でしょうねえ」

ハーツは、自室の華やかな掛け時計を見て笑みを浮かべた。時刻は午後三時十六分。

「コンコンコン」

遠慮がちなノックの音。やはり、予想通り。お前達の考える事など全てお見通しだ。

「どうぞ」

「失礼します」

ジュディア、セルフアス、ノレッジ。来ると思っていた。お前達に時間を与える為に、わざわざ三時から五時までの授業を休講にしたのだから。まあ、来なくてもこちらから迎えに行くつもりだったが。

「善良なる君達が、私に何の用です？」

「ハーツ様、大変失礼だと承知の上で申し上げます！」

ジュディアが私の前に跪く。セルフアスとノレッジも同様だ。実に気分が良い。物事が自分の思う通りに動くというのは。

「ルナリート君の事ですか？」

私は悲しみに曇った声と表情を演出する。

「その通りです！」

ジュディアアが続きを話そうとしたのを制止し、私は彼女達の間を誠意を持って見据える。

「彼を死なせたくなかったですか？」

「はい！　どうか、あいつを助けてやって下さい！」

「勿論無理には申しませんが、僕からお願ひ致します」

何故若者は、こうも単純なのだろう。思わず声を上げて笑い出しそうになるのを必死で堪える。

「場所を移しましょう」

私は、「転送」で自分を含む全員を、「会議室」へ移動させた。この会議室は、二階の「東図書館」の一角に秘密裏に作られたもので、「転送」でしか入る事は出来ない。また、完全な防音で、どんな話をして、誰にも聞こえない。部屋には大理石で出来た長方形のテーブルと、九つの椅子。本来は、私と親衛隊の会議で使うものだ。

「彼の命は、君達に係っています」

私は、無能な三人に解り易く話す事にした。私の完璧な計画を。

### 第十三節 欺瞞

「出る！　お前の命運は尽きた」

親衛隊の声が牢獄に響き渡る。ニヤニヤと笑いながら、ルナを取り囲む彼等。彼等は楽しくて堪らない。一方的な暴力には甘美な悦びがあるからだ。

「私は、逃げも隠れもしませんよ」

ルナは、親衛隊を一人一人睨み付けた。その眼光は鋭く、彼等から笑みが消える。彼等はルナの足以外を拘束し、剣を首に突き付けた。首からは血が滴る。

「黙って歩け。無駄な言葉を発したら、首を落とす」

神官の手先で、力で全てを解決しようとするお前達には解らないだろう。強靱な意志は、暴力には支配されない事を。私は唯、前を見据えて歩く。

裁判所は、神殿の屋上にある。其処に辿り着くまでには、一階の大礼拝堂、二階の学校、三階と四階の居住区、五階の神官、司官の住宅を通過しなければならぬ。学校を通過した時に見た掛け時計は、午後八時四十分を指していた。私の裁判は、九時からなのだろう。

今は子供、学生、大人、誰もが束の間自由時間だ。彼等は連行される私を遠巻きにして、囁く。「可哀想に」と。そして、一部の者は私を蔑む。私は彼等の視線をしっかりと受け止め、無言で私の決意を目で伝えた。「私は間違っていない。皆が立ち上がれば、この世界は変わる」と。

暗闇に、無数の光る砂が敷き詰められたような星空。其処にいる生物の、全ての温かみを奪い取るほどの冷気。そして、吹き荒ぶ風。裁判所の壁には一m間隔で燭台があり、いずれも風に揺られている。だが、私の心は無風だ。

「只今より、被告人ルナリートの裁判を行ないます！ 善良なる皆様、起立し神に敬礼を」  
ハーツの声を聞いた瞬間、目の奥がチリチリと燃えるような感覚に襲われた。一体？ 奇妙な感覚を覚えつつも、私は被告席から立ち上がり、裁判所奥に聳え立つ、神を象った彫像に敬礼した。

「皆様、着席して下さい」

着席前に周りを見渡してみる。私の背後は傍聴席で、すり鉢状の階段に全ての天使、一万五千人が座っている。前には神官、隣にはリバレスが座り、右前方にはジュディア、セルファス、ノレッジが、左前方には親衛隊と四間の司官が居る。

「今回、被告には三人の弁護人がついていきます。学友のジュディア君、ノレッジ君、セルファス君です」

あれ程、馬鹿な真似は止めると言ったのに！ 被告である私に厳罰が下れば、お前達にも悪影響が及ぶんだぞ。だが、私は嬉しさを感じていた。最後まで友達でいてくれる事に。

「それでは、被告に対する罪状を読み上げます！」

私は唾を呑んだ。ハーツは、今朝の私の発言を此処で明言するだろう。それに対して、私は自分の考えを全ての天使に叫んでやる！

「被告は、『昨晚、午後十一時頃、封印の間で祈りを捧げる為、一人で外出をしました』。これは、重大な法律違反です！ この違反を審議し、裁きます」

何だと？ この裁判は、私の思想と発言を裁くものだろう！ 外出も罪だが、私の罪はもつと重い筈だ。

「私は……！」

続きを叫ぼうとするが、口が開かない！ これは……、拘束の神術。一体誰が？ ハーツでは無い、とすると親衛隊か神術の司官か。上手く隠しているが、神術の司官、つまりジュディアの母が神術を発動させているのが見えた。何故だ？

「神官、ルナは……！！」

私の所まで飛んで来ようとしたリバレスまで、拘束で地面に落下する。

「皆様、被告は、『言葉を発せない程』反省しております。そうですね、ルナリート君？ 沈黙はイエスと取りますよ」

勝ち誇った笑みを向ける神官。私は首を振ったが、今度は全身が拘束された。

「この通りです。皆様！ 弁護人、異議はありますか？」

「いいえ」

三人は声を揃えて答えた。私の発言を聞いたジュディアとセルフアスまでもが、何の躊躇も無く。私は理解した。ハーツとジュディア達は何らかの取引をした。恐らくは、私を生かす為に。ハーツが、私の思想を此処で明言せず、私を生かす理由は、一つしか無い！

「判決を下す！」

目の前が真っ赤だ。全身が震える！

「被告には、今後死ぬまで、牢獄で暮らす事を命ずる。但し、学校には出席する事。だが、教師以外との会話は一切認めない。また、学校卒業後は私の親衛隊として生きる事」

私は涙を流した。堪えきれない、怒りと絶望で。私は自分の考えを此処で皆に聞かせる事は愚か、今後誰かに話す事も出来ない。完全なる不自由。そして、嫌悪する神官の傍で一生を終えなければならぬのだ。

……ふざけるな！

そんな人生に何の意味がある？ 私は、自由の尊さを伝える為に此処に来たんだ！ お前に利用される為じゃない。私は……、死ぬ覚悟は出来ている。この天界を、お前の呪縛から解放する為ならば！ 私はお前を許さない。絶対に許さない！

その瞬間だった。ルナの体に異変が起こったのは。体全体が、光り輝く膜で覆われ、頭髪は銀色に、瞳は真紅に染まっている。

かけられた拘束の神術を弾き飛ばし、彼は立ち上がる。そしてゆっくりと、リバレスに近付き手を翳し、彼女の拘束も解いた。

「何をするのです？ 裁判の途中ですよ！」

「黙れ、茶番はもう終わりだ」

「司官、親衛隊！ 彼を止めるのです！」

神官の叫びで、四人の司官と八人の親衛隊が、一斉にルナに飛び掛る。だが……

「邪魔をするな！」

ルナは、両手を左右に突き出し、全員を裁判所の壁まで弾き飛ばした。初級神術「衝撃」によって。本来、衝撃は水の入ったコップを倒すぐらいの力しか無いが、今の彼が使う神術の威力は通常の数百倍にも及ぶ。

「後はお前一人だ。他人を塵のように扱い、天界を、天使を食い物にする重罪人」

「ルナリート、折角助けてやったのに何だ、その態度は？」

「私達は、『偽りの神』と『お前が造った教え』に縛られる、自分の意志を持たない人形なんかじゃないんだ！ 全ての者は、生まれながらに自由に考え発言し、生きる権利がある」

長年、言いたくも言えなかった言葉が次々と、堰を切ったように出てくる。私はもう止まらない。神官、止められるものなら止めてみるがいい。溢れ出る力に満ちた私を。

「……お前はそれを踏み躪<sup>にじ</sup>ってきた！ 罪の無い者を何人殺したか解っているのか？ 否、解らないだろうな。自己保身にしか興味の無いお前には」

傍聴席の天使達は、ルナの言葉に強く頷いている。「ハーツの恐怖政治は必要無い」。皆、気持ち一つである。

「な……、何たる侮辱！ 君はもう必要無い。死ぬがいい！」

ハーツは杖を振り上げ、灼熱の炎の球体を作り上げた。高等神術「滅炎」である。直径五m程もあるその熱球は、ルナへ猛スピードで飛ぶ！ しかしルナは目を瞑<sup>つむ</sup>り、対抗する神術を発動させた。

「高等神術、絶対零度」

厚い氷の壁が、滅炎を飲み込む！ 滅炎は、完全に掻き消された。

「小癪<sup>こしかく</sup>な……。こんな屈辱は初めてだ。私の究極神術で、粉々にしてやる！」

ハーツは翼を開き飛び上がる。杖の宝石には凄まじい光熱。魂砕断！

「お前に殺された天使達は……。この世界を変えたかったんだ。何者にも怯える事無く、自由を享受出来る世界へ」

「黙れ！ 厳格な掟こそが、無能な民を生かす事が出来るのだ」

「掟は必要だろう。だが、お前は『自分に都合が良い』掟を造るだけだ！」

ハーツの顔は、今にも血が噴き出しそうな程紅潮している。これがハーツの本気。傍聴席の天使達が逃げ惑うのが見える。ハーツ、お前には完全な敗北を味わわせてやる。

「死ねええ！」

ハーツの杖から光の刃が放たれた！ 無数の刃が私を完全に包囲する。

「パリン！」

硝子が砕けるような甲高い音。そんな刃が届く筈が無い。私は、鉄壁の守りである究極神術「光膜<sup>こうまく</sup>」で自分を覆っているのだから。今の私は、どんな神術でも使う事が出来る。習得していない、究極神術、禁断神術さえも。それが何故かは解らないが、不思議と今の自分の力に違和感はない。寧ろ、これが「本当の自分」という気さえする。

「そんな馬鹿な……」

ハーツは杖を落とし、呆然と宙を漂っている。

「神官ハーツ！ 審判の時だ」

私は、地面を蹴って飛び上がりハーツを思いっきり殴る！

「うがああ……！！」

神官は墜落し、神を象った像に激突した。像と、ハーツの骨が砕ける音が響くのを聞いた後、私は裁判所に降り、ゆっくりと、動く事が出来ないハーツに歩み寄る。

「来るなあ、許してくれえ！ 命だけは助けてくれえ！」

惨めな姿だ。あれだけの命を奪いながら、自分の生に其処まで執着するとは。

「ルナー、止めて！ 殺す必要は無いわー」

リバレス、それにセルフアスとジュディアまでが、私の前に立ち塞がる。

「止めるな！ この男が居なければ、天界は救われる！」

三人を払い除け、私は平伏すハーツに宣言する。

「ハーツ、お前には魂砕断では生温い。無に呑まれるがいい！」

禁断神術発動の為に、意識を集中する。その時だった。尋常ならざる声が響いたのは。

#### 第十四節 神意

「待つのだ、天使ルナリートよ！」

威厳に満ちた、脳が揺さぶられる声。それが聞こえた瞬間、私の膨らんだ力が急速に萎んでいくのを感じた。一体？

「誰だ！」

「我は、お前が存在を信じることが出来なかった、『神』だ」

神だど？ 有り得ない。

「嘘だ！ 『神』が存在するならば、こんな愚者に全権を委ね、独裁を許す筈が無い！」

「天使ルナリートよ、落ち着いて話がしたい。怒りを鎮めるのだ」

その言葉の直後、一陣の風が吹いた。穏やかで温かい風。その風は、ルナを包み込み元の姿に戻す。憤怒も憎悪も消し去る優しい風だ。

「貴方は、本当に『神』のですか？」

怒りも、力も消えていた。私は、そんな事を出来る声の主を信じ始めていた。

「そうだ。我は第二万三千二百六十四代目の『神』。この天界を支える者だ」

神の存在は認める。だが、歯痒い。

「しかし！ 何故『神』が居ながら、この世界で私達は安息の日々を送れないのですか？」

「我はこの天界を維持する為に、『封印の間』の最上階から離れる事が出来ない。肉体は常に其処に在り、意思を転送する事さえも困難だ。こうして声を聞かせるのも、実に五千年振りの事なのだ」

穏やかなのに、心に響く力強い声。その言葉に偽りが無いと信じられる。

「我は、常に三つの責務を負っている。一つは、天界の維持エネルギーの産生、一つは天使へのESG供給。そしてもう一つが、『人間界』への関与だ」

ざわめきが聞こえ振り返ると、裁判所には、神の声を聞く天使で溢れていた。

「我は、五千年に一度しか声を聞かせる事は出来ないが、この世界の為に全力を尽くして来たつもりだ。だが、神官ハーツの圧制に苦しめられていたのは詫びよう……。五千年前に彼を神官に任命した我の責だ。済まなかった。本日より彼を罷免し、余生を『封印の間』

で過ごさせる。天界の統治権は分散せよう」

ハルメス兄さん、クロムさん、遂に天界が良き方向へ向かいます！ 私は、今は亡き二人の顔を思い浮かべた。

「だが、天使ルナリートよ。我は公正に、お前も裁かねばならない。幾らハーツへの憎しみが深いとしても、お前は圧倒的な力を以って『殺す』事で解決しようとしたのだから。何を言い渡されても構わない。天界に捧げようとしたこの命、願いが成就した今では。

「どのような罰でも、喜んでこの身に受けましょう」

「良い心構えだ。天界と、其処に生きる者を愛するお前の心、しかと受け取った」

「天使ルナリートには、『二百年間の墮天』を課す」

天使としての力を一時的に失い、天界から人間界に墮ちるのが「墮天」。軽い罰だ。二百年後には、戻って来る事が出来るのだから。その時には力も戻る。

「承知致しました。その罰、今直ぐにでもお受けします」

「急ぐ必要は無い。『墮天』は明朝九時に、此処で行なう。尚、その際にはお前の力の九割を封じる。天翼獣リバレスの同行は許可しよう。異議はあるか？」

「ありません」

「それでは、明朝までに準備を整えておくのだ」

神の声はハーツの姿と共に消えた。私は、神の思慮の深さに身震いする。神は動けずとも、全てを見ていたのだ。自分の責務を果たしながら。私は……、小さい存在だな。

放心状態が長く続いた。気付くといつの間にか私は、歓喜に沸く天使達に囲まれていた。

「俺達は今日から自由に生きることが出来るぞお！」

無数の歓声。私は早く帰って準備をしなければならないのに、このままでは、此処を出られない。私は、空に飛び上がる。だが、皆も嬉々として私を追う。埒が明かない。

「(リバレス、帰るぞー)」

「(解ったー)」

意思の転送でリバレスと合流後、私達は部屋に戻った。まさか自分の命日の予定が、人生最高の日になるとは。

## 第十五節 恋闇

ルナとリバレスは、ベッドに「ドサツ」と倒れ込んだ。二人は極度の疲労で、身動きすらも億劫だった。

そのまま一時間ばかりが過ぎた。時計の針は、もう直ぐ午後十一時を指そうとしている。

「リバレス、色々済まなかったな」

ルナは俯せのまま、リバレスに声を掛けた。

「いいのよー。ルナが今もこうして生きていてくれるだけで、私は満足だから」

「ありがとう」

「どういたしましてー。それはそうと……」

身を起こし、彼女の方を向く。すると、其処にはいつになく真剣な顔があった。冗談は通じそうに無い。

「さっきの事だろ？」

彼女は、小さい首を「コクリ」と縦に振る。

「……さっきの『力』。あれは正直、自分でも解らない。だが、違和感は覚えなかった。あれが、本来の自分じゃないかと思えるぐらいに」

「ルナ、怖かった。髪は銀色になってるし、目は赤いし……」

「外見まで変わっていたのか……。ハーツへの怒りと絶望で、体の内側から燃えるような感覚に襲われたが」

リバレスは俯いていたが、ピョンツと私の肩に飛び乗る。

「今のルナはいつもと変わらない。これからも、ルナはルナのままできてねー」

「ああ」

私が微笑むと、彼女は私の周りを飛び回った。あれだけの事があったのに元気だな。

「それにしても良かったわねー、ルナの夢が叶って！ 明日から二人共人間界なのが、玉に瑕<sup>きず</sup>だけだ」

「お前も来てくれるのか？」

「もー、当たり前じゃない。ルナ一人じゃ、危なっかしいからねー」

私は肩に止まった彼女の頭を撫でて、頷いた。

「頼りにしてるよ。『下等な人間』と、二百年も過<sup>こ</sup>すのは苦痛だからな」

かつての神が戯れで創った、人間。獄界との関係に亀裂を奔<sup>はし</sup>らせた存在。下等な知能を持ち、繁殖力だけが優れた生命。何故神は人間を創ったのか。獄界との争いの火種になる事を、聡明なる神が考え付かなかったとは思えない。何か、確固たる理由がある筈だ。無論それを私が考えた所で、答えは見えないのだが。

「わたしはルナと一緒になら、二百年ぐらい楽勝よー。でも、よく考えれば、わたしってまだ二百二十四歳だから、帰って来る頃には倍の歳？ ……ガーン！」

リバレスは、「ガツクリ」と肩を落とした。笑みを湛<sup>たた</sup>えながら。その様子が滑稽<sup>こっけい</sup>で、私は思わず笑いを零した。

「あ、ルナが笑ったー！ 思いつ切り笑うのを見たのは、久しぶりよー。あははは」

そう言えばそうだな。こんなにも心が晴れ渡る事が、長らく無かったから。

「ははは……。改めて、明日からは『人間界』暮らしだけど、宜しく頼む」

「任せなさい！」

この調子だと、人間界でも楽しくやって行けそうだ。お前が居てくれて、良かった。

深夜二時。二人が墮天の準備を済ませ、ようやく眠りに就いた頃、隣室で微かにピアノの音が響いた。内に激情が秘められた、哀しく、切ない旋律。その音が鳴り止んだ後、静かに隣室の扉が開いた。其処から一人の天使が現れ、ルナの部屋の前に立つ。

「今晩は……」

弱々しく響く声。だが、ルナはその声で目を覚ました。ジュディアだ。ルナは、熟睡しているリバレスを起こさぬよう、足音を忍ばせ、ゆっくりとドアを開いて外へ出る。

「どうしたんだ、こんな夜遅くに？」

「本当にごめんなさい、全部私の所為なの！ 私が余計な事をしなければ」

目を腫らした彼女が、廊下に響き渡る程の声で叫ぶ。咄嗟に、ルナは彼女の口を塞いだ。

「もう少し小さな声で話せよ。みんな寝てるんだ」

「ごめんなさい」

涙を落として俯くジュディア。私は、彼女の肩を「ポンツ」と叩く。

「何も気にする必要は無い。結果として、天界は私の望むように変わるんだ。二百年の墮天など、些細な事だ」

私の言葉で、彼女は顔を上げ微笑む。妖艶な表情……

「ルナツ」

彼女は私に抱き付き、胸に顔を埋めた。

「ルナ、私は貴方を愛してる。初めて会った時から……。そして、これからも」

解っていた。だが、私は動転し言葉を返せない。頬を朱に染めたジュディア。私は……

「ルナ、私は二百年待ってる。貴方を想い、美しいままの私で」

私の背を抱く力が強まる。爪が食い込む程に……

「……返事は、二百年後に」

私を離れ、自室へ向かうジュディア。その横顔に流れる一筋が、煌いていた。酷いかも知れないが私は、彼女の想いを、今直ぐに受ける事は出来ない。

部屋に戻ると、リバレスが私の肩に飛び乗った。全く……、寝てろよ。

「相変わらず、ジュディアは積極的ねー！ いい加減折れたら？」

「お前なら、私が気安く領けない理由を解るだろ」

大きく頷き、自分のベッドに戻るリバレス。私も眠ろう。次に天界で眠れるのは二百年後だ。目を瞑ろうとした、その時、ふと視界に入るものがあつた。月華に照らされ、咲き誇るルナ草。フリーダムと名付けたその花を、私は忘れていた。

「お前とも、暫くお別れだな」

私はルナ草を「保護」の神術で包み、窓から外に放った。術が解ければ花は大地へと降り立ち、根を張る事だろう。私の願い、「自由」は叶えられた。ありがとう。刹那、ルナ草が輝いた気がした。まるで、私の心の声に反応したかのように。

## 第十六節 墮天<sup>だてん</sup>

午前八時。ルナとリバレスは全ての準備を済ませて、出発の時を待っていた。荷物は膨大だ。衣服、本、食器などに加え、リバレスの二百年分のESGが荷物袋を圧迫している。ルナのESGは無い。墮天の受刑者は、人間の食べ物を摂取して生活しなければならぬからだ。また、受刑者は武器を持つ事を許されない。

「武器ぐらい持たせてくれたら良いのにねー」

リバレスが呟いた。彼女は、人間界で外敵に襲われる事を心配しているのだ。

「大丈夫だ。九割の力を失っても、私は人間よりは格段に強いだろう」

「人間相手ならそれで良いかも知れないけど、もし魔に襲われたらどうするのー？」

「強い魔なら、逃げるしか無いな。他に心配事は？」

「天使の指輪は無くさないようにしなくちゃねー」

「そうだな」

もし無くせば、私は天使では無くなる。指輪は、生まれた時から身に付ける天使の証だ。

「そろそろ行こう」

「オッケーです」

神殿の屋上へ向かう二人。二人を賞賛し、今にも踊り出しそうな歓喜に沸く天使達。彼等は一樣に活気に満ちている。生を謳歌<sup>おうか</sup>出来る幸せを実感しているのだ。

「ルナ、昨日は本当に悪かった！ お前を助けたい一心だったんだ」

裁判所で真つ先に話しかけて来たのはセルフアス。その必死の表情を見て、私は拳で彼の胸を小突いた。

「セルフアス、ありがとう。私の為に奔走<sup>ほんそう</sup>してくれて」

「うおお……、ルナ！ 二百年後、元気で帰って来るのを心待ちにしてるからな！」

「ああ。お前も元気だな」

私の為に泣いてくれる友を背に、私は処刑台へと歩を進める。途中、ノレッジを見付けた。彼は、伏し目がちに私を見詰めている。恐らくこの数日間の事で、私に対して罪の意識を感じているのだろう。だが私は、彼の心の弱さを罪に問える程立派では無い。

「ノレッジ！ 二百年間、トップの座は預けておくからな！」

はっと顔を上げるノレッジ。彼は私に頭を下げた後、眼鏡を上げて見せた。私とリバレ

スは顔を見合わせて笑う。

そして、私達は処刑台に立った。

「ルナ！　ずっと、貴方の返事を待ってる。きつといい返事を……」

真つ赤な目、下睫まつげに溜たままっている涙。私は、彼女の悲壮なまでの想いを感じた。

「……ゆっくり考えとくよ」

「一つだけ約束して。天界に戻るまで、人間の女に心を奪われたりしないって」

有り得ない。私が、下等な人間に心を奪われるなど。

「勿論だ。私は、何事も無く天界に戻って来る」

「良かった。でも、もし貴方の心が誰かに奪われたら、私は絶対に許さない！」

冷たく、憎しみに溢れた声だった。彼女を怒らせると恐ろしいな。

「気を付けて、行ってらっしゃい！」

今度は華やかな笑顔。私は頷き、時計を見た。間も無く九時になる。顔を上げると、セルファスと目が合った。否、正確には彼はジュディアを見詰めていた。

静寂に包まれる。巨大な力が場を覆ったからだ。そして、声が響く。

「天使ルナリート、及び天翼獣リバレスを、只今より二百年間の墮天の刑に処す！」

「謹んでお受けします」

私がそう言った直後、急激に体の力が抜けた。体が……、酷く重い！

「ルナリートよ、天界の為に自らを犠牲にするその態度、誠に見事だ。これを持つ事を許可しよう」

その言葉と共に、目の前に現れたのは一振りの剣。僅かに金色を含んだ白銀色の金属オリハルコンで作られた剣で、精神力を攻撃力に変換する力を持つ至高の剣だ。この剣があれば心強い。

「ありがとうございます」

剣を持つ。重い！　だが仕方無い、今の私は以前の十分の一しか力を發揮出来ないのだ。

「禁断神術……、『墮天』」

神の声が訝まじし、ルナとリバレスは、高速回転する光の膜に包まれた。

「みんなー、元気でねー！」

リバレスは膜の外に向けて手を振るが、二人の姿は外から既に見えない。真つ白な光が、二人の意識を奪い、視界を漆黒に塗り潰す。

「（ルナリート、お前は天界へ帰還後、人間界へのある重要な『計画』の指揮を担わねばならない。何故ならお前は……、『エファアロード』の力を持つ者なのだから）」

消え行く意識の中、私は確かに、そう聞いた。

## 第一節 追懐

## 第二章 人間界

永遠の心。君に会えたから、私の心は生まれたんだ。

出会った日の事を覚えてるだろうか。私は決して忘れない。君が私を変えてくれたから。一緒に生きられたのは僅かな時間。けれど私の心の中で、その時間は永遠だ。

君は私に、生きていく本当の意味を与えてくれた。君の優しさ、つよ靱さ、温かさが私を少しづつ変えたんだ。

私は君を愛してる。永遠に。死さえも、私の心を砕く事は出来ない。

君と生きた日々は、いつでも脳裏に蘇る。君の声を聞くだけで私は幸せだった……でも、その声はもう届かない。呼び掛けても！  
だから私は戦うんだ。生きる意味を取り戻す為、寂しがり屋の君との約束を果たす為に。そう、未来の為に！

§The Heart of Eternity§

I remember the certain occurrence changed me. And it gave me the unescapable destiny.

My heart is crying silently now.

But, even if a fearful destiny attacks us, I will love you until the end of the time.

I want nothing, except the existence of you.

You gave me the heart of eternity. I never forget it to wipe out the tragedy's repeat.

So, it was the beginning of the meaning of my life.

## 第二節 雷霆らいでん

真冬の足音が近づく十二月六日。その夜、人間界のアトン地区にある、ミルドの村は嵐に見舞われていた。村の南には鉱山、北にはミルドの丘。東は港、西には畑・果樹園がある。この村の主産業は鉱石の採掘であり、この日も多くの男達が鉱山に出掛けていた。

男は鉱山、女と子供は家に居た為、その夜の異変には誰も気付かない。

空高くで、光を放つものが現れた。大きな光と、小さな光。それは天界の住人、ルナリートトリバレスだ。いずれも、急速に落下している。

「おい、リバレス！ 起きろ！」

ルナが取り乱してリバレスに叫ぶ。

「ん、なーに？ え……、キャアア！」

落ちている！ 墮天は、安全な所に転送では無く、空の上から実際に落とすようだ。落下方向の先には、真っ暗だが微かに地面が見える！

「大丈夫だ！ 翼を開けば」

「あれっ、ルナー！ 翼が無くなってるわよー」

背中には……、何も無い！ 墮天は翼も失うらしい。血の気が引く。どうすれば良い？  
「不味いな」

「ルナー！ わたしが全力で支えてみる！」

小さい翼を懸命に広げ、私を支えようとするリバレス。だが彼女にそんな力は無い。

「リバレス、止める！ 無茶だ」

「ルナ、神術は使えないの？」

体を浮かせる神術は……、無い！ ならば、最善の手段は……

「リバレス、『保護』を使う。お前も力を貸してくれ！」

「解ったー！」

微弱な、保護膜が私達を覆う。く……、精神エネルギーまで大幅に失っているらしい。

それでも、生身の体で地面に激突するよりはマシだろう。

「地面が見えてきたわよー！」

大地が近い、残り数百m！ 「ビュオオオ……！」、何だこの風雨は？ 天界で、こんな

激しい嵐を体験した事など無い！

「ぶつかる！」

眼前に黒い土！ 目を閉じようとしたその時、「ピカッ！」、耳を劈く轟音と視界を染める白光が私を襲った。雷だ！ 「ドオオン……！」、凄まじい衝撃、全身が砕ける程の！ 体の感覚が消えていく……

私は死んだのか？ 時間の経過を感じられない。何の音も……、聴こえない。

「……ナ、ルナ……」

聞き覚えのある声、リバレスだ。私は恐る恐る目を開ける。

「ルナ！」

目に涙を溜めたリバレスが、私の胸に飛び込む。

「ぐっ……」

耐え難い痛みが全身を駆け巡った！ 私は顔を顰める。

「ルナー、大丈夫なの？」

彼女に傷は無いらしい。それだけは良かった。私は心配をかけまいと、笑いを作る。

「……体中が酷く痛む。此処まで脆くなっているとは。墮天を甘く見過ぎていたようだ」  
「天使の体のままじゃ、刑罰にならないもんねー」

全身を鈍器で殴られたような激痛！ 思わず目を閉じる。

「うう……。お喋りをしている場合じゃ、無さそうだ。何処か、休める場所を」

「動いちゃダメよー！ 『治癒』の神術をかけてあげたいけど、今のわたしにはそんな力は残ってない。ルナー、しっかりして！」

眩暈がする。体に力が入らない。目の前が真っ暗に……

「ルナ、どうしたのよー！」

リバレスの声が遠ざかっていく……

「仕方が無いわ。絶対に嫌だったけど、『人間』に助けを求めろしか」

リバレスは、ルナの荷物からESGを十個取り出し、地面に叩き付けた。割れたESGから、光の柱が立ち上る。ルナはその光を臍おぼろ気に見ながら、意識を失った。

### 第三節 純真

暖炉の火が揺れている。その光に照らされる一人の少女。彼女は、絹のように滑らかな、栗色の長い髪を僅かに靡かせ、じっと窓の外を見詰める。

「お父さん、帰りが遅いなあ」

この世の闇を知らぬような、純粹で穏やかな瞳。だが、その奥には靄ぐよい光が宿る。

「もう八時か。七時には帰って来るって言ってたから、ご飯の準備も済ませたのに」

窓の外は強い風雨。時折、雷も鳴っている。彼女の家は煉瓦造りれんがにも関わらず、「ガタガタ」と揺れていた。

「心配ね……。お父さん、大丈夫かな」

彼女の柔らかな声が、不安に曇っている。彼女は立ち上がり、胸のネックレスを握り締めながら、テーブルの上の遺影を眺める。母の肖像だ。彼女が手を伸ばす、その時だった。

「ドーン……！」

窓の外が青白い光で一杯になる。落雷だ、近い！ どうやら丘に落ちたようだ。「パタン」と、遺影が倒れた。

「ああ、びっくりした！」

彼女は胸を撫で下ろし、深呼吸した。遺影を立て直し、窓の外をぼんやりと見る。暗闇の中で、丘のシルエットだけが見える。その光景は不気味で、禍々まがまがしささえ感じる。普段は長閑な風景だけに、その異様さは際立っていた。

「もう、お父さんのバカ！」

心の中が不安で一杯になる。唯でさえ最近は何物が多いのに、一体何をやっているの？ お父さんに悪態を吐いてみたが、一向に私の心は晴れない。

ん？ あの光は何だろう。丘の上が光ってる。見た事の無い、綺麗な光の柱。  
「まさか……、魔物？」

私は恐れている事を口に出した。どうしよう。もしかしたら、誰かが襲われているのかも知れない！ それなら助けに行かなくちゃ。お父さんは帰っていないけど、私一人でも力になってあげたい。

彼女は直ぐに身支度を始めた。今着ているのは、黒のシンプルなブラウスト、ベージュのティアドレスカート。その上に茶色い皮のコートを羽織る。右手には剣を、左手にはランタンを持った。

雨具は必要無いわ。出来るだけ早く行きたいから。私は、玄関を飛び出す。

少女は吹き荒ぶ嵐の中、可能な限り走り、丘の麓に辿り着いた。

「光が消えた……」

急ごう。大体場所は覚えてる。私は息を切らせながら、光っていた場所を目指す。どうやら其処は窪地くぼちのようだ。窪地の中心に何か見える。人だ！ 私は大声を出す。

「大丈夫ですか！ しつかりして下さい」

斜面を駆け下り、剣とランタンを地面に置いた。声に対して反応が無い。揺さ振ってみても、意識は戻らない。でも生きているみたいだ。脈がある。

私はランタンで、その人と周りを照らして見た。何て事！ 此処は窪地じゃ無い、落雷の跡だ！ この人は落雷を受けたのだ。さっき私が見た落雷を。

「直ぐに手当てをしなくちゃ！」

私はこの人の腕を取った。背中に担ぐ為に。華奢な腕、私は思わずこの人の顔をまじまじと見入る。女の人みたいに綺麗な顔。真っ赤な髪……。少なくとも、この村の間では無い。ううん、アトン地区で赤い髪の人がいるなんて聞いた事が無いわ。何処か、遠い所からの旅人なんだろう。

少女は、ルナを背負い歩く。体には、ランタンと剣を結び付けて。重い足取り、だが彼女は渾身の力を込める。自分が救える命は、救いたいから。

#### 第四節 邂逅かいご

意識が揺れている。現実と夢の狭間、しかしゆっくりと現実が私を支配した。

「う……、ううん」

「良かった、意識が戻って！」

瞼まぶたを開くと、一人の少女の顔があった！ 何者だ、リバレスは？

「お怪我は大丈夫ですか？ あんな所に一人で倒れていて、驚きましたよ！」

栗色の長い髪を揺らして、私を見詰める。その目に悪意は無い。悪意どころか、私はこ

んなにも、穏やかで、何もかも包み込むような目を見た事が無い。

私は無言で状況把握に努めた。此処は煉瓦造りの簡素な家。天界の凶鑑で見た通りの、人間の住宅だ。当然だが彼女は人間で、この家は彼女の家。私は彼女に助けられたのか？ 硬いベッド。シーツの目も粗く、寝心地が悪い。それより……

「(リバレス、何処だ!)」

「(わたしは此処よー!)」

右手の薬指が微かに動いた。リバレスは指輪に変化しているようだ。

「(何故、こんな事になってる?)」

「(わたしが救難信号を出したら、この女が助けにきたのよー)」

やはりそうか。動けない私を、リバレスが運ぶ事は出来ない。私が黙り込んで考えていると、少女は目に涙を浮かべて話し掛けて来る。

「傷が痛むんですか……? しっかりして下さい!」

必死な顔。例えば人間でも、無視する訳にはいかないな。

「ああ、傷は大丈夫だ。しかし全身に力が入らない。特に、腹部辺りに違和感を覚える。痛みでは無いが」

「思ったより元気そうで何よりです! きつと、お腹が空いてるんですよ。今日の夕飯、沢山作ったので、食べて下さい! 温めて来ますね」

私は首を傾げた。一体、この少女に私の何が解る? だが私は、笑顔で駆けて行く彼女に、何も言えなかった。

「(リバレス、私はどうすればいいんだ?)」

「(お好きなように!。でも、これから人間界で暮らすんだから、利用しやすい人間を作るのはいい事じゃないの?)」

他人事だと思って……。 「夕飯」、確か人間が夜に食べる食事の事だった気がするが。まさか、今から私は人間の食事を食べさせられるのか! 下等な人間の食事を……

数分後、少女が恐るべきものをトレイに乗せて持って来た。凶鑑で得た知識を元に分析して見る。黄色のスープ、パン、肉と植物が炒められたもの……。 初日から人間の食物が出て来るとはな……。 ESGが恋しい。

「料理には余り自信が無いんですが、遠慮せずどうぞ!」

「あ……、ああ」

満面の笑みで私を眺める少女。指輪のリバレスが震える。笑うなよ! だが人の好意を踏み躪<sup>こ</sup>ってはならない。私は意を決して、スープを飲む。

「何だ、これは!」

驚きの余り、大声を出してしまった。

「美味しく無いですか?」

少女は悲しそうに俯く。私は思いっ切り首を振った。

「逆だ。私はこんなに『美味しい』ものを食べた事は無い」

こんな感覚は初めてだ。大袈裟だが、口の中が幸せなのだ。ESGのような瞬時の充足感はないが、「美味しい」というのが、こんなにも幸福だとは。

「ほんとうですか！ 良かったあ。ちよっと塩を入れ過ぎたので、心配だったんです」

私が食べる様子を嬉しそうに眺める少女。私は、運ばれた料理を次々と平らげる。

「(いいなー、ルナ。わたしも食べてみたい)」

「(お前にはESGがあるだろ)」

料理は全て、私の胃に収まった。こんな時に言う台詞は……

「ご馳走様」

「お粗末様でした。よっぽど、お腹空いてたんですね。喜んで貰えて、私も嬉しいです」

少女は、食器を下げる。例え相手が人間であろうと、私はこの少女に素直な感謝を覚えていた。見ず知らずの私を助け、料理まで振舞ってくれた少女に。

「ああ、お陰様で力が戻って来た気がするよ。ありがとう。ところで君の名は？」

私は立ち上がりながら、そう言った。

「私は『フィーネ』です。あなたは？」

フィーネか。顔には幼さが残っているが、澄んだ茶色の瞳の奥には、揺るぎ無い心が宿っている。純粹さと共存する、力強い心。髪は背中まで真っ直ぐ伸びており、背は私よりも二十cmばかり低いだろうか？

「私は、ルナリート。ルナと呼んでくれ。私は、『ある辺境の地』から旅を始め、さっきこの村に流れ着いた。この村は？」

咄嗟に考えた嘘だ。自分が天界から落ちた天使だという事は隠さなければならない。

「ルナ、さん。良い名前ですね。旅人だと思っていましたよ。赤い髪で蒼い瞳を持つ人はこの辺りに居ませんから。此処は、アトン地区の北西端に位置する、ミルドの村です。良質な鉱石が採れる鉱山で有名ですよ」

人間界は複数の地区から成り立ち、各地区には数万から数十万の人間が居ると、天界の図書には書かれていた。各地区の詳細までは解らないので、地図を入手しよう。

「あっ！」

目を見開いて声を上げたフィーネ。只ならぬ雰囲気が漂う。

「どうしたんだ？」

「お父さんが、鉱山から帰って来ないんです！ 私、様子を見に行かないと。最近、魔物が多いから心配で心配で！」

フィーネは、濡れたコートを羽織る。震える彼女を見て、私はリバレスに目を遣った。

「(村を襲うような魔は、恐らく低級魔だろう。リバレス、私はこの少女に助けられた。受けた恩は、私は返さねばならない。彼女の父親を無事に連れ帰ろうと思うが、どうだ?)」

低級魔相手なら、万が一戦闘になっても私は負けない。オリハルコンの剣もある。

「ルナがそうしたいなら止めないわ。相変わらず甘いわねー、ルナは」

リバレスの苦笑が目には浮かぶ。まあ、人間を助けるのは今回限りだ。

「フィーネ、私が代わりに鉱山に行く。君は此処に居るんだ」

「え、駄目です！ あなたは病み上がりなんですよ」

彼女は真剣な表情で、私の前に立ち塞がる。何処まで人の心配をするんだ。

「怪我は完治した。それに、剣の腕には自信がある。鉱山は何処だ？」

随天しても私は天使だ。怪我の治りは早い。私は荷物から剣を出して、軽く振って見せた。本当は少し重かったが。

「家を出て、南です。本当に……、大丈夫なんですか？」

私は返事をする代わりに微笑み、頷いた。そして、外への扉を開く。

「ルナさん、お気を付けて！ 済みませんが、お願いします」

フィーネの言葉を背に、私は雨の中を駆け出した。

## 第五節 脆弱

「(はああ……。低レベルな村ねー)」

リバレスが、ルナの意識に話し掛けた。二人は、フィーネの家から二k m程離れた、鉱山の入り口に立っている。

「(全くだ。こんな所で二百年も生活すると思うと、気が滅入る)」

二人は、此処に辿り着くまでに見た、村の景観を嘆いているのだ。道は舗装されず、家には所々罅が入っている。上下水道も無さそうだ。子供の遊び場は落書きだらけだった。こんな低レベルな文明に馴染めるだろうか？ 私は掌で顔を覆い、首を振る。

「(さっさと、あの娘の父親を連れ帰って、こんな村とはおさらばしましよー！)」

「(そうだな、手早く済ませよう)」

此処までに魔は現れなかったが、鉱山の中には居るかも知れない。大丈夫だ、学校で戦闘実技を教わったのは、有事の際に魔と戦う為じゃないか。

「行くぞ」

二人は、薄暗い鉱山へ入って行く。足元の水溜りが、血溜りである事に気付かず。

中は薄暗い。坑道の側壁には等間隔にランタンが吊り下げられているが、辛うじて足元が見える程度である。分岐点には、粗末な案内板がある。二人は、奥へと進む。

異様な雰囲気。ルナは肌が粟立つのを感じていた。多くの鉱夫がいる筈の鉱山に、誰もおらず、聞こえるのは水音のみだからだ。……やがて不安が、現実に変わる。

「やはりか……」

足元に、惨殺された男が転がっている。全身に深い切り傷があり、特に胸部が深く挟られている。其処から流れ出た血液が大きな血溜りを作っていた。凝固はしていない。死んでから大した時間は流れていないのだ。傷跡から察するに、間違い無く魔の仕業だろう。「(ひどいわねー……。やっぱりルナ、あの子の為に『魔』と戦うなんて、馬鹿げた事は止めて帰りましょーよ)」

「(約束は約束だ。人間を助ける事はもう無いから。行くぞ……)」

案内板に従い、更に奥へ進む。これまでに二十三人が殺されていた。切り裂かれ、引き裂かれ、燃やされた者達。ルナは、彼等の苦悶の表情を見て憤りを覚えた。だがどの男も、フィーネには似ていない。そして、二人は最深部の採掘場に着いた。声が聞こえる。聞いた事の無い、低い、野獣のような声。

「ヒヤハハ、死ね、ゴミ共が！ 貴様らは消えるべき存在だ！」

これが魔！ 何と禍々しい……。黒褐色の皮膚、背丈は二mを超える。頭部・両手足・尾があり、鋼はがねのような筋肉に覆われている。白濁はくたくの双眸そうぼう、鋭く長い牙、窪んだ鼻とがと尖った耳。私は、天使や人間と余りに異なるその容姿に、純粹な恐怖を覚えた。

奴は、その場に居る人間を紙屑のように引き裂き、魔術で燃やしている。

「フィーネ……！」

その断末魔で、私は我に返った。魔の爪で胸部を貫かれた男、フィーネの父！

「済まない、フィーネ。君の父親は救えなかった……！」

私の声で魔が振り向く。

「お、また人間か？ 殺してやるぜ。楽しくてたまらねーよ！」

「獄界の住人は、こんな愚物ばかりか？ リバレス、元の姿へ戻れ！」

「解った！」

魔が猛スピードで走り寄る！ 私は剣を抜いた。「キンッ！」、剣が魔の牙に直撃する。

牙が砕け、飛び退く魔。

「グッ……、この力。貴様、人間じゃないな。まさか天使か？」

魔の口から緑色の血が流れている。私は、剣の切っ先を魔に向ける。

「生憎あいにく、墮天あいたくはしているがな。平然と生命を奪う、お前のような下等な者と、私は話す口を持たない」

「墮天使の分際で。死ね！」

魔が咆哮ほうこうと共に、口から炎を吐く！ 剣では防ぎ切れない。

「リバレス！」

私の声で、リバレスが私に「保護」を使う。炎は、私を逸れて壁に当たった。

「中級神術、『天導炎』」

私の左掌から、炎の渦が伸びる！

「ギャアア……！」

恨みに満ちた絶叫が呟する。どうやら、私は魔を殺してしまっただらしい……。この程度の力で死ぬという事は、やはり低級魔だったようだ。

「ルナー、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それより、私は魔を『殺した』上に、約束も守れなかった……」

私は俯いて目を閉じた。殺すのも、約束を守れないのも、最悪な気分だ。

「仕方無いわよー！ 殺さなきゃ、ルナーが殺された。約束も、どうしようもないわ」

沈黙。二人は話すべき言葉を見付けられない。だが、その沈黙は破られる。

「化け物……。ルナーさん、あなたも魔物なんですか？ 魔法を使うなんて。それに、妖精？」

フィーネ！ 何故こんな所に？ まさか全てを見ていたのか？ 少なくとも、戦いを見ているのは確実だ。

「見てしまったんだな。だが、私は化け物でも魔でもない。人間でも無いがな」

「わたしも、妖精なんかじゃないわよーだ！」

私達の素性は明かせない。しかし、フィーネは私達の言葉など上の空だった。

「お父さんは？ ……お父さん！」

父の亡骸へ駆け寄る彼女。鉱山全体に響く程の、泣き声……

「済まない。間に合わなかった……」

フィーネは、骸に抱き付き、顔を埋めている。私達は居た堪れなくて、その場を離れた。

「どうするの？ ルナー」

「私達が出るのは、彼女が無事に家まで帰るのを見届けるぐらいだな」

他には何も出来ない。失った命が戻らない事を、私は誰より知っている。

「そうねー。あんまり深入りするのも良くないし、何処かに隠れて様子を見守りませよー」

「ああ、これで終わりだ。行こう」

心が痛む。私は天使、これ以上人間を助ける義理は無い。なのに、彼女の顔を見ると辛い。私は両掌を組み、頭を抱える。此処を離れなければ！ 私は、ゆっくりと歩み出した。

「待って下さい！ 何処へ行くつもりなんですか？」

涙声のフィーネ。何故私達を止める？ 私は彼女の目を直視出来ない。

「私達はこの村を離れ、安住の地を探す。君には感謝してる。だが、もう私達とは関わりな。そして、誰にも口外するな。それを守れなければ、私は君を……、殺さねばならない」

私達の存在が公になれば、魔から命を狙われる。そして、人間からは救済を乞われる。

「口外はしません。私があなたに殺されるのも……、構いません。だから、お願いします」

人間を助けて下さい！ あなた達の力が必要なんです！」

人間の為なら、自分が死ぬのも厭わない。私と……、同じだ。涙が零れるのも構わず、強い、炎のような意思を湛えた目で、私を射抜く。さっきまでの少女とは別人だ。

「わたし達が、脆い人間の為に動く理由は無いわ！」

リバレスの甲高い声が響く。だが、フィーネの意思は揺らがない。

「皆、頑張っていました。魔が齎した疫病に見舞われても、魔に何度襲われても……。私の母も三年前に殺され、父と二人で一生懸命生きて来たんです。なのに……、なのに！」

これ以上聞いたら、彼女の心に呑まれる！ なのに、体が動かない。

「うう……。私の村だけではありません。世界中で苦しんでいる人が居るんです！ 私は何でもします。だから、どうか……、力を貸して下さい！」

彼女が私の手を取る。私は反射的にそれを振り払い、目を伏せた。

「駄目だ。私を助けてくれた礼は返した。これ以上、君を助ける理由は無い」

私は、フィーネに背を向ける。早くこの場を逃げ出したい。

「せめて、家までの道程の安全は確保しておく。泣き疲れたら、帰るんだ」

私は関わりの無い人間の為に戦える程、善人じゃ無い。

「私は……、明日の夕方六時に、あなたが倒れていた丘、ミルドの丘で待っています！ あなたが来るのを信じて、待っています！」

フィーネは離れて行く私にそう言った。信じる？ 会ったばかりの私を。殺すと言った私を。何故、そんなにも靱い心を持てる。人間は下等な生物じゃないのか？

嵐はいつの間にか止んでいた。

初日から、これ程多くの出来事に遭遇するとは。私達は、森の中に神術で寝床を作った。空には糠星。フィーネの声が頭から離れない。だが、明日私が行く事は無いだろう。

二人は眠る。人間界で過ごす二百年の重さを噛み締めながら。

## 第六節 葬列

うーん……。眩しい。そろそろ目覚め時かな？

「ふわあ？ あれっ！」

此処は何処？ 見慣れない風景！

「はははっ、お前も驚いたか。此処は人間界だぞ」

そうだった！ わたし達は、昨日から人間界に居るんだ。ルナもびっくりしたんだから、わたしが驚くのも無理は無いわね。

「あははっ、まだ墮天に慣れてないもんねー」

わたしは欠伸をしながら、伸びをした。さて、今日はどうするのかな？

「今日は、一刻も早くこの村を離れたい所だが、食糧調達が先だ。村の食糧品店に行こう。全く……、不都合だよ」

流石ルナ。わたしのアイコンタクトを解ってくれる。

「仕方無いわねー。人間とは関わりたく無いけど、ルナの命には代えられないわー」

ルナが、天使服から『戦闘着』に着替える。この服は、黒い皮のブルゾンとパンツ、そしてダークグレーのインナーで構成される。服そのものに神術が施されていて、耐久度が高い。昨日みたいに、魔と遭遇するかも知れないから着替えたみたいね。わたしはいつも通り、指輪に変化。

ルナは目立っていた。髪が赤いのが珍しいのは勿論、服も人間界には存在しないものだからだ。しかし、村人は珍しい旅人に注意を向ける余裕は無い。「ある儀式」を行なわなければならぬからだ。

「あの集団はなーに？」

村の大通りを、黒い服を着た村人が歩いている。しかも、沢山。

「さあな。何かを運んでいるみたいだが。ん？ 隠れるぞ！」

ルナが物陰に隠れる。一体？

「パパ、パパー！ 行かないでよ！ 今度、遊んでくれるって言ったじゃないか！」

「ああ、あなた！ 私と子供を置いて逝くなんて……」

「うう……、お父さん、お父さあん！」

葬列。昨夜、死んだ男達を弔う為の。フィーネも居た。

放心状態の者、半狂乱の叫び声を上げる者、棺から離れない者、悲しむ様子は色々だけど、共通しているのは、女子供だという事。この村の男は、殆ど殺されたのかも知れない。ゆっくり、ゆっくりと葬列は進む。拭えない悲しみと憎しみを纏いながら。

「(人間の悲しみは、天使と変わらないんじゃないか?)」

ルナは、昨日フィーネに会ってから、人間を最良目で見えるようになってる。確かに、わたしが見ても、天使と人間は変わらない。力を除いては。何処が下等なんだろう？ でも、それをわたしが認める訳にはいかないわ。

「(所詮、紛い物でしょー?)」

「(本当に、あれが紛い物だろうか？ フィーネ達の、あの悲痛な顔が?)」

「(もー、しっかりしてよ！ ルナ、こんな場所は早く離れるわよ!)」

首を傾げながら、葬列に背を向けるルナ。ルナは理不尽な暴力を許さない。神官ハーツに対してそうだったように。だから、心配なのだ……

海沿いに食糧品店を見付けた。民家と同じ煉瓦造り。入り口は、低い階段の上にある。食糧品店だけあって、店の前も、階段も小綺麗にされている。扉を開くと、「カランカラ

ン」と乾いた音がした。

「いらつしやい！ 何が入り用だい？」

愛想の良い、小太りの中年男。ルナは嚙めつ面だ。

「食料と水が欲しいんだが、どうすればいい？」

「異国の人……、みたいだね。こんな銀貨で商売してるんだがね」

銀貨？ 銀を小さく、薄く伸ばして円盤状にしたものだ。銀なんて天界には余る程有るのに、人間界では価値があるみたいねー。

「これじゃ駄目か？」

ルナは、純金のコップを出した。天界では別段大したものじゃない。

「こりゃ驚いた……。純金じゃないか！ これを、銀貨に交換するけどいいかい？」

「ああ、頼む」

ルナの頭と同じぐらいの大きさの袋一杯に、銀貨が詰め込まれる。

「それで、この『銀貨』は何と交換できるんだ？」

「へ？ それだけあれば、この店の食糧を全部買えるよ！ ざっと、一年分ぐらいかな。

でもそれは勘弁してくれっ。店仕舞いになる」

「全部は要らないから、三日分ぐらいくれ」

ルナが苛立ってる。この人間がお喋りだから。

「了解っ！ いやあ、金持ちだねえ！ 初めてだよ、あんたみたいな旅人は！」

「解ったから、早く食料を渡してくれ！」

ひゃー。ルナの機嫌が悪くなったら、誰がフォローすると思ってるの？

「済まないねー、珍しいお客さんだからつい！ それはそうと、昨夜の惨事は知ってるかい？ 特にフィーネちゃんって子が可哀相なんだよ！ 母親が死んでも、村の皆を励ましてくれた。なのに、父親まで……」

「もういい！」

ルナは、食糧と水が入った袋を取って、店を出る。これは完全に怒ってるな……

「(余計な事を喋り過ぎだ！)」

「(そうねー。それより、早く食事にしませよ！)」

村の外れの大きな木の下で、ルナは食べ物を齧る。わたしも、周りに誰も居ない事を確認してから元に戻り、ESGと水を摂った。時刻は既に正午を回っている。

ルナは遠い目をしている。考え事している証拠だ。この状況は不味いなー。

「フィーネは、本気で私を信じているんだろうか？」

嫌な予感的中するものだ。はあ、困った。

「そんな訳無いじゃない。ルナを利用しようとしてるだけよ！」

説得力、無いなあ。あの子、天使だったら間違い無く良い子だもんね。

## 第七節 思惟

フィーネの顔が浮かんで、消えない。何の見返りも求めず、私を助けた少女の顔が。そして父を喪った後の、強い意志を湛えた顔が。自分の命で人間が救われるなら構わない、と彼女は言った。あの言葉に偽りは無いだろう。

どうして、「魔」に命を脅かされ続ける毎日の中で、そんなにも強く生きられる？ 天界では、ハーツに従いさえすれば誰でも生きられた。だが、人間は生を望んでも死ぬ。身震いが止まらない……

紅い。空と、自分の前髪が。赤は生命の躍動を感じさせる色だ。冬の空は、早い時間に朱に染まる。生き急いでいるかのように。私は生きている。天界の為に死ぬ筈だったのに。虐げられる生と自由を解放するのが、私の夢だった。

結論は、彼女の目を見た時に出ていたのかも知れない。私は立ち上がった。

「リバレス、丘へ向かうぞ」

「え？ ルナ、冗談が上手くなったわねー」

肩に乗っていたリバレスが、顔の前に飛んで来る。制止する気だろう。

「私の本気だ」

「ダメよー！ 相手は所詮人間なのよ」

「確かにそうだ。だが彼女の強さ、否、人間に興味が沸いたんだ」

もう少し、話をしてみたいのだ。その靱さが本物かどうか、私と価値観を共有出来るかどうか。

「はああ……、やっぱりねー。でも、余計な事に巻き込まれるわよー」

私の考えはお見通しか。私の事を氣遣って、止めようとしてくれたんだな。

「心配するな、話をするだけだ。人間の為に、命を懸けて戦う事は無い。それにあの娘は、私達が人間界で生きていく上で役に立つかも知れないだろ」

「はいはい。ルナに危険が無いなら、文句は言わないわー」

「済まない」

リバレスは、苦い顔で手をひらひらさせる。そして、指輪に変化した。

返照を受けて煌く懐中時計を開く。もう直ぐ五時半だ。後、一時間もすれば夜が訪れる。その時私は何を思い、何をしているのだろうか？

## 第八節 明眸

「お父さん、お母さん、行って来ます」

紅くれないの中を、少女は歩き始めた。父母の遺影に言葉を掛けてから。右手は、胸のネックレスを強く握り締めている。六日前、自分の誕生日に父から託された、母の形見。腰には剣を携えている。覚悟の証だ。フィーネは丘をじっと見据える。

あの人、ルナさんの澄んだ瞳。深い、深い慈しみに溢こぼれていた。まるでお父さんや、お母さんのように。幾ら怖い事を言っても、あんな目をしている人が、悪人な筈が無い。

私は無力だ。只の、十七歳の女。ううん、魔物の前では全ての人間が無力だ。剣や弓で魔物を倒す事は出来ない。私に力があれば、お母さんとお父さん、村の人達を助けられるのに……

十七年間、私は沢山の愛情を貰った。その愛情を、倍にして皆に返したい。皆を幸せにしたい。その為なら、私は何だって出来る。

ルナさんは、来てくれる。私はあなたを信じます。

もし、あなたが助けてくれなくても私は……

少女は丘へ向かう。泥濘ぬかるみに足を取られぬよう、一步一步、しっかりと踏み締めて。彼女の瞳に揺らぎは無い。消えない、静かな炎を宿しているから。

## 第九節 返照

見渡す限りが夕紅ゆづりあけに染まっている。丘も、家も、人も。悠然と構えているように見えて、何処か焦燥しょうそうを感じさせる光景だ。

リバレスを身に付けたルナは歩く。随天した場所を目指して。

「(人間界の夕焼けも美しいな)」

「(そうねー。広い上に、海もあるもんね。遠くに來たって感じがして、少し寂しいけど)」  
天界は、一辺が五十kmの正方形の大地の上に創られている。人間界は、半径五千kmの球体だ。スケールが違い過ぎる。

「実際に、離れているから……」

距離だけで無く、力も、文化も。

「ルナさんっ！ 来てくれたんですね！」

フィーネがルナを見付け、満開の花のような笑顔で、手を振っている。

雰囲気が変わった。外見上の変化は、目が涙で腫れ、背中まで伸びた髪が所々乱れているぐらいだ。根本的に違うのは、「少女」では無い事だ。甘えを捨て、しっかりした芯を持った、「女性」になっている。美しい、そう感じた。だが、彼女に吞まれる訳にはいかない。

「初めに言っておくが、私は君の話を聞くだけだ。人間の為に戦うつもりは無い」

彼女は一瞬、表情を曇らせて俯いたが、直ぐに顔を上げた。思い詰めた表情。

「そうですか……。解りました」

「(あれっ、物分りがいいわねー)」

どうした事だ。私の考えを変えさせるんじゃないのか？ その程度で諦めるのか。

怪訝な表情をするルナの前で、突然フィーネが剣を抜いた。ルナは彼女を睨む。

「そんなもので私を脅すつもりか？ 失望したよ」

リバレスも危険を感じ、元の姿に戻る。

「自殺も無駄よー！ あなたが死んでも、わたし達は動かない」

震える手で剣を握るフィーネ。万が一彼女が切り掛かって来ても、余裕で避けられる。

「違います。私が……、魔物を倒しに行くんです！ 例え一匹でも倒せれば、その分誰かが救われるから」

何を言い出すんだ、そんな事が出来る筈が無い。その前に殺される！

「馬鹿な真似は止せ！ 命を粗末にするな」

私は、彼女の剣の刃を素手で掴んだ。掌から、薄く血が流れる。

「いいえ、止めないで下さい！ あなたが助けてくれなくても、私は今日旅立つ覚悟をしていました。私が動かないと、何も変わらない。動いても変えられないかも知れない。でも、少しでも誰かを助けられる可能性があるなら、私はそれに賭けたいの！ どうしても止めたいなら、今此処で私を殺して下さい！」

まさかこれ程とは……。私と同じ、否、もっと強い心。何が下等なものか。こんな想いを抱いて生きている女性が居る。胸が詰まった。この剣は要らないな。私は、剣を彼女の手から引き離す。その時、彼女の手に触れた。薄く、冷たい手。細い指。剣は持つだけでやっつだろう。

剣を失った彼女は、その場に座り込み、泣なみ哭する。

「うう……、あなたは、私から武器まで奪うんですか？ 私は、一体どうすればいいの！」

無心に泣く彼女は、まだ少女の面影を残している。私よりも小さくて、私よりも遥かに若いフィーネ。私の完敗だ。

「フィーネ、君は何でもすると言ったな？」

手を差し伸べる私を、フィーネは怪訝な顔で見る。真意を測りかねているらしい。

「私とリバレスが、この世界で不自由なく暮らせるようにして欲しい。具体的には、食料や情報、宿などの提供だ」

「え……？ それじゃあ」

彼女の手を引き、起こす。そして私は微笑み、頷いた。

「助けるから、もう泣くな」

「は……、はいっ！」

私の手を握り「ブンブン」振り回すフィーネ。まるで、玩具を貰った子供のようにはし

やぎ方だ。

「はああ……。相変わらず甘いんだから」

溜息を吐き、フラフラと私の肩の上に乗るリバレス。彼女はさり気無く、私の掌の傷を治癒した。お前はいつでも、私を助けてくれる。恩に着るよ。

「フィーネ、私は人間に被害を与える魔のみを排除する。それで構わないな？」

「はい！ 張り切って、お二人のお世話をさせて貰いますね。手始めに、今晚は美味しいものを作りますよ！」

無垢な笑顔で、彼女は何度も礼を言った。

この日の夕飯は、昨日よりも美味しく思えた。明日からは、全く異なった日常になる。魔と戦う事を決めたのだから。だが正直、不安よりも期待が大きい。囚人のような生活を強いられた天界とは違い、この世界には無限の自由がある。

仄かな月影が寢室の窓から差し込んでいる。二百年、案外短いかも知れないな。

## 第十節 花葩

「ルナさん、朝食の準備が出来ましたよっ！」

朝から元気に溢れたフィーネの声が響く。食卓には、スクランブルエッグとベーコンの炒め物、パン、コーヒーが並んでいる。ルナは料理を食べた後、コーヒーを飲んだ。

「うっ……。この飲み物は、苦くて飲めたものじゃないな」

食べ物美味だが、こんな苦いものを飲む人間の気が知れない。

「コーヒー駄目ですね。それじゃあ、紅茶にします」

新しく出された「紅茶」という飲み物は、香りがきつく不味そうだったが、飲んでみると甘くて美味だった。何でも、挑戦してみるものだな。

食事を済ませた三人は、旅立ちの準備を始めた。魔の脅威に晒される他の街へ赴く為に。

元々、必要な荷物は纏めているルナとリバレスは直ぐに準備を終え、フィーネを待っている。ルナは、ハルメスに貰った「自由と存在」を開いた。リバレスは、ルナの肩の上で眠り始める。

ハルメス兄さん、「自由」と「生きる事」の大切さをこの本に記した貴方が、今の天界を見れば、さぞ喜ぶ事でしょうね。貴方が、生きていてくれれば……

ルナは、ハルメスに貰った白銀の懐中時計を開く。午前十一時十八分。

「ルナさん……。お待ちせしました」

何だ、その格好は？ 古ぼけた鋼の鎧に剣が二本。とても、歩けそうに見えない。

「フィーネ、それで動けるのか？」

「……勿論ですよ」

フィーネが一步踏み出す。「ガシャン！」という音と共に、彼女は倒れた。

「意気込みは解った。だがそのままじゃ、家を出る事すら出来ないだろ。置いて来るんだ」

「はい……。そうします」

真っ赤な顔をして鎧を脱ぐフィーネ。数分後、身軽になった彼女と共に家を出た。

「次の街に向かう為に、船着場に行くんだな？」

「はい。……でも、その前にどうしても立ち寄りたいたい所があるんです」

彼女はそう言って、胸に抱えた花束に目を落とした。何処か儂げな微笑を浮かべながら、一片の、皎白な花卉が散る。

村を見下ろすように、丘の中腹に設けられた「特別な場所」。死しても、村人と共に在るように。そして、残された者がいつでも死者に会えるように。そんな願いが込められた場所。共同墓地である。其処には、花束や食物などが供えられている。

「短期間に、沢山死んだのねー」

周りに誰も居ない為、通常の姿に戻ったリバレスが声を漏らした。

「はい……。今年だけで百人以上が殺されました」

俯くフィーネ。その口調は重々しい。

「この墓は、父親の墓か……」

「いいえ、お父さんとお母さんのお墓ですよ」

「済まない……」

「いいんです。少し話を聞いて貰えますか？」

「ああ」

「手短かにねー」

余計な事を言うな。私はリバレスの頭を軽く小突く。ムツとした表情。リバレスは、私が不要な情を抱かないようにしたいのだろう。だが、私はフィーネの話を聞いて見たい。

「フィーネ、気にせず話を続けてくれ」

フィーネは、私達二人を交互に見た後、ゆっくりと頷いた。

「お母さん……。私の母が三年前に殺されたのは話しましたね。母はとても優しい人で、自分よりも家族や親しい人を第一に考える人でした。魔物が村に撒いた毒に侵され、徐々に痩せ細り……。苦しみ抜いて最期を迎えた時も、私と父の心配ばかりしていたんです」

君は母親に似たんだ……。私は黙って彼女の言葉に耳を傾ける。

「父は、靱い人でした。仕事をしながらも、母と私をいつも気遣い、決して弱音を吐きませんでした。私は父が泣く姿を見た事がありません。『悲しみは伝染するから、家族には笑顔で接するんだ』って言うのが父の口癖だったんです」

彼女の目から零れ落ちる一滴の涙。キラキラと光り、地面に吸い込まれる。

「人間は脆い。なのに何故、自分の無力さに涙してまで生きようとする？ それ程の悲しみがあるなら、死を受け入れる方が容易だろう？」

訊いてみたかったのだ。死という逃避を選ばず、敢えて茨の道を歩もうとする彼女に。「例え脆くても……、この世界に生を受けるのは素晴らしい事なんです。人は愛し合い、新たな生命を育みます。その生命もまた、注がれた愛情を誰かに注ぐでしょう。私は父と母から沢山の愛情を貰いました。私は幸せです。今までに貰った愛情を膨らませて、皆に返す事が出来るから」

彼女は胸のネックレスをギュッと握る。形見の品だろうか？ 私は続きを促した。

「でも、この世界にはそんな幸せを奪われる人が沢山います。魔物によって殺される人。最愛の人を魔物に奪われ、憎しみに狂わされて幸せを見失う人。魔物が絶対悪だとは言いません。魔物にも私達を襲う理由があるのでしょう。けれど、人間の私から見るとやっばり許せない。人間も魔物も争う事無く共存出来れば最高だと思います。だけど、魔物の脅威は増すばかり。魔物は私達を皆殺しにしようとしています。私は生きたい！ 皆に注がれた愛情を、皆に返さないといけないから。そして、皆に生きて居て欲しい！ 理不尽に命を奪われる事無く。大好きなお父さんとお母さんから貰ったこの命。一人一人に宿る大切な命。脆くても一生懸命生きて、幸せでありたいんです！」

彼女は涙を拭う。私は思わず彼女から目を逸らしてしまった。

眩しい、その底知れぬ愛情が。生への直向きさが。

自分や大切な人が、いつ殺されるかも解らないこの世界を、どうして素晴らしいと思える？ 何故、憎悪や悲哀に打ち負かされない？ 私は、神官や不自由な天界を憎んでいた！

リバレスも俯き、黙っている。彼女もまた、私と同じ気持ちだろう。

「お待ちせしました。さあ、行きましょう！」

花束を置かれた墓石が、日の光を浴びて眩く輝いている。

フィーネは、船着場に着いても、船に乗っても村と丘を見詰めていた。「今のミルドを、しっかりと憶えておきたいんです」、彼女は微笑みながらそう言った。

## 第十一節 死毒

ミルドを出た翌朝、三人は「レニーの街」に着いた。ミルドからは東に三百km、多雨で作物が多く獲れる事で知られ、アトン地区の食糧生産の五割を担っている。その為、魔には要所と見做され、幾度と無く攻撃を受けて来た。最近、レニーに妙な噂が立っている。ある作物を食べると「痩せ細り、死ぬ」と。

午前八時、二十m先も見えない濃霧の中、三人は街へ降り立った。

異様に静かだ。街の入り口で見渡して見るが、人影は無い。街に入り、暫く歩いていると、ようやく一人の中年の男に出会った。樽たの上に座り、酩酊めいてしている。

「若い……、悪い事は言わん。直ぐに立ち去るんだ。この街は……、呪われている！」  
呂律が回っていない。だが、確かに「呪われている」と言った。

「何故だ？ 魔物に襲われているとでも言うのか？」

「……違う。もっと恐ろしい事だ。病……、死の病に冒されているのだ！」

「病気？ どんな病気なんですか！」

フィーネが男を揺さぶる。必死の形相だ。男は、彼女の手を振り払い叫ぶ。

「皆、痩せ細り、激痛の中……、死ぬんだ！」

男は急に笑い出し、やがて眠ってしまった。この街も酷い状況のようだ。

「どうするんだ？」

黙って何かを思索しているフィーネに問い掛けた。

「お母さんと症状が同じです！ お母さんと村の人を殺した魔物が、この街の何処かにいる……。私、捜して来ます！」

「探す？ 待てよ、フィーネ！ 危険だ！」

私が思考している間に、フィーネは霧の中に消えていた。

「(全く……、これだから人間は……)」

幾ら何でも、フィーネは魔の懐に飛び込む程馬鹿じゃない。彼女の無鉄砲さは後で咎とがめるとして、私達が今すべき事は情報収集だ。酒場に向かうか。其処には情報が集まるとフィーネに聞いた。

濃霧が霧雨に変わる中、木造の酒場を見付けた。木は長年の風雨で老朽化している。だ  
がみすばらしい感じはしない。「カランカラン」、扉を開くと乾いた鈴の音が響いた。

「いらつしやい……」

ミルドの食糧品店の店主と違って、気弱な声を発する若い男の店主。どうしたものか。

「この店に客は居ないのか？」

「そうだよ、街が大変だからね。今日は、あんたが最初の客だ」

「街の状況を詳しく聞きたい」

私は店主に数枚の銀貨を渡す。情報料だ。

「毎度、飲み物は何にする？」

飲み物？ 棚に並んでいるガラス瓶に入った液体の事か。どうやら酒のようだが……

「(一番高い酒にしたらー？ 安物は、天使の口には合わないわよー)」

ナイスフォローだ、リバレス。

「じゃあ、此処で一番高級で美味しい酒を頼むよ」

「了解。『恵みの雨』っていうこの土地原産の白ワインだよ。最高の味さ」

大層な名前だな。だが、恐る恐る嘍<sup>す</sup>つてみると、以外に美味だった。

「まあ美味だが、アルコールが弱いな」

天界でたまに振舞われる酒は、アルコールが五割を占めている。

「お兄さん、酒に強いみたいだねえ。久々の上客だ。もっと飲んでくれよ」

勧められるままに、グラス五杯分を飲み干す。まだまだ飲めるが、私は先を急ぐ。

「そろそろ、この街の状況について教えてくれ」

「そうだね。この街は、数ヶ月前から急に病気が流行り始めた。その病気に罹<sup>か</sup>った者は、苦しみ抜いて確実に死ぬ。最初は、森で果実を収穫していた人、次にその家族、最後は果実を食べた人が病気になった。僕は病気じゃ無いけど、いつ罹<sup>お</sup>つても可笑しく無い」

病気が空気感染や接触感染なら、この男は無事では無いだろう。感染源は恐らく、森で収穫された果実。ならばフィーネの言う通り、魔が森に毒を撒いたと考えるのが自然だ。

「森は何処にある？」

「街のすぐ南だよ。まさか……、行く気じゃないだろうね？ 死ぬぞ！」

「心配要らない。訊いてみたただけだ。ありがとう」

私は更に銀貨を弾んでから、店を後にした。

「(敵は手強そうねー)」

リバレスの不安そうな声。彼女は、相手がどんな奴か推測出来ている。

「(ああ。この街の人間に見付かっている事考えると、狡賢<sup>すあかし</sup>く残忍な奴だろう)」

「(じゃあ、わたしも戦った方がいい?)」

「(最悪の場合は頼む。)」

その時だった。耳に突き刺さる金切り声が響いたのは。

「た……、助けてくれえ！」

只事じゃ無さそう。私は声のする方に駆ける。街と森の境界にその男は倒れていた。

一足先に着いたらしい、フィーネが男を介抱している。若い男の全身には、「ロープで巻かれたような」傷があった。土気色の顔。そして、病的に痩せ細った体……

「どうしたんだ？」

「う、うう……。俺は、俺は見たんだ！ 森の奥で魔物が毒をばら撒くのを」

「もう大丈夫だ」

一時凌ぎだが、私は男を神術で眠らせる。

「この街の様子は、母が亡くなった時と全く同じです！」

フィーネが顔を覆いながら叫ぶ。彼女を咎める気は失せた。私がすべき事は一つ。

「今から魔を倒しに行く。この毒は、魔を倒せば消えるだろう。君は此処に居ろ」

私はフィーネの肩を叩き、森へと歩き出した。

「嫌です！ お願いだから、私も連れて行って下さい！ その魔物だけは許せない」

剣の柄を「ギュツ」と握り締めて、震えている。

「何を言っても、多分、ううん、絶対ついて来るわよー。やれやれねー」

「仕方無い……。だが、絶対に私から離れるなよ」

「はい、約束します」

彼女の目は怒りに燃えている。周りが何も見えない程に。

## 第十二節 狡猾

三人は森へと足を踏み入れた。この森自体が、果樹の集まりだ。だが、奥へ進む毎に木は鬱蒼と生い茂り、日光が差し込んで来ない。此処の暗さは夜のようだ。

更に歩くと果樹が途切れ、原生樹に変わった。手付かずの森から流れてくる、肌に重く纏わり付く嫌な空気。それをルナは察知した。

「この奥に、きっと魔物がいる」

恐らく、森を流れる小川の水源に。

「解りました……。気をつけます」

森の光が徐々に失われていく中で、ルナの後ろを歩くフィーネは何かに躓き、ふと足元を見る。其処には赤く可憐な花が咲いていた。原生林にしては派手な色彩に目を奪われる。

「綺麗な花」

その花を摘もうと腰を下ろす。そして、彼女は何気なく周りを見渡して見た。

「……あれ？ ルナさん、リバレスさん！」

二人の姿は無かった。彼女は立ち上がるうとするが、視界が霞みその場に倒れる。

「私は……、どうなるんだろう」

彼女の意識は其処で途切れた。

此処は、レニーの森の最奥に位置する水源だ。だが、水は本来の清澄さを失い毒々しい紫色を呈している。

「ようこそ、お嬢さん……」

ノイズが混じった、不気味な低い声。両手両足を蔦で縛られたフィーネが目覚めます。

「だ……、誰！」

彼女は声の主を睨み付けた。異形の者……。一見巨大な植物にも見えるが、体中がボコボコと膨らみ、赤い血管のようなものが張り巡らされている。頭は毒々しい赤色の花のよう、其処に飛び出た目玉と裂けた口が見える。

「人間によく効く毒を作る『魔』だよ。ククク……」

「お前が、私の村も襲ったのね！」

彼女は、食い込む蔦の痛みを無視して体を揺らし、叫んだ。

「村？ 沢山滅ぼして来たから、解らないなあ。クククッ」

「私は、お前を絶対に許さない！」

フィーネは歯を食い縛り、唇を噛んだ。一筋の血が彼女の頬を伝う。

「まあ、そう言うなよ。一つ取引をしようじゃないか。オレは、今後も人間を毒で殺し続ける予定だ。だがお嬢さん、あんたがこの果実を一つ食べ切れたら、オレはこの世界から撤退する。……どうだい？ 悪い話じゃないだろう」

林檎程の大きさの赤黒い果実。吐き気を催す、刺激臭が漂っている。

「本当に……？」

彼女は自分が無力なのを知っている。その果実を食べれば、自分が命を落とすと解っているが、それで他人を救えるならば。そんな気持ちになっていた。

「魔は一度言った事は取り消さない。約束を破るぐらいなら、死んだ方がマシだよお……」

「……解りました。食べます」

菓の拘束が解ける。彼女は、魔が差し出す果実を受け取った。

「さあ、食べるんだあ！」

フィーネは目を閉じ、思い切ってその果実を齧る。

「う……」

彼女は果実を落とし、俯せに倒れた。血の気が引いて行く。

「バカめ！ 一口で致死量だあ。ヒヤハハ……、愉快で堪らないねえ」

フィーネは自分の愚かさを呪い、激しい憤りの中で意識を失っていった。

「そうか、愉快か。それなら、笑いながら死ぬがいい！」

剣を抜き、こちらに駆け寄る人影。迅い！

「誰だ！」

「貴様に名乗る名など無い。フィーネが毒で死ぬ前に消えて貰うぞ！ リバレス、フィーネを頼む」

「解ったー！」

ルナは剣の切っ先を魔に向ける。リバレスは、フィーネの毒の進行を遅らせる処置を開始した。

「オリハルコンの剣に、天翼獣……。お前が、例の墮天使か。……許して下さい！」

突如その場に跪く魔。ルナは呆気に取られたが、やがて剣を下ろした。

「許して欲しいなら、フィーネと人間にかけて毒を解除しろ」

ルナが一步近付く。その時だった。

「馬鹿が！」

魔が、頭から大量の毒霧を放出する！ くっ……、目が眩む。卑怯な！

「死ね！」

魔から触手が伸びて来た！

「ルナ、保護！」

触手は私の脇腹に直撃したが、リバレスの神術で浅い傷で済んだ。もう、騙されない。「貴様に情けをかけた、私が馬鹿だったよ」

「グアッ……！」

魔の触手を二本切り落とす。残りは胴体と触手が二本と頭か。

「オレが墮天使如きに負けるか！ 死ね！」

地面、空気、水、周りの木々……、全てが毒化していく。

「ルナ……」

リバレスまでもが、毒に侵されていた。私も体の力が抜けていく。時間が無い。

「焼き払ってやる。高等神術『滅炎雨獄』！」

この神術は、「滅炎」を広範囲に広げたもの。半径10mが火の海と化す！

「ギィヤアア……！」

炎の中、のた打ち回る魔。やがて、火は消えた。

「や……、止めてくれ。許して下さい……」

高等神術で黒焦げになっても、まだ生きているとは！ こいつは中級魔、否、上級魔かも知れない。毒はまだ消えていない。生かしておくとは危険だ。

「一度は許そうとした。だが、二度目は無い。転生したら、正直に生きる事だ」

「ま……、待って」

私は、躊躇せず魔の首を切り飛ばした。自分達の命を守る為に。

「ククク……。お前の事は獄界に伝わっている。覚悟しろお！」

それが、奴の最後の台詞だった。厄介だな……。だが、私が決めた事だ。

毒が消えていく。ルナ達の毒は勿論、大地、水、木々、街……。魔が齎した毒は全て消えた。ルナとリバレスが深呼吸していると、フィーネが目覚める。

「う、ううん……」

私は彼女を抱き起こし、目を開けるのを待った。言いたい事がある。

「……ルナさん？」

「馬鹿！ 一番憎んでいる相手を、どうして信じる？ 私が来るのがもう少し遅ければ、死んでいたんだぞ！」

私は、彼女を揺さぶる。そうせずには居られなかった。

「ごめんなさい。私一人の命で、沢山の人が救われるって思うと……」

俯き、涙を浮かべるフィーネ。だが、はつきり言っておかなければ。

「考えが浅過ぎる。魔は人間そのものを滅ぼそうとしているんだ。たった一人の人間の言

葉に、耳を貸す筈がないだろう？ これからは、軽率な行動を控えるんだ！」

「……解りました。でも、どうしてそんなに詳しい事まで知っているんですか？」

「余計な事は、訊いちやダメよー。わたし達は『協力』してるんだからね」

その通りだ。彼女に、深く知られてはならない。フィーネは黙って頷き、立ち上がった。そして彼女は柔らかに微笑む。

「助けてくれて、ありがとうございます！」

「ああ。それより私は空腹だ……」

私がそう言うと彼女は、「腕によりをかけますよ」と言わんばかりに、袖を捲まくった。さつきまでの霧が晴れ、空から眩しい光が覗く。

### 第十三節 饗宴

街の入り口に群集が居る。彼等は一様に、此方こちらに向かって手を振っている。

「英雄の凱旋がいせんだー！」

さつき、倒れていた男がそう叫び、駆けて来る。何事だ？

「貴方が街を救ってくれたんですね！ 街長が祝宴を開くそうです。是非せひ、ご参加を！」  
不参加だ。私がそう言おうとした瞬間、フィーネが耳打ちする。

「ルナさん、断れませんかよ。この街を出る船は明日まで出ませんし……。ほら、街の人が  
どンドン集まって来ます」

ざっと数えて、数千人。この街を出られないなら、仕方無いか。

「ああ、参加させて貰う」

「ありがとうございます！ お二人のお名前を、是非お聞かせ下さい」

「……私はルナリート。もう一人はフィーネだ」

「ルナリート様、フィーネ様。今晚、盛大な祝宴を開きます！ 街が一丸となって。夜まで  
どうぞお待ち下さい」

男が、群集の元に帰って行くと、群集は方々に散った。準備を始めるのだろう。

街は熱気に満ちている。神官ハーツが消えた天界のように。

「(困ったもんねー。逃げなくていいの？)」

「(まあ、なるようになるさ。人間の対処はフィーネに任せるし)」

「ルナさん、今日は楽しませようねっ！」

鼻歌を口ずさむフィーネ。こんなに楽しそうな彼女は見た事が無い。祝宴が開かれる事  
と、母の仇を討てた事に対する喜びだろうか。

私達は、街の中心にある葡萄園ぶどうえんに案内された。この葡萄園を中心に、街全体で祝宴を開  
くらしい。各住宅から、テーブルと椅子が運び出される。テーブルには、様々な料理や酒  
が並んでいる。「街が一丸となって」という言葉の通りだ。

空には月が昇る。葡萄園には、豪華な料理と無数の酒が運び込まれた。見渡す限り、人、人、人。この街そのものが、一つの巨大な生命に思える。死の恐怖を脱した「今」を祝うという、一つの意味を持った生命。

いよいよ、祝宴が始まるらしい。私は、銀の杯に「恵みの雨」を注がれた。誰もが、手に杯を持ち街長を注視している。不気味な光景。全員が杯を持って、何をする気だ？

「さあ、ルナリート様とフィーネ様に感謝の意を表し……、乾杯！」

「乾杯！」

杯がぶつかり合う。フィーネも杯をぶつけて来た。これは、祝いの儀式と考えて良さそうだ。大地が揺れる程の歓声上がる。大声を出さないと、話が出来ない。

「凄い騒ぎ方だな。こんな騒がしい行事は、天界に無かった！」

「(そうねー。それだけ嬉しいって事でしょ。それはそうと、後でわたしにも飲ませてね)」

「(勿論だ)」

リバレスも酒を飲める。彼女も天使同様、酒には至極強い。

「皆の者！ この偉大なる勇者の話を、酒の肴さかなにしよう！」

「は？ 何を言い出すんだ、この男は。困るじゃないか。こういう時は……」

「フィーネ、何でもする約束だよな。上手く話してくれ」

「ええー……！ そんなあ、私は話が苦手なんですよ！」

額から汗を掻き、狼狽ろうばいしている。だが、「キッ」と前を見据えた。覚悟が出来たようだ。

「(頑張ってるねー)」

指輪のリバレスが、面白がって私とフィーネに言葉を転送する。

「え？ リバレスさん。何処ですか！」

辺りをキョロキョロ見回すフィーネ。私は指輪を小突いた。

「それではフィーネ様、お話を！」

「あつ、はい！ ええつと……」

フィーネは、冷や汗を掻きつつも上手く話をした。リバレスの存在と、人間離れたルナの力を隠して。ルナは、「記憶を失った剣士」とされた。

ルナは感謝の為に訪れてくる人間に、適当に相槌を打ちながら、料理を頬張ほおばり、水をのように飲む。飲み比べをしてくる人間も居たが、ルナは全員を負かした。

「(人間は、本当に楽しそうに笑いよく喋るな。流石に疲れたぞ)」

「(それじゃー、みんな酔い潰れてるし、宿に行きましようか)」

無言で頷き、私はワインを一本持つ。フィーネは、まだ街の人間に囲まれている。

「フィーネ、私達は先に宿に行く。後は頼んだぞ」

「ふぁい？」

泥酔か……。まあ、此処には魔は居ないし、暫く放っておいても大丈夫だろう。  
「酔いが醒めたら、宿に来るんだぞ」

私は、この街の宿で最も高級な部屋を無償で提供された。リバレスは、ワインを飲んで  
いる。彼女専用の小さなグラスに注がれたワインを何杯も。

「このお酒、美味しいわー!」

彼女は驚嘆きょうたんの声を上げた。無邪気に私の周りを飛び回りながら。  
「だろ?」

「いいなあ、料理も美味しいんだらうな」

その時、部屋の扉をノックする音が響き、彼女は指輪に戻った。扉を開けると、街人に  
運ばれて来たフィーネの姿があった。既に眠っている。私は、連れて来てくれた人間に礼  
を言い、フィーネを抱えベッドに寝かせる。彼女の体は軽く、温かい……。また、その幸  
せそうな寝顔に鼓動が早まった。私も酔っているのかもな。その後、リバレスを肩に乗せ、  
バルコニーに出た。

「フィーネも、普通の人間なんだな」

「ホント、人間って色んな面で弱いわねー」

弱いが、強い。弱さも強さも持っているのが、人間なんだ。

「二百年、あつと言う間かもな」

「……そうかもねー」

リバレスも、人間への偏見が薄らいでいるようだ。やはり、天界の教えは碌ろくなものじゃ  
無い。何が、「人間は知能が低く、感情のみで動く動物。言葉を一応話すことが出来る」だ。

「ルナさーん……」

フィーネの声。どうやら目を覚ましたらしい。振り返ると、真っ赤な顔で足取りが覚束  
無い彼女が居た。

「どうした、眠れないのか?」

「……あなたは、何者か解りませんが……。良い人ですね。とっても感謝してます」  
俯いて、呟くように言う彼女。普段と様子が違う。

「急に何を言い出すんだ?」

「私の我儘わがままを聞いてくれて、助けてくれて。初めは、無口で怖い人だと思っていたのに」  
「フィーネ、酔っているのに無理するな。ゆっくり寝るんだ」

「私は酔ってません。今言った事は、全部本当です!」

耳が痛い程の大声。どうやら本心らしい。さて、どう切り返すか。

「ルナが良い人なのは当たり前じゃない。だから、あんまり心配かけないでねー」

お前まで何を言い出す。リバレスは思いつ切り笑っていた。彼女の前で。

「はーい。……あれ、目の前が」

フィーネは前のめりになったので、受け止める。もう、寝息を立てていた。

「はあ、ヤレヤレねー。これだから人間は……」

リバレスが溜息を漏らした。その気持ちはよく解る。

「まあ、仕方無いだろう。それでも、私が思っていた人間像よりは遥かに上出来だ」

「ルナは何でも、公平に見ようとするもんね。でも、あんまり人間を鼻負すると、ジューディアに怒られるわよー」

ジューディア。私が墮天する前に、「人間に毒されるな」と言っていたな。

「私は、人間に毒されてなどいないさ。唯、愚かでは無いと理解しただけだ」

「はいはい。確かに、天界で言われてた程、馬鹿じゃないもんねー」

お前はいつも私の考えを理解してくれる。

「リバレス、ありがとな。お前が居てくれて、助かってる」

「もー、照れるわよー！」

小さな手で、私の頬を引っ張る。ちよつと痛い。

天界に帰ったら、人間への誤解を解こう。思い込みが激しいジューディアは、少々怖いが。

「人間界での話、一杯持ち帰りましょーね」

リバレスが翼をはためかせて、飛ぶ。

「ああ。色んな思い出が出来そうだ。また、明日からも頑張るか！」

「はーい！」

私達は明日からの旅に備えて眠りに就く。

しかし……、フィーネが目覚めるのは、いつになる事やら。

#### 第十四節 零雨

今日もこの街には雨が降っている。静かで冷たい雨。そう遠くない未来、雨は雪へと変わるだろう。ルナが墮天して今日で五日目になる。変化に満ちた生活、だがその生活に彼は慣れてきた。フィーネとリバレスはまだ眠っている。彼はハルメスに貰った本を開いた。

正午頃、ルナが本を読み終えた後にフィーネが目覚める。

「おはようございます！」

「おはよう。随分長い間眠っていたな」

髪が乱れた彼女は眠そうに目を擦こすっている。

「あっ、見ないで下さいよ！ 顔を洗って来ますね」

私の視線に気付き、彼女は慌てて部屋を出て行った。

「ところで……、お前は何故まだ寝てるんだ？」

起きる気配の無いリバレスの頭を指で小突く。

「う、うーん。もう朝なのー？」

「もう昼だ。たまには、私より早起きしてみたらどうだ？」

「わたしがこの二百二十四年間で、ルナより早く起きた事が何回あるのよー？」

リバレスが、膨れっ面をしながら私に訴える。開き直るなよ。

「そうだな……。まだ九回しか無い。大体、二十五年に一回しか起きない奇跡だよ」

「其処まで詳細に言わなくても……。でも、わたしが遅く起きるのは仕方無いのよー！」

「確かに。今まで色んな事を試したけど、無理だったからな」

「そんな他愛の無い話をしていると、フィーネが濡れた髪を拭きながら帰って来た。

「お待たせしました。この街は水が豊富なので、水浴びもしてたんですよ」

彼女は身震いしながら微笑む。体から湯気が出ている事から察して、温水を浴びたのだろうが、今は寒そうだ。

「朝食は後で良いから、暖炉で温まった方がいいぞ」

そう言っ、暖炉に薪たきぎをくべた。「パチパチ」と、火が勢いよく燃える。

「ありがとうございます！ ルナさんとリバレスさんも、水浴びどうですか？」

水浴びか……。天界の住人は、普段から薄い「保護」で体が覆われているから、余り体が汚れない。体を洗うのは二ヶ月に一回で十分だが、何事も経験か。

「解った。行くよ」

「わたしもー！」

浴室は、男女別だった。天界のように、個室になっていないらしい。リバレスにどうするか聞こうとすると、彼女は「翼の無い女天使」に変化した。余程入りたらしい。

「わたしは、ゆっくり入浴するから、朝食を食べたら迎えに来てねー」

彼女はそう言うと、女用の浴室に走り去った。

温かい湯船に浸かると心地良い。天界には冷水のシャワーのみだ。必要は無いが、頻繁に水浴びするのも悪くないな。私は、湯船を出ると「焦熱」の神術で体を乾かした。部屋に戻ると、扉の向こうから鼻歌が聞こえた。随分ご機嫌だな。

「お帰りなさい！ サッパリしましたか？」

大輪の花のような笑顔で、フィーネが私を迎える。思わず目を背けた。

「ああ」

「朝食の準備、出来てますよ！」

色取り取りの料理が食卓に並んでいる。やはり彼女は料理が上手い。

「ところで、フィーネ。祝宴の事は覚えてるか？ 特に、宿に帰って来てから」

椅子に座って、料理を食べながら訊いてみた。

「ええっと……。祝宴の最初の方しか覚えて無いです。ごめんなさい」

「謝る必要は無いさ。唯、君が私の事を『初めは無口で怖いと思っていた』事が解っただけだから」

目を丸くして、頬を朱に染めるフィーネ。やはり昨日の言葉は本心だな。

「まさか私、そんな事言ったんですか！ ごめんなさい。でも、今はそんな風に思ってますよ！ 今は、優しくて頼り甲斐がある人だと……、ああっ。何言ってるの、私！」

「ははははっ……」

素直過ぎる。大慌てだな。あんまりからかうのは止めよう。

「ルナさんっ！ 笑ってる所を初めて見ましたよ！」

そうかも知れない。私は余り笑わないから。だが、最近よく笑うようになったと思う。

「私だって、笑う時ぐらいあるさ！」

「もつと笑って下さいね」

ニコニコしながら、私の顔を見詰めて来る。食べ辛い。その時、部屋の扉が開いた。

「たっだいまー！」

「えっ……。誰ですか？」

リバレスが、女天使の姿で帰って来た！ 待ってるって言ったのはお前だろ。

「こら、リバレス！」

「あ、ごめんなさい！」

直ぐに指輪に変化するリバレス。フィーネに説明するのが厄介だな。

「羨ましいな。私も、色んなものに変身出来たらいいのに……」

全く驚いていない。彼女にとっては、私が笑った事の方が重大事件らしい。

三人は食事を摂った後、食糧を買出しに行った。途中、会う人全てに礼を言われた。食糧も無料で貰い、船に乗る。次の目的地は「ルトネックの村」だ。レニーから南に百km、水産業が盛んな村らしい。

間も無く日が沈む。この世界ではS・U・Nの事を「太陽」と言う。魔の事も「魔物」と呼んでいる。天界とは微妙に違うらしい。

「もう直ぐルトネックに着くけど、あそこは魔物が多いから気を付けてな」

小型船の船長が舵を握りながら呟いた。船員は船長一人、乗客は私達だけだ。

「そんなに多いのか？」

「ああ。頻繁に船が襲われてる。それに、二週間前から連絡が取れていない……」

「大丈夫ですよ。ルナさんが助けてくれます！」

フィーネの双眸が期待に染まっている。そんなに期待されても困る。

「(気安くそんな事言わないでくれるー?)」

「ごめんなさい！」

突然頭を下げるフィーネに、船長が不思議そうな顔をする。

「何にせよ、期待してるぜ！ ん……、様子が可笑しいな」

船長が指差す先。其処には茜色の空……、否それだけじゃ無い。

「村が燃えてる！」

フィーネの声が大空に吸い込まれて行く。砂漠に落とした一雫のように。

## 第十五節 相違

「さあ、着いたぜ！ お……、俺は帰るからな！」

船長はルナ達を下ろした後、直ぐに帆を張った。

「待てよ！」

ルナの叫びを無視し、船は遠ざかる。仕方無く村へ向かおうとすると、「ピカッ」と目の前を閃光が奔った。背後で、「ドーン」という轟音が響く。

振り向くと、船が燃えていた。瞬く間に、船は海底に沈んで行く。

「魔の攻撃だ！」

「船長さん！」

フィーネは沈む船に叫び、一瞬呆然ぼうぜんとしたかと思うと、今度は村の中に駆け出した。

「待つんだ！」

絶対に一人で行かせる訳にはいかない。私は本気で走り、フィーネの腕を掴んだ。

「隠れるぞ！」

背筋が凍る程の殺気！ 私はフィーネと共に物陰に隠れる。リバレスも元の姿へ戻った。

「クツクツ。後はお前達一人だけだあ！ どう殺すか……。皮剥ぎ、串刺し、八つ裂き？」

道端に転がる骸、瓦礫がれきと化した家々。此処はもう村じゃ無い。廃墟はいきよだ。

漆黒の体に黒光りする翼を持つ魔。形状は天使にそっくりな魔が、今正に最後の住民を殺そうとしている。若い母と、幼い子供を。

「どうか、どうか！ 私はどうなっても構いませんから、この子の命だけは！」

「さて、どうしようかなあ？」

魔は腕組みをして、平伏す母親を見下している。その時、フィーネが猛然と駆け出した。

「待ちなさい！」

「馬鹿！ どうして、先を考えずに行動するんだ！」

私は物陰から出られない。足が……、竦む。

「お、まだ生き残りが居るか。そう急がなくても、後で殺してやるから！」

魔が掌をフィーネに向ける。その直後、フィーネは五m後ろの瓦礫へ弾け飛んだ。

「フィーネ！ ルナ、助けに行かないの？」

「待て、リバレス！ あの魔は強大だ。作戦を練らなくては」

震えと、冷たい汗が止まらない。作戦など無駄だ。力が違い過ぎる！ 例え墮天前の私でも、歯が立たないだろう……。死ぬのが怖い。

「邪魔が入ったが、お前の言う通りにしてやろう」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべる魔。何を考えている？

「それでは、子供は助けてくれるんですね？」

「ああ……。子供から殺してやるよ！」

魔が掌を子供に向ける！ 途轍も無い冷気。子供は、凍り付き砕け散った。

「うわああ……。殺してやる！」

「いいねえ、その怒りに狂った顔。そんな奴を殺すのが俺の楽しみなんだよ！」

魔は突進して来た女を躲し、炎を放つ！

「ぎゃああ……」

女は燃え尽きた。灰すら残っていない……。何て魔力だ。

「殺すって言うのは、強い者だけが行える愉しみなんだぜ！」

「うう……。何て事を！ どうして魔物はそんなにも残酷に人を殺せるの？ 私達が何を

したのよ！」

女の居た場所に唾を吐く魔。フィーネは、魔に詰め寄り叫ぶ。危ない！

「娘、待たせたなあ……。次はお前の番だ！」

魔の掌に力が集約される。止めなければ！

「中級神術『天導雷』！」

天を裂く雷撃が魔に直撃する！

「グッ、誰だ！」

無傷か……。だが、出て行くしか無い。フィーネを助ける為には！

「屑が……。それ以上の愚行は、見過ごす訳にはいかない！」

私は剣を抜き、切っ先を向ける。体が震えるが、気付かれないようにせねば。

「フッ……。やっと来たか。待っていたぞ、墮天使ルナリートよ！」

「何故、私を知っている？」

「貴様の存在は既に知れ渡っている。それより何故、墮天使が人間の味方をする？ 愚鈍  
で不要な人間は、神が勝手に造ったものだろうが。それを、俺達が殺して何が悪い？」

私もそう思っていた。実際に人間に、フィーネに出会うまでは。

「確かにそうだ。だが、人間は神の干渉を受けず、自分の意思で生きている。天界に誕生する資格が無い魂から生まれるという点以外では、私達と何ら変わりはない！ 自分の意思で懸命に生きる生命を無意味に奪うな」

「クククッ……。本当にそう思っているのか？ どうやら貴様等天界の住人は、『人間』の真の存在理由を教えられていないらしい。神が教えるのは、歪んだ歴史のみか……。人間は、決して『神の戯れ』などで創られたのでは無い。完全な計算の元で創り出された、天界の副産物ということだ！」

副産物？ 何が真実で、何が偽りなのだ。

「……。どういう事だ？」

「貴様が知る必要の無いことだ。俺が此処に居るのは、貴様を消す為。人間の抹殺に、墮天使の力は邪魔だからな。貴様が倒した魔は、低級魔と中級魔。俺は、中級魔の二階級の『指揮官』だ。貴様には万に一つも勝ち目は無い！」

魔の力が更に増幅する！ 逃げるしか無い。

「(フィーネ、リバレス！ 私に勝ち目は無い、逃げるぞ！)」

私は魔から飛び退き、フィーネを抱える為に走る。だが、魔の指先から漆黒の矢が三本放たれた。矢は正確に、全員を狙っている！

「クッ……！」

リバレスは上手く避けたが、私には二本の矢が右大腿と左上腕に刺さった。フィーネを庇ったからだ。

「ルナ！」

「ルナさん！」

二人の叫びが訝した。痛みで意識が少し朦朧とする……

「大丈夫だ。(それより、私が隙を作るから逃げるんだ！)」

二人が頷くのを確認し、私は力を振り絞る。

「高等神術『滅炎』！」

直径五m程の、炎球が魔に炸裂する。今だ！

私達は同時に、魔と反対方向に駆け出した。途中、足の痛みを堪えフィーネを抱える。二百mは遠ざかっただろう。だが、私達は足を止めた。魔が……、先回りしていたからだ。

「敵前逃亡とは無様だな！ だが、この俺から逃げられる訳がないだろう？」

無傷で、私を嘲り笑う魔。もう……、駄目だ。

「待って下さい！ どうか、二人は助けて下さい。悪いのは私なんです。人間を助けて欲しいって頼んだから。殺すなら私だけにして下さい！ お願いします！」

跪き、魔に懇願するフィーネ。屈辱だろう……。私が不甲斐無**い**ばかりに！ 目の前が真っ赤になる。鼓動と呼吸が早まる。この感覚は……

「却下だ。だが、そんなに死にたいのならお前から燃やし尽くしてやろう！」

魔の掌に魔力が集まる。凄まじい魔力。気温が上昇し、大地が揺れている。こんな魔術を受ければ、フィーネは即死！ 私を助けてくれた彼女。人間を愛し、世界を愛し、喜び、悲しみ、幸せを求めて生きている彼女が焼き尽くされる……

**嫌だ！ 私はフィーネを失いたく無い！**

ルナの髪が銀色に変わり、力に溢れる。傷は瞬時に完治した。

「死ね！」

魔から炎が放たれる……が、ルナは炎の前に立ち塞がり、その炎を掻き消した。その素早さと力強さは、指揮官である魔を凌駕する。

「待てよ、お前の相手は私だろうか？」

私は剣を振り下ろし、魔の両腕を断ち切る。まるで紙を切るように手応えが無い。

「グアアッ……。何だ、その力は？ その髪……。まさか貴様は」

私が何かなど、どうでも良い。お前は、もう死ぬんだ。

「エファアロード？」

エファアロードだと。神も同じ事を言っていた。

「第一段階『銀の髪』。まさか、そんな筈は無い！ これでも食らえ、地獄の業火だあ！」  
魔の口に集約される力。さっきの数倍はあるだろう。だが、今の私には無力だ。

「究極神術『光膜』」

私達三人を、超高密度の光る膜で覆う。魔の炎は膜に弾かれ、全く届かない。反撃だ。

私は、高等神術「絶対零度」を放った。

氷が魔を包み込み、聳え立つ冰山となった。私は、剣で氷を割り魔の元へゆつくりと近づく。魔は身動き一つ出来ない。

「……殺せ。俺は貴様に勝てない」

「殺す前に一つ質問する。エファアロードとは何だ？」

「その力と『銀の髪』が、第一段階である証拠だ。『真紅の目』が発現すれば、貴様の力は更に十倍になる。貴様は今後、『司令官』や『側近』に狙われるだろう。幾らエファアロードでも、『あの方達』には勝てない。クククッ……。さあ、殺すがいい！」

真紅の目？ 神官と対峙した時には確かにそうだった。だが、段階とは何だ？

「お前の知る事を、全て教えるんだ！」

「貴様如きがエファアロードなら、この世界は『獄王様』の物だ！ クハハッ……」

その瞬間、「ドオオン」という爆音と閃光を放ち、魔は自爆した。

## 第十六節 慟哭

景色が揺れている。彼方此方で上がる炎が、視界を歪めるのだ。だが、やがてこの炎は消えるだろう。燃えるものを全て焼き尽くした後に。

ルナの髪は元の色に戻っていた。ルナとリバレスは、呆然と立ち竦むフィーネに近寄る。

「フィーネ、大丈夫か？」

彼女は遠くを見詰め、返事をしない。私達の事を知って驚いているのだろうか。

「さっきの話を聞かれてしまったからには仕方無い。私は……」

其処まで言った時、彼女は涙を浮かべて私を見据える。

「あなたが……。誰かなんてどうでもいいんです！ どうして……。どうして争いは無いならないの？ 何故殺し合わなくちゃいけないの？ 解らない。私はどうすればいいんですか！ どうすれば、皆幸せになれるんですか？ 教えて下さいよお……」

フィーネが、強く私の胸に縋り付く。涙が零れて、焼け土に消える。

「君はよくやってるよ。今直ぐに、争いが無くならないのは仕方無い。それを变える為に、私達は此処にいるんだろ？」

フィーネは一生懸命だ。心からそう思う。私は、そつと彼女の頭を撫でた。

「うう……。はい……」

大声で泣く彼女。感情が、堰を切ったように溢れ出したのだ。

満天の星空。廃墟に吹く風は冷たい。火は全て消えた。三人は暖を取る為に、損傷の少ない、辛うじて屋根が残っている家に入った。隙間風が寂しげな音を奏でる。

「落ち着いたか？」

窓際で、淡い月光を背にして立つフィーネに問い掛ける。

「はい、ご迷惑をお掛けしました……」

彼女は薄っすら笑顔を浮かべて、頭を下げた。もう大丈夫だろう。

「世話が焼けるわねー。もうちよつと考えて、行動してほしいわ！」

「反省しています……。本当にごめんなさい！」

「もういいよ。ところで君は、私達の正体を知ってしまっただろう？」

彼女になら私達の全てを話しても……。構わないだろう。

「ええつと……。話が難しくさつぱり解りませんでした。ルナさんは、『ダテンシ』だと言う事ぐらしか。『ダテンシ』と言うのは、何処かの国の事ですか？」

首を傾げるフィーネ。そうだな、確かに背景となる情報が少な過ぎる。

「ははっ……。今から説明するよ」

私は、自分が天界から落ちた天使だという事、私とリバレスの関係、天界での日々から話し始めた。そして天界、人間界、獄界の成り立ちについて語る。だが、人間が魔の脅威に晒される理由は話せなかった。彼女が神や天界、否、私達を憎むかも知れないと思ったからだ。

「驚きました！ あなたが天使様だなんて」

彼女は恍惚まろろとしている。少し胸が痛む。

「止めるよ。私はそんなに尊敬される存在じゃない。他の天使達も同じだ」

「でも、天使様って本当に居たんですね！ 神様も。それなら、この世界も直ぐに平和になりますよね！」

神が人間を中界に創ったから、君達は苦しまなければならんだ。心の中で謝る。

「そうだな、平和はきつと訪れる」

気休めだ。私が幾ら魔を倒しても、魔の侵攻は止まらない。それに私は二百年で天界に帰る。だが彼女の笑顔を見ると、そう言うしか無かった。

「頑張りましょうねっ、ルナさん！」

フィーネが私の手を取る。いつもはひんやりしているのに、温かい。今まで以上に、彼女の力になる。私は、そう決意した。

火を囲んで、フィーネの料理を食べる。話に花が咲いた。争いの無い世界、誰にも脅かされず、いつまでも話が出来る夜。それを私が実現させられたら……

私は、エファロード。それが何かは解らないが、もっと私に力があれば。

## 第十七節 昇陽

ガサガサと物音がする。廃屋の窓から差し込む光と、その音でフィーネは薄目を開けた。音の正体は、ルナが廃屋を出て行く音だった。

私とリバレスさんを残して、こんな朝から何処に行くのだろう。彼女は興味本位でルナの後について行く事にした。

「惨いな……」

人も動物も居ないこの村は静寂に包まれ、ルナさんの声が遠くからよく聴こえた。彼は、破壊の限りを尽くされた村の中で、「何か」を探して歩いている。草叢くさむら、瓦礫がれきの下、廃屋を巡って。

それは……、「死体」だった。殺された人達の。

「ドォーン！」

轟音が響き、私は思わず耳を塞ぐ。一体？ 物陰から顔を出して、その音源を探る。ルナさんが、地面に大穴を開けていた。不思議な力で。

死体が宙を舞い、穴に呑みこまれて行く。ルナさんは、全ての村人を埋葬するつもりなのだ。何の為に？ きつと、私をこれ以上悲しませない為に。

あなたは、優しい。私が思っていたよりもずっと、ずっと。

私は眩い太陽を背にして、一夜を明かした廃屋に戻る。美味しいご飯を作らなくちゃ。

「お帰りなさい、朝食の準備は出来てますよ！ (ありがとうございます)」

何だか嬉しくて、私は目一杯微笑む。「ありがとうございます」は心の中で言った。

「ただいま」

ルナさんも笑ってくれた。最近、良く笑ってくれる。

ん？ ルナさんの表情が険しくなった。リバレスさんが笑ってる。また、「頭の中で」会話してるのだろう。私にもそんな能力があれば良いのにな。

ルナさんが、リバレスさんを指で突っ突く。

「痛いー！ フィーネ、ルナが苛めるのー！」

今にも泣き出しそうな顔。一体どうしたのだろう？ でも、苛めるのは良くない。

「あらあら、ルナさん。リバレスさんを苛めたら駄目ですよ」

私がそう言うと、ルナさんは苦笑した。ん？ 私は何か間違った事を言ったかな。

「リバレス、冗談は止せ。フィーネが本気で信じるだろう？」

「はい。フィーネ、ごめんね。ふざけてただけよー」

リバレスさんが、ちょこんと頭を下げてルナさんの肩に乗る。

「冗談だったんですか！ てつきり喧嘩をしたのかと」

「見れば解るだろ？ フィーネ、君は騙だまされ易いから気を付けるんだぞ」

「よく言われます。でも、私は人を疑うより信じて生きて行きたいんです。その方が幸せじゃないですか？」

「そうかも知れないな。だが、少しぐらいは疑いを持った方がいい。また、魔に騙されたら困るしな」

腕組みをして何かを考えているルナさん。誰かを疑うのは嫌だけど、心配をかける訳にはいかない。

「はいっ！ 努力してみます」

フィーネがテーブルに料理を運ぶ。暖炉の火で焼いたトーストを無塩バターと砂糖で味付けしたもの、野菜を煮込んだスープが二人分並んだ。

私は、ルナさんがトーストを齧るのを見ている。感想が聞きたいから。

「このトーストは……、辛いものなのか？」

予想外の言葉、トーストが辛い筈が無い。

「え？ 甘い筈ですよ！」

私はトーストを千切って、口に入れた。辛い！ まさかそんな筈は……、ううん、さつきはポーっとしてたから有り得る。

「ごめんなさいっ！ ……砂糖と塩を間違えちゃいました」

「フィーネは見た目と違ってドジねー」

恥ずかしい！ 早く作り直さないと。私は、トーストが乗った皿に手を伸ばす。

「フィーネ、このままでいいよ。十分に美味しいから」

伸ばした私の手を止め、ルナさんは瞬く間にパンを食べてニコツと笑った。

「ルナさんは……、優しいんですね」

朝の光景も思い出され、涙が出そうになる。何とか、目からは零れなかったけれど。

「どうしたんだ？ 悲しいのか」

「いいえ……、嬉しいんです。私、ルナさんだけは、信じていけそうです」

全身が火照り、胸の奥も熱い。こんな気持ちは……、初めてです。

## 第十八節 漂揺

朝食が終わり、出発の準備が整った三人は地図を広げた。懐中時計は午前十時を指し示している。広げた地図に、壊れた窓から日の光が射す。

「次は何処へ向かうんだ？」

ルナが、現在地であるルトネックを注視しながらフィーネに尋ねる。

「それが……」

フィーネは視線を落として口籠る。その顔に宿っているのは不安。

「どうしたのー？」

「この村にはもう誰も居ないので、連絡船に乗せて貰え無いです……」

連絡船が無い……、か。船が無ければ、ルトネックから出る事は出来ない。此処は孤島だ。だが心配は要らない。連絡船は無くても、漁船は数隻見掛けた。

現状、選べる道は二つ。レニーに戻るか、南西に五百k mの「リウォル」に向かうかだ。

「ならば、漁船で『リウォルの街』へ進もう」

「はい！ 『流石』ルナさんですね」

流石？ 此処でその言葉が出てくるのは可笑しい気がするが、まあいいだろう。

「行き先は『リウォルの街』で決定だけども、この『死者の口』って何？」

リバレスが、地図上で此処から東に百k m程の地点を指差す。

「其処は……、魔物が現れる場所として有名なんです。この世界に居る魔物は、全て其処から来たとも言われています」

身震いするフィーネの肩を、私は「ポンッ」と叩く。

「いずれは、私が其処へ行く事になるかも知れないな」

「……はい。私は、何処へもお供します！」

彼女は強く頷いた。リバレスも、真剣な面持ちで地図の上を飛んでいる。

船着場には三隻の漁船が係留されている。三隻共木造の帆船で、大きさが違う。

「さあ、行きましょう！」

フィーネは迷わず、一番大きな船に乗り込んだ。全長は二十m程で、帆の白さが眩しい。吹き寄せる風と潮騒が、新たな旅立ちを予感させる。

「待てよ、あんまり急ぐと危ないぞ！」

私は、その声を掛けながらフィーネに続く。係留ロープは岸壁から外しておいた。

「大丈夫ですよっ！」

「まだまだ、子供ねー」

笑顔で駆けるフィーネを見て、リバレスが笑う。

「お前も子供だろ？ 一緒に飛び回って来いよ」

私はリバレスの頭をポンポンと叩いた。

「ムカツ！ でも、たまには飛び回るのもいいかもねー」

冬にしては暖かな陽射しの中で、フィーネと共にしゃぐリバレス。平和な光景だ。

「さて、フィーネ。村も見えなくなって来たし、そろそろ操船を頼む」

私は、走り疲れているフィーネの肩を叩いた。

「えっ！ ルナさんが操船してくれるんじゃないんですか？」

何を言うんだ。人間界での雑務は君に任せている筈だ。

「天使だった私が、船を操れる筈が無いだろ？」

「えーっ！ それじゃあ、リバレスさんは？」

「こんなに小っちゃなわたしが、操船なんて出来る訳無いでしょー！」

「でも……、変化したら？」

フィーネの顔が青褪めている。まさか、本当に？

「変化した所で、操船技術は無いから無理。フィーネ、冗談は止めて早く操船してよねー」

「本気です！ 単なる村娘が、操船なんて無理ですよ！」

身を乗り出し、私とリバレスに訴え掛けて来る。これは本気だ。

「どーするのよー？ 陸はもうあんなに遠いわよー！」

「漂流決定だな」

私は甲板の手摺に凭れ、空を眺めて呟いた。

「何でそんなに冷静なのよー？」

何とかなるさ。フィーネが居れば。ルトネックの危機に比べれば、漂流など些細な事だ。

「船は南西に向かっていているようだし、食糧も一週間分位はあるからな」

「そうですね。ルナさんが居れば大丈夫な気がします」

リバレスが、忙しなく私とフィーネの間を飛び交う。怒っているな。

「二人とも呑気過ぎよー！ わたしはESGがあるから、一週間以上の漂流でも大丈夫だけど、ルナは随天で弱体化してるのよ。フィーネは普通の人間だし！ ……知らないわよ、どうなっても」

このまま船が南西に進めば、明後日にはリウオルに着く。だが、延着する可能性も考慮すべきだ。船はゆっくりと進む。私達の思いに縛られる事も無く、唯、風を受けて。

見渡す限りが紅く染まっている。遮るものは何も無い。この星を包む夕焼けの中心に立っているような感覚。甲板でたった三人、並んで見るこの光景は格別だった。

「それじゃあ、そろそろ夕食を作りますね！」

「否、今日は要らないよ」

「え？ でも、お腹が空いたでしょう。私の料理が嫌になったんですか？」

「そんな事は無い。君の料理は美味しいよ。だが私は、天使だから余り空腹になったりしない。明日以降、私がいもし空腹になったらちゃんと言うから、気を遣わないでくれ」

空腹にならない筈が無い。だが、私はそう言うしか無かった。

「解りました……。せっかくルナさんと仲良くなれたと思ってたのにな……。それじゃあ、私一人で食事を取らせて貰いますね」

フィーネは俯きながら、トボトボと一人、船室へと帰って行く。

「済まない……」

「どうしてあんな嘘を吐いたのよー？ ESGが無いと、人間と同じようにお腹が空く癖にー！」

リバレスが、全速力で私の胸に体当たりして来る。

「痛い痛い……！ 私とフィーネでは丈夫さが違うだろ？ この船には、二人で一週間分の食糧しか無いんだ。私が食べなければ、食糧は二週間以上もつ。それぐらいなら私は耐えられる筈だ。それに、ああでも言わないとフィーネは気にして食事を取らないだろ？」

「もー！ 相変わらず甘いんだから。それとも、相手がフィーネだから？」

「違うって！ 私は堕天使、フィーネは人間なんだから当然だろ？」

「へーえ。ちよつと前までは、『下等な人間と暮らすのは苦痛だ』って言ってた癖にー！ 挑発的な笑みを浮かべるリバレス。最近、よく突っ掛かって来るな。

「こら、『蝶々』！ いい加減にしろよ！」

「ムカムカツ！ わたしは『蝶』じゃなーい！」

リバレスは蝶扱いされると怒る。何度も何度も体当たりされた。

フィーネとリバレスは眠りに落ちた。二人共、「スヤスヤ」と寝息を立てている。私は、そつとベッドを抜け出した。

星屑にかかる薄いベールのような雲。ベールの切れ間から覗く下弦の月。淡い光の下、私は甲板の椅子に座り世界地図を開いた。地図にはフィーネが、これまでの旅路を赤い線でマークしてある。

「明日で一週間か……」

ミルドの丘から始まったこの旅を思い返す。……とても充実した日々。天界に居た頃は想像も出来ない程、起伏に富んだ日々。この一週間は、天界で過ごす百年、否、千年以上の価値がある。

フィーネの存在が、私の中で日毎に大きくなっている。彼女を目で追い、彼女の事を考える頻度が増した。不思議な気持ちだ……

二百年。この二百年は「刑罰」では無く、掛け替えの無い「思い出と経験」になるだろう。二百年後、「贖罪の塔」を上り天界に帰る頃に、私は「誰を想い」、「何を決断」して

いるのだろうか。今は解らない。だから、毎日を懸命に生きるしか無い。

私は思索を巡らせながら、乾パンを一枚齧る。私個人の荷物に入っている、少ない食糧の一部だ。食糧は一日分にも満たない。空腹だが、我慢して寝よう。

穏やかな海は揺り籠かごのようで、船は揺ら揺らと心地良く眠る。

## 第十九節 際涯さいがい

漂流三日目、ルナは船窓から差し込む、朝陽に照らされて目を覚ました。フィーネは、ルナが起きると朝食を食べるように言ったが、彼は断った。

この船はルトネックを出てから、ずっと南西に進んでいる。何も問題が無ければ、今日中にはリウォールに着くだろう。今日は快晴で雲一つない。風も吹いている。ルナは、自分が持つ食糧を全て食べた。耐え難い程空腹だったからだ。

ESGを摂りたい。ルナはその衝動を抑える。墮天中にESGを摂ると、墮天の意味が無くなり、天使の資格を剥奪はくだつされるからだ。

「魔物です！」

突如、甲板で体操をしていたフィーネの声が響いた。ルナはリバレスを起こし、船室から甲板へ飛び出る。

上空を舞い、この船を取り囲む三体の魔。体長は二m程で、烏に手足が生えたような姿。

「低級魔だろう。フィーネは船室へ！」

私がそう叫んだ瞬間、魔が三体全て急降下し私に襲い掛かる！

「くっ！」

何とか剣を抜き攻撃を捌いたが、私はよろめく。油断大敵だ！

「グアアッ！」

奇妙な叫びを上げながら、魔が私に追撃する！

「初級神術『落雷』！」

リバレスが、魔の一匹に雷を落とす！ 魔は絶命し、メインマストの帆を破って海に墜落した。

「ルナさん！」

船室から剣を持って現れたフィーネ。余計な事を……。咄嗟に二匹の魔が、フィーネに向かっ行く！

「中級神術『天導氷』！」

氷の渦が、二匹の魔を呑み込む！

「ギイヤアア……！」

一匹が凍りつき、最後尾のマストを押し折って、粉々に砕けた！ もう一匹は？  
「フィーネ！」

天導氷を避けた一匹が、フィーネに向かって疾走している！

「ガキンッ！」

鈍い音が響く！ 何が起きた？ 甲板に転がる剣の破片、緑の血を流して天空に逃げ去る魔。フィーネは？ 「ボチャンッ」という音が、船の下で聞こえた。

「フィーネッ！」

魔に一撃を与えたフィーネが、反動で海に落ちたのだ！ 冬の海は冷たい。私は、躊躇う事無く飛び込んだ。一瞬で、体が芯まで冷える。私は、全身を「焦熱」で覆う。フィーネは、手足をバタつかせて今にも溺れそうだ！ 直ぐ行くからな。

「リバレス、ロープを！」

「解ったー！」

私は、フィーネを片腕で抱え船から垂らされたロープを上った。

「ルナさん……、大丈夫ですか？」

自分よりも私の心配をするフィーネ……。私は思わず彼女を抱き締めた。

「無茶をするなって言ってるだろ！ 私にはフィーネが必要なんだ」

目頭が熱い。彼女の顔が滲んで見える……

「ごめんなさい。私も……、ルナさんが大切ですよ……」

冷えた体を震わせながら、フィーネは私に身を預けている。目を瞑って、微笑みながら。リバレスが暖炉の火を熾すまで、私達が離れる事は無かった。

漂流四日目の夜。昨日、メインマストの帆と最後尾のマストを破損した所為で、未だリウォルには着いていない。昨日から、同じ所をぐるぐる回っているような気がする。

「まだ陸に着きませんね……」

甲板の椅子に座るフィーネが、ポツリと呟いた。

「そうだな……（それより）」

空腹の為、ボーっとする。何とか、話す事も考える事も可能だが、それもいつまで続くか解らない。フィーネは元気が無い私を気遣って、話を振って来る。

「ところで、天使様って普段はどんな生活をしているんですか？」

「君が思ってる程、良い生活はしてないよ。短い命を懸命に生きてるフィーネみたいな人間の方がずっと、生きてる実感が湧いて幸せだと思う。私達は毎日同じ事……、勉強や儀式の繰り返しで、生ける屍しかばねのようだった」

少なくとも、天界に自由が訪れるまでは。

「そうですか？ 私には、あなたがそんな世界で生きていたとは思えません。ルナさんは私に元気をくれます。ルナさんが傍にいと、私は何でも出来そうな気がするんです！ だから私は、あんなに無茶な行動をしてしまうのかも知れませんね……。そんなに、素晴らしい人、いえ、天使様が生ける屍だなんて」

月影の下でも解るぐらい、フィーネの顔が赤い。それを見ると、私も気恥ずかしくなる。「はははっ……。フィーネは変わってるよ。少なくとも、天界で君のように……。自分の命に感謝し、住む世界と住人を想う者は居なかった。君の考えは、私を良い意味で変えてくれた。ありがとう」

今の正直な気持ち。伝えなければいけないと思った。

「そうねー、フィーネは良い子だもんねー！ ね、ルナ？」

リバレスが物言いたげに私を見る。

「ああ、そうだな。フィーネは良い子だ」

上擦った声を出してしまった。全く……。余計な事を。

「そんな……。私の方が感謝しても全然足りないのに。ありがとうございます、ルナさん、

リバレスさん！」

彼女は私の手を取りながら、私達に頭を下げる。もう、そんな礼儀は不要だろう。

「フィーネ、そんな他人行儀はもう必要無い。私達は呼び捨てで構わないよ。それに、敬語も要らない」

リバレスも頻りに頷いている。

「え……。ええつと、それは無理ですよ。恐れ多いです。でも……。この戦いが終わったら、そうしてもいいですか？」

「それじゃー、ルナとフィーネの為に早く戦いを終わらせないとねー！」

またチラッと私の方を見る。お節介な奴だ。

「ああ。その為には、もっと頑張らないとな！」

フィーネは私の目を見て、はにかみながら頷いた。

眩暈がする。朝も、昼も解らない。今日は、何日目だ？ ああ、六日目だ。

「フィーネ、リバレス。私は限界のようだ……」

二人の気配が近くにある。視界がぼやけて、何も見えない。音も遠い。

「どうしたんですか？ ルナさん！」

「……。実はルナ、空腹なのに殆ど何も食べてないのよ」

「ルナさん、あなたは空腹にならないと！」

彼女の仄冷たい手が、私の手を握っている。滑らかな絹のような感触……

「……。心配要らない。今から一時的に、身体の機能を停止させる」

「ダメ！ 『停止』の神術を自分に使うのは危険よー！」

停止の神術は、対象の時間進行を遅らせ動きを止める。だが自分に使うと、自分では神術を解除出来ない。精神エネルギーが枯渇するまで、停止は継続する。もし、精神エネルギーが枯渇すれば、死ぬ。

「リバレス、街に着いたら……。停止を解除してくれ。全く……。不便な体だ」

もう、二人の声は聞こえない。私は、薄れ行く意識の中で「停止」を発動した……  
私は見た。身体機能が停止する直前、ハルメス兄さんが私に向かって微笑むのを。千百年前と変わらない、力強い笑みを。

## 第二十節 懐抱

暗黒の底で、融けない氷の中に閉じ込められている。寒い！ 息が出来ない……。手足を動かしたくても動かない。このまま、死ぬのか？

「……ナ、ルナ」

「ルナ……、さん」

氷の外から声が聞こえる。懐かしく、温かい声。誰だ？ 「ピシッ」と、氷から音が聞こえた。割れ目から光が射し込む。眩しい！

「ルナさん！」

声が耳元で聞こえたので、私は恐る恐る目を開いた。

「……フィーネか」

目の前にフィーネの顔。随分やつれたな。折角せっかくの可愛い顔が台無しだぞ……

「ルナさんっ！」

フィーネが私を抱き起こした。そして、強く抱き付く。

「痛いつて……。私は大丈夫だ」

「ルナさああん……！！」

私は泣きじゃくる彼女の頭を撫でる。かなり心配をかけたようだ。ところで、此処は何処なのだろう？ 船室では無く、何処かの宿のようだが。

「ルナ！」

リバレスが私の頭をポカポカと叩く。

「リバレスも心配かけたな。どれぐらい、私は停止していた？」

「ルナはあれから三日間、死んだように眠ってたのよー！」

三日。ならば、今日は漂流から九日目の十二月十九日。窓の外は明るい。まだ朝か。

「此処は、リウォルの街か？」

涙で目を真っ赤にしたフィーネに尋ねる。

「はいっ！ ルナさんのお陰で、無事に着いたんです！ どうして、私なんかの為に無理をしたんですか？ 幾ら、人間より丈夫だと言っても、今は弱ってるんでしょう……」

「ごめん。フィーネ、リバレス。心配をかけて悪かった」

私は、フィーネの背中をそっと擦りさす、リバレスの頭もゆつくりと撫でた。

「ところで、この街にはいつ到着したんだ？」

「ルナが倒れてから次の日には街に着いたわー。殆ど眠らずに三日間、フィーネは付きっきりでルナを看病してたのよー！」

三日も眠らずに付き添ってくれたのか！ 私はそれの方が心配だ。

「フィーネ、ありがとう。お陰で助かったよ」

「そんな、感謝してるのは私の方ですよ！ ルナさんのお陰で、私は元気に此処に居られるんですから」

君はいっただって、相手に感謝する。自分の事は評価せずに……

「それなら、お互い感謝してるって事にしよう。今から、私は街に食事をしに行くから、君は眠ってくれ」

彼女の体が心配だ。彼女に料理を作ってくれとは言えない。だが、彼女の目からポロポロと涙が落ちる。不味い事を言ったかな？

「嫌です！ ルナさんは、私の為に空腹で倒れたのに。私が無理にでも料理を作っていれば、あなたは苦しまずに済んだ。私に料理を作らせて下さい」

細い指が背中に食い込む。今の彼女を止めるのは不可能だ。

「解った。それじゃあ、美味しい料理を『沢山』頼む」

「はい、任せて下さい！」

フィーネは元氣一杯の笑みを浮かべて、立ち上がった。だが、彼女の顔が赤い。熟した林檍のように。彼女も気付いたのだ。互いの体温が残る程、長時間抱き合っていた事に。

「ルナも照れちゃってー！ 顔が赤いわよー」

リバレスが突っ突いて来るが、返す言葉も無い。

部屋には色取り取りの花が飾られている。フィーネが、私の目覚めを願って置いてくれたものらしい。リバレスと談笑していると、本当に沢山の料理が運ばれて来た。パンにスープ、卵料理や野菜、肉料理……。いつも作って貰っていた料理の五倍の量はある。だが、私は瞬く間に完食した。

「ご馳走様！ 美味しかったよ、生き返った気分だ」

満腹がこんなにも幸せだとは。ありがとう、フィーネ。

「それは良かったです！ 作った甲斐がありますよ」

彼女は食器を片付けながら、鼻歌を口ずさんでいる。ご機嫌だな。

「片付けが終わったら、ゆっくり寝るといい。旅は明日からにしよう」

私は彼女を手伝いながら、そう言った。

「えっ、私は大丈夫ですよ。看病中も、少しは眠っていたので」

目の下に隈は出来ているが、確かに眠くは無さそうだ。

「そうか……。どちらにしろ、今日は休みにしよう。ゆっくりしてくれ」

彼女には休んで欲しい。ミルドを出てから、過酷な旅だったから。

「そんな、悪いですよ！」

申し訳無さそうに首を振るフィーネ。どうしたものか。

「はいはい！ わたしに名案があるわ。二人で出掛けて来たら良いのよ。息抜きに成る程。私が出掛けようと言えば、彼女は付いて来る。のんびりさせる事も出来る。」

「フィーネ、私はこの街の中で『君の行きたい所に』行こうと思う。何処に行きたい？」

「ええっ、突然言われても！ そうですね、私は……、買い物と、この街の名物の音楽隊の演奏を聴きに行きたいです。あ、美味しい料理も食べに……。いえ、何処でも良いです。顔を掌で覆いながら俯くフィーネ。頬は朱に染まっている。行く所は決まったな。」

「フィーネの望むままに。行こう」

「は……、はい。お願いします」

彼女の無垢な顔に、喜びが浮かぶ。私も、体がカーツと熱くなった。

「行ってらっしゃーい」

「お前も行くんだよ。指輪に変化して」

「(わたしは、此処で待ってた方が良いんじゃないのー?)」

「(街の中に魔が現れるかも知れないだろ。それに……)」

「(はいはい、サポートさせて頂きますよー)」

済まない、と心の中で呟きつつ私はリバレスの頭を撫でた。

## 第二十一節 織手を取って

穏やかな日差しが、宿から出てきた若い男女を照らす。一人は鮮やかな赤髪の青年、一人は艶やかな栗色の髪の少女。傍目には、二人は恋人に見える。

此処はリウォルの街。金属加工と交易が盛んである。建物や道は石と鉄で造られ、これまで二人が訪れたどの街よりも整然としている。また街を囲む重厚な外壁は魔の侵攻を阻んでいる。住人や交易商が行き交う街の中心は華やかだ。多様な色彩と喧騒に満ちている。

「この街は平和だな」

「そうですね。外壁が街を守り、人々には鍛鉄で出来た武器がありますから」

フィーネはさつきから、キョロキョロしている。その視線の先を追うと、彼女が何を求めているか解った。

「まず、服屋に行こう」

「えっ、どうしてですか？」

目を丸くしている。私の読みは正しいようだ。

「フィーネの服を買うんだよ。この街で売っている、センスの良い服は似合うと思う」

「そんな事ないですよ。でも、そう言われると嬉しいですよ……」

頬を赤らめて俯くフィーネ。彼女はさつきから、街を歩く女性達を見詰めていた。華や

かで、可愛らしい服を着ている女性達を。

丹念に磨き上げられた白い外壁、入り口の両脇は硝子で中が良く見える。中には、所狭しと綺麗な服が並んでいる。リウォールで最高の服屋だ。ルナは、ドアに手を掛けた。

「この店には高級品しか置いてません！ 別の店に行きましょう」

フィーネがルナの手をグイグイと引っ張る。だが、ルナは微笑みドアを開ける。

「いらっしやいませ！」

シックな装いの三人の女性が声を揃える。店員だ。

「本日はご来店ありがとうございます。どのような服をお探しですか？」

一人の女性が品定めするように見て来る。フィーネは、恥ずかしそうに店員から目を逸らした。二人の店員は、奥へ引っ込む。「金が無い」と判断されたのだろう。

「この子に合う、『最高の』服を持って来てくれ」

「お客様、失礼ですがご予算は？」

やはりな。私は店員を睨み、銀貨の山と純金の皿を見せる。

「……大変失礼致しました！ 只今、最高の服をお持ち致します！」

血相を変えた店員が他の二人を呼び、大急ぎで店内を駆け巡る。人を見掛けで判断するからだ。

「ルナさん、私は普通の服で良いですよ！ 私には贅沢です」

何度も首を振り、私の手を握るフィーネ。その目には薄っすら涙すら浮かんでいる。

「遠慮するなって。どうせ買うなら、良い物を買おう」

「(そうそう、フィーネは遠慮し過ぎよー。折角の機会だし、もっとルナに甘えないとー！)」

また余計な事を……。顔が火照っているのが自分で解る。

「はい……」

フィーネは、顔を両手で覆っている。指の隙間から覗く額は赤い。

三人の店員は息を切らせながら、抱え切れない程の服を持って来た。

「はあ、はあ……。これで如何でしょうか？」

シルクのワンピース、毛皮のコート、ドレス……。人間界にしては、中々の品揃えだ。

「フィーネ、気に入ったら全部買っていいぞ」

「えーっと……。どうしよう。私、こんな服見るのも触るのも初めてなんですよ」

そう言いながらも、彼女の目は輝いている。しかし、恐る恐る服に触れるので埒が明かない。私は、店員を一瞥して言う。

「フィーネ、試着すればいいよ。店員さん、いいだろ？」

「勿論です！ どうぞ、好きな物をお召し下さい！」

その言葉でフィーネは決心が付いたようで、数着の服を持って試着室に入った。

「ルナさん、どうですか？」

数分後、彼女は私の前に現れた。驚きの余り咄嗟に言葉が出ない。純白のドレスを着たフィーネは清楚で繊麗だった。元々可愛いとは思っていたが、服でこれ程変わるとは……か……、可愛いと思う」

フィーネが、胸元のレースをギュッと握って顔を赤らめる。

「は、恥ずかしいです……。この服を着ていると、まるで花嫁さんみたいで」

花嫁衣裳……。か。「まだ」不要だが、似合っているし買っても問題無いだろう。

「よし、その服をまず貰うことにしよう」

店員が三人並んで、同時に私に頭を下げる。息の合った動きだ。

「お買い上げ、ありがとうございます！」

「ルナさあーん！」

フィーネは、照れながらも嬉しそうに笑っている。結局、自分の服も含め十着程の服を購入した。

胸元にリボンが付いたオフホワイトのワンピースを着たフィーネが、私の後ろを伏し目がちに歩いている。道行く人が、羨望の視線を送ってくるからだ。

「良く似合ってるよ」

「凄く恥ずかしいけど、凄く嬉しいです……。ありがとうございますっ」

頬を朱に染めて満面の笑みを私に向ける。この笑顔を見続けたらいい。傍で、ずっと。

私達は市場の中を歩いている。多種多様な雑貨、食物、道具が露店で売られている。一歩進むだけで人にぶつかる程の混雑。

「ルナさんっ、あれを見に行きましょうよ！」

珍しい品を見付けては、走り出すフィーネ。だが、このままでは逸れてしまう。

「フィーネ、そんなに慌て無くても大丈夫だって！」

私の右手が彼女の左手を掴む。指と指が絡み合った。フィーネの熱が指を通して伝わる。

「ルナさん？」

フィーネと手を繋いでいる。それを意識すると、急に恥ずかしくなった。手を離そう。

「あっ……。ダメですよ。せっかく繋いでくれたんだから」

彼女は顔を紅潮させながらも、指に力を込める。彼女の細く繊細な指から、さつきよりも、確かな温かみが伝わって来た。私は黙って頷く。

その時、指輪のリバレスが「キュッ」と私の指を軽く締めた。そうだな、リバレス。

私は彼女が好きだ。

## 第二十二節 至幸の協奏曲

あなたの手は温かい。あなたと手を繋いでいると、心の中までぼかぼかする。ルナさんの隣で、可愛い服を着て街を歩く。何て幸せなんだろう。

私達は、ずっと手を繋いだまま色んな店を回った。可愛い雑貨の店、初めて見るお菓子が売っている店。そして、今から私が一番行きたい場所に向かう。

「ルナさんっ、あれです」

「結構大きいんだな」

直径二百m程の円形の劇場だ。白亜の外壁と屋根が眩しい。此处では、毎日「リウオル楽団」による演奏会が行なわれる。楽団は、木管楽器・金管楽器・弦楽器・鍵盤楽器・打楽器で構成され、私は鍵盤楽器のピアノを是非見たかったのだ。

ピアノの、繊細で美しい音色が私は好きだ。小さい頃ピアノ奏者に憧れていたが、村や家にそんな余裕は無かった。でも……、この旅が終われば、ルナさんの隣でピアノを弾けるようになりたいな。

私達は、劇場の階段席の最前列に座った。ルナさんが交渉してくれたお陰だ。席に座っても私達は手を繋いだまま。リバレスさんは、ずっと黙っている。気を遣ってくれているのだろう。彼女の気配りは、私なんかよりずっと木目細かい。見習わなくちゃ。

「幕が開いたな」

「はい、ドキドキします」

本当はずっとドキドキしている。今朝、ルナさんが目覚めてくれた時から。

皆が、劇場中央のステージに立つ指揮者を注視する。演奏が始まった。

素晴らしい演奏だった。特に、ピアノ協奏曲が。儂げな旋律の中に秘められた、情熱と強さ。完璧な和音の中に時折混ざる不協和音。まるで、人の人生そのものだ。ルナさんも演奏に聞き入っていた。「天界にも引けを取らない」らしい。

日が海に沈んで行く。世界は温かな橙色。あなたの傍に居ると温かい。どんな苦しい事があっても大丈夫な気がしてくる。

あなたの横顔、あなたの声、あなたの心。出来ればずっと、隣に居させて下さい。

## 第二十三節 閃光

ルナとフィーネは、港沿いのレストランに入った。内装も外装も赤煉瓦で、店内には硝子製のランプが吊るされている。ランプの明かりは、店内を暖色に染める。

時刻は午後七時半。二人は向かい合わせの席に座り、コース料理を頼んだ。オードブルとポタージュスープは既に食べ終え、眼前の凝った魚料理を食べ始める所だ。

「わぁ、美味しそうですね！」

「本当だな。それより、今日は楽しかったよ。ありがとう、フィーネ」

そう、生まれてから今までの中で一番。楽しくて幸せだった。

「こちらこそ、ありがとうございます！ 私、今日の事は絶対忘れません。大切な大切な思い出です」

彼女は、胸元のリボンを「キュッ」と掴む。顔は仄かに赤い。

「私も忘れたりしない、ずっと。さぁ、料理はまだまだある。食べよう」

フィーネがニッコリ頷く。やはり彼女は笑っている顔が一番可愛らしい。

「あ、これ美味しい……」

「確かに美味しいな。まあ、フィーネの料理には及ばないけどな」

私は、どんな料理よりも、フィーネが心を込めて作ってくれた料理の方が好きだ。

「ええっ！ 私の料理如きじゃ、此処の料理には及ばないですよお」

思いつ切り首を振る彼女。私は正直に言っただけなんだが。

料理を食べ進めてデザートが出て来た頃、私は「ある話」をふと思いつ出した。今日、露店の男から聞いた話だ。「リウォルの街の北東三十kmには『リウォルタワー』と言う古代の塔があり、其処には魔物が屯たむらしている」らしい。

だが、何故今それを思い出したのだ？ この店は南向きに立っていて、私は北向きに座っている。そうだ、右前方に「違和感」を感じたのだ。右前方は北東。「チリチリ」と身が焼かれるような感覚が襲って来る。

「不味いな……」

「え？ 美味しいですよ」

説明している暇は無い！

「この店を出るぞ！」

「えっ！」

私は椅子から立ち上がり、フィーネの体を抱える！

「(何？ この物凄いエネルギーは……)」

リバレスも気付いたらしい。北東の方角に、膨大なエネルギーが集約されているのを。しかも、そのエネルギーはこちらに放射されようとしている！

私は店の窓を蹴破り、フィーネを抱えたまま海に飛び込んだ。出来るだけ深く！

「ピカッ……」

強烈な閃光が頭上を奔り、数十m下の海底まで真昼のように照らす！

「ドゴォォ……ン……」

続いて、身を引き千切るような轟音と衝撃に揺さぶられた！

そして……、訪れた静寂。だがその静寂も、フィーネの金切り声によって破られる。

「キヤーー！」

街の一部が消えていた。幅五十mの直線状に抉られて……。海から上がって確認すると、北東から南西に一直線に消えていた。消失した長さは一kmはある。建物も、人も、森も、大地も例外無く消えた。さっきのレストランは、もうこの場所に存在しない！

「何て事だ……」

「どうして……、どうしてこんな事になるの？」

座り込み、涙を流しながら焼け土を叩くフィーネ。リバレスもこの事態で元に戻る。

「ルナー、この跡はまさか」

「これは、『S・U・Nブラスター』による攻撃だろう。S・U・Nから降り注ぐエネルギーを蓄え、光線を照射する禁断の兵器だ」

これだけの威力を持ち、尚且つ人間界に存在し得るものは、「S・U・Nブラスター」を除いて有り得ない。人間界には、「贖罪の塔」を始め数々の天界由来の建築物があると聞く。リウォルタワーは、禁断兵器を使う為の建造物と考えて間違い無いだろう。だが、何故？

「S・U・Nブラスターなら、この程度の被害で済まないんじゃないの？ わたしは、一つの街を消すぐらい造作も無いって聞いたけど」

確かにそうだ。だがこの常軌を逸した焼け跡は、S・U・Nブラスターによるもので間違い無い。ならば、ブラスターの出力が100%では無いと言う事だ。

「魔が使ったと考えれば合点がいく。完全には使いこなせないのだろう」

「それで、ルナーはどうするのー？」

彼女の顔に怒りが滲んでいる。当然だ。数百、数千の人間が殺されたのだから。

「決まってるだろ、塔に乗り込む！ こんな残酷な攻撃をする者を、私が許せる筈が無い」

「……私も、連れて行って下さい！」

フィーネが立ち上がった。その目には、強い意志の炎が宿っている。悲しみと、憎しみ、焦燥が滲んだ炎……。だが連れて行く訳にはいかない。

「駄目だ。相手は、封印された禁断兵器を使う程の力と知能を持っている。君を庇いながら戦える相手じゃない！」

「でも！」

「頼む……。此処に居てくれ。此処で、傷付いた人々を助けてやってくれ！」

私は彼女を鎮める為に抱き締める。瓦礫の下から聞こえてくる呻き声を聞き、彼女はゆっくりと頷いた。

「解りました……。決して、無理はしないで下さいね。私は……、ルナーさんが」

その言葉の続きは、今は聞くべきでは無いし言わせたく無い。

「心配は要らない。私は必ず、フィーネの元に戻るから。その言葉の続きはその時に……」  
私は彼女の髪を優しく撫で、北東へと駆け出した。

## 第二十四節 星奔せいほん

ルナがリバレスを肩に乗せ、霽月せいげつと耀星ようせいの光を受けながら北東へ走る。塔までは三十km、彼の速度なら一時間もかからない。

直線状の焼け跡を越え、森を真つ直ぐに突っ切る。やがて、人間界に似つかわしく無い、大理石とオリハルコンで出来た塔が見えた。高さは百m、直径は五十m程ある。

「何よ、あれ！」

リバレスが、塔の下を指差す。その先には夥おびただしい魔。

「塔の中に居る主を守ってるみたいだな」

「どうするのー？」

「強行突破だ！ 奴等は恐らく低級魔。一気に片付ける！」

ルナは走りながら精神を集中する。神術を發動させる為だ。魔までの距離は、百mを切った。魔がルナに気付く。恐ろしい形相。

「グオオ、死ネエエ！」

「ルナ、危ない！」

魔の爪や牙が、手を伸ばせば届きそうな所まで迫っている。

「行くぞ、高等神術『雷光召喚らいこうしょうかん』！」

視界が光に奪われた後、電撃が魔の体を貫いた！ 大半は仕留めた筈。

「リバレス、入り口へ急ぐぞ！」

私達は魔の屍を乗り越え、塔の中に転がり込む。入り口のオリハルコンの扉は、内側に向けて捻じ曲げられていた。凄まじい力だ。

「コロスコロス殺スウウ……！！」

生き残った魔が追って来る。全て相手にしていたらキリが無いな。

「リバレス、結界だ！」

その意味を即座に理解したりバレスが、入り口に向かって精神力を集中する。

「中級神術『結界』！」

私とリバレスの「結界」が、塔の入り口に張られる。結界は、魔を通さない。低級魔なら、触れただけで消滅するだろう。上級魔以上には効果は無いだろうが。

「これで暫くは大丈夫だな」

結界に体当たりして絶命する魔の声を背後に聞きながら、私とリバレスは歩を進める。

「そうねー。それにしても、華美かみな塔」

彼女の言う通りだ。荘厳な柱、壁に整然と並ぶ神術で灯された燭台。一階層の高さは十

m程で、天井には水晶で作られた飾りが吊るされている。上層へ続く、内壁に沿った螺旋階段には、真紅の絨毯という絢爛さ。しかも、この建築様式は百万年前のものだ。その間、此処は完璧な形のまま維持され続けて来たのだ。

「この塔は、禁断兵器の為だけに作られたにしては不自然だな」

何か別の思惑があったのかも知れない。だが今すべき事は、塔を上り兵器を捜す事だ。

「なかなかやるじゃないか、随天使ルナリート！」

突如、背後で不気味な声が響く！ 私は剣を抜きながら振り返った。

「お前が街を破壊したのか？」

一見、女に見える魔。ルトネックの魔に似て、漆黒の体に漆黒の翼。そして、漆黒の長い髪。「チリチリ」と殺気を感じる。強い！

「私が破壊？ お前はもっと、賢い奴だと思っていたけどねえ。私如きの力で、この塔の封印を破れたと思うのかい？ 天界の技術の結晶、オリハルコンで出来た封印を」

「お前より強力な魔が封印を破り、兵器を使った。その魔は、塔の上に居るという事か」

「ご名答。正解した所で、お前は『この塔の秘密』も知らぬまま、私に此処で殺されるんだだけだね！」

魔の体が、筋肉で膨らみ、牙と爪が伸びる！ まるで、全身が黒い鋼鉄の刃だ。

「ルナ！ 相手は強いけど大丈夫なの？」

「大丈夫じゃなくても、負ける訳にはいかないだろ！」

リバレスが背中にしがみつく。こいつは、間違い無くルトネックの魔よりも格上だろう。

だが、不思議と恐怖は無い。フィーネに戻ると約束したから！

「お前が、『エファロード』の力を使う前に殺してヤルウウ……！！」

大地を轟かせるような低い声。重そうな体の割に、速い！

「喰らえ！」

しつかりと腰を落とし、敵に向けて剣を振り抜く。「ガキンッ！」、直撃した！

「効かぬワアア！」

その瞬間、強靱な腕の一撃が私の腹部を捉える！

「うっ！」

腹から空気が押し出され、私は壁まで弾き飛ばされた。壁に激突した瞬間、「ポキッ！」と肋骨が数本折れる嫌な音が響いた。

「死ネエエ」

魔が、倒れた私まで間合いを詰め、私を蹴り上げる。

肺から、「ヒュッ」という音が漏れ、私の体は天井に激突し、床に墜落した。

「うう……」

私の体は、もう動かさそうに無い……。呼吸するのにも、痛みを感じる。

「ルナー！」

リバレスが、ルナの元まで全力で近付く。だが、それを魔が見逃す筈も無い。

「天翼獣如きが邪魔をするナアア！」

リバレスに、魔の爪が炸裂する。

「キヤアア……！！」

床に落ちるリバレス。魔は、彼女を踏み付けた。彼女の叫びが段々、弱々しくなる。

「リ……、リバレス！ お前を死なせたりはしない」

ルナは、剣を支えに立ち上がった。髪が、根元から銀色に変色して行く。同時に骨折と傷が修復した。

「お前の相手は、私だ！」

「エフアロード！」

一歩後退る魔。だが態勢を立て直し、口を開き笑う。

「アハハハ……！！ それが第一段階か。笑わせるねえ」

「何が可笑しい？ お前が私に勝てない事がか」

「確かに、その力があれば『今の』私を殺す事は出来るだろうねえ。でも、私の『主』は絶対に倒せない。しかも、お前の力は不安定。面白くて仕方無いねえ」

この力でさえ勝てないだと？ 戯言を。否、まさか？

「私は、主の『一部』に過ぎない。お前を偵察に来ただけさ。上で待ってるわあ」

魔が霧のように消えた……。一体？ それよりも！

「リバレス！」

私は、倒れたリバレスを手に乗せ、目一杯「治癒」の神術を施した。傷が見る見る治る。

「うーん……、ルナ？」

お前が居なければ、私は殺されていた。私は彼女の頭を指先で撫でる。

「大丈夫か？」

「お陰様で。あれっ、ルナ、髪が銀色になってるわよー！」

リバレスが、小さな指を私の髪に向ける。元気になってくれて良かった。

「ああ、これで三度目だな。一体私は何者なんだろう？」

彼女の元気そうな顔を見て、緊張が解ける。すると、髪の色は元に戻った。途端に体の力が抜けて、ふらつく。

「ルナー！」

「大丈夫だ。『力』の反動だろう……」

私は、深呼吸した後、リバレスを肩に乗せて螺旋階段を上がって行く。

## 第二十五節 決然

二人は塔の二階に到着した。ルナが敵の気配を探るが、この階層には居ないようだ。部屋の中央には豪壮な祭壇さいだんがあり、その周囲は浅い堀になっている。何処からか水が流れ込み、部屋全体に「サラサラ」と水音が響く。

「何で、塔にこんな部屋を作るのかしらねー？」

「祭壇に何かある。見てみよう」

私はリバレスと共に、祭壇へ続く数段の階段を上る。念の為、畏に警戒しながら。

「オリハルコンで出来た銘板があるわー。文字が書かれてるけど、わたしには読めない」

「古代文字だな」

塔の建築様式が百万年前だから可笑しくは無い。私は、古代辞書の記憶を手繰り寄せた。

「この塔は、人間の創造と時を同じくして建立された」

銘板は二枚あり、私はもう一枚を解読する。

「塔には、如何なる時であろうと人間を滅ぼせるように、禁じられし兵器を置く」

「どういう事だ？ 戯れであれ何であれ、人間を創った神が、何故人間を滅ぼす兵器を作ったんだ」

「もしかしたら……、昔の神様は人間の存在が魔に憎まれる事を、初めから解ってたんじゃないのー？」

その通りだ。聡明な神が、それを解っていない筈が無い。

「そうだろうな。だが、『何故』人間を創ったかが解らない。魔に憎まれてでも、人間を創る必要性があったと考えれば辻褄つじまが合うが」

魔、獄王に憎まれながら人間を創り、それを破壊する兵器を置く。それなら、最初から人間を創らなければ良かったのでは？

「うーん、考えても始まらないわよー。先に進めば答が見えて来るんじゃない？」

リバレスは首を傾げた後、上の階へ続く階段へと飛び去る。

「待てよ！」

そうだ、先に進まなければ。いつ、禁断兵器が再始動するかも解らないのだから。

二人は更に上層へと上る。第三階層、この部屋は一面が緑の木々や花に覆われている。

やはり、その中央には祭壇があった。

「また二枚の銘板か」

ルナは祭壇に上り、古代文字を解読し始めた。彼は身震いしながら、確信する。重要な事が書かれている事を。

「人間という生命そのものに、天界を維持する為の鍵がある」

「神は、神合成しんごうせいという力により、S・U・N (Super Ultimate Nuclear star) の光を受けて無限に等しい膨大なエネルギーを生み出す」

生命そのものに鍵？ 意味が解らない。神は「S・U・N」の光からエネルギーを産生

していたのか！ 歴史では、「光を取り込んだ」としか伝えられていない。

私は先に進むのが怖くなって来た。真実を受け止めるには、相応の覚悟が要る。

「ルナー、上にはもつと、とんでも無い事が書いてるかも知れないわね……」

彼女も震えていた。しかし私の中で、恐怖よりも真実を知りたい気持ちが膨らんでいく。

一面が砂漠の第四階層。此処にも祭壇と銘板が存在していた。

「神は、神合成で持て余したエネルギーから、自分自身に似せた天使を創った」

「神は天使を強化する為に、E S G (Energy Sphere of God) というエネルギー球体を天使に与える事にした」

知らない歴史が、銘板には刻まれている。此処まで来たら、全てを知る必要がある。私は、砂に足を取られながらも階段へと急ぐ。

**この塔は、禁断兵器と、「真実」を与える為に造られたものだ。**

第五階層は夜の海を横していた。部屋の上には、月と星が浮いている。海の中央に祭壇が浮かんでいるのでルナーは泳ぎ、月明かりを頼りに銘板を読み始めた。

「際限無く続く神合成の果てに、神は天界だけでその膨大なエネルギーを処理する事が出来なくなった」

「神は苦心の果てに、中界に人間という生命を創る事で、余剰エネルギーを消費する事にした。それにより、天界は安定に保たれる」

そう言う事だったのか。これで、全ての辻褄が合う。だが……

「ふざけるな！ 人間を創ったのが、神の戯れだと？ 人間は天界維持の代償に創られたんじゃないか」

歯痒い。天使が人間を見下す理由など無い。寧ろ、感謝しなければならぬのだ！

私は思わず銘板を殴った。「ドンッ！」という音が、海に反響する。

「人間って、天界の為に利用されてたのね……」

リバレスは俯き、拳を握っている。暗い表情、彼女もまた私と同じ気持ちなのだ。

「行こう。全てを受け止める為に」

私は、「ある決意」を胸に、上層への階段を踏み締める。

第六階層。此処は唯、真っ白な空間。思考を停止させられるような、眩しい白。その中央に、透明な水晶で造られた祭壇があった。

「人間は天使と同じように、魂を与えられる。魂に於いて両者に優劣は無い」

「天使と人間の違いは、E S G を摂取しているかどうかだけである。人間が、E S G を摂取すれば、拒絶反応と長い年月を経て、天使となる」

私がフィーネを始め、人間に対して感じていた事。「天使と人間は余り変わらない」、それは当たり前だったのだ。魂……、心は同じなのだから！

二人は進む。「決意」を強固にする為に。

第七階層は、宇宙を象っていた。床が漆黒の闇、空中には大小様々な星が浮かんでいる。

S・U・Nと思しき天体が部屋の中央にあり、其処から少し離れて惑星シェファを模した祭壇がある。ルナは祭壇に上がり、文字に目を通した。

「人間は唯、天界維持の為にエネルギー塊として、排出される存在に過ぎない」

「人間界の存在意義、それは天界にとって無くてはならない、言わば塵処理場である」

断言している……。何の罪の呵責も無く。

「人間が、魔に脅かされているのは天界で生きる私達の所為だ！ 人間は、辛い世界に生まれ、苦しみながら生き、悲しみの中で死んでいく。なのに私達は平和な世界で、被害者である人間を蔑み、彼等の事を考える事も無く生きてるじゃないか？」

「人間って……、可哀想な存在だったのね」

リバレスの目から、小さな雫が零れ落ちる。私も目の前が滲む。

何が人間は下等だ？ 愚かなのは私達の方じゃないか！

第八階層の中央に、屋上へ続く螺旋階段が見えた。階段の両脇には、二枚の銘板。

「この階段の先には、神の兵器が安置されている。それを神が扱う事により、人間を全て焼き尽くす事が出来る」

「神は、兵器で人間を殲滅し、新たな人間を創る。それが、最も効率の良い消費である」

ルナは剣を抜き、銘板に歩み寄る。頭髮が銀に染まる。

「パキンッ！」

銘板を両断した。そして、大きく息を吸い込む。

「ふざけるな！ 余りに身勝手過ぎる。一体私達に何の権利があるんだ？ 私達の為に人間は魔に虐殺される。何故だ？ もっと他に方法があっただろう！ かつての神よ」

フィーネ、君が悲しい目に遭って来たのは、私達の所為なんだ。済まない……。本当に済まない！ 涙が止まらない。今こそ、決意を覚悟に変え、それを口にする時。

「リバレス、私は決めた。今後二百年間、私は人間を守り続ける。せめてもの償いの為に！」

「……わたしは止めないわー。ううん、止める権利も無い。わたしもルナの力になるから宜しくねー！」

彼女はそう言って、私の肩に座る。私は黙って頷き階段を上り始めた。リバレス、頼りにしてるよ。さて、上に居る魔と兵器を止めなければな。

## 第二十六節 光翼

その頃、塔の麓に「人影」が現れた事を二人は知る由も無い。

空には限り無く新月に近い、細月が浮かぶ。薄い月光と、星明りが塔の屋上を照らしている。ルナは、屋上への扉を蹴破った。

「遅かったでは無いか」

屋上が揺れる程の重低音。声の主は、闇よりも深い漆黒の巨影。そして脇に佇む細い影。「死にたくなければ、直ぐにその兵器から退け！」

巨大な魔と先刻の女が、屋上中央にあるS・U・Nブラスターの前に立っている。私は剣の切っ先を向けた。

「グハハハ！ エファロードがその程度の力。お前の報告通りだな！」

薄気味悪い嘲笑。何が可笑しい？

「そうでしょう！ あれは、唯の愚かな墮天使なんですよおお！」

「ハハハハ……！」

退く気が無いなら、後悔させてやる。私は精神を集中した。

「高等神術、『光刃』！」

無数の光の剣が空間に現れ、巨大な魔を切り裂く！ 手応え有り。だが……

「何だ？ この玩具のような剣は。この程度では、我が僕は倒せても、この『シェイド様』には傷一つ付けられんぞ！」

シェイドの全身から、紅蓮の炎が上がる。はつきりと姿を確認出来た。身長は三mばかり、横幅も二m位はある。体は鱗のような固い皮膚で覆われており、至る所から剣のような突起物が出ている。背中には体よりも更に巨大な羽があるようだ。それでも、天使の形状に比較的近い。奴の言う通り、今の私の高等神術でさえも、奴にダメージを与える事は出来ていない！

「もう終わるか？ 今から、私はシェイド様の体内に戻り、お前達を惨たらしく殺してやるからねえ！」

女が「モゴモゴ」と蠢きながら、シェイドの体内に呑み込まれていく。

「さあ……、始めようか。エファロードよ！」

シェイドの力が膨れ上がる！ 屋上が、否、塔全体が揺れている。

「ルナー！ 何なの？ あいつのエネルギーは！」

有り得ない……。神官ハーツも、ルトネックの魔の指揮官も、さっきの女も、こいつの前では塵に等しい。今の私でさえも、遠く及ばないだろう。まともに息が出来ない。

「我は、獄界の指揮官を束ねる『司令官』である！ 我は獄王様直々の命を受け、お前を殺す為に此処に現れたのだ。お前はエファロードと言えど、所詮第一段階。足らぬ力で、精々足掻くがいい！」

シェイドが手を上に翳し、塔の屋上に結界を張った。逃がさないと言う事か。  
「エファロード、第一段階？ そんな事はどうでもいい！ 私は、人間の為に戦う事を決めた。幾らお前が強大な力を持っているとしても、邪魔をするなら戦うだけだ！」

自分の中の「恐怖」を殺し、剣に精神力を集中させる。全力で走り、シェイドの胸に突きを放った！ 「ズシャッ」と言う軽い音。同時に舞う、奴の突起物。掠っただけだ！

「その程度の速さで、我を捉えられると思うか？」

シェイドの姿が消える。否、目で追えない。

「(リバレス、階段を伝って逃げろー)」

リバレスが真っ青な顔で首を振る。早く！

「まずは、天翼獣から死ぬがいい！」

リバレスが狙われている！ 私は彼女を片手で捕まえ、胸に抱いた。

「僕に聞いた通りだな。お前の、他人を気遣うその甘さが命取りだ」

「ブシュッ！」

背中と腹の辺りに、鈍い痛み感覚が広がる。奴の五指が突き刺さったようだ……

「これで『計画』の進行も、天界への侵略も容易くなる！ グハハハ……！」

計画、侵略？ そんな事より私は……、死ぬ。血を吐き、視界が暗幕に包まれていく。

「ルナをよくもー！」

リバレスが、シェイドに神術を放っている。止める、逃げるんだ……

「小賢しい奴だ」

「キヤアア……！」

彼女が地面に叩きつけられた音が聞こえた。済まない、私と共に墮天したばかりに……

ごめんな、フィーネ。私はもう……

「ルナさんっ！」

生きる事を諦めかけた時、幻聴が聞こえた。

「まさか人間が来ようとは。お前は何者だ？」

僅かに残る視界が、声の主をぼんやりと捉える。フィーネ？ 声を上げようとしても、

血が喉に詰まる。本当に……、フィーネなのか？

「そうか、お前がエファロードの女か。ついでに切り刻み、殺してやろう！」

何故こんな所に来た？ 後先を考えずに行動するなよ。心配するのはこっちなんだから。

だが、今はそれも愛おしかった。……彼女を守らなければ。

「待てよ、シェイド。私達の勝負は、まだ終わっていない」

「真紅の目！ グツ、第二段階が発現したか」

第二段階だろうと、何でも良い。彼女を守る為に戦えるなら！

「フィーネ、リバレスを連れて階段を下りろ！」

「はいっ！ ルナさん、約束を破ってごめんなさい。どうしても心配だったから」

彼女はキラキラ光る目元を拭い、リバレスを抱えて走る。

「フィーネ、ありがとう！」

「逃がすと思うか？」

シェイドが、フィーネの方を向く。行かせるか！

「その余所見が命取りだ」

私は、シェイドの左腕を肩から切り落とす。今の私なら、対等に戦えそうだ。

「グウウ……、第二段階でも我にはまだ及ばない。今度こそ、息の根を止めてやろう！」

シェイドが大口を開き、中から赤黒い大剣を出した。私の剣の数倍の長さ太さ。

「私は負けない」

互いの剣がぶつかり、火花が散る！ 奴の攻撃は重い、スピードはこちらに分がある。

シェイドの剣を紙一重で躲し、胴体に斬撃を入れる。奴は、敢えて斬撃を受け私を蹴り上げる。そんな応酬が続いた。

私も奴も傷だらけだ。次で決める！ 私が剣を構えると、シェイドは宙に浮き上がった。

「お前は空を飛べない。これで終わりだ。究極魔術『獄闇』！」

塔の上空から光が消えた。まるで巨大な闇のカーテンだ。これに包まれば、私もフィ

ーネ達も闇に毒され死ぬだろう。防ぐ手段は唯一つ！

「究極神術、『神光』！」

私を中心に、光の球体が拡大する！ 闇を拭い去れば私の勝ち。闇に吞まれば負けだ。

「ウグググ……、エファロードが！」

獄闇の圧力が増す！ 光が収縮していく。このままでは負ける！

真つ向勝負が好きだが、この場合は綺麗事など言っていられない。賭けに出る！

私は神光を止めた。そして、自分をシェイドの頭上に「転送」させる。剣に、力と全精

神力を乗せて……、振り下ろした！

「何だとおお……！！」

剣が右肩から入り、左腰で抜ける！ 奴の獄闇が消えた。勝った！

私は、上手く着地出来ず、その場に倒れた。

「ルナさーん！」

フィーネが駆け寄り、私を抱き起こす。

「ありがとう。君が来てくれたお陰で、奴を倒す事が出来た。……リバレスは？」

彼女はシェイドの一撃を喰らった。早く治療しなければ！

「やっほー！」

奇妙な掛け声と共に、リバレスがフィーネの背中からひよこつと現れた。

「リバレス、無事だったのか！」

「わたしは気絶しただけよー。それより、フィーネはよく来れたわねー」

リバレスがくるつとフィーネの方を向く。

「はい……。私、ルナさんの事が心配で心配で。馬に乗って追いかけてました。それで、塔の入り口には魔物が沢山居たので、森で爆薬を爆発させて、注意を逸らせてから塔に入っ  
たんです」

何という無謀さと行動力。感心を通り越して、呆れてしまった。

「さて、この兵器と塔を封印して帰ろう」

私は、南西を向いている兵器の下に潜り、封印装置を探す。随分狭く、身動きするのも一苦労だ。目当てのものを見付けたと同時に、遠くの床の上で何かが蠢いた。

「死ネエエ……!!」

シェイド！ 口から、矢のようなものを発した！ 此处では避けられない！

「キヤアア！」

一瞬、何が起きたか解らなかった。矢は私に当たっていない。私は兵器の下から這い出た。床には血溜まり！

「フィーネ！」

彼女が、私の代わりに矢を受けたのだ！ フィーネが血溜まりに崩れ落ちる。

「貴様ああ！」

私は、シェイドに走り寄り、頭を叩き割る！

「ギイイエアア！」

不快な断末魔を聞きながら、私は奴の全身を炎で焼き払った。

「フィーネッ！」

胸から鮮血を流すフィーネを、私は抱き起こす。治療を施すが、出血が止まらない！

「ふふ……。あなたを守れて良かった」

彼女の口から血が溢れる。私はそれを懸命に拭う。

「フィーネのバカー！ 何でそんな事をするのよー」

「ごめんなさい……。でも私は……。ね、ルナさんにどうしても、恩返しがあったんです。あなたは……。無鉄砲で我儘な私なんかの為に、戦ってくれた。だから私は……。安心して……」

彼女の体から、体温が失われて行く……。嫌だ。絶対に嫌だ！ 幾ら治療に全力を注いでも、フィーネの可愛らしい顔から血の気が引いて行く……

君は、どうしてこんな時に微笑んでいられる？

「ルナさん……、あなたに会えて良かった。今しか言えないから……、言わせて下さい。私は……、あなたが大好きです」

「フィーネ、フィーネ！」

「ごめんなさい……。せっかく買ってくれた服が……、台無しですね」

彼女は目を閉じた。

私は……、君に返事をしていない！ 私も君が……

「うわああ……！」

頭の中がグチャグチャに歪む。彼女の手の冷たさを感じた瞬間、頭の奥底から「意識」が生まれ、私の意識を支配し始めた。

「私の名は、『ルナリート・ジ・エファロード』。万物を超越する力を以って、この者に祝福を与える」

何だ、この言葉は？ 「私」が勝手に喋った。しかも、自分の背中に光で編まれた翼が生えている。だが「私」は本来の私の一部、素直にそう思える。

「禁断神術『蘇生』」

制御出来ない「私」が、フィーネに手を翳した。すると彼女の傷は塞がり、瞬く間に温かみを帯びて来る！

「あれ……？ 私は目の前が真っ暗になって、死んだと思ったのに」

フィーネが目を覚ました！ 「私」が、私に戻る。私は彼女を抱き締めた。だがその時、塔が揺れ始めた。封印装置が作動したのだ。この塔はもう直ぐ崩壊する。喜びは後だ。

「フィーネ、リバレス。しっかりと掴まってるんだぞ」

私は二人を抱え、光の翼で飛び立った。

夥多なる星の揺り籠へ。

## 第二十七節 澄月の恋舞

リウオルの湖。街から見て、塔よりも遠い森の中にあるこの湖は静寂に包まれている。時折、微風が湖面に漣を立たせる他に目立った動きは見当たらない。湖は、夜空と遠景を映す鏡のようだ。月影と糠星、遠くに見える山々をそのまま、水面に映し出す。

光が湖面を走った。空を舞う光を映したのだ。フィーネを抱えるルナの翼の光。リバレスはそっと二人を離れて、湖畔に降り立った。

「ルナさん、本当にありがとうございました。さっき……、死ぬかも知れないと思った時、

本当は怖かったです。目の前から光が消えて……」

ポロポロと、フィーネの目から雫が落ちる。彼女はルナの首に抱き付いた。ルナは右手で彼女の背中を、左手で膝裏を抱えている。

「……君が、無事で本当に良かった」

ルナは、彼女の背中をゆっくりと擦る。彼の目にも、煌く雫が溜まっている。

フィーネの栗色の髪が、緩やかな風に靡く。まるで、夜風と同化したかのように。

彼女の体は温かい。君が生きていてくれる、何て幸せな事だ。

「覚えていますか……」

フィーネが耳元で、躊躇いがちに囁く。

「君と過ごした日々で、私が忘れた事は、何一つ無いよ」

「……さつき言った事です。私が、死にかけた時に」

彼女の顔の左半分が、仄かな月光に照らされる。頬は朱に染まっている。

「……勿論、覚えてるよ」

フィーネの潤んだ目が、私の目を捉えて離さない。優しさ、靱さ、純粹さと僅かな戸惑いが滲んだ瞳。

「私は、ルナさんが大好きです。世界中で誰よりも……。ルナさんは、優しさを一杯くれたから。私は、あなたが傍に居てくれるだけで、温かい気持ちで一杯になるんです。強い心を持ち続けられるんです！ あなたは天使様なのに、私を助けてくれて、怒ってくれた」

私は、目を閉じて彼女の言葉を、一言一言しっかり受け止める。

「ミルドの丘から全てが始まりましたね。初めは、ルナさんの事が怖かったけど、今はあなたと居るだけで幸せな気持ちで満たされます。でも……。私は人間でルナさんは天使。私の恋は叶わないと解ってます。それに、あなたには天界で素敵な恋人がいるかも知れない。それでも、ルナさんは、私が初めて好きになった人だから、どうしても伝えたくて」  
彼女の背中を引き寄せる。愛しくて仕方無い。

「……ありがとう、フィーネ。人間も天使も、相手を思う気持ちは変わらない。魂が同じだから。私は、懸命に生きて、どんな辛い状況でも優しさを人に分けられるフィーネの方が、私なんかよりずっと素晴らしいと思ってる。君が居たから、私は変わった。戦う決意が出来たんだ。君は私に無い物を沢山持っている。君が私に、心をくれたんだ。だから私は、ずっと君を守る。これから先、何があっても」

私は深く息を吸い込み、言葉を待つフィーネの目を見詰める。

「私はフィーネを愛してる」

私の正直な気持ち、生まれて初めての気持ちだった。君が、誰よりも何よりも大切だ。  
「ルナ……、さん」

フィーネは目を閉じ、目尻から一筋の涙を流した。紅涙は月華を受け、煌く。  
「フィーネ……」

背中にかかる長い髪を撫で、私はフィーネの唇に口付けをした。柔らかで、滑らかな唇。心が燃え上がるように高揚し、体が熱い。二人の想いが重なる事が、これ程悦びに溢れているなんて。一生心に刻まれる、大切な、大切な瞬間。

言葉は必要無い。触れ合うだけで、愛しく思う気持ちが伝わって来る。

ずっと、傍に居たい。一緒に過ごしたい。そんな想いが、強く駆け巡る。何があっても、私達の心は離れない。どんな悲しみや、苦難が訪れたとしても。

私の命は君の為に。君と生きる為に。

星が流れ、月は煌々と光る。私達を祝福しているかのように。

Our eternal heart began from this time……

## 第二十八節 寒花

三人は、日が昇る頃に宿に帰って来た。ベッドに横たわるなり、三人共直ぐに眠りに落ちる。長過ぎる一日で、疲れがピークに達していたからだ。三人共、その寝顔は安らかだ。昼を過ぎても彼等は起きない。午後三時頃、部屋の扉の前に一人の初老の男が訪れた。

「コンコンコン……」

控え目なノック音、だがその音でルナとフィーネは目覚めた。ルナが立ち上がり、そつとドアを開ける。

「誰だ？」

初老だが、風格のある男。人の上に立つ者の雰囲気醸し出している。宿の者では無い。

「失礼を承知でお伺いします。リウォルタワーは、貴方達が沈めて下さったのですか？」

私が塔の方角に向かう所は、人間に目撃されている。しかもフィーネは馬まで借りていて、朝それを返却した所だ。知られていても不思議じゃない。

「ん？ 確かに私が沈めたが、それがどうかしたのか？」

「やはりそうですか！ 私はこの街の長です。今日は、あの忌まわしき塔が消えた記念に、祝宴とパレードを催したいと思っていますのです！ パレードに是非主賓として参加して頂きたく、此処に参りました！」

随分と腰が低い長だな。だが、また祝宴か……

「参加しますよ！」

フィーネが横から顔を出す。彼女が参加したいなら、私が断る理由も特に無い。

「そういう事で、私達は参加させて貰うから宜しく」

長は皺の刻まれた顔に笑みを浮かべ、丁重に頭を下げた。

「それでは今晚六時より、開催させて頂きます。時間までに、街の中心にある『鉄神殿』にお集まり下さい！」

鉄神殿。昨日は立ち寄らなかつたが、この街の名物で、鉄で出来た神殿だな。

「了解」

長は、再度頭を下げ宿を出て行つた。いつの間にか起きたリバレスが、私の肩に乗る。

「人間は祝いが好きねー」

「そんな事はないですよ。魔の脅威が無くなった事が、嬉しくて仕方無いんです！」

彼女には、長や街の人間の気持ちが良い解るのだろう。

「まだ祝宴まで時間があるし、散歩でもするか」

私達は顔を洗い、軽く食事を食べた後宿を出た。

街には、昨日の傷跡が生々しく残っている。ルナが塔を崩壊させた事は、既に街の人間に知れ渡っており、多くの人間がルナ達に話し掛けた。

殆どが感謝の言葉だったが、一部の人間は嘆きの言葉を投げ掛けて来た。ルナがもう一日早く来ていれば、大切な者を失わずに済んだと。

街の再建に汗を流す人間、怪我の手当てをする人間を見て、フィーネは駆け出した。ルナとリバレスは、街の外れの人気の無い浜辺に座る。此処で聞こえるのは、潮騒だけだ。

「ふうー、やっぱり指輪の姿は窮屈だわー」

リバレスは、周りに人が居ないのを確認してから元の姿に戻った。

「それにしても……、ルナがねー」

リバレスが、じいーっと私を見て来るので、思わず目を逸らす。

「な、何だよ？」

「恋愛成就おめでとー！」

彼女は笑いながら、私の頭の上に乗る。恥ずかしくて返す言葉も無い。

「フィーネは良い子だし、大事にするのよー」

リバレスが私の頬を引っ張る。彼女も嬉しそうだ。

「……ああ。解ってる」

此処まで来れたのは、お前のお陰だよ。

午後六時。三人は鉄神殿に集まった。この神殿は、外装だけで無く内装の全て、柱や彫刻までもが全て鉄で出来ている。天界には劣るが、卓越した技術だ。

「さあ、皆の者！ リウォルパレードの始まりだ！」

街長の掛け声で、神殿中央の天井から吊り下がっていた幕の覆いが外され、文字が現れ

た。白い鳩が飛び交う中、その文字を街人全員が合唱する。

「胸に刻もう、この時を！ 我々は語り継ごう、英雄ルナリートの名を！」

大袈裟な謳い文句と共に、盛大な祝宴は始まった。

ルナとフィーネは、色鮮やかな花で飾られた、滑車の付いた台座に座らされ、街の人間に囲まれながら、街中を練り歩く。

「ふふふ、こんなに盛大に祝ってくれて嬉しいですね。まるで、私達二人を祝福してくれてるみたいですよ」

昨日買った、白いドレスを着たフィーネが顔を赤らめ、私の手を握る。

「本当だな。良い思い出になりそうだ」

喜びで乱舞する人々の中を通り抜けながら、私とフィーネは祝酒を飲む。本当に、私達の結婚式を行っているみたいだ。……少し酔いが回ってきた。

「フィーネ、綺麗だよ」

潤んだフィーネの双眸が私を見詰める。

「ルナさん、愛してます」

パレードの間、私達は手を重ね、離す事は無かった。

「ルナリートさん、そしてフィーネさん！ リウオルは、お二人の『像』を作り、この街の守護神として、末代まで崇拜して参ります」

街長がその言葉を口にした時、私は流石に遠慮したが、満場一致でそれが実行される事に決まった時には止める事が出来なかった。

神殿にいる者も、街の中にいる者も皆楽しそうに酒を飲み、料理を食べ、踊りに没頭する。其処に、音楽隊の演奏も加わり、祝宴はますます熱を増していった。その光景は、人間界の弱い酒とは言え、樽一杯飲んだので、私は久々に酔っていた。

「人間も良いもんだな、あんなに楽しそうに笑ってる」

私達は酔いを冷ます為に、神殿の端の方に座っていた。此処には誰も来ない。

「そうねー、本当に人生を楽しんでるって感じよねー」

リバレスの顔も赤い。その顔には笑みが浮かぶ。フィーネはとっくに酔い潰れて、私の膝の上で眠っていた。

「天使は強い力と長い命を持つてるけど、一つの事でこんなにも幸せにはなれないからな。短い人生でも、これだけ笑えれば幸せだろうな」

安らかな寝顔を浮かべるフィーネの髪を、私はそっと撫でる。

「ルナさん……」

夢の中でも、私を想ってくれている。嬉しいものだ。

「ずっとフィーネの傍に居てあげるんでしょー？」

「ああ。私は、フィーネとリバレスの三人で、過ごすつもりだよ」

リバレスの頭をポンポンと撫でるように叩く。

「ルナも変わったわねー。わたしって……、お邪魔虫じゃ無い？」

不意に彼女の顔に哀愁が浮かんだ。だが、直ぐに微笑みを取り戻す。

「お前は、私にとって必要だ。ずっと、一緒だから心配するなよ」

リバレスは頷きながら、私の顔の周りを飛び回った。

人々は、酔い潰れて家路に就く。夜は深まり、星空の下私達も宿へと歩いていった。フィーネは、ついさつき目を覚ました所だ。

人間界に堕ちて、二週間と少し。楽しい思い出ばかりが蘇る。これが刑なら願っても無い。私の心は満たされていた。他に、欲しい物は何も無い。

神の存在を信じていなかった私が、神に願う。ずっと、この幸せが続く事を。

宿に着き、ハルメス兄さんに貰った懐中時計を開く。時刻は、午前一時三十八分。フィーネが、眠る前の酔い覚ましに海風に当たりたいと言うので、二人で浜辺に赴いた。

もう冬だな。私が墮天してから、毎日どんどん気温が下がってきているのが解る。だが、優しい海の音と、零れ落ち<sup>こぼ</sup>れそうな星々を見ると、温かな気持ちになる。

「ルナさん、私はとっても幸せです。あなたが傍に居てくれるから……」

私は彼女の肩を抱き寄せた。浜辺に座る私達の目の前には、真つ暗な海と星の海。

「私もだよ。ずっと一緒に生きよう。フィーネは十七歳、私は千八百二十六歳。年齢は離れてるけど、そんな事は関係無い」

何気無く私はそう言った。だが、彼女は俯いた。不味い事を言ったか？

「ルナさんが人間なら、十八歳ぐらいに見えます。でも私は、どんなに長生きしても百年も生きられないです……。あなたは若いままで、私は年老いていくでしょう」

そうだ……。どんなに一緒に居たいと願っても、彼女は人間だ。生きられる時間の長さが違う。だが、E S Gを彼女に投与すれば……。駄目だ、拒絶反応というリスクがある。そもそも、時間の長さなど関係無い。密度が問題なのだ。

「百年でもいい。その時間の価値は、私とフィーネで何も変わらないから。その百年は、私にとっての一生と同じ価値がある。それに、大切なのは若さじゃ無く心だ。私は、命ある限り君と共に在る。だから、心配しないで欲しい」

フィーネは顔を上げて、私に微笑みかけた。一点の曇りも無い、笑顔。

「はい、ずっと傍にいて下さいね！ ……天国にいるお父さんとお母さんにも、今の私を見せてあげたいな。『辛い事もあったけど、私は幸せです』って」

彼女は私の右手を、強く強く握り締める。思いの切実さが、手を通して伝わる。私も、そっと包むように左手を重ねた。絶対に、彼女を不幸にはしない。

「ご両親が見ているんなら、尚更フィーネを幸せにしないと。魔を倒して、この世界を平和にしたら一緒に暮らそう。何処か、田舎の方に家を建てて、誰よりも幸せに」

私はそう言って、祈るように目を瞑って空を見上げるフィーネにキスをした。

「はい……、約束ですよ。ルナさん、大好きです」

私は、この広い宇宙で君に会えた事を素直に感謝する。

「あっ！ 掌を上に向けて見て下さい」

フィーネが突然声を上げた。私は首を傾げながらも言われた通りにする。冷たい雫が掌に数滴落ちて来た。これは……？

「雪ですよ」

夜闇の中、微かに煌く白い結晶。微風に揺られて舞い落ちる花卉は、息を呑む程幻想的で美しい。

「これが雪……。初めて見たよ」

天界に雪は降らない。天界は特殊な結界で覆われ、ある程度温暖に保たれているからだ。

「ルナさんと出会った、ミルドの丘。あそこにもよく雪が降り積もるんです。雪って、綺麗ですよ」

「ああ。今頃、あの丘にも雪が降ってるかも知れないな」

私は、フィーネの肩と髪に積もった雪を手で軽く掃った。フィーネが笑って立ち上がる。

「ルナさんにも、一杯積もってますよ！」

彼女も、私の雪を掃う。私は立ち上がり、彼女を後ろから抱き締めた。

「ふふ……、行きたいですね」

「ん？ 何処に行きたいんだ？」

私は、指でフィーネの頬を突っ付く。

「ミルドの丘ですよ。二人が初めて出会ったあの丘で、一緒に雪が見たいんです」

雪が小降りになり、やがて消えた。

「ああ、絶対に見よう。約束だ」

全てが始まったあの丘で、あの時とは違う二人で。

「はいっ！ 約束ですよ！」

フィーネが私の頬に口付けをする。楽しみが一つ増えたな。

**だがその時、背筋が凍るような殺気を何処から感じた。**

人間には感じられないだろうが、凄まじい殺気だ。冷や汗が背中を伝う。

「どうかしたんですか？」

「……何でも無い。冷え込んで来たし、そろそろ宿に帰ろう」

私は笑顔を作って、彼女の手を取った。

あの殺気は、確実に私達に向いていた。魔では無いが、異様に密度の濃い殺気……

この時、誰も居ない海岸に、不気味な笑い声が響いていた事を、二人は知らない。

## 第二十九節 星石

祝宴の翌朝、ルナ達は宿を出て街長の家に向かっていた。街長から話があるらしい。

街外れにある豪邸が長の家で、鉄の門と肉食獣の彫刻が訪問者を迎える。中に入ると、手入れの行き届いた芝生が目を惹く。三人は、使用人の案内で客間に通された。ルナとフイーネはソファに座る。客間にある品の良い絵画と彫刻を眺めていると、街長が現れた。

「この度は本当に有難うございました！ この恩は、決して忘れはしません」

街長はソファの前にあるテーブルに頭が付く位に、深い礼をした。本当に腰が低い。きつと彼は、任人と同じ目線でこの街を統治しているのだろう。

「私は当然の事をしたただけだよ。それより、頭を上げてくれ」

ルナさん、それは当然じゃありません。あなたにしか出来ない事ですよ。

「そんなに謙虚になさなくても！ 兎に角、有難うございました！」

其処に、使用人が温かい紅茶を持って来た。私とルナさんは、同時にそれを啜る。薫り高い茶葉と、新鮮なミルク。美味しい。

「ところで、話とは？」

ルナさんの言葉に、長は笑みを浮かべる。どうやら私達に有益な情報らしい。

「はい、貴方達に是非一度、足を運んで頂きたい場所があるのです。それは、偉大なる『神官』が居る『フィグルルの街』です。神官は人智を超えた力で、人々に救いを齎しているという話です。一説では、数百年以上も前から生きていっているという事……。この街を救ったルナリートさんに通ずるものがあるかも知れません」

ルナさんは考え込んでいる。私もその神官は噂で聞いた事がある。いつまでも歳を取らず、美しい銀色の髪を持った神官。その人はルナさんの力になってくれるかも知れない。

「ルナさん、行ってみましょう！」

私がそう言うと、ルナさんは一瞬「ムスッ」とした表情になった。でも、指輪のリバレスさんと何らかの会話をした後、いつもの穏やかな顔に戻ってホッとする。

「……そうだな。一度会ってみようか」

「そうですか！ それでは、フィグルルへの船を手配しておきますので、正午過ぎに船着場へお越し下さい。それと……」

長が、隣で控える使用人に目で合図を送る。すると使用人は、別の部屋から純銀と宝石で作られた豪華な小箱を持って来て、長に渡した。

「ルナリートさん、これをお受け取り下さい。この箱には、『シェファ』と呼ばれる宝石が入っております。ご存知の通り、シェファとは私達の暮らすこの星の名。この宝石は、世界に二つと無いと言われる程貴重な石で、虹色の光を自ら放ち続けます。これを、フィー

ネさんへ贈る指輪の石としてお使い下さい」

この人は何て事を言うの。恥ずかしい。あ、長が箱を開けてくれた。凄く綺麗な石ね。艶やかな石自体が、虹色に発光している。

「流石に、そんな貴重な物は貰えないよ」

「いいえ、私はリウォルの代表として、これを受け取って貰わねばならないのです。お願いします！」

必死に懇願している顔、ルナさんがこっちを向いたので、私は頷いた。

「……解った。頂く事にするよ。この石をフィーネの指輪にする時は、またこの街に来る」  
「ルナさんっ！」

「（もー、二人共いい加減にしてよねー！）」

「ハッハッハ……！ 貴方達の結婚式は、是非この街で。盛大に行わせて頂きますよ！」  
長まで……。もうっ！ 私達は、暫く談笑してから船着場に向かった。

三人は大型の帆船に乗り込んだ。天気は晴天。海の香りが船上に広がり、空には鳥が群れを為して飛んでいる。威勢の良い船長が出航の合図をした。船着場には、多くの街人が駆け付けてルナ達に手を振っている。

船は東に六百km、北に四百km航行して目的地に着く予定だ。順調に航海すれば、二日後の夕方にフィグリルに到着する。この船には、船員が十人、乗客が百人程乗船している。客室のグレードは一〜三までだが、ルナとフィーネは一室しか無い特別室に案内された。特別室には、テーブルに椅子、硝子窓、クローゼット、バス等が完備されている。

「部屋は申し分無いが、ベッドが一つしか無い。枕は二つあるのに」

ルナさんが首を傾げる。あの長は……。困った人だ。私はルナさんに説明しないといけないのに。

「ルナさん、これは、あの……。結婚した二人が眠るダブルベッドです」

ああ、もう。ルナさんも、ベッドも直視出来ない。

「街長、余計な気を回して！ 仕方無い、別の部屋を借りよう」

ん、別の部屋？ それは考え付かなかった。どうやって、照れずに一緒に眠るかしか考えていなかったから。

「ルナー、折角街の人が気を遣ってくれたんだから、この部屋で良いんじゃないのー？」

リバレスさんが、私にウィンクする。彼女は、私の心を的確に読んでいる。

「……ルナさん。私はこの部屋が良いですよ」

恥ずかしいけど、あなたの温かみを感じて眠れるなら。それに、リバレスさんも居る。

「私はルナさんを信じてますから」

私がそう言っても、ルナさんは渋っていた。でも、最終的には了解してくれた。あなたの、そんな優しさが好きです。

豪華な夕食の後、リバレスさんが私に話があるとの事で、ルナさんに席を外して貰った。窓の外を見ると、「パラパラ」と雨が降っている。

「わざわざごめんねー」

リバレスさんが、テーブルの端に腰掛けて私に微笑みかける。

「いいえ、どうしたんですか？」

「一つは、ルナの事を未永くお願いしたいって事よ」

彼女は私に頭を下げた。滅相も無い、私も頭を下げる。

「そして、もう一つは……、ルナには言わないでね」

「はい、解りました」

私は目を見開き、身構える。一体何を言い出すのだろう。

「天界に、ルナの事を好きな女天使が居るの。名前はジュディア」

前に少し聞いた事がある。ルナさんの幼馴染で、今も友達。でも、ルナさんは私を選んだ。何が問題なの？ 私は息を吞んで続きをじっと待つ。

「思い込みが激しい天使だから、気を付けてね。って言っても、ルナは二百年人間界に居るし、ジュディアは天界に居る。だから、私の杞憂に過ぎないんだけどねー」

杞憂……、だろうか？ 私がジュディアさんの立場だったら、心配で仕方無いと思う。

如何なる方法を使っても、会いに行くのでは無いか。

リバレスさんにお礼を言い、暫くするとルナさんが帰って来た。雨に濡れて。何処と無く寂しそうな表情。私は彼を、何も言わず抱き締めて背中を擦る。

同じベッドで眠りに就く前、何度もキスをした。私は、ルナさんが眠るまでずっと、顔を見詰めていた。離さない。

「ドンドン……！」

誰かが激しくドアを叩いている。時刻はまだ午前五時だけど、私達三人は飛び起きた。

リバレスさんが指輪に変化して、ルナさんは走ってドアを開ける。

「ルナリートさん、大変です！ 魔物が甲板に」

魔物？ ルナさんは頷き、剣を持った。私も手伝おうと、荷物を探る。しかし、私の手をルナさんが止めた。

「二人は此処に居るんだ。リバレス、魔がこの部屋まで来たらフィーネを守ってくれ！」

テーブルの上のリバレスさんが光る。了解したという意味だろう。私は此処を離れる訳にはいかない。足手纏いになる。

「ルナさん、気を付けて下さいね！」

「大丈夫、すぐ戻って来るよ。約束する」

ルナさんはそう言って微笑んだ。少しホツとする。でも、まだ不安で鼓動が激しい。

彼が部屋を出て、五分が経過した。居ても立ってもいられない！ 私はリバレスさんをお願いして、甲板が見える所まで行く許可を貰った。リバレスさんは、私の右手中指の指輪になってくれている。

通路を歩き、甲板への扉が見えた。扉の硝子越しに、甲板が見える。

「ルナさんっ！」

「(声を出しちゃダメ!)」

リバレスさんが私の指を締め付ける。ルナさんに、私達の姿を見られてはいけない。心配を掛けるから。でも、今ルナさんは危機に陥っている！ 全身が真っ黒な鱗で覆われた、尾を持つ魔物に羽交い絞めにされているのだ。

槍のような尾が、ルナさんの首に突き付けられてる！ 危ない！ 尾がしなって、ルナさんの顔に直撃しそう！ あ、何とか体を振って避けてくれた。良かった。でも、危ないのに変わりは無い。私が走り出すと、リバレスさんが元の姿に戻った。彼女もルナさんを助けるつもりだ。

私が甲板への扉に手を掛けたその時、予期しない事が起きた。魔物だけが、氷付けになったのだ。氷結した魔物が粉々に砕け散る。一体誰が？

ルナ……。

凄まじい「敵意」を感じた。魔物の殺気とは別の。「リウォルの浜辺で感じたもの」と同じだ。私はその「敵意」と対峙する事になるかも知れないわ。

怪我をした船員を、ルナさんは医務室まで運んだ。その後朝食、昼食、夕食時にルナさんの様子を伺っていたけど、やっぱり彼は上の空だった。敵意に心当たりがあるのだろう。

リバレスさんが眠った後、私はルナさんの耳に囁く。

「ルナさん、一体何があったんですか？ 朝から様子が変ですよ」

部屋の明かりを消しているの、彼の表情をはっきりとは読み取れない。でも、目を見開いたのは解った。

「そうか……。フイーネは鋭いな」

「ずっと考え事をしてるみたいで、心配なんです」

東の間の逡巡。しかし、ルナさんは口を開いた。

「目に見えない、『敵』が恐ろしかったんだ……。でも、私は何があっても君を守る」「リウォルの浜辺で感じた、恐ろしい『敵意』の事ですよね？」

ルナさんは言葉に詰まった。凶星なのだ。

「そうだ。でも心配は要らない。私達の想いは、誰にも邪魔をさせないから」

私はルナさんの胸に、ギョッと抱き寄せられた。此処に居ると、安心する。あなたの鼓動が聞こえるから。あなたが生きているのを実感出来るから。

少し泣いた。「永遠」に、此処に居られる訳では無いと思ってしまったから。でも、あなたは私が眠るまで、口付けて、髪を撫でてくれた。お休みなさい、私の望みは目が覚めても、あなたが隣に居てくれる事だけです。

### 第三十節 華兄

黄昏の海が眩い、時刻は午後六時。リウォルを通航してから二日後の夕方、予定通りルナ達はフィグリルに着いた。フィグリルの建造物は、全て白亜で出来ている。建造物だけでは無い、道も、港の岸壁も。フィグリルは、アトン地区に於いてリウォルに並ぶ都会で、交易、芸術、医療が発展している。特に芸術は、アトン地区だけでは無く世界中で評価を受けている程だ。

「真っ白で綺麗な街ですね……」

フィーネは、感嘆の溜息を漏らしながら、街の中心部に向かって先頭を歩く。

「そうだな、夕紅を受けても白く眩しい」

そう言っただけ私を止めた。そして、街全体を見渡す。これは……

「どうかしたんですか？」

フィーネが首を傾げて私の顔を覗き込む。目の前にあるものは見間違いで無さそうだ。

「(ルナー、これは巨大な結界よね)」

そう、神術による結界だ。人間には認識出来ない「薄い結界」が、街全体に張り巡らされている。この結界は魔の侵入を防ぐものではなく、進入を「検知」する為のものだろう。

街は少なく見積もって、二百平方kmはある。これ程までに桁外れの神術を使える者が、

この街に居るのだ。恐らくは噂の「神官」。まさか神官は天使なのか？ 否、並の天使では

こんな芸当は不可能だ。私でも無理だろう。

「フィーネ、この街には強大な力を持つ者が居る。神官がそうかも知れない」

「それなら、早く会いに行きましょう！ きつと私達の力になってくれます」

フィーネは結界を越えて走って行く。相変わらずだな……。私は溜息を吐いてフィーネを追い掛ける。

家々の外壁に設置された街灯に、人間が火を灯していく。すっかり夜だ。神官の居る神殿までは、港から一時間程歩かねばならない。私達は白亜の表通りを通っていたが、通りに面した家から、夕食の良い香りが漂って来る。視界を掠める一家団欒の風景。フィーネと作る温かな家庭を思い浮かべた。

神殿も純白だった。しかし、何故かこの神殿は何処かで見ただ事があるような気がした。数秒考えて答が出る。天界の建築様式に似ているのだ。屋根や柱、階段が。

神殿の前に佇む私達の元に、一人の衛兵が近寄って来る。

「失礼ですが、貴方はもしかや、ルナリート様ですか？」

何故私の名を知っている？ 既に、私の名は人間界に広まっているのか。

「そうだが……」

「ルナリート様、神官がお待ちです！」

衛兵が、ピシッと背筋を正し私に敬礼をした。どうやら歓迎されているらしい。

私達は衛兵の後を歩き、神殿の奥へと進む。壁には神術で灯された燭台。足元には赤い絨毯。じゅうたんそして、脇には大理石の彫像。まるで天界に居るようだ。

「こちらです、どうぞお入り下さい」

衛兵に促され、私はドアに手を掛ける。「ギィイ」という音を立てて、ドアが開いた。

部屋で私を待っていた人物を見た瞬間、私は言葉を失った。足元が揺れ、やがて全身が震える。そして震えは、涙に変わった。

「……ハルメス兄さん！」

「待っていたぞ、ルナ！ 大きくなったな」

何という僥倖……！ 兄さんは、千百年前に神官によって葬られたとばかり思っていたのに。少年を取っているが、紛れも無くハルメス兄さんだ。短く切られ、逆立った銀色の髪。そして、強さと優しさ、鋭さが共存する蒼い瞳。

「よくぞご無事で！」

「おいおい、泣くなよ。折角の、千百年振りの再会だぜ」

「はい……。貴方の事を忘れた事は、片時ありません！」

私は涙をハンカチで拭い、兄さんに貰った本と懐中時計を見せた。

「ちゃんと持って居てくれたんだな、ありがとう。言って無かったが、その時計は俺の神術で動かしている。俺が死ねば、止まるようになっていたんだ」

そう言う事は最初に言っただけだ。ハルメスさんは秘密裏に裁かれ、誰も裁判を傍聴出来なかったのだから。死んだと思うのが自然だ。

「この時計にそんな仕掛けが……。それより、どうして此処に？」

私がそう言うと、兄さんは不敵な笑みを浮かべた。

「五百年の墮天の刑を受けたからだ。ハーツは俺を殺さなかった。五百年間の苦渋を俺に味わせた後に、自分の側近にしようと目論んでいたのだろう。だがそれは、奴の完全な誤算だった。俺は人間界に住み着き、未だに帰っていないからな。お前も、墮天か？」

そうか、ハーツは兄さんまで自分の物にしようとしていたのか。卑劣な奴だ。だが、束縛された時代は終わったのだ。

「はい、私も二百年間の墮天です。しかし遂にハーツは失脚し、天界には『自由』が訪れたんです！」

この喜びは、この人に一番伝えたかった。それが叶って胸が一杯になる。

「そうか、やったな！ ……まあ、積もる話は後でゆっくりするとしよう」

「その前に、一つだけ聞かせて下さい。何故天界に帰って来ず、この世界に居るのか」

「…：恐らく、お前と同じ理由だ」

兄さんは、私の横で怪訝な顔をしているフィーネに視線を送った。成程。しかも、兄さんは「天使の指輪」を付けていない。完全に天使である事を放棄している。彼も私と同じように人間を愛し、魔と戦ったのだろう。だが此処に、その愛する人間は居ない。それなのに、兄さんは人間の為に生きている。

「一つ違います。私は、二百年が経てば天界に帰るでしょう。貴方のように、たった一人で戦い続ける事は出来ません…：」

「構わないさ。二百年、お前が居てくれるだけで大助かりだ。それはそうと、隣の女性と指輪になっている天翼獣を紹介してくれないか」

指輪のリバレスがビクツと動き、彼女は元の姿に戻った。私が二人を紹介した後に、二人が自己紹介を始める。

「フィーネです。ミルドの村から来ました。宜しくお願いします…：」

彼女にしては珍しく、随分ギクシャクした挨拶だった。

「リ…：、リバレスです。あなたの事は、ルナから伺っています。初めまして」

「はっはっは、俺はハルメス。宜しくな。ルナ、良い仲間を持ったな！」

兄さんが、私の背中を平手で叩く。私は笑みを浮かべて頷いた。

四人で暫く話をした後、私とフィーネ、リバレスは二階の豪華な客室に案内された。夕食会の準備が終わるまで寛ぐよう言われたからだ。兄さんは会の指揮を行なうらしい。

夕食会までの間、私はフィーネに兄さんとの事を話す事にした。私の生い立ち、クロムさんに育てられ、同じ孤児同士の兄さんと暮らした事。ハーツとの確執など…：

話が終わるまで、フィーネは一言も喋らず黙って聞いていた。話し終えた後、彼女は浮かない表情でポツリと呟く。

「ルナさん…：」

「どうしたんだ？ フィーネ」

彼女の表情の理由が解らない。塞ぎ込み、諦観しているかのような表情。それを見詰めていると、彼女は窓際へと歩いて行った。表情は見えないが、背中が僅かに震えている。

「今話を聞いて、何だかルナさんがとても、とても遠い存在に思えました。私はたった十七年しか生きていなくて、あなたのように厚みのある人生は送っていない。あなたは凄いい力を持ち、素晴らしい仲間が居る。…：私は、本当にあなたに相応しいんでしょか？」

遠い存在…：、か。だが、フィーネは決して薄っぺらな人生を送ってきた訳じゃない。

その心が培われるまでに、どれ程の愛、喜び、悲しみを受けてきたか、想像もつかない。「私は…：、フィーネと一緒に生きられる事を誇りに思っている。君の心は、私なんかよ

りもずっと素晴らしい」

彼女の手を握る。私よりも少し冷たい手。何の心配もしないで欲しい。

「あなたの方がずっと……。私は……」

フィーネの目から涙が零れた。まだ、何か言いたい事があるようだ。彼女が更に何か言おうとしたその時、ノックの音が聞こえた。

「宴会の準備が整いましたので、どうぞお越し下さい」

フィーネが頷く。話は後だ。

神殿一階の大広間に案内され、私達は円卓に座った。豪華な料理、見た事も無い酒が並び、人間の奏者によるピアノの演奏が雰囲気盛り上げている。

「さあ、今日は千百年振りの再会を祝って、乾杯だ！」

ハルメスさんの声と共に、夕食会が始まった。

「こんな日が来るとは思っていませんでした。今日は最高の日です！」

私は喜びの余り、感情を抑え切れない。兄さんと話したい、千百年の出来事を聞いて欲しい。それだけが私の望みだった。熱中する余り、周りの声も聞こえず、他のものは見えなかった。

天界に自由が訪れた事を、兄さんは何より喜んだ。そして私とフィーネの事を話すと、兄さんは自分の事を教えてくれた。深くは教えてくれなかったが、墮天した年に「ティファニー」という人間の女性に出会い、恋に落ちたらしい。

「お前も立派な大人だな。フィーネさんを大切にするんだぞ！ 絶対に失わないように」

兄さんは目を細めて、私の肩を叩く。私はしっかりと頷いた。

「はい！ 私は、フィーネを守り通します」

「よし。それでこそ、俺が見込んだ男だ！ その誓いを忘れるなよ」

私達は、「パーンツ」とハイタッチを交わした。そして、二人で笑う。

「はいっ！ また今度、ティファニーさんとの話を詳しく聞かせて下さいね」

「ああ、この戦いが終われば話す。……必ずな」

一瞬、兄さんは視線を下に落とした。何かを躊躇っているかのように。だが、今聞いても答えてはくれないだろう。ならば、フィーネの為に魔との戦いを終わらせるしか無い。

二百年ハルメスさんと手を組めば、人間界の魔を全て撃退するのも不可能じゃないだろう。外の結界を見る限り、兄さんの力は半端じゃない。

私達は再びハイタッチをして、暫く話し込む。話す事が多過ぎて、収集がつかない。

「ルナ、そろそろフィーネさんの所に行った方がいいんじゃないか？」

ハッとしたり。見回してみると、この広間にはもう誰も居ない。食器も片付けられている。

「今、何時ですか？」

「夜中の三時だ。早く戻るんだ」

私は領き、一礼した後部屋へ駆け戻った。静かにドアを開け、部屋を見回す。リバレスは眠っている。フィーネは……、居ない！ 思わず声を上げそうになったが、私のベッドの上に一枚の紙を見付けたので、声を押し殺した。急いで書かれている文字を読む。スラスラと流れるような、綺麗な文字。

「愛するルナさんへ」

屋上で待っています。凍えない内に会いに来て下さいね。

フィーネ・ディアリーハート」

私は紙を懐に入れ、屋上を目指して駆け出した。

### 第三十一節 永遠の約束

あらゆる生物を凍て付かせる、刃の如く鋭い冷気。屋上への扉を開けたルナはその寒さに愕然とし、街が見える屋上の涯に佇む少女を胸に抱き寄せた。

「来てくれたんですね」

「当たり前だろ！ どうして、君は……」

私が其処まで言った時、彼女は私の手を握った。何と言う冷たい手！ まるで、氷のようだ。その冷たさに私は胸が一杯になり、言葉が出ない。

「……ルナさんと二人で話が出来たかったです。出来るだけ早く」

彼女は頭を私の胸に預け震えている。話をする前に、まず体を温めなければ。私は、神術で熱を発生させ彼女をゆっくりと温める。

空は厚い雲で覆われ、殆ど星は見えない。だが時折、雲の細い切れ間から月光が私達に降り注ぐ。街の明かりも殆ど消えている。見えるのは、一部の街灯や宿の明かりのみだ。

世界が寝静まる時間。夢が支配する時間。胸の中でゆっくりと呼吸するフィーネを見てると、まるで世界で目覚めているのは二人だけのよう気がする。

「ルナさん、私は幸せですよ」

フィーネが潤んだ目で、ゆっくりと確かめるように呟いた。

「私も、フィーネが傍に居てくれるだけで幸せだよ」

彼女が私の背中に手を回し、より強く顔を胸に埋める。顔は……、震えている。

「別の世界に生まれた私達が、出会って此処に居ます。それだけでも奇蹟なのに、ルナさんは私を愛してくれたんです。……無理なお願いばかりした私を」

私は、彼女の言葉を反芻しながら静かに頷く。左手は彼女の腰を抱き、右手で髪を撫でながら。

「沢山思い出を作りましたね。とても楽しく、幸せな思い出を」

彼女が私の顔を、否、空を見上げる。仄かな月華が彼女の涙を輝かせる。

「フィーネ、何か不安な事があるなら言ってみて欲しい。君の悲しみは、私の悲しみだ」

「ルナさんは、私と過ごす時間が一生と同じ価値があると言ってくれました。でも、私は先にこの世界から消えてしまう。その時、私はあなたにとって『思い出』になるでしょう。あなたは天界に帰り、元の暮らしをする中で、私の事を忘れてしまうかも知れない。あなたは、私と過ごした時間の、百倍以上の時を生きていますよ……」

彼女が死んでしまった後、私は八千年以上一人で生きなければならぬだろう。だが私は決して忘れない。君と過ごした時間の全てを。君の温かい心を。

そして君を失っても、私には出来る事がある。

「フィーネ、何も心配しなくて良いんだよ。命を失っても、『魂』は死なない。魂は記憶を無くした後、新たな生命へと生まれ変わるんだ。だから、君が私より先にこの世界から居なくなったら、私は君の生まれ変わりを捜す。それは、空で光る数多の星々からたった一つを選び出すぐらい難しいけれど、必ず捜し出す」

フィーネが、大きく目を見開き話の続きを待っている。期待と不安が入り混じった瞳。「記憶を失っても、私達の魂に刻まれた『この思い』は消えない。きっとフィーネは、生まれ変わっても、寂しそうに私を待ってるよ。何度でも……、何度でも私は君を見付ける。私は、『永遠に』フィーネを捜し続けるから安心して欲しい」

彼女の涙が頬を伝い、足元に落ちる。再び彼女の顔を見ると、微笑みが浮かんでいた。「グスン……。ふふ……。解りました。それなら私も、絶対にルナさんを見つけます。あなたは、その優しい瞳で私を待っていてくれる筈だから」

私は彼女が愛しくて堪らず、唇を重ねた。蕩ける様な、長く激しい口付け……

二人共、触れ合う体が火照っている。目を閉じ、フィーネを感じていると、やがて全身に熱が回った。目を開くと、一面が雪で真っ白だった。フィーネも、屋上も、街も。

「生まれ変わる時は、『雪の降るミルドの丘』を再会場所にしたいです」

「ああ、そうしよう。二人共、決して忘れてはいけない『永遠の約束』だ」

私はそう言って、強く頷いた。この約束を果たす前に、二人で何度も丘に訪れよう。記憶に、心に、魂に刻む為に。

彼女の手を引く。神殿の寝室に戻る為に。だが、彼女は動こうとしない。

「ルナさん……。一つお願いがあるんです」

彼女の顔が紅い。薄明かりの中でもはっきりと解る程に。

「フィーネのお願いなら、聞かない訳にはいかないな」

私の耳元に、彼女が口を近付ける。そして、途切れ途切れに言葉を発する。

「……あの、一緒に……。居たいんです」

「私は、ずっとフィーネと一緒に居るつもりだよ」

だが、彼女は首を振った。何を言いたいのか解らない。

「……朝まで、二人で」

ようやく解った。彼女の口からそんな事を言わせるとは……

もう、戦いが終わるまで待つ事など出来ない。

「フィーネ、今日は二人だけで一緒に眠ろう」

彼女は更に顔を紅潮させて頷く。幸福に満ちた、不安など一片も無い笑顔。私も全身が燃えるように熱い。

私達は雪の中、神殿を抜け出して、街の宿まで走る。手を繋いで、息を切らせて。

私の胸に頭を預け、規則正しく寝息を立てるフィーネ。その律動は彼女が生きてくれている証。それを実感出来る他に、私は何も望まない。

魂が触れ合える「瞬間」を、大切にしていきたい。「永遠」は「瞬間」の積み重ね。私達は「永遠」を誓った。恐ろしい「死」さえも、私達を引き裂く事は出来ない。

二人が眠る宿の前に、一枚の純白の羽がひらひらと舞い落ちる。その羽は何かを予兆させるかのように雪に突き刺さり、やがて降雪に埋もれた。

### 第三十二節 残夢

温かい、あなたの腕、胸。あなたはまだ眠っている。一定のリズムで呼吸して、その度にあなたの胸が上下する。私の頭もそれに合わせて動く。同じ時間を共有している、そう考えると嬉しくて仕方無い。もしこれが夢なら、見果てぬ夢であって欲しい。

私はルナさんと、どんな家庭を築くのだろう？ 子供は二人欲しいな。私は一人っ子だったから。暮らすのはミルドかな？ ルナさんと一緒なら何処でも構わないけど。

ルナさん、私にはもう何の不安ありません。あなたが全部、取り去ってくれたから。カーテンの隙間から、真っ白な光が射し込んで来る。今、何時だろう？

「フィーネ……」

ルナさんが目を覚ました。起きて直ぐに、彼は私をゆっくりと抱き締めてくれる。

「ルナさんっ、おはようございます！」

「おはよう、フィーネ」

彼の顔が目の前にある。私達は、目を閉じキスをした。

暫くして、ルナさんが懐中時計を取り出した。それを見た途端、彼は立ち上がる。

「フィーネ、もう正午を回ってる！」

私も立ち上がり、急いで帰り支度をする。そして、宿を飛び出した。リバレスさん達、心配してるだろう。

「うわあ……、一面真っ白ですね」

唯でさえ白亜が眩しい街なのに、今は何もかもが真っ白だ。家も、地面も、街灯も。ルナさんが、眩しさに目を細める。私は彼の手を握った。温かい、最愛のあなたの手。

「ルナさん」

「ん、フィーネ、どうしたんだ？」

ルナさんが白い息を吐きながら、私の顔を見詰める。

「……昨日の事、私は一生忘れません。ううん、何度生まれ変わっても絶対に。もう何も怖くありません。死ぬ事さえも」

「ああ、私も絶対に忘れない。これからも、ずっと仲良くやっついていこうな」

ルナさんは、笑って私の体を抱えた。足が宙を舞う。恥ずかしい、けど……

「ルナさん、大好きです！」

「私もフィーネが大好きだよ。よし、このまま神殿まで走るか！」

ええっ、このまま走るんですか！ ルナさんの馬鹿。でも、このまま二人で走って行きたいです。ずっと、永遠に。

### 第三十三節 欠片

神殿へ帰り着いたルナとフィーネは、待ち構えるハルメスとリバレスに叱責された。ルナとフィーネは何度も謝り、連絡も無しに姿を消すような事はしないと誓った。

大広間の隣室の食堂で、遅い昼食を四人で囲む。今後について話し合う為だ。ハルメスが、世界地図を広げてテーブルから最も近い壁に貼り付ける。

「食事も済んだようだし、そろそろ始めよう」

兄さんの目が鋭くなる。私は地図を注視し、身構えた。

「此処を見て欲しい」

兄さんが指差した先には赤い印が付けられている。フィグリルから南南西に百km地点。海上に浮かぶ小島だ。四方が切り立った崖の島。

「この島には、『輝水晶の遺跡』がある。二ヶ月程前に、俺の部下が発見した遺跡だ。部下は、遺跡に落ちていた銘板の破片を持ち帰った。其処には何が書かれていたと思う？」

彼の表情から意図を読み取るのは困難だ。笑っているようにも、深刻そうにも見える。私は首を振った。だが、リバレスが口を開く。

「グッドニュースですよねー？」

「その通り。リウォルタワーの古代文字よりも古い文字で、『冥界の塔』、『封印』と書かれてあったからだ。冥界の塔は『死者の口』を意味する。もしこれを封印出来れば……」

「魔物の侵攻が止まるんですよね！」

フィーネが身を乗り出して声を上げた。兄さんは大きく頷く。輝水晶の遺跡には、「冥界の塔」と「封印」に関する情報がある。もしかしたら、その手段があるかも知れない。ならば取るべき方法の一つだ。

「行きましよう、その可能性があるなら」

「お前ならそう言うと思ってたぜ。本来なら、俺が遺跡の細部まで調べるべきだが、俺はこの街から長時間離れる訳にはいかない。結界が消えるからな。この街の外には、数千の魔が息を潜めている。だから、俺は『転送』でお前達を島まで送らせて貰うぜ」

苦い顔をするハルメス兄さん。本当は自力で調べたかった筈だ。だが、兄さんは私に全てを任せようとしている。期待に応えなければ。

「解りました。しっかり調査して来ます」

「済まないが頼む」

私と兄さんは拳を突き合わせる。そして、兄さんから「転送の聖石」を貰った。これは転送の神術が込められた石で、私達が遺跡から帰還するのに使う。

「そうそうルナ、調査が一段落したら帰って来るようにな。今晚はご馳走だ」

兄さんとリバレスが微笑んでいる。どうしたのだろうか？

「ルナー、今日は何の日？ 十二月二十四日よ」

「私の、否、私とハルメスさんの誕生日か！」

私と兄さんの誕生日は偶然同じだ。それにしても、兄さんと私は共通点が多い。

「えっ！ ルナさん、言ったださいよお。私、何の準備もしてないです」

フィーネが私の服の裾を引っ張る。人間界に来て自分の誕生日などすっかり忘れていた。四人で笑い始めたその時、隣室から「ピアノの音」が聴こえて来た。完璧な音程と、悲しみに満ちた旋律。そして、狂気が滲んだ鍵盤を強打する音が。

### 第三十四節 憎嫉ぞうしつ

彼女は、ルナが墮天してから一週間、失意に沈んでいた。彼の不在がどれほど苦しみに満ちているか、彼女はそれを実感せざるを得なかった。ESGも喉を通らず、水のみを摂取して生活した。だが水は、摂取した分だけ涙に変わる。彼女は決心した。

彼女は封印の間に赴き、神に懇願する。ルナが無事で居るかどうかの確認と、人間達の視察を行ないたい。神はルナの無事を知っていたが、ジュディアが人間界を視察するのは、天界の将来にとって有益だと判断し、彼女を派遣する事にした。

そして彼女は、十二月二十日に人間界に降り立つ。母に、「神術を強化する杖」を借りて。

彼女はルナと違い、力は抑制されていない。寧ろ杖によって強化されている。

ルナを探すのは簡単だった。神術で、天使の指輪の場所を追跡するだけだからだ。そし

て彼女は目撃する。彼女にとって、最悪の光景を。

「ああ……、ルナ。約束したのに」

隣の部屋から、ルナ達の声が聞こえる。私はルナにピアノを聴かせよう。そうすれば、私の想いに応えてくれるかも知れない。

彼女は大広間のピアノ椅子に座る。彼女は、自分の行く手を阻む人間全てを氷付けにした。ピアノの両脇にも、「氷の彫像」が佇んでいる。

彼女は鍵盤を叩いた。強く、強く。爪が割れ、真紅の血が鍵盤に滴り落ちる。それでも彼女は弾くのを止めない。

「まだ、貴方が人間界に堕ちて十八日。私は、貴方を千百二年も想い続けたのに」  
赤い鍵盤の上を滑らかに、彼女の指が滑る。非の打ち所の無い指の運び。

「……どうして、あんな小娘がいいの？ こんなに完璧な私が居るのに」  
あの女の顔を思い浮かべると、この身が引き裂かれそう！

「あ……、そうか。貴方は正直で優しいから、騙されてるのね。可哀相に。早く目覚めさせてあげないと」

曲が最高潮に達する。その時、背後でドアが開く音がした。ああ、愛しい人が来たのね。

「ジュディアア！」

相変わらずの美形。私の脳裏に刻まれたその声。貴方は誰にも渡さない。

「久し振りね、ルナ。そして、堕天使ハルメス」

「一体何のつもりだ？」

私が凍らせた人間を見て、ハルメスが近付いて来る。彼の力は私より遥かに上、本気を  
出されると「予定」が狂ってしまう。

「あなたに用は無い、どきなさい！」

高等神術「拘束」で彼の動きを一時的に止める。私は、足早にルナに近付いた。

「ジュディアア、争いはダメよ！」

「リバレス、ルナの『愚行』を見過ごしたあなたも同罪ね」

私はリバレスを「衝撃」の神術で弾き飛ばす。

「ルナ、貴方は可哀想。こんな、人間の女に毒されて」

私は杖を人間の女に向ける。「予定」を無視して、さっさと殺したくなってきた。

「待て、フィーネに手を出すな！」

ルナが……、ルナが私を睨みながら剣を向ける。どうして？

「其処まで……、貴方の心は蝕まれているのね。早急に呪縛を解かないと」

私はルナも「拘束」し、おぞましい人間の女に近付く。

「ルナさん、ルナさんっ！」

「フィーネ……、逃げろ」

「嫌です！ ルナさんを置いてなんて行けませんよ」

女はうずくまるルナに抱き付く。やはりこの女は、「予定」通り始末しよう。私は女をルナから引き剥がし、片手で首を掴んだ。

「ジュディア……。殺すなら、私を殺せ」

もう直ぐ貴方を、奈落から救い出すから安心してね。

「ルナ……、私は貴方を愛し続けて来た。それは、今もこれからも変わらないわ。あなたが望めば、私の美しい顔も、体も、心も貴方の物になるのよ。それなのに、寄り道なんてして……。でもいいわ。貴方に教えてあげる。下等な人間に情を持ち、救おうとする愚行の代償の重さを。『輝水晶の遺跡』で待っているわ」

私は手に力を込め、女を失神させる。そして、翼を広げて女を抱え、この場を去った。もう直ぐ、貴方は私の元に戻って来るわ。

### 第三十五節 無音の狂奏曲

ジュディアがフィーネを連れ去った数分後、ルナ達は動けるようになった。ハルメスは即座にルナとリバレスと共に、遺跡のある島へ「転送」で移動した。だがハルメスは、長時間フィグルルを離れる事は出来ない。

「ルナ、俺はフィグルルに戻るが、お前は必ずフィーネさんを連れて帰って来いよ」

「はい、勿論です！ リバレス、行くぞ」

「了解！」

ルナがリバレスを肩に乗せ、遺跡の入り口へ駆け出す。

「ルナ！ 愛する人を失う事は、自分が死ぬより辛い。今のジュディアの力を侮るな」

兄さんの真剣な声。重みのある言葉だ。私は振り向き、強く頷いた。今フィーネを失うなんて、私には考えられない！

遺跡は間違い無く天界の古代建築で、大理石で構成されているが、途方も無い年月の経過により表面が風化している。地上から見ると普通の家屋程の小さな遺跡だが、入り口をくぐると長い階段が地下に伸びている。地下には広大な空間があるらしい。遺跡内に明かりは無く、足元は愚か目の前の壁すらも見えない。ルナは、神術で炎を作り前方を照らしながら歩く事にした。

無音の遺跡。聞こえるのは自分の足音とリバレスの息遣いだけだ。何て長い階段、まるで地の底に向かっていようだ。私は、躓かないギリギリの速度で階段を駆け下りる。

「あっ、あれは何なのー？」

階段が途切れ、地下一階と思しき部屋に到着した時だった。部屋の中央が赤色に光っている。私達がそれに近付くと、その光は強さを増した。

「赤い輝水晶で造られた壇だな」

「壇の正面に、何か文字が書いてあるわよー」

リバレスが指差す先を見る。兄さんの言う通り、リウォルタワーより古い文字。天界で古代語辞典を暗記した私でも、完全には読み解けない。今はフィーネを捜す為一秒でも惜しいが、読んでおいた方が良いでしょうがした。

「この遺跡……、始まりは中界と共に」

まさか！ この遺跡は二十億年前から存在すると言うのか。そんな時が経過しているなら、遺跡は崩れ去る筈だ。否、壁や床をよく見ると、表面が神術で保護されているのが解る。仮に二十億年間この遺跡が維持されて来たなら、此処は天界にとって非常に重要な場所なのだろう。

「随分古いのねー。急がないといけないけど、この先にも壇があるなら見た方がいいかも」  
リバレスも私と同じ事を考えている。私は頷き、更に下層へ続く階段を駆け下りる。

「フィーネ、無事で居てくれ！」

私は祈るように声を上げた。遺跡内に不安げな自分の声が反響する。

地下二階、其処にはさっきと同様、中央に輝水晶の壇がある。だが色は「橙色」だ。それにしても、これ程輝水晶を多用するのはどう言う事だろう。輝水晶は天界でも非常に貴重な石だ。なのに、この遺跡には巨大な輝水晶が幾つも安置されている。恐らく……、その答えは壇に刻まれているだろう。私は、壇の正面に立つ。

「この遺跡は……、冥界……、封印」

ハルメスさんの元に届いた銘板の破片に類似した内容。その文句と古代文字を完全に記憶し、私達は更に下層へと下りる。

「キヤーー！」

地下三階に先に着いたリバレスが叫ぶ。私は、階段を十段一気に飛び降りた。

「死骸か！ 低級魔らしき者が二十体」

黄色の輝水晶の壇を囲むように、氷付けの魔。これが意味する事は……

「ジュディアが殺したのねー……」

間違い無い。部屋には傷付けず、魔のみを殺す完全な神術。ジュディアは此処を通り、下層へ向かったのだ。私は壇にさっと目を通す。

「機構は……、最深度……、エネルギー」

意味が解らない。だがこの先には、少なくとも四つの壇がある筈だ。今まで目にした赤、橙、黄、これは虹色の並び。先の壇を読めば何か解るかも知れない。

地下四階は、案の定緑色の壇だった。

「エネルギー……、源」

それしか解読出来ない。私達は更に地下へ下る。既に、地下百mは越えただろう。地下五階の青の輝水晶には、こう書かれていた。

「起動は……、一万の……、人間」

この遺跡には、冥界の塔に関連した何らかの機構がある。私はそう確信した。それには、エネルギーが必要であり、人間も関係する。

地下六階は藍色の壇。次の階層が最後……

「虹の祭壇……、捧げよ」

捧げる？ 私の額に冷や汗が流れる。冷涼な遺跡の温度が更に下降した気がした。もしジュディアが、この遺跡の「意味」を予め知っていたとしたら。

私は剣を抜き、ゆっくりと階段を下る。だが地下七階にも人影は無かった。それどころか、この部屋から地下へ下りる階段も無い。見回しても壇と壁だけだ。

「ジュディア、居ないわねー」

念の為、部屋の天井付近を探索したりバレスが肩の上に戻って来る。私は、取り敢えず壇の文字を読む事にした。

「生け贄は……魂！」

フィーネの身が危ない！ 私が紫の壇を叩くと、壇はゆっくりと右にスライドした。隠し階段か。下を覗き込んだその時、階下から声が響く。

「ルナさあん……！！」

一番大切な人の声、無事なようだ。私は剣に精神力を込め、最後の階段を駆け下りた。

七色に輝く虹の輝水晶で造られた壇、その上にフィーネは仰向けに拘束されていた。彼女が動かせるのは、頭から上だけだ。フィーネと私の間にはジュディアが立ち塞がる。

「フィーネ！」

彼女の瞳がこちらを見詰める。その双眸に宿るのは恐怖。一体どんな目に遭ったんだ？

「ルナさん……、危険だから逃げて！」

私は彼女に近づく為、一步踏み出す。だが直ぐにジュディアがそれを制する。

「ルナにしては随分遅かったわね。でもいいわ。お陰で準備は整ったから」

優越感に満ちた冷笑。私は怒りの余り、剣を彼女の首元に突き付けた。

「準備などどうでもいい。フィーネを解放しろ！」

「ふう……、そんなに焦らないですよ。私は、あなたに協力しようとしてるだけなのに」

「協力って何よー？」

リバレスの言葉で、彼女の顔に更なる冷酷さが滲み出す。何を考えている？

「そう、協力よ。知ってる？ この遺跡の意味を」

「……この遺跡には、冥界の塔を封じる機構が備わっている？」

「フフ、この遺跡自体が『機構』なのよ。それで、そのエネルギー源は何なのか解る？」

彼女の口元が綻ぶ。場に不釣り合いな、満面の笑顔。気味が悪い……

「まさか……、本当に『人間の魂』なのか！」

「その通り！ この遺跡、即ち封印機構を作動させるには、一万分人の魂が必要な」

ジュディアが杖を掲げる。私は更に剣に力を込めた。彼女の首から一筋の血が流れる。

「お前はフィーネを生け贄にするつもりか！」

体の奥底から力が溢れてくる。前髪が銀色に変わった。

「ルナ、話は最後まで聞く物よ」

彼女の杖が光る！ その瞬間、私の体は動かなくなった。力の増幅まで停止している。

「究極神術『不動』を貴方にかけてたわ。貴方は、指先を一mm動かす事も出来ない。同時に体の変化も停止させた。今の私じゃ、それ以上力の増えたルナは相手に出来ないから。でも安心してね、口だけは動かせるようにしたから」

「ふざけるのはいい加減にしる……」

「まあ、結論から言えばこの娘は名譽ある『生け贄第一号』って事になるわね。最近、魔の進行が激しいのは貴方もよく知っているでしょう？ このまま行けば、天界まで侵略される恐れもあるの。だから私は『仕方無く』人間を殺す事にした。貴方を惑わすこの女が消えて、貴方は魔と戦う必要が無くなる。一石二鳥じゃない」

人間の、フィーネの命などこいつは何とも思っていない。早く動け、私の体よ！

「人間の命の重みは天使と同じだ。それにお前がフィーネを殺したら、私がお前を殺す」

「私を殺す？ とうとうそんな世迷言を！ 貴方は最高の天使なのにも関わらず、下等な人間に情を抱いた。許せない！ どうしてこの女に拘るの？ 私が居るのに。何故、下らない人間の為に命を懸けるの？ 人間なんて、天界の塵に過ぎないのに！」

感情を剥き出しにして、私の服を掴むジュディア。彼女の目からは涙が零れ落ちている。

「お前の高慢な心では、生涯理解出来はしないさ……」

私は呼吸するのも苦しいが、そう言い放った。彼女は顔を蒼白にして、一步後退る。

「ジュディアー！ もう止めて」

『蝶』は黙りなさい……」

頼みの綱のリバレスまで地に落ちる。どうしても……、この体が動かない！

「もう直ぐ、貴方を呪縛から解放してあげるわ。私が人間を一人殺せば、貴方は私の元に戻って来る。そうよね？ フフ……。そろそろ終わりよ、汚らしい女」

ジュディアは本気だ。彼女の杖に途轍もない力が集約されている。これは「魂碎断」！ 「待ってくれ！ 殺すなら私を殺せ。フィーネは助けてやってくれ！」

有りつ丈の声で彼女に訴える。だが彼女は、自分の妄想に囚われ聞く耳を持たない。

「……いいんですよ、ルナさん。私が悪かったんです。天使のあなたに、無理なお願いは  
つかりして……。さあジュディアさん、私を殺して下さい。それで、ルナさんを許してあ  
げて下さい！」

フィーネが涙を流しながら私に微笑む。最後まで、私の前では笑顔で居たい、そんな想  
いが彼女から伝わって来る。私の目からも涙が止め処なく溢れ出した。

「人間如きが気安く名前を呼ぶんじゃないわよ！ ルナ、貴方は馬鹿だわ。人間の女なん  
かに想いを寄せるなんて。私はずっと、ずっと……。あなたの事を愛していたのに、受け  
入れてくれなかった」

「……お前には悪いが、私はフィーネを愛してる。これからは私の事など相手にしなくて  
いい、忘れてくれてもいい！ だから、もう邪魔しないでくれ！」

ジュディアの杖から、「魂砕断」の力が失われる。解ってくれたのか？

「決めた……。この娘を殺すのは止めにする」

「……本当か？」

彼女は頷き、高らかに笑い出す。そして、フィーネの方を向いた。

「**獄界に堕ちてしまえ**」

フィーネの魂を獄界へ送る気か！ 魂砕断よりも酷い。堕ちた魂は、獄界で切り刻まれ、  
汚され、破壊されるんだぞ！ ジュディアが、漆黒の剣をフィーネの胸の上に呼び出す。

彼女は本気だ！

「殺すのよりも、ずっと酷いじゃないのー！」

「止めるおっ……！」

私達の声でジュディアは振り向いた。其処には形容し難い、**狂気・の・滲んだ・笑顔**

「**禁断神術『墮獄』！**」

禁じられし神術の刃が、フィーネの胸を貫く！

「ルナさあ……んん！」

私は目を閉じる事も出来ず、唯、肉体から魂を剥ぎ取る刃が、最愛の人に突き立てられ  
るのを見るしか無かった。心が音も無く崩れ……。狂奏曲を奏で始める。

「いい気味ね。これで正気に戻ったでしょ。ルナ？」

「……ジュディア、貴様に解るか？ 私の心が！」

私が壊れ、再び「私」が私を支配し始める。呼吸が際限無く早まる。

「さあ……。解らないわね」

愛情、憎悪、喜悅、悲嘆、希望、絶望……。あらゆる感情が瀑布となり、心の中で荒れ  
狂っている。体が熱い、心が熱い。燃えてしまう……！

ルナの体に異変が生じた。髪は銀色、目は真紅、背には光の翼。彼は目を見開き、ジュディアの神術を解除して歩き始める。部屋の温度が急激に上がり、暴風が吹き荒れる。

「な……、何なの？」

ジュディアが震えながら杖をルナに向ける。だが彼は、動く事も無く瞬時に杖を折った。「其処をどけ」

「嫌よ！」

ジュディアは両手を広げ、ルナの歩みを止めようと試みる。ルナはジュディアを睨んだ。「それならば死ぬがいい。私は全てを超越する者、『エファロード』。私の邪魔をする者は、全て滅ぼし尽くす！」

制御出来ない「私」が喋る。だが構わない、フィーネを救う為なら！

「ルナー……。何て怒り、憎しみなの。此処に居るだけで焼き尽くされそう」

リバレスの心の声が届く。どうやら今の「私」は、他人の意識を読む力もあるらしい。

「私は本気よ！ 絶対に行かせない」

「愚かな。力の差も見抜けぬ下衆め、覚悟するがいい」

ジュディアが様々な神術で私に攻撃する。だがそれらは、全て私に届く前に消えた。

「これは、エファロードのみが使える神術だ。『滅 (ruin) 』……」

目の前に、直径三m程の『無』の空間が現れる。凄まじい力、この『無』は触れたもの全てを飲み込み消滅させるだろう。後には、破片は愚か空気すら残らない。

放たれた無はジュディアの右肩と翼を抉り取った。それでも無は消えず、神術で保護された壁に穴を開け遙か彼方まで進んだ後消えた。

「クッ……、絶対に後悔する事になるわよ。どうせ、二百年後には……」

ジュディアは血塗れの肩を押さえながらそう言い残し、「転送」で消えた。

意識が、「私」から私に戻ってくる。

「フィーネ！」

私は、血を吐き目を閉じているフィーネの手を取った。

### 第三十六節 The last smile

「……ルナ、さん」

私の呼び掛けに、フィーネは弱々しい声を返した。良かった、まだ生きてる！

「フィーネ、直ぐ治してやるからな！」

私は精神を集中し、「蘇生」と「治癒」の神術を同時に発動させた。だが……

「ルナさん……、ダメですよ」

今の私の力を以ってしても、「墮獄」を消す事は出来ない……！ 彼女の体が冷たい。まるで、氷で出来た人形のように。

「フィーネ、フィーネ！ お願いだ、戻って来てくれ！」

「もう……、今の私には、多分、何も効果が無いです。……目の前が真っ暗で、触覚も消えました。唯……、ルナさん、あなたの声だけが聞こえます」

彼女の目は中空を眺め、焦点が合っていない。フィーネは本当に私の姿すら見えていないのだ。自分の目から、熱いものが際限無く溢れる。

「嘘だ、嘘だあ……！ 私にはフィーネさえ居ればいい！ 私は解ったんだ。天界も、人間界も、天使も何も必要無い。唯、君だけが私には必要なんだよ！ ずっと……、一緒に生きて行こうって約束したじゃないか。お願いだ、いつものように微笑んでくれよ！」

私は彼女の体を抱き起こし、強く抱き締める。しかし彼女の体は反応を示さない。

「ふふ……、ルナさん、笑って下さいよ。私は……、あなたが笑ってくれる時の、優しい目が大好きなんです。あの日……、初めてルナさんと出会った時から、私は助けられっぱなしでしたね。ルナさんは、とても……、とても優しくかった」

彼女の表情がゆっくりと微笑みに変わる。目を閉じ、口元を綻ばせて。こんな時にまで、君は私に微笑むと言うのか？

「私は、ルナさんから沢山の事を貰いました。あなたと居た時間……、幸せだった。だから、私の人生は決して不幸じゃ無い。短くても……、大好きなルナさんと愛し合えたから」  
今にも消えそうな声、彼女の体温は更に下がり、呼吸までもが止まりそうだ……

「救われたのも、沢山の事を貰ったのも私の方だ！ フィーネが、私の心を温めてくれたんだよ。一生懸命生きる事も、人を愛する喜びも、全部君が教えてくれた。君が居たから、私の人生は光に溢れたんだ！ なのに、なのに……」

「ルナさん……、あなたは優しいから、私の為に涙を流してくれてるんですね。私も……、あなたと過ごした事、思い出すと、涙が溢れます。もっと、一緒に生きられたら……、今まで以上の幸せがあったんじゃないかって。戦いが終わり、一緒に暮らして、ルナさんの子供を生んで……。でも……、それは叶わない、贅沢過ぎる夢」

彼女の手が、私の顔を探して宙を彷徨う。私は彼女の手を握って自分の頬に導いた。

「私はもう……、死にます。それが解るから……」

「フィーネ、嫌だ！ フィーネー！」

目の前が滲んで、彼女の顔を直視出来ない。彼女の涙が私の手の甲に落ちる……

「私が悲しんだら……、いつもルナさんが、慰めてくれましたね。今度は、私の番ですよ。雪の降る昨日の夜、私達の最初の夜、約束したじゃないですか。『永遠』を。例え、何があっても、『死』が訪れても、私とルナさんは離れないって。私が死んでも……、あなたは悲しまなくていいんです。あなたは、私の『魂』を見付けられます。どれだけ、遠く離れたとしても……、絶対に」

そうだ……、その通りだ。死の間際に居る彼女の前で、私がこんなに気弱でどうする？  
「フィーネ……、君の言う通りだ。例え君の体が消えても、私は百年でも千年でも君の魂を捜し続けて、再び君を抱き締める。だから……、安心してくれ」

「やっぱり私は……、ルナさんが大好きです。でも……、暫くのお別れですね。あなたが迎えに来てくれる日まで、私は……、あなたを愛し続けて待っています。私の、ルナさんへの想いは永遠に。あなたに出会えて、本当に良かった……」

フィーネは死ぬ。今の彼女の温もりを感じる事も、声を聞く事も、もう出来ない！

彼女の魂を見付け出しても、二人で過ごした記憶は消えるだろう。楽しかった事も、悲しかった事も、愛し合った日々も。それでも私は彼女を捜し出す。私達の心は永遠だから。

「フィーネ、君は私に本当の『心』をくれたんだ。『心』は温かくて、どんな苦しみや悲しみも包み込んでくれる。『心』は溢れ出して、優しさや強さ、愛に変わるんだ。私も君を誰より愛してる。私達は『永遠の心』を信じているから、何度生まれ変わっても心を失いはしない。私は『永遠の心』を持って、何処に居ても必ず君を迎えに行く。だから……」

「何も心配せず、いつも眠るように……、おやすみ」

私は、目を閉じ彼女の唇にキスをした。その冷たさを感じ、涙が止まらない。苦しくて、不安で堪らないが、私はフィーネを笑って送りたい。胸が張り裂けそうで、体が震える。だが、私はそれを抑えて彼女に微笑む。

「ルナさん……、ありがとうございます。私も『永遠の心』を持って、あなたを待っています。あなたと過ごした日々、愛する心も全部永遠に……、忘れない。でも……、寂しいから、早く迎えに来て下さいね。もし……、私が『心』を失いそうになったら、『約束の場所』へ連れて行って……、下さい。行きたかった、あの場所へ。そろそろ……、時間、みたい、ですね。音も消え……、て……」

フィーネを流れる時が、止まろうとしている。何か言わなければいけないのに、言葉にならない！

失われる。彼女の靦<sup>こ</sup>さを秘めた純粋な目も、可愛い顔も、そして最後の微笑みも。

「おやすみなさい……。ルナさん、大好き……」

それが、最愛の人から零れた、最後の言葉だった。

「フィーネ……!!」

私は声が枯れても叫び続ける。もう、動かない彼女の体を抱き締めながら……  
フィーネは命を失って尚、微笑みを浮かべていた。

### 第三十七節 光芒

永遠を信じていても、目の前にある離別の痛みが心を抉る。昨日まで温かった私の心は、冷たく閉ざされてしまった。この痛みをどうすればいい？ 君を捜す、その前にあるこの痛みを！ 意識が無秩序に混濁こんだくしていく。もう、何も考えられない……

どれだけの時間が流れただろう。一時間、一日、一週間？ 時間の感覚が無い。

私の中にあるのは混沌と悲しみだけだ。そして、目の前には愛する人。目覚める事の無い、最愛の人……。このまま、私も消えてしまいたい。

「……ルナー！ しつかりしてよ！」

聞き覚えのある声が、意識の外側から聴こえる。「バシッ！」という音が鳴った。どうやら私は頬を叩かれたらしい。

「……リバレスか」

「悲しいのはよく解る。けど……、いつまでも此処に居たって始まらないわ」

彼女の小さな目が腫れている。酷い顔、泣いていたのだろう。

「そう……だな。『あれから』どれぐらい時が流れたんだ？」

「三日よ」

そうか、三日。フィーネを喪って……

「フィーネ！」

彼女は、死んだ時と全く同じまま私に微笑みかけている。また涙が溢れてきた。彼女は外気と同じ温度だ。限り無く氷点下に近い……

「ルナ、しつかりしてよー！」

このままではいけない。私は、フィーネの亡骸を抱える。

遺跡の階段を上り、外に出た。外は一面に雪が積もり真っ白だ。君の好きだった雪。私はフィーネを抱え、島の西端の切り立った崖に辿り着いた。彼女を埋葬する為に……

此処から遙か西にはミルドがある。今、ミルドの方角に日が沈もうとしている。

私は剣と神術で地面に穴を開ける。土が穴の脇に堆つたかく積まれていくにつれて、私に背負われているフィーネにも雪が積もる。その度に私は彼女の雪を掃った。

フィーネ、此処ならミルドが見える。君が育ち、私達が育ったミルドが。

私は、彼女の体をゆっくりと穴の底に横たえる。そして、魔に触れられないように境界を張った。後は、掘った土をかけるだけ……

何故、愛する人を窮屈な土に埋めなければならない？ そう思うと、私の手は止まった。代わりに涙が溢れ、体が震え出した。そして私は声を上げて泣き始める。

土をかけなくても、フィーネの体はどんどん雪で覆われていく。しかし彼女の顔は安ら

かだ。苦痛や不安など微塵も感じさせない表情。私はやつぱり弱い……

「フィーネは、きつと最後までルナを信じてたのよー。それで、今も何処かでルナが来るのを待ってる……」

お前はいつも私の事を理解し、私の希望を先読みするんだな。

「そうだな……、『永遠の心』を持ったフィーネの魂が消える筈が無い」

私はフィーネに土を被せ始めた。だが彼女の声が、温もりが蘇り手が進まない！

「ルナー……、ごめんね」

リバレスの手が光る。私に神術を使っているのだ。何だ？ 酷く……、眠い。これは、中級神術「催眠」。そうか、お前は私を苦しめない為に……。済まないな。

私は夢を見た。フィーネと出会い、過ごしてきた楽しい日々の夢を。ミルドの丘で旅立ちを決意した事、レニーでの祝宴、ルトネックからの漂流、リウォルでお互いの気持ちを確かめ合った事、そして永遠を誓ったフィグリルでの夜。

だが夢は悪夢に変わる。フィーネがジュディアによって、獄界に墮とされたのだ。

真つ暗だ。夢は終わったのに何も見えない。この闇も夢なのだろうか？

君は死んだ。私と関わったばかりに。私の非力さ故に！ それでも君は、幸せだと言ってくれた。最後まで私に微笑んでくれた。

いつまで私は悲しみに暮れている？ フィーネに約束したじゃないか。迎えに行くと。

彼女が普通に生を全うしたなら、彼女は人間界に転生していただろう。だが、彼女は獄界に墮ちた。このままでは人間界で彼女の転生を待ち、迎える事は不可能だ。だから私は、君が居る所へ迎えに行かなければならない。出来るだけ早く。

君を迎えに行けば、恐らく私は死ぬだろう。それでも私は構わない。心が冷たくて痛くて……、どうしようも無いんだ。自分の死よりも、君の魂を「永遠」に失う事の方が辛い。だから私は行くよ。

**獄界へ、君の魂を取り戻しに。**

獄界で出会う者は全て敵。だけど私はもう決めた。このまま、君を思い出して生きる事など有り得ないから。

目に光が飛び込んで来る。ちっぽけな生命が何をしようと変わらない、不変の朝の光だ。

「半日以上眠ってたわよー」

リバレスが私よりも早く起きています。これで十回目か。私は、目の前に作られた「大理石の墓」を見て、「ありがとう、リバレス」と呟いた。彼女は「うん」と言い、頷く。

「これからどうするのー？」

彼女は私の肩に座った。伝えなければならぬ。私の覚悟を。

「……私は一人で獄界へ行く。獄界に乗り込んで、フィーネの魂を奪還するんだ」

「え、獄界！ 幾ら何でも危険過ぎるわ。『魔』の支配する世界よ。ルナが強いからって、絶対に殺されるわよー」

リバレスが、顔を真っ赤にして耳元で叫ぶ。当然の反応だ。獄界には、今まで戦ってきた魔よりも強大な者が幾らでも居る。神と並ぶ力を持つ「獄王」を筆頭に……。今の私の髪は銀色で、シェイドと戦った時と同等の力があるが、それでも命を捨てに行くようなものだ。光の翼も既に失われている。

「解ってる。でもな、フィーネは私を信じて死んだ。このまま人間界で過ごしているだけじゃ、彼女との約束は果たせない。それどころか、早く救いに行かないと彼女の魂は獄界で蹂躪されるだろう。そんな事は許せないし耐えられない！ 私の人生にはフィーネが必要だ。だから、命を賭して獄界へ行く」

リバレスが私の顔の正面に飛んで来た。私を睨みながら。

「それで奇跡が起きて、フィーネの魂を解放出来たとしても、転生したら記憶は失われる！ 永遠を心に刻んでいたって関係無い。それが現実なのよー！ 甘い幻想を見るのはいい加減にして」

幻想か、そうかも知れない。フィーネとの約束も甘い空言かも知れない。それでも私は、彼女の最後の言葉と微笑みを信じる。それにもし……

「記憶が無くなっても、フィーネはフィーネだ。例え、彼女が生まれ変わり私の事を何も憶えていなくても構わない。それが、私が彼女にしてあげられる唯一の事だから」

リバレスは何かを考えるように、目を瞑った。数秒後、何かを決意したように目を開く。

「じゃあ、わたしが『自分の意思で』獄界に行くのも勝手よねー？ わたしだって、フィーネを助けたい。それ以上にルナが心配なのよ」

「何でそうなるんだよ！ 獄界は危険だ。大人しく、人間界で待っていてくれ」

彼女は何の躊躇ためらいも無く首を振る。これじゃあ立場が逆だ。

「ルナー、勝手なのはお互い様よ。それに、何でも一人で出来ると思ったら大間違いよ。ね？ 早くフィーネを助けに行きましょうー！」

目頭が熱い。リバレスは元氣一杯に羽ばたいて、私の肩に乗った。

「……ありがとう。お前は、最高のパートナーだよ」

聖石を使って島から出る前に、私はフィーネの墓に触れる。自然と涙が零れた。だが、彼女を救うまではもう泣かないと誓う。

フィーネ、少しの間寂しいかも知れないけど、信じて待っていてくれ。リバレスも一緒に来てくれるから、必ず君を助けられる。次に会う時こそは、永遠の幸せを掴もうな。

ルナとリバレスは、島からフィグリルの神殿に戻った。日は完全に落ち、世界には夜の

帳とばりが下りている。雪の降る静かな夜。二人はハルメスに事の顛末てんまつを話した。流石に、獄界へ行く事までは話せなかったが。ハルメスはルナを抱き締めた後、ポツリと呟く。

「お前も……、エファロードだったんだな」

「兄さんは、エファロードを知っているんですか？ まさか、貴方もエファロード」

言われて見れば、確かにハルメスさんの髪は最初から銀色だ。

「否、俺はエファロードの責務を捨てた男だ。だから、エファロードを名乗れない」

遠い目、其処には微かに、懐かしさが含まれているような気がする。

「エファロードとは、何を指すのですか？」

「……いざれ解る。『第四段階』を制御出来るようになれば。それよりお前は、今からすべき事があるんじゃないのか？」

第四段階、私が「私」に操られる段階の事か。「私」を私が制御出来れば、解るのだろう。

今からすべき事、反対されるかも知れないが、話さなくては。

「私達は『獄界』に向かいます。フィーネの魂を救いに」

「……やはりか。俺がお前の立場なら、そうするだろうからな」

兄さんは私の肩を叩く。そして、昔の事を少し語ってくれた。かつて、恋人であるティファニーさんが健在だった頃の話だ。

兄さんは日々魔と戦っていたが、狡猾な魔がティファニーさんを人質に取った。兄さんは魔を撃破したが、彼女は瀕死の重傷を負った。其処で兄さんは、天使の指輪を外し彼女に与える。すると、指輪の力で彼女は蘇ったらしい。

指輪を外した天使は、天使では無くなる。だが、彼はそんな事はどうでも良かったのだ。

「人間界は俺が守るから、行ってこい。獄界に！」

兄さんの言葉で、勇気と力が溢れて来るのを感じる。貴方はやはり私の道標だ。

「はいっ！ 後、もう一つ訊いてもいいですか？」

ハルメス兄さんに、どうしても訊きたい事がある。否、正確には私を肯定して欲しい。

「構わないぜ。何でも訊いてくれ」

「ハルメスさんは、『永遠の心』は転生しても消えないと思えますか？」

束の間の沈黙。だが兄さんは力強く微笑む。

「ああ、勿論だ。現に、ティファニーの心は俺の中にある。信じていけば叶わない事など無いさ」

心が彼の中にある？ 意味深な発言だが、これ以上は別の機会に訊く事にしよう。兄さん、お陰で私の覚悟が強まりました。ありがとうございます。

私達は、兄さんに獄界への行き方を訊いた。獄界へは死者の口、即ち「冥界の塔」を下るしか無いらしい。人間界で見えている部分は、冥界の塔の屋上に当たる。塔は数千階建ての超高層建築で、獄界から上ってくる魔が充満している。話を聞いている間、身震いが

止まらなかった。

「明日、日の出と共に俺がお前達を塔まで送ってやるぜ。塔は、要塞のような島の中心にある。転送で島の上空に移動後、お前達を俺が降下させる」

塔に直接移動しないのは、移動直後魔の大群に囲まれる可能性があるからだ。だがどうやって降下させるんだ？ 私達が首を傾げていると、兄さんは目を閉じた。数秒後、目を開けると瞳は真紅に変わっていた。そして、背中には光の翼！

「ルナとそっくりじゃないのー！」

兄さんも『エフアロード』なのだ。彼の姿を見て、私は素直にそう思えた。

「ルナ、リバレス君。今日はゆっくり休むんだぞ。明日からの重労働に備えてな！」

元の姿に戻ったハルメスさんが微笑む。人間界で過ごす夜は暫く訪れない。焦る気持ちはあるが、今日はゆっくり休もう。

「はい、ハルメスさん。ありがとうございます！」

私とハルメスさんはハイタッチを交わした。其処にリバレスも加わる。その後、三人で夕食を摂った。穏やかに夜が更けていく……

部屋は暖炉の火で暖かく、窓は真っ白に曇っている。それを指で擦ると、煌く空の月が現れた。少し窓を開けると、冷たく澄んだ空気が流れ込んで来る。

君は今何処で、何を見ているんだろう？ 今は同じ景色を見る事は出来ないけど、必ず一緒にミルドの丘に行こうな。

私は窓際を離れ、ぐっすり眠っているリバレスの頭を指でそつと撫でる。

「リバレス、ありがとう。明日からもっと辛いけど、私はお前を守るから、お前も私を助けてくれよ。頼りにしてる」

リバレスは何だか嬉しそうに寝返りを打つ。こんなに小さいのに、大きな存在だ。

私は静かに部屋を出た。どうしても、フィーネと永遠を誓った屋上を目に焼き付けておきたかったからだ。屋上への扉を開く。直ぐに凍て付く風が私を通り抜けた。

雪を踏み締め、私は目を閉じる。君の事を、思い浮かべながら。

### 第三十八節 薄明

まだ日も昇らない早朝、三人は神殿の屋上に集まった。リバレスはルナの指輪に変化し、ハルメスは光の翼を広げる。

「ルナ、出発する前に一つ伝えておく事がある」

真剣な表情。ルナは咄嗟に身構える。

「……はい、何ですか？」

「天使の指輪についてだ。天使の指輪は、天使である証であると同時に、持つ者に対して

力を与えている。だから、もし人間が天使の指輪を付けると、天使と同等の力を得られる。だがそれは一般の天使や人間の話で、俺達二人は例外だ。俺達は生まれた時から天使以上の力を持っている。そんな俺達が、指輪を付けるとどうなるか？ 指輪に力を奪われるんだ。天使の指輪は、持つ者の力を一定範囲で制御する機構を備えている」

知らなかった。私は、彼の目を見据えて続きを待つ。

「俺が何を言いたいのか、もう解つただろう？ お前がフィーネさんとリバレス君を守る最後の手段、それは指輪を棄てる事だ。『天界を捨てる覚悟』があるなら、お前は制御されないエファアロードの力を發揮出来るだろう」

「解りました。もし私が、指輪を棄てるような事があれば、その時は……」

「俺と共に、人間界に定住だな。だがそれは最後の手段。そろそろ出発だ！」

兄さんはそう言つて、神術で私の体を浮かべた。この中で私だけが飛べないからだ。

「準備はオッケーです！」

リバレスの掛け声で、私達は天高く舞い上がった。神殿や街は遥か下。彼方に見える山々の間から朝陽が顔を出す。その光は山々を、街を、やがては海を黄金色に染め上げた。

真冬の上空は私達でも寒い。だが、君はもつと寒い所で一人ぼっちだ。直ぐに行くから、待つてるんだぞ。

雲の上まで昇り切つた所で、兄さんは「転送」を使つた。景色が高速で移り変わる。そして、目的地上空に到達した。

島の周囲は、数千m級の高山に囲まれている。高山の頂は槍いばきのようで、来る者を阻んでるようにしか見えない。この山は魔によつて造られたのかも知れない。島の大地は、日が射しているにも関わらず真っ黒だ。否、「暗黒」と言つた方が正しい。そんな大地には無論、如何なる植物も生えていない。

ハルメスさんは、私を片手で抱える。私は剣を抜き、頷いた。

「兄さん、準備完了です。リバレス、行くぞ！」

「了解！」

兄さんとリバレスの声が重なる。その直後、兄さんは急降下を始めた！ 出来るだけ魔に見付からず、しかも短時間で攻め入るにはこの方法しか無い。

風を切り裂く音で、地上に居る数体の魔がこちらを見た。だがもう遅い！

地上五十mの時点で私は兄さんから飛び降り、炎の神術を發動させる！ その神術に兄さんが雷の神術を上乗せする。取り敢えず、地上の魔は一掃した。

「必ず、『三人共』無事で戻つてこいよ！」

兄さんの声が「転送」で届く。私は着地して剣を持つ右手を高く掲げた。切っ先が朝陽を浴びて、煌く。私がフィーネを連れ戻し、自分もリバレスも無事である可能性は、この煌きのように微かだ。だが、僅かでも光があるなら、私はその道を行こう。

自分を偽らず、信念のままに生きる道を。

## 第一節 深淵

### 第三章 獄界

宮殿、其処は獄界の中枢である。獄界は直径が千五百kmの円構造で、中心に向かえば向かう程、魔の力は強大になる。円の中心にある宮殿には、「司令官」以上の魔が居る。第一階層には「司令官」、第二階層には獄王の「側近」が住まう。そして今、第三階層の扉が開かれた。一人の女の魔によって。彼女は、司令官より一段下の「指揮官」である。

「フィアレス様、報告致します。ルナリート・ジ・エファロードが冥界の塔に現れた模様です。偵察兵の連絡によると、塔を下降し始めたとの事」

女は感情を押し殺した声で報告をした。魔にしては色の薄い肌の女で、髪は黒。短めの髪はようやく耳が隠れるぐらいだ。

「ふーん、そうか。それなら僕が人間界に向く必要は無いんだね。早く来ないかなあ」嬉しそうに笑う少年。シルバーの十字架があしらわれたシャツ、レザーパンツ、グローブ、そしてブーツまでが黒で統一されている。だが彼の姿は天使と殆ど変わらない。漆黒の翼が背中にある以外は。だが鋭さと厳格さ、気品に満ちた顔。そして黒味がかった銀髪と真紅の瞳を見ると、只者で無い事は明らかである。

彼が、何も無い空間から「黒の剣」を取り出す。禍々しい力を秘めた剣。

「ルナリート、僕の剣の錆さびにしてあげる。でも僕の所までも辿り着けないようじゃ、『彼女』の魂は壊すしかないから、精々頑張ってね」

彼は笑う、幼い顔で。だがその笑いには一分の隙も無い。そして彼はルナリートが着くまでの間、いつもの通り「修煉場」に向かう。彼は千五百歳になってから今日までの二十六年間で、約四千名の魔を腕試しに倒して来た。その中には、側近や司令官も含まれる。

王子フィアレス。獄王の息子である彼は、父の力を確実に受け継いでいる。

## 第二節 抹滅

ルナとリバレスは冥界の塔に入った。彼等が居るのは塔の屋上である。塔は直径が四十mの円形で、各階層の高さは十mだ。壁は黒一色の花崗岩かこうがんで、表面保護の為魔術が施されている。また、螺旋階段脇の手摺は「黒オリハルコン」で作られている。彫刻物と壁の窪みに設置された燭台の明かり以外は、塔の内部は黒で統一されている。迫り来るような黒、それは見る者の感覚を狂わせる。時間の感覚を奪い、閉塞感へいそくかんを与えるのだ。

宇宙の星々、大地、海、そしてS・U・N。それらを象った彫刻は、見る者に悠久の時の流れを感じさせる。実際にこの塔は、建造されてから二十億年が経過していた。

「ルナー、あれは？」

リバレスがフロアの中央を指差す。其処には真っ白な球体の彫像があり、黒オリハルコ

ンのプレートが埋め込まれている。

「これは……、輝水晶の遺跡よりも古い文字だ。私には読めない」

どんな辞書にも載っていない文字だ。しかし暫く眺めていると、何故か意味が理解出来た。これもエフアロードの力だと言うのか？

「此処は、封印されし塔の三千階。獄界の者は、中界に通じる扉を決して開けるべからず」  
「読めるじゃないのよー！」

リバレスが私の頬を引っ張る。仕方無いじゃないか。それよりこの文章の意味……。まず、中界（人間界）に続く扉は既に開かれている。この塔の内部から察するに、此処は獄王により管理されていた筈。ならば、この扉は獄王が開いたのだろう。何の為に？ 中界を侵略した人間を滅ぼす為に。そして、私達は三千階層もの高さを下りなければならない。

私達がプレートを離れ、階段へ向かおうとしたその時だった。

「貴様は……、ルナリート！ 探す手間が省けたようだな」

魔が階段を上ってこちらに向かって来たのだ。魔から強大な力を感じる！

「リバレス、指輪に変化して私をサポートしろ！ そのままの姿でいると殺される」  
「解ったー！」

リバレスが指輪になると同時に私は剣を抜く。その時には、魔が剣の間合いギリギリまで迫って来ていた。

「俺様の名はイレイザー。シェイドと同じ司令官だが、俺様の方が奴より上だ！」

体長は二mで漆黒の体。形状は、天使と同様だ。翼も持っている。一番の特徴は、奴が持つ得物<sup>えもの</sup>。柄の部分が三m、刃の部分が二mもある大鎌だ。

イレイザーが不敵な笑みを浮かべた瞬間、鎌が振り下ろされた！ 私はバックステップで躲<sup>かわ</sup>す。だが、完全には避けきれず頬を切られた。鎌が床に突き刺さっている、私はずかさず間合いを詰めて剣を振る！ だが奴は一瞬早く鎌を抜き、柄で私の剣を防いだ。

「ガキンッ……！」

剣と大鎌がぶつかる。何て力だ！ 腕が痺れる。武器での戦いは不利だ。力とリーチが違い過ぎる。

「高等神術、『滅炎』ー！」

私は巨大な火球を十個作り、全てを同時に放った！

「甘いわあ！」

だがイレイザーは全ての火球を鎌で掻き消し、猛スピードで向かって来る。

「引き裂かれるがいい！」

再び私の鎌が振り下ろされた。今度はそれをサイドステップで避けた。鎌が再び、床に突き刺さっている。剣で攻撃すれば、さっきのように防がれるだろう。ならば！

鎌を抜いたイレイザーが、柄で私の胸を強打する。私の体は宙を舞う。「ミシミシッ」と

「骨の軋む音が聞こえる。……だが、これで終わりだ。」

「究極神術『神光』！」

目を開けられない程の閃光が、至近距離でイレイザーに炸裂する！ 私は精神を集中し、神術の発動準備をしていたのだ。

「ギャアア……！」

痛烈な叫びがフロア中に響く。これで、少なくとも奴は立ち上がれないだろう。

「(勝ったのねー?)」

「(ああ)」

光が消えていく。其処には、イレイザーが倒れて……、いない！

「貴様は此処で死ぬ。死ぬ、シヌノダああ！」

左半身が消失して尚、右手だけで大鎌を振り下ろす！

「クッ！」

剣でのガードが間に合わない！ 「ズシャッ！」という音がして、鎌が私の胸に当たった。重傷かも知れない。

「(保護を使ってるわよー!)」

助かった……。リバレスのお陰で、掠り傷で済んだ。今度はこっちの番だ！ 私が剣を構えた途端、イレイザーはその場に崩れ落ちた。絶命している。

「死ぬまで戦いを止めない……。か。恐ろしいな」

まだ塔の屋上だと言うのに、こんな強敵に出くわすとは。先が思いやられる。

「ルナー、此処で止まってる場合じゃないわよ！」

リバレスの言う通りだ。時間が惜しい。私はリバレスを肩に乗せて駆け出した。

ルナは五十時間連続で走り、塔の二千階に辿り着いた。途中数百体の魔に遭遇したが、いずれも低級から上級魔だった為、苦戦はしなかった。フロアの中央に彫像がある。三千階と同様球体の彫像だが、真っ白では無く三分の一が黒い。

「……此処は塔の二千階。天界の者は下ってはならない。闇は光の力を奪う」

どういう意味だ？ 確かに塔を下降するにつれて息苦しくなっているが。否、息苦しただけじゃない。明らかに体が疲弊している。

「はあ、はあ……。行くぞ、リバレス」

休憩無しに、魔と戦いながらの二日間。流石に辛い……。だが一刻も早く進まなければ。

「ルナ、休みましょー。足がもつれてるじゃない」

「でもフィーネが！」

気力だけでその声を上げた。だが私の体は確実に眠りを欲している。リバレスは、戦闘時以外は眠っていた。だから今は彼女の方が元気だ。

「ダメ！ そんな状態で強い魔に会ったら殺される。だから、このフロアの階段を結界で

塞いで休みましょー！」

私はリバレスの言う通り、階段に結界を張りフロアに横になった。

「リバレス、済まない。三時間だけ寝るから起こしてくれよ……」

そう言うなり、私は眠りに落ちる。フィーネ……、ごめん。少し休ませて欲しい。

### 第三節 智慮

突如、硝子が砕けるような乾いた音がフロア中に鳴り響いた。その音でルナは飛び起きる。傍らで眠っていたリバレスも寝惚け眼を擦った。

「リバレス、早く指輪に変化しろ！」

言われるがままに、リバレスは指輪に変化する。ルナは舌打ちした。結界が魔によって破られたのだ。百体以上の魔が突進してくる。

「ゆっくりり休む事など出来ないようだな」

時計を見る。眠ってから二時間弱、疲れが余り取れていない。だが突き進むしか無い！「道を空ける！ 邪魔する者は斬る」

私は自分の体を結界で覆いながら、剣を抜いた。走りながら立ち塞がる魔を斬っていく！下りの階段に差し掛かっても、魔の軍勢は途絶えない。剣を振る腕が痺れ、足が鉛のように重い……。疲労の余り意識が混濁する。それでも、フィーネの笑顔を中心の支えにして、無心に走った。

走り始めて三十時間が経過した。今日は一月一日、新年だ。GB522M164T800（神と獄王が誕生して六十五億二千二百六万四千八百年の経過を意味する）年の幕開けである。

現在私達は塔の千五百階に居る。下り始めて八十時間でようやく塔の半分だ。フロアの中央には球体の彫像があり、半分が黒い。私はプレートに目を通した。

「此処は塔の中央。これより下は獄王の領域。神の光届かぬ闇の世界」

塔を下る毎に体力と精神力を奪われるのは、疲労の所為だけでは無いのだ。私もリバレスも、獄王の領域に近付くにつれて力が減少している。

神は光からエネルギーを生産する。光が無ければそれが出来ない。私達天界の生物は、光から遠ざかる程に力を失うという事か。逆に獄王は、獄王は「海」からエネルギーを生産する。現在は、獄界の中枢を囲む「闇の海」から力を得ているらしい。闇の海には、生きる者の邪悪な念や、二十億年前の大戦の犠牲者の魂が溶け込んでいるとも聞く。

彫像に腰掛け、息を整える。その時だった。「ゴォォ……！」という轟音と共に、黒い炎が私達を包む！ 体が焦げ付く程熱い。また、強力な魔のお出ましか。

「何者だ！」

そう叫びながら、私は神術で風を起こし炎を押し返す。

「お前がルナリートか？」

炎の向こうに佇む魔。何と女の魔だった。華奢な体で、肌の色を除けば身体は天使と変わらない。それよりも、彼女は涙を流している。何故だ？

「ああ、私がルナリートだ。此処を通してくれるなら、お前に危害は加えない」

「私の名はソフィ。お前は……、イレイザーを、私の『最愛の魔』を殺したんだ！」

そんな事が……？ 否、魔も高等知能を持つ。愛情が、天使や人間と同様でも可笑しくは無い。私は無意識に、剣を抜こうとした手を引っ込めていた。

「死ねええ！」

気付いた時には目の前に火球があった。赤黒く、濃縮された憎悪の炎。

「くっ！」

リバレスが私に「保護」を使ってくれていたが、胸に直撃した炎で私は二十m程後ろの壁に激突した。背中と後頭部を打ち、胸には火傷。致命傷では無いが立ち上がれない！

「お前は、自分の恋人の魂を救う為に塔を下り始めた。そうでしょう？ お前にそんな心があるなら、何故イレイザーを殺した？」

ソフィが、私の頭を踏み付ける。こいつはフィーネの事を知っている！ そして、イレイザーに「最愛の女」が居る事を知らなかったと言っても、意味は無いだろう。言い訳しても死者は戻って来ない。それに、最後まで戦士だった者を貶すつもりも無い。

「私にも話をさせてくれ」

私はソフィの足を掴んで引っ張る。彼女が転倒したと同時に私は立ち上がった。

「そうだ、私はフィーネを救う為に来た。イレイザーは、命を落とす時まで私を殺すつもりで戦った。互いに譲れぬものがあり、それを守る為の戦いだっただ」

「黙れ！ お前の話など聞きたく無い。お前は、イレイザーの仇なんだ！」

ソフィが、再び紅蓮の炎を作り出す。このフロアの天井にも届きそうな炎。

「どちらが死んでも可笑しくない状況で、命を懸けて戦った。此処で私がお前に謝れば、私は『誤って』イレイザーを殺した事になる。だから私は、迷わず自分の道を進む」

ルナの背中に光の翼が現れる。彼は掌から暴風を起こし、炎を完全に掻き消した。力を使い果たしたソフィが、その場に力無く座り込む。

「殺せ！ 私も、イレイザーの下へ送ってくれえ！」

「私はお前を殺さない。お前が、これからも変わらずイレイザーを愛し続けるならば、彼の魂を探してやってくれ。お前には死ぬ程の覚悟があるから出来る筈だ」

私は彼女に背を向け、階段へと向かう。すると指輪のリバレスが私の指を締め付けた。

「(放って置いていいのー?)」

「(ああ。愛する者を奪われた痛みはよく解る。だがその痛みは、復讐でも、自殺でも癒されない。命を賭して、愛する者を取り戻すしか無いんだ。例え、生まれ変わって記憶が消

えようともし、心までは消えない事を信じて)」

魔は忌むべき存在だと思っていたが、決してそうでは無い。思想が違うだけで心の構造は変わらないのだ。詰まる所、天使も人間も魔も、「自分の信じるもの」の為に戦う事しか出来ない。だから私は振り返らず進む。

「…お前の愛する人間の魂は、獄王様が保管している。早く、此処から消えて！」

ソフィが私の背中に叫ぶ。私は振り返らずに礼を言い、階段を下り始める。フロアに研する泣哭なきうしやくの声。彼女の幸せを願う。

フィーネの居場所が解った。だがその場所は最悪だ。私は、獄王から彼女の魂を取り戻さなければならぬのだ。それでも私は歩みを止めはしない。

私は翼を広げて、階段とフロアの上を滑空する。走って下りるより断然速い。それに、不必要に魔と戦う必要も無い。この状態はエフロードの第三段階…。第四段階の「私」を制御出来れば、自分の正体が解る…。か。

#### 第四節 驕恣きょうし

飛行を始めて僅か四十時間で、私達は最下層に辿り着いた。光の翼が現れてから私の疲労は殆ど無い。リバレスは指輪の形状のまま、必要時間は眠っている。

最下層には、真っ黒な球体の彫像とプレートがあるだけで、扉や階段などは無い。取り敢えずプレートを読んで見るか。

「此処は獄界へ通じる間。闇を模したこの像に向かって、『獄王の名』を口にせよ」  
何という事だ、此処まで来て…。神の名すら知らぬ私が、獄王の名を知る筈も無い。

「無駄だ。ルナリートよ」  
背後から声がした！ さっきまでは何の気配も無かったと言うのに。私は振り向きざまに、剣を抜く。

「ワシの名はファング。獄王様の側近じゃ。ワシを殺したくば、殺すがいい。殺せば、貴様は獄界へ行く事は出来ぬがな」

狼を巨大化したような軀むた。黒色の体毛に金色の目。目には狡猾で老獯ろうかひ、残酷な光が宿っている。獄王の側近、力も半端では無いだろう。

「私はフィーネの魂を救いに来た！ 頼む、此処を通してくれ」

他に方法が無い以上、私はこいつに頼むしか無い。まず断られるだろうが…

「いいじゃろう」

え？ 私は耳を疑った。だが、ファングの気が変わらない内に獄界へ行きたい。

「済まない！」

「構わんよ。じゃが、獄王様の命令で一つ条件がある」

只では通さない、当たり前か。何が望みだ、私の命か？ 意を決して私は口を開く。  
「言ってくれ」

ファングの目が怪しい光を帯びる。その光に一番近い表現は、「優越感」。

『天使の指輪』じゃ。貴様の強力なエネルギーを吸収した指輪を、獄王様に献上する事が条件。それを呑めば、獄界に案内しようではないか」

束の間の逡巡……。私が天使の資格を失う事は、フィーネの魂に比べればどうでも良い事だ。だが指輪が獄王に渡ると、天界の秘密が獄界に知られてしまう。神術の術式、天使の力を引き出す方法も漏洩するだろう。そうなれば獄界全体の力が増幅し、天界までもが侵略されるかも知れない……

「(ルナー、ダメよ！)」

リバレスが指をきつく締め付ける。その気持ちは解る。私一人の決断が、天界を危機に追い遣るのだから。しかし私は、フィーネの声、温もり、滑らかな髪、死に際の最後の微笑みを思い出し、決断した。

「……いいだろう」

私は、右手中指で千八百二十七年間光り続けた指輪を外す。自分勝手なのは承知だが、私にとってはフィーネがどんなものより大切なのだ。彼女を助けられたら、償いとして一生、天界と人間界の為に戦わなければならないが、それでも構わない。

「(ルナー……)」

リバレスが私の名を呼び、何も言わなくなる。お前の気持ちは解るが……、済まない。私は指輪をファングに投げる。奴はそれを、鋭い牙で器用に捕らえた。

「確かに受け取った。そんなにもあの女の魂が大事か……。貴様のエゴが、天使や人間を破滅させる事になると言うのに。まあ良い、約束通り獄界の『入り口』に案内しよう。其処からは、自分の力で獄王様に辿り着くのじゃな！」

そう言う事か。どうせ入り口から獄王の所まで、鉄壁の守りなのだろう？ だが必ず突破してやる。指輪を外した瞬間から、体の奥が疼く。誰にも負ける気がしない。

「さっさと案内しろ」

「ハッハッハ……！ 愚かな『エファロード』よ、獄界で後悔するが良い！ 獄王様の名、それは『フェアロッド・ジ・エファサタン！』」

ファングが獄王の名を叫ぶと、フロアに黒い霧が立ち込め始めた。体が溶けて行くような感覚……。そして私は意識を失った。フィーネ、もう少しだよ。

## 第五節 灼紅

「うう……」

意識を失ってから、どれだけ時間が流れただろう？ 薄目を開ける。此処は獄界だ、

私はそう確信する。重く淀んだ<sup>よど</sup>空気<sup>くわい</sup>で呼吸が苦しく、全身が鉛で塗り固められたかのように重いからだ。獄界は、全てが暗黒に包まれていると思っていたが、実際は違う。見渡す限りが「鮮血色」の世界だ。大地も空も。私とリバレスは熱砂の上に倒れていた。

「うーん……。ルナー、大丈夫？」

「ああ。だがこの世界は、呼吸するだけで体力を奪われる」

遠景が歪む程の熱気、押し潰されるような重圧感。この世界は私達を拒絶している。

「うん、わたしも体が重くて上手く飛べないみたい。……あつ」

よるめきながら宙を舞うリバレスの視線の先、其処には「真紅」の元があった。

「暑い訳だ」

熱砂の周りを溶岩の海が囲んでいる。血を煮え滾らせるように。溶岩と逆の方向を見ると、地平線すら見えない砂漠と岩山。獄王は「闇の海」の近くに居る筈だ。砂漠の向こうは、溶岩の方角より暗い。だから私達は、砂漠と岩山を越えていかねばならない。

「元の世界には戻れそうも無いし、頑張りましょうー！」

リバレスが元氣一杯に声を上げ、私は強く頷く。近くに魔の気配が無い事を確認し、私達は食事を摂った。この先、いつ休憩出来るか解らないから。

熱砂の上空を飛び続けて六時間。ようやく辺りが、暗くなり始めた。獄界の中核へ近付いている証だ。溶岩の海はもう、薄明かりでしか確認出来ない。

渾身の力で翼を震わせる。この世界に来て二十二時間が過ぎた。

「(大分暗くなつて来たわねー。溶岩の明かりは殆ど見えない。それなのに、下にあるのは最初と変わらず砂漠と岩山だけ……)」

「仕方無いさ。獄界の構造など、天界の者は誰も知らない。私達が出来るのは、暗黒に向かつて進む事だけだ」

獄界に来てから一度も魔に遭遇していない。お陰で食事や休憩が思う通りに出来た。魔に遭遇しないのは、恐らく今私達が通っているルートが通常のルートでは無いからだ。魔はもっと楽な道で冥界の塔へ行ける。事実、ファングは私達と共に居なかった。

更に二十四時間が経過した頃、眼下の景色が豹変する。

## 第六節 苛烈

「あーっ！」

突然リバレスが叫んだ。五k m程先で砂漠が途切れ、深く暗い漆黒の海が現れたからだ。

私はその色を目にした瞬間、奇妙な感覚を覚えた。これは、既視感<sup>きしかん</sup>。この海はいつか何処かで確実に見た事がある……。不気味な海なのに、懐かしささえ覚える。だが海を目前にした途端、私は砂漠に墜落する。「途轍も無い何か」に体が捕われたのだ！

「ルナー、どうしたのー！」

リバレスには「聴こえない」らしい。この「呪詛」<sup>じゆせ</sup>の声が。

「はあ、はあ……。あの海は危険だ」

頭が割れそうに痛い。何だ、この声は！

「**リバレスロードネオ……！ 呪いじゆせ……！ 恨みじゆせ……！**」

「うわああ！」

私は、頭を押さえて転げ回る。誰かこの声を止めてくれ！

「どうしたのよー！ 何があったの？」

リバレスが天使の姿に変化して、私の背中を擦る。私は何とか立ち上がり、海に叫ぶ。

「お前は誰なんだ！」

「**貴様らの戦いの所為でええ……、犠牲に……**」

戦い、犠牲？ 何を言っているんだ。私の声は聞こえていないのか。

「**世界がああ……、血に染まり……、割れて……**」

理解した。この声の主は二十億年前の戦いの犠牲者。その魂が私に叫んでいるのだ。エファロードである私に。何故だ？ 思索を巡らしていると、声はいつの間にか消えていた。

「ルナー、大丈夫？」

「……ああ。あの海から、死者の呪いが聞こえて来たただけだ。この海は「闇の海」、これを越えれば獄界の中枢だ。さあ、行こう！」

リバレスが訝しげに首を傾げる。私の言葉に確証が無いからだろう。だが私には自信があった。「何度も見た風景」を見間違えたりしない。

彼女は指輪に戻り、私は漆黒の深淵に飛び立つ。光源である溶岩から遠く離れているので、此処は暗い。それは、星々が瞬く地上の夜の暗さと変わらない。眼下にはドロドロとした闇の海、進む先は純然たる闇。その闇を、私の輝く翼が切り裂いていく。

また一日が過ぎた。今日は一月六日。時刻は午前十時。獄界での時間経過を知るには、体の変化を感じるか、時計を見るしか無い。明るさも景色も変わらないからだ。

そして、遂に予期していた瞬間が訪れた。

「大群のお出ましか」

「(な……、何て数なのー！)」

空一面を覆い尽くす程の魔、数方は居る！

「此処は魔の世界。それは初めから解っていただろ？ リバレス、フィーネを連れて生きて帰ろうな！」

私は少し力を込めて、指輪のリバレスを撫でる。此処からが真の戦いだ。

「(うん、解ったー！ 約束よ)」

その直後、魔の大群が私に向かって魔術を一斉放射し始める！ これだけ守りが堅いの

は、中枢が近い証拠だ。気合を入れて進まねば。

「究極神術『光膜』！」

結界の数千倍の強度を持つ光の膜が、私を中心に半径1mの球状になって現れる。そして、全方位から魔術が膜に炸裂した！

「ドゴオオ……ン！」

膜ごと私の体が振動する。光の明滅、立ち上る煙。だがこの程度の攻撃では破れはしない！ 攻撃は数分間、途絶える事無く続いた後、ピタッと止んだ。何故だ？

「(キヤアー！)」

「魔術での猛攻の内に囲まれたな」

上下左右、全てが魔！ 密集した魔が私を凝視している。

「エファロードを殺して、世界を我々の物にするのだあぁ！」

耳を劈く雄叫び、数万の声の反響。私は身震いした。

「(ルナー！)」

「……私は前に進む！ 死にたくない者は、道を空ける！」

私は、「光膜」を濃縮し体の周り数c.mに留める。これで大概の攻撃は無効化出来るだろう。私は剣を抜き、進行方向に一直線に突進する！

その後は正に修羅場だった。何人倒しても、魔は私への攻撃を止めない。一群を振り切っても、別の一群が直ぐに襲い掛かってくる。目の前の者全てが私を殺そうとする敵だ。休む暇は無く、瞬きすら躊躇われる程だ。それでも私は進んだ。唯、フィーネを想って。

戦闘は三日に及んだ。体も精神力も衰弱し切っている。だが遂に、海に浮かぶ巨大な島、其処に建てられた高度な建築物が見えた。獄界の中枢、もう直ぐ……、目的地だ。

黒花崗岩で造られた街、仄赤い光が整然と並ぶ。島の中心には獄王の宮殿！

「リバ……、レス。ようやく、着いた……」

安心と、疲労がルナの翼を消し去った。彼はゆっくりと、街へ落ちて行く……

「(ルナー！) しっかりして、後少しじゃないの！」

リバレスの声が虚しくルナの脳裏に響く。だが既に、彼の意識は失われていた。

## 第七節 老獯

無機質な、金属を叩く音が繰り返されている。「ガシャン、ガシャン……」と。耳障りなその音で、私はゆっくりと瞼を開いた。

「ガハハハハ！ 無様な、ルナリートよ。エファロードでありながら、貴様は拷問の末に処刑される運命だ！」

何だこいつは？ 見るからに弱そうな魔だ。それより此処は……、牢獄か。壁も床も、

鉄格子さえも黒一色。さっきの音の正体は、こいつが鉄格子を叩いていた音か。

「(リバレス……、居るか?)」

「(無事よー。今は、ルナの胸ポケットに隠れてるわ)」

胸の辺りが僅かに動く。良かった、無事だったか。それにしても、あんな所で力尽きるとはな……。剣や荷物も取り上げられたようだ。

「(無事で何よりだ。リバレス、此処は何処で、どれくらい時間が経ったんだ?)」

「(此処は、獄王の宮殿の地下牢。今はルナが落ちて、大体六時間ね。危なかったのよー！ルナは沢山の魔に囲まれて……。でも、獄王が魔を制止して此処に運ぶよう命じた。だから、私達は今も生きてるって訳ね)」

獄王の意図は解らない。何故私を生かした？ あれだけ多くの魔を殺した私を。だが何にせよ私は、今から獄王に会わねばならない。翼は失っているが。

「エファロード、このケージ様を無視するとは良い度胸だ！」

さっきの魔が罵声を浴びせて来る。こいつは番兵か、どうでも良いが。私は鉄格子を掴み力を入れた。「バキンッ」と言う音をさせながら、格子は押し折れた。今の私にとって、唯の鉄棒など脆弱な小枝と大差無い。

「ところで、誰が拷問の末に処刑されるんだ？」

「貴様は……、獄王様に殺されるんだああ！」

番兵が必死の形相で階段を駆け上る。私は体の緊張を解しながら、ゆっくりと後を追う。恐らく、先には強敵が待機している事だろう。

階段を上り詰め、其処にあった扉を私は開く。

思いの外広く、色彩に溢れたフロアだ。一边は百m程の正方形で、極彩色の絨毯、豪壮な彫刻、宝石が鑲められた壁。何より、天井から吊り下げられた輝水晶のシャンデリアが目を惹く。突如、其処に立てられた黒い蠟燭の火が消え、何処からとも無く声が響く。

「よくぞ此処まで辿り着いたな。ルナリート・ジ・エファロードよ。我こそは獄王、フェアロット・ジ・エファサタンだ。我はこの宮殿の屋上に居る。我に話があるならば、屋上まで来るが良い。待っているぞ」

重く……、力を感じる荘厳な声。私の体だけで無く、フロア全体が震える。この声の主は疑いようも無く、獄王だ。

「……解りました。私は、必ず貴方の元に参上しましょう！」

蠟燭の明かりが灯る。私は、妙な気配を感じて振り返った。黒い影が、私の鳩尾に一撃を喰らわせる！ 内臓に衝撃が奔り、骨が軋む。私は壁まで飛ばされた。

「ハッハッハ……！ そんな言葉は、ワシを倒してから言うが良い！」

ファンング！ また気配を感じられなかった。私はよろめきながら立ち上がる。

「翼も無い、愚かなエファロードよ。たった一人の人間如きの為に、貴様は命を落とす。

ハッハッハ！ フィーネとかいう女だったかな？ 穢れけがの無い、綺麗な魂の色をしていたぞ。お前を殺した後は、ワシが切り刻んで食すとしよう！」

切り刻み、食すだと？ お前如きが。私は口の中の血を床に吐き捨てる。

「フィーネは……、お前のような愚物には触れさせない！」

「(ルナー、大丈夫なの?)」

「(大丈夫だ……。翼が無くとも、私はこんな奴には負けない)」

さっき受けたダメージに鑑みて、奴の力は今の私よりも大分上。しかも私には剣が無い。だが、卑劣な者に負けてフィーネを失うぐらいなら、刺し違えても倒して見せる。

「ほざけ。今の貴様は所詮第二段階。それではワシに遠く及ばぬ。死ぬ！」

ファングが大口を開き、其処から無数の雷弾らいだんが発射される。私はそれを走りながら躲し、反撃の機会を狙う。ファングが消えた！

「其処だ！」

視界の端にギリギリ映った奴は、私の頭上！ 私は拳を突き上げた。「バキッ!」、拳はファングの腹部に命中する。しかし、大した手応えも無く奴は飛び退いた。

「ハッハッハ！ 効かぬわ。戯れは終わりじゃ。禁断魔術、『死闇』！」しおん

その咆哮ほうこうの直後目の前が、否、このフロア自体が深い深い闇の螺旋へと変貌へんぼうしていく！ 何だこれは？ 特殊な空間に閉じ込める魔術、と言うのが一番近い気がするが。ファングの姿は無い。私とリバレスは……、螺旋を滑るように下へと落ちて行く！

「どうなってるのー!!」

リバレスが元の姿に戻り叫ぶ。螺旋の底まで落ちれば、私達は死ぬだろう。それどころか、魂すらも閉じ込められるかも知れない。

「リバレス、私に構わず上へ飛ぶんだ！」

「飛べない！ 幾ら飛ばたいでも落ちるだけよー!!」

彼女の半狂乱の声。此処では重力の法則が違うらしい。どうすれば？

「フィーネ、私に力を貸してくれ！ もう直ぐで君の所へ行けるんだ」

目を瞑り、力を願う。フィーネを助けられたら、私はどうなっても構わない。だから、

今は私に力を！ 鼓動が早まる。この感覚は、「第三段階」！

「翼が蘇ったわー！ これで安心……、じゃ無いわー！」

光の翼を全力で動かしても、一向に上に行けない！ 下に何か見えて来た。闇の海？

「ルナー！ 下に居るのは全部骸骨がいこつよ、何とかして！」

海に浸かる骸骨が乱舞し、私達の着水を待っている。此処で死ぬ訳にはいかない！ そうだ、この螺旋は「魔術で作られた空間」。ならば……

「禁断神術……、『滅』！」

上着の内ポケットに入れた宝石シェファを握り締め、「滅」を発動させる。この石は、私とフィーネの未来の象徴。願いを込めて。

耳が張り裂けるような音が聴こえ、体が暴風に包まれた。もう目の前は死の海！

「キヤアア！」

耳元でリバレスの金切り声が響く！ その瞬間、海から「光」が溢れた。

「ドサツ」

私達は、「落ちた」。無事、元のフロアの床に。其処にファングが歩み寄る。

「見事だ……」

予想外の言葉、私達を油断させるつもりか？ 私は奴を睨む。するとファングは、首を振りながら一歩後退した。

「ワシは、もう貴様と争う気は無い。『死闘』も破られた今、ワシに勝ち目は無いからじゃ。だが……、『上層のお方』には貴様は絶対に勝てない。だから、此処は通してやろう」

ファングが、喉の奥から「鍵」を取り出し、私に渡した。本当に戦う気は無いらしい。

「良いだろう。不要な戦いは私も望まない」

そう言って、私は上層への階段を上り始めた。念の為、奇襲に警戒しながら。

「あいつ、やけに往生際おうじょうぎわが良いわねー。次に待ってる奴が、そんなに強いのかな？」

「誰が待っているようが、私には関係無いさ。それより、危険だから早く指輪に戻れ」

階段の先にある扉が見えた。異様な扉、まるで生物の「内臓」を模したような……。しかも扉自体が、生きているかのように蠢いている。そして何処からか漂う、臭気。これは死臭だ。扉の下の隙間から、鮮血が流れ出てくる。私は反射的に飛び退いた。

この扉を、開けたくない。「開けるな」と本能が、私に告げている。

だが私は、震える手で扉に鍵を差し込んだ。

## 第八節 血脈

部屋全体が巨大な生物の体内のようだ。その中央に佇む一人の少年、身長は私よりも十cm程低く、顔には幼さが残っている。小柄で華奢、耳の辺りまで伸びた黒銀の髪が僅かな風に靡く。私よりも僅かに黒い肌で、背中には漆黒の翼。そして真紅の瞳。

「随分遅かったね」

少年の眼光が私を射抜く。少年特有の高い声でのんびり話しているのに、その目には凄まじい殺意が宿っており、私は呼吸する事さえも忘れそうになった。

「お前は……、何者だ？」

「僕は、フィアレス・ジ・エファサタン。ルナリート、ようやく会えたね」

微笑みながら私に近付いて来る。だが目は笑っていない。私は一歩後退した。

「確かに私はルナリートだ。私はお前に用は無い。獄王に会わせてくれないか？」

『お父さん』には会えないよ。僕を倒さないよね」

この少年は獄王の息子！ 道理で震えが止まらない訳だ。

「僕はこの前やっと千五百歳になって、天使や『君』と戦う許可を貰ったばかりなんだ。僕は自分の力を試したくて！ 獄界の皆じゃ、僕の相手は務まらないからね。これは君の剣でしょ？ 返すよ」

フィアレスが何も無い空間に手を伸ばし、剣を出す。紛れも無い、オリハルコンの剣だ。「一体どういふつもりだ？」

こちらに放り投げられた剣を受け取り、私はいつでも動けるよう身構える。

「だから、僕は君と戦いたいんだよ！ 僕と対等に戦えるのは、君だけだからね」

少年が今度は、空間から何の光も反射しない「黒の剣」を出す。禍々しく歪んだ剣！

「あー……。ゾクゾクするなあ。僕は君を殺す気で行くから、君も本気を出してね！」  
「あー……。ゾクゾクするなあ。僕は君を殺す気で行くから、君も本気を出してね！」

「キンッ！」

後ろに振った剣が、奴の剣に当たる音が響く！ それが聴こえた瞬間に、奴は私の正面に移動していた。何と言う移動速度、今の私でも目で追い切れない！

「へえ、今のを防ぐなんて。普通の魔ならあれで一撃なのに。そろそろ、本気で行くよ！」  
「こちらを殺す気で戦わなければ、確実に殺される。」

「キンッ！ キンッ……！」

フロアに響き渡る剣の衝突音、私は奴の攻撃を防ぐのでやつとだ。反撃の隙は無い。

「これでどうだ、『獄闘』！」

リウォルでシェイドが用いた究極魔術か？ 否、別物だ。密度が違い過ぎる！ 部屋全体が闇に染まり、周りから私を押し潰そうとする。私は咄嗟に「光膜」を発動させた。

「ジジジ……！」

光膜が消えそうな程の圧力！ 私は膜の維持に全力を注ぎ込む。

「(危ない！)」

リバレスの声、何事だ？ 黒刃！ 気付いた時には、光膜に刃が突き立てられていた！  
膜が破れ、刃が私の左肩に刺さる。迸る鮮血！ 私は何とか奴の剣を薙ぎ払った。

「(ルナ！ 大丈夫？)」

左手で肩を押さえ、治癒の神術で傷口を塞ぐ。右手では剣を持ち、切っ先をフィアレスに向ける。傷口は閉じてても、筋繊維の修復には時間がかかりそうだ。

「はあ……、はあ」

必然的に呼吸が荒くなる。回復の為に少しでも時間を稼ぎたい。しかし……

「エファロードって、この程度？ 僕を失望させないでくれよ！」

フィアレスは、容赦無く甚振るように無数の斬撃を浴びせて来る！ 私は、斬撃が致命傷にならないようにするのが精一杯だ。体の至る所から血が噴き出す。

「うーん……、僕は、『愛』ってよく解らないけどそんなに大事なの？」

フィアレスは、余裕で腕組しながら可笑しそうに笑う。

「当たり前だ。お前みたいな、『子供』には解らないさ」

「僕を子供扱いするな！ 要は、あの魂が君にはとても大切なんだね。それなら君を殺した僕が貰ってあげるよ！」

「彼女の魂は、「物」じゃ無い！ それに、彼女は私の手で解放される」

私は両手でしっかりと剣を握り、奴の眼前に突き出した。

「こんなに力の差があるのに、どうやって？ 面白い事を言うね」

一瞬の油断、私はすかさず渾身の力で蹴りを放った。蹴りは奴の腹部に炸裂する！

「うぐっ……！」

フィアレスは後ろに吹っ飛び、翼でブレーキをかけた。上手くダメージを軽減している。

「ふう……。今のは驚いたよ。油断したらダメだね」

私は翼を開き宙に浮く。長期戦は不利だ、一気に片を付ける！

「高等神術『滅炎雨獄』！」

「高等魔術『獄炎』！」

互いの炎がフロアに充満し、呼吸するだけで喉が焼けそうだ。赤と黒の炎、逃げ場は何処にも無い。

「行くぞ！」

「来い！」

私達は炎で体が焦がされるのを無視し、激しい剣戟けんげきを繰り返した。剣から火花が散る。

「究極神術『神光』！」

「禁断魔術『死闇』！」

炎、光、闇が渦を巻く。刹那せつなでも気を抜けば、死に追い遣られるだろう。

「(何て戦いな……)」

リバレスが呟く。それもその筈だ。間違い無くこの戦いは、この星で最高レベルの戦い。

「くっ！ エファロード、やるじゃないか。スピードも力も、どんどん上がってる」

「お前こそ！ 恐ろしい奴だ。だが、私はファイネに約束したんだ！」

フィアレスの体が僅かにバランスを崩した。私は其処に、自分の腕が折れる程の剣撃を

叩き込む！ 奴は地面に落ちた。勝機！

「禁断神術、『滅』！」

直径十m程の、「無」の空間が、フィアレスを飲み込む。

「僕は負けない！」

フィアレスは消えた。勝ったのか？ 滅は壁や床、更には光も闇も呑み込み消失した。

「危なかったよ……。今のは。君の指輪に記憶されていた『転送』の神術で、自分を飛ばさなければ死んでいた」

しぶとい奴だ。だがフィアレスは右肩から先を失い、顔からは血の気が引いている。

「早くも利用されてる訳だ……。だがもう勝負はあっただろう？」

奴の首には、ペンダントのトップとして、私の指輪が吊り下げられていた。

「僕は、誇り高き王子！ こんな所で逃げる訳にはいかない！」

流石は獄王の息子。左手一本で剣を取り、私に向ける。

「此処を通してくれないならば、戦うしか無いな」

私は剣を強く握る。そしてフィアレスに歩み寄ると、部屋が急に暗くなった。

「待つのだ、フィアレスよ！ 『今回は』大人しく負けを認めるのだ。お前は此処で死んではならぬ！」

獄王の声。子供を案じぬ親は居ない……。か。

「はい、お父さん。悔しいけれど……。今回は僕の負けです。エファロード、君は今からお父さんに殺される。だから、お父さんの跡を継ぐ僕が最強だ」

私は最強の座など要らない。フィーネさえ戻ってくれば。

部屋が明るくなる。其処にフィアレスの姿は無く、血痕けっこんの中に鍵だけが転がっていた。

「ルナー、次が……」

元の姿に戻り、目に涙を浮かべるリバレス。不安と心配が宿る双眸そらばら。私は静かに頷き、上層への階段を上り始めた。唯、フィーネと誓った、永遠の心を抱き締めながら。

「ドクン、ドクン……」

鼓動が際限無く早まる。目の前には見上げる程の高さの、黒オリハルコンで出来た扉。規則正しく十字架の文様が並び、十字架のクロスする部分には宝石があしらわれている。

恐怖と、「懐旧」の情が溢れる。この扉も、「私」は知っている。

「リバレス、行くぞ！」

「オッケーです！」

彼女は私の周りを舞い、指輪に変化した。

「ギィイ……」と、重々しく扉が地面を擦る音が響く。

## 第九節 覚醒

ルナーが扉を開け一步部屋に入った直後、扉は消えた。この部屋に床は無い。全方位が暗黒の海で、翼が無ければ眼下の海に呑まれるだろう。だが海までの距離は軽く数十kmはあり、空間の至る所に星屑ほしこずが浮かんでいる。現実の世界では説明出来ないような部屋だ。

部屋の中央には「白い十字架」が浮かび、一人の男が磔はりつけになっている。獄王だ。肩よりも長い銀の髪、やつれ果てた顔。だが、基本的にはフィアレスに酷似している。

「久し振りだな、エファロードよ」

本当に、再会を愛おしむような声。何故かその声は、私の心の琴線に触れた。

「久し振り？ 一体此処は何なのですか」

「此処は獄界の中樞、『断罪の間』。全ての界で生まれし『悪魂』を滅する場所にして、私の居場所。エファロードは、そんな事も忘れてしまったのか？」

「私は、こんな場所に来た事はありません。それよりも、フィーネの魂を返して下さい！」  
私は叫ぶ。だが心の何処かが、この場所は初めてでは無いと呟いている。

「百万年振りの再会だと言うのに、何も思い出せないのか。それとも、まだ記憶が継承されていないのか？」

獄王の真紅の瞳が私を見据える。百万年、記憶の継承……。頭がピリピリ痛む。

「神は『魂界』の力を借りて、天界と中界に魂から生命を生み出す。獄王も同様に魂界の力を受けて、獄界に生命を生み出す。神の役目は、天界の維持とESSGの精製。私の役目は、獄界の維持とESS (Energy Sphere of Satan) の生成、更に『悪魂』を滅する事。そしてもう一つ。強大な力を持ち、私の力でも完全に滅する事の出来ない悪魂を封印する、『深獄』の扉を閉ざし続ける事だ」

魂界、深獄……。少なくとも私は聞いた事が無い。獄王は尚も話を続ける。

「神は、天界で処理出来ないエネルギーを消費する為、中界を占領した！ 獄王には何の相談も無く。それなのに、我がお前に手を貸す必要があるだろうか？」

尤もだ。私は何も言えない。すると獄王は眼下にある海から、水晶で出来た小箱を取り出した。これはまさか……

「フィーネ！」

小箱の中で薄桃色に淡く光るそれは、紛れも無くフィーネの魂だった。

「やはり魂の中身まで解るようだな、エファロードよ」

獄王は薄笑いを浮かべながら、小箱を海に戻す。私が下手に動けば魂は壊される！

「どうすれば、フィーネを解放して貰えるんですか！」

私は十字架に近づく。だが、獄王の手が届く範囲には近寄れない。私の全力でも、傷一つ付けられない結界が張られているからだ。やはり私と獄王では力の桁が違う。

『『エファ』は始まりの者。そのお前が、たった一人の人間の為に此処まで来るなど、愚かだとは思わないのか？ 我と戦ってまで、この女を取り戻したいのか？』

広大な空間中に響き渡る獄王の声。海が騒ぎ、星が落ちる。私も指輪のリバレスも、激しい震えが止まらない。死んだ方が楽だと思える程の恐怖……。それでも私は退けない。

「私は彼女を誰よりも愛しています。彼女が戻って来るのなら、他には何も必要ありません。私の、命さえも。彼女は、私に『心』をくれました。そして私達は『永遠』を誓ったのです。だから私は戦います。相手が神であろうと、獄王である貴方であろうと！」

私は震えを止め、キッと獄王の目を見据える。獄王は笑みを浮かべた。

「己の信ずる道ならば、死すら辞さぬその心。変わらぬな。エファロードは昔からそうだった。良からう、ロードとサタンは戦いでしか相手を理解出来ぬ。それが真理。光と闇は

混ざり合わぬ、だが互いに必要なもの」

その言葉の直後、獄王の影から獄王の分身が現れる。分身は結界を越え私の前に立った。

「何故、貴方自身が戦おうとしないのです？ 魔術で作った分身で十分だと！」

「我がこの十字架から動けぬ理由。そして神が天界の封印の間から動けぬ理由。ルナリート・ジ・エファロードよ、お前はそれすらも解らぬからだ」

意味深な言葉、だがどういう意味だ？ それを私は理解せねばならないのか。

「獄王、貴方の分身を倒せば、フィーネを解放して貰えるのですね？」

「そうだとしても、無駄だ。この『影』には、我が力の一割を注いでいる」

獄王の穏やかで静かな声の後、黒い剣を抜いた影は残像だけ残り消えた。

私の左腕に何かが触れる。「ブシュッ！」と音がした。見ると……、**腕が無い！**

「うわああ！」

痛みが急激に押し寄せ、私は大声で叫ぶ。大量の出血で意識を失いそうになる。

「ルナ、『治癒』！」

リバレスが治療を試みるが全く効果が無い。

「エファロードよ、早く第四段階の力を見せたらどうだ？ 次は右腕を切り落とす」

第四段階、私が「私」になる段階。否、「私」を制御出来て初めて完全な第四段階だろう。

「ズシャッ！」

今度は右腕が落ちる。オリハルコンの剣も、深海へと沈んだ。

影は獄王の隣で、表情一つ変えずに命令を待っている。

もう……、私に勝ち目はないだろう。大量の出血と痛みで宙に浮くのがやっとだ。

「まだ目覚めぬか？ それならば女の魂を、『深獄』に封じるまでだ！」

フィーネを深獄へ？ ふざけるな。あの領域は、『悪魂』の巣窟なのだぞ！

私の意識が消える。また、「私」が勝手に口を開く。

「……待て、サタン！ 深獄へ向かわせるべき魂ではないだろう？」

「ようやく来たか、ロードよ。改めて、久し振りだな」

獄王の顔が綻んだ。友との再会を喜んでいるように、目を細めている。

「ああ、百万年振りだ。それにしても、酷く傷付けてくれたな」

両肩を撫でる「私」。その直後、切り落とされた両腕は完全に再生した。

「相変わらずの力だな、ロードよ」

「ルナリートとハルメスは、『愛』を主題に生み出されたエファロード。愛する者を守る時、力の制限が消えるようになっていく。深獄は、我々よりも危険な力を持つ魂を封じ込める場所だ。其処に、たかが一人の人間を堕とす必要も無かるう？ 我からの願いで、解放してやってはくれまいか？」

私は、「私」の言葉を理解出来るようになって来た。「私」が私に溶けて行く……

「確かに、女の魂など我にはどうでも良い。だが、お前の願いを我が聞く必要も無い。『お前』は、勝手に中界を侵略したのだぞ！」

「それはかつての過ちあやまち。だからこそ、二百年後の計画で水に流すのではないか」  
計画、それは私が墮天した時に神が言っていた計画。

「……果たして、『愛』を背負ったエファロードが、それを実行出来るかどうか？」  
獄王が重々しい口調で私に問い掛ける。信用されていないようだ。

「それは、シエドロット・ジ・エファロードが最後の責務として行う。安心するが良い」  
「ふ……、聡明なるシエドロットが最後を『計画』で飾るか。良からう。だが女を解放するに際して、一つだけ条件を出す」

じっくりと私を睨め付ける獄王。相変わらずの鋭い眼光だ。

「困難な事ではあるまいな？」

「記憶が継承されつつあるエファロード、ルナリートの力を見せてみよ。その力が、私の影を越えるならば魂は解放する。たまには、私の力を戦いに使うのも悪くない」

獄王の影が、剣を頭上に掲げる。すると、剣に黒い稲妻が集まり、影の鎧へと姿を変えた。この星で最硬度を誇る、闇物質の鎧。剣も勿論、同物質だ。私は深海へ沈んだオリハルコンの剣を手に呼び戻し、構えた。膨大な精神力を受けた剣は白く輝く。

「サタンよ、その姿……、かつての戦いの時と変わらぬな。行くぞ！」

私は、「私」を取り込んだ。制御されない力を持つ私、これが真の第四段階。つまり「記憶の継承」だ。連綿と受け継がれる「エファロード」の記憶。

エファは「始まり」、サタンは「獄王」、そしてロードは「神」。

私は、「神」を継ぐ者だ。

## 第十節 宿世すくせ

「ガキッ！」

私とフェアロットの剣がぶつかり、その衝撃で空間が歪む！ これが私の真の力。

「フィーネの魂を返して貰うぞ！」

私は精神を集中し『炎』を思い描いた。それだけで、半径二百mが炎の海に変わる！ この程度の炎なら『術式』は必要ない。術式は、イメージを具現化させる為のもの。言わば、精神力を術術に変換させる為に必要な言葉であり、神が天使に与えたものだからだ。

「(そんな炎で我を消せると思うか?)」

影が私の背後、かなり遠い場所で呟く。否、これは意識の『転送』だ。影が消える、恐らく私のすぐ近くに来るだろう。ならば……

「禁断神術、滅 (ruin) ー！」

私の周囲に無の空間を発生させる。これで近寄れまい。

「禁断魔術、闇 (darkness) ー!」

私の滅に、影が闇をぶつけてくる! 闇は滅と同じ、無に帰す力だ。

「チヂチ……!」

力が混ざり合い、歪み、周囲の空間を抉り取って消えた。その後には星も海も残らない。私達は超高速で斬り合いを始める! 剣がぶつかれば百 m 程距離を取り、瞬時に間合いを詰める。剣技は対等だが、私には鎧が無い。傷がどんどん増えていく。

私達は生命の始まりから続く者。六十五億年も昔から。幾度争って来ただろう? 私達は、戦う事ではか理解し合えなかった。私達は孤独だ。神と獄王は、他に比肩する者が居ないからだ。自己の価値を見出す為には、神は獄王を、獄王は神を越えようとする以外に無かった。そうやって私達は生きてきたのだ。

だが今の私は違う。たった一人の人間の為に生きているのだ。フィーネの為に!

「光 (sunlight) ー!」

エファロードのみが使える、究極の術。光を凝縮し、小規模な S・U・N を作り出す。燃え盛る炎が光に吞まれ、闇の海は蒸発を始める。「キイーン!」と、甲高い音が胄す。

「闇海 (darksea) ー!」

断罪の間が、くつきりと光と闇に分かれた。獄王の周囲に漆黒の水が集まり、高さ数 k m の波となったのだ。波と言うより、これは最早絶壁だ。

光と、闇の壁が激突する! 光が壁に吞まれたら、私は闇に取り込まれ死ぬ!

「アゴアゴ……!」

闇海の力は凄まじい! 幾ら光に精神力を注いでも、徐々に押され始めている。

「私は、愛するフィーネに再会するんだ。それまでは、死ねない!」

「『愛』を主題にしたエファロードの力はそんなものか? 脆弱にも程がある!」

壁が目の前に迫る! 精神力を使い過ぎて頭が割れそうだ。何故私は勝てない?

「ルナリト、お前には覚悟が足りないのだ。我々神と獄王は力の全て、命の全てをそれぞれの『界』に捧げて生涯を終える。其処にあるのは、『永遠の孤独』。その運命の重さを背負う我に、お前の利他的な『愛』が勝てる筈が無いだろう!」

フェアロットの声が、直接脳に響く。そうだ、ロードもサタンも『界』の為にだけに生き、それだけの為に死ぬ運命なんだ。だからシェドロット、今の『神』も私達の前に姿を現せない。私はそんな運命を背負えるのか?

「(ルナー! フィーネに『永遠の心』を誓ったのを思い出して!)」

リバレス! お前は、本当にいつも私を助けてくれる。どれだけ辛い状況に陥っても、最良の方法で私を励ます。

フィーネは私を信じて死んだ。最後まで笑顔を絶やさずに……。だから私は此処まで来たんだ。……迎えに来たんだ! 君は言った。「寂しいから、早く迎えに来て下さいね」と。

「私は負けない！ 今度こそ、フィーネを守り抜く為に」  
私は目を見開き、剣を鞘に収め、闇に向けて右手を翳した。

「光 (sunlight) --」

術の多重行使だ。壁を押し返す光はそのままに、さっきの光よりも更に凝縮した光の槍を作る！

「キュイン！」

槍が壁を貫く！ 真っ直ぐに影に向かっている。

「グオオ……！」

影の叫び。断罪の間を埋め尽くしていた、光と闇が消失する。影も、もう居ない。

「見事だ……」

獄王の声が響く。だが私は、完全に力を使い果たし意識を失った。

## 第十一節 黙示

翼を失い、銀から赤に戻った髪を揺らめかせ、ルナは中空に浮かんでいる。リバレスはその傍らで表情を曇らせる。獄王は、静かに彼が目覚めるのを待っていた。

「(目覚めよ、ルナリートよ)」

脳に直接響く重い声。瞼が、否、体の全てが重い。何とか私は目を開ける。

「ルナー！ ようやく起きたわね」

リバレスが私の周りを飛び回る。私は宙で横たわっているようだ。獄王と話す為に姿勢を正そうとしたが、上手く体が動かない。翼も、今は出せないようだ。

「無理をするな。エファロード『最終段階』に達していいにも関わらず、あれだけの力を発揮したのだ。それに、我はもう戦う気は無い」

「くっ……、フィーネは？」

声を出すだけで、喉と腹部に鈍い痛みが奔る。力を使い過ぎた反動か。

「ルナリート、お前は神としての力を受け継ぎながら、数奇な運命を背負ったものだな。

シェドロットが行う『二百年後の計画』があるというのに。何故お前は、『愛』を主題に生まれてきたのか？」

「計画も生まれた意味も、私には解りません。唯、私は自分の『心』を信じるのみです」

私がフィーネを愛したのは必然だったが、他人に決められた事では無い。己が生きる道は、己で切り拓くものだ。それが私の真理。

「やはり『計画』の詳細は知らぬか。エファロードの記憶は継承されるが、詳細はお前達二人のエファロードの誕生後決められた事だからな」

計画は、シェドロットの最後の責務で、中界侵略を水に流す程重大なもの。一体？

「計画とは具体的に何を示すのですか？ 私とフィーネに何らかの影響を及ぼすと？」

私がそう訊くと、獄王は目を逸らした。語る気は無いらしい。

「我は約束通り、女の魂を解放しよう。だが、お前が『永遠』の愛を望むならば、近い未来シエドロットに会う事になるだろう」

遂にフィーネが解放されるのだ！ 私の内側から喜びが満ち溢れてくる。しかし、私が現在の神に会わねばならないのは何故だ？

「私がフィーネを愛し続けるならば、私は神の元に行かねばならない……？」

「その通りだ。だが忘れるな。真理を貫く力と心を。例えその道が、シエドロットと相反する物であったとしても！」

その言葉に偽りは無く、悪意も感じられない。エファロードとエファサタンは、憎み、傷付け合うだけでは無く、何処か根底で繋がっている。そう思えた。

「解りました。私は、自分の信ずる道を進みます！ 今こそフィーネを解放して下さい！」

獄王が力強い笑みを浮かべ、頷く。眼下の海から、魂が入った小箱が浮かび上がった。

「転生すれば女の記憶は消え、心は何も無い純粋な状態に戻るだろう。生前にどんな約束をしていたとしてもだ。それでも構わないのだな？」

「はい……、覚悟の上です」

甘い希望なのは解っている。それでも私は、彼女を、彼女との約束を信じる。

フェアロットが小箱を開ける。薄桃色のフィーネの魂がゆっくりと色を失い、やがて消えた……。これで彼女は解放されたのだ。安堵、不安、色んな思いが心を駆け巡り、私の目から涙が零れる。

「女の魂は『魂界』へと送った。二百年後……、新たな人間へと生まれ変わるだろう」

「有難うございます！」

私とリバレスは、フェアロットに深々と頭を下げる。

獄界から早々に去れとの事で、私達は獄王の力でフィグリルまで転送された。二週間前よりも気温がぐんと下がっている。街灯の明かりと、それを反射する雪が懐かしい。

フィーネ、二百年後私は会いに行くよ。生まれ変わった君と、永遠の幸せを掴む為に。だからもう少しだけ、寂しいだろうけど待っていて欲しい。

## 第十二節 交睫

「リバレス、良く頑張ってくれたな」

私はリバレスの頭を指先で撫でる。彼女は私の周りを飛び回り、降り頻る雪を集めた。

「いいえ、大した事はしてないわよー。ルナが頑張ったからじゃない！ それにしても、ルナが『神』の名を受け継ぐ者だったなんて……、ビックリよ」

彼女は集めた雪を私の掌に載せた。それは体温で直ぐに融けたが、私達の関係は変わら

ない。私は私、リバレスはリバレスだ。

「神の子孫だと解つても、私の心は変わらないさ。さあ、神殿へ帰ろう！」

二人同時で微笑み合う。それだけで、私達の思いは通じ合う。

ハルメス兄さんは神殿の前に立っていた。恐らく、毎日外で待っていてくれたのだろう。駆ける私に気付いた兄さんは、全力疾走でこちらに向かって来た。

「お帰り、心配したぜ！ 無事で何よりだ」

兄さんが片手を上げる。私はその手に、力強くハイタッチをした。

その後、神殿の中に入り事の顛末を彼に話した。話を聞いている時の兄さんは、自分の事のように、嬉しそうだった。

「フィーネさんを助ける事が出来て、本当に良かったな！ そして……、遂にエフアロードを知ってしまったか」

エフアロードという単語が出た瞬間、彼の表情が険しくなる。

「はい。私とハルメスさんは、『愛』を主題に生まれた、『神』の後継者なのでしょう？」

「……確かにそうだ。でも、俺は『愛』をするように生まれて来たんじゃない。ティファニーだから愛せたと信じてる」

兄さんは力強く言い切った。私も無言で頷く。フィーネだから愛したのだ。

「さて、ルナ。勿論気付いているとは思いますが、俺達は『本当の兄弟』だ。今日は、フィー

ネさんの解放と、俺達兄弟を祝し、リバレス君を労う会を催そうと思う」

そう、ハルメス兄さんは「血の繋がった」本当の兄弟だ。私達の考えが似ているのも無理は無い。祝勝会、今日ぐらいは羽目を外しても構わないか。

「兄さん、今日は酔い潰れるまで飲みますよ！」

「わたしも負けないからねー！」

私達は思いっ切り笑う。私達は、紛れも無く「家族」だ。

いい夜だった。神殿の屋上で、雪も気にせず三人で騒いだ。旨い料理を食べ、美酒に酔いながら、過去の話やこれからの話に花が咲いた。

一番印象的だったのは、ティファニーさんの魂は、兄さんと同化したと言う事だ。確かに、それならずと一緒居られる。転生して記憶を失う事も無いだろう。だが同化すると、以前のように愛し合う事は出来ない。

兄さんとリバレスが寝静まった後、私は一人屋上に戻る。街の薄明かりが、ひらひらと舞い落ちる雪を淡く輝かせている。

きつと今頃、『ミルドの丘』は純白に覆われている事だろう。此処で約束を交わしたフィーネは、この世界に居ない。二百年後に帰って来るが、あの時のフィーネでは無い。私の頬を一筋の涙が伝う。これは、思い出への涙だ。

「寂しいよ、フィーネ……」

私はボツリと呟いた。すると、雲の切れ間から月が顔を出す。まるで、私の声を聞いたかのように。私は雪の上に力無く座り込んだ。その瞬間、凄まじい疲労と眠気が私を襲う。何とか部屋までは戻れたが、「長い休息」が私には必要だ。

翌朝、私はリバレスと兄さんに「自分の体の状態」について話した。冥界の塔、獄界での激戦で私の体はボロボロな事。エファロードの第四段階に辿り着いたのが急であった上に、獄王の影を倒す為に力を使い過ぎた事。そして完全に回復する為には「光」を浴びられる場所で、千年は眠る必要がある事を。だが私は、フィーネの転生に合わせて二百年だけ休む事を申し出た。神や獄王の言う「計画」も気になるからだ。人間界で戦う兄さんには申し訳無いが、今の私は戦う事は愚か、普通に生活する事すら儘ならない。

「本当にごめんなさい！ 折角、兄さんと一緒に戦えると思っていたのに、こんな所で！」  
「気にするな。二百年ぐらい、あつという間だぜ」

兄さんは笑って肩を叩いてくれた。次に目覚めた時は、必ずお役に立ちます。

「はい！ 二百年、お願いします。もしフィーネの転生が早まった時は……」

「解ってる。俺が見付けたら、守っておくよ。だからしっかり体を休めるんだ。心配しなくても、お前の未来は俺が必ず守ってる」

私は深々と頭を下げて礼を言う。嬉しくて目の前が滲んだ。兄さん、恩に着ます。

私達はたった二人の兄弟にして、史上初の「二人のエファロード」。神は通常、配偶者を持たず一人しか子を残さない。神は単独で子を創れるからだ。それなのに、父シエドロットは二人の子を生み出した。しかも、「愛」を主題として女性を愛せるように。

愛を主題とする二人のエファロード、それには深い意味があるのだろう。だが私も兄さんも、意味などには囚われず、唯愛する者の為に全てを懸ける。

「二百年後には必ず、誰もが平和で幸せになれる世界にしましょう！」

「勿論だ。今から、お前を長期間眠れる安全な場所へ『転送』する。ところで、リバレス君はどうするんだ？」

刹那の逡巡、だが彼女は私の肩の上に飛び乗り、予想通りの回答をする。

「わたしは、ルナと一緒に眠ります」

私達は、フィグルルの東百kmの海上に浮かぶ「眠りの祠」に転送された。兄さんの、強力な結界で守られた島だ。其処で私は、眠る為の特別な神術を発動させる。

「おやすみ、リバレス。そして、フィーネ……」

「また寝坊したら、起こしてねー」

二人は暖かな光に包まれ、やがて眠りの世界へと誘われた。幾千の朝陽と月光を浴びても目覚めない、深い眠りの世界へ。

## 第一節 流転

## 第四章 新世界

ルナトリバレスが眠りに就いて五十年後の天界。神殿の屋上、かつて裁判所だった場所に全ての天使が集結していた。ある、重要な「決定」を聞く為である。

「只今を待ちまして、獄界との和平策である『新生・中界計画』の実行責任者及び、実行日時が決定されました！」

死を司る間の司官ノレッジが声を張り上げた。聴衆は、静かに彼の声に耳を傾けている。ルナの墮天後、天界では司官が「若い世代」に任される事となった。死の司官ノレッジ、力の司官セルフアス、そして神術と命の司官ジュディアだ。もしルナがジュディアを傷付けていなければ、間違い無く彼が天界の指導者になっていただろう。

しかし歴史は不可逆で、失われた信頼は戻らない。

『『新生・中界計画』の実行責任者は、私達三人の司官。私達を統括する最高責任者は、『神』であるシエドロット様です！』

翼の半分が欠け、肩に惨烈な傷跡が残るジュディアが、ノレッジの言葉を継いだ。

「実行日時は、百五十年後の四月四日。午前零時です！」

ジュディアの肩の傷を庇うように優しく擦る天使、セルフアスが聴衆を見渡す。彼は、若いながらもジュディアと結婚した。大怪我をしたジュディアを、献身的に看護したのが切っ掛けである。セルフアスの誠意で、ジュディアの心は氷解したのだ。

この集会を開いたノレッジは、ルナの不在で天界一の頭脳を發揮した。学力テストでは、全て一位を維持。彼が恐れる存在はもう天界には居ない。

「かつての英雄ルナリート、及びハルメス。二人のエファロードは、最早私達の仲間ではありません！ 私達の主は唯一人、シエドロット様です。共に戦いましょう！」

ノレッジが、一際大きな声を張り上げる。割れんばかりの拍手喝采。

一般の天使は知らない。人間が自分達と同じだと言う事、そしてその存在意味を。だからこそ、躊躇い無く「計画」は決定し、実行されるのだ。獄界と天界との間に平和を齎す、シエドロット最後の責務である計画が。

計画が実行される時、熾烈な運命の螺旋はあらゆる者を呑み込む。

百年後、人間界の「フィグリル王国」皇帝ハルメスは、自室の窓辺に寄り掛かり呟く。  
「……後、百年か。俺が皇帝になったと知れば、あいつらは驚くだろうな」

この百年で、人間界は著しく進歩した。産業の発展、整備されていく街。そして、人工は数倍に膨れ上がった。それを支えたのは皇帝ハルメスの力と、強力な武器を作り出した

人間の科学力だ。人間は、激化する魔の侵攻に対抗するべく、数々の武器を生み出した。魔の固い皮膚をも破る、新型の爆薬。それを応用した「銃」や「大砲」、「爆弾」などだ。

だが、ここ数年魔の侵攻が緩やかになった為武器は余り、魔と戦う為の兵は職を失う。そんな元兵士を統率し、一大国家を作り上げたのが「リウォル王」である。王はフィグリル皇国を目の敵にし、度々攻撃を繰り返している。どちらの国も、「交易」が主産業だからだ。王の目的は、アトン地区に統一国家を作り、いずれは世界の覇権を握る事である。ハルメスがリウォル王国を潰すのは容易いが、それは彼の願う所では無い。

「人間達は解っていない。百年後、どんな惨劇が繰り返り広げられるか。内輪揉めしている場合じゃ無いんだ！」

ハルメスが大理石のテーブルを力任せに叩く。テーブルは一瞬で粉々になった。彼はリウォルに対して、何度も和平の申し入れをしたが、聞き入れられる事は無かった。

そして彼は知った。百年後に実行される「計画」の詳細を。天界から視察に来たノレッジに伝えられたのだ。ノレッジは彼に進言した。「計画に協力すれば、天界に戻る」と。しかし人間を、ティファニを愛するハルメスが、それを受け入れる筈も無い。

「ルナ、早く目覚めてくれ！ お前が居れば、リウォルを鎮められる。そして、人間界を一つにする事も可能なんだ」

彼はバルコニーに出て、沈み行く返照を眺める。それは訪れる長い夜と、安息の朝の遠さを物語るような、虚しい色に思えた。

ルナと獄王の戦いから百五十年の歳月が流れたこの日、獄界の宮殿前にある「サタン・スタジアム」には、三十万もの魔が集結し、中央に立つフィアレスの声を聞いている。

「お前達、計画実行までは後五十年だ！ それまで、存分に力を付けておけ！」  
彼の声は魔術で増幅され、獄界中に響き渡った。

「ウオオ！」  
歓喜の叫びがスタジアムを揺さぶる。無理も無い、彼等の悲願が遂に果たされるのだ。

この百五十年間、特に五十数年前からは、魔の戦力を人間界侵攻に割かなかった。「計画」に向けて温存する為だ。魔は自己の鍛錬に日々を費やした。それはフィアレスとて例外では無い。彼はルナに負けた自分を悔い、死に物狂いで己を練磨しているのだ。

この星で最強の力を持つのは、「ロード」では無く「サタン」であると証明する為に。

ルナは長い夢を見ていた。眠りに就いて間も無く二百年が経過する。

「ルナさん、ルナさんっ……」

暗闇に浮かぶ薄桃色の光が、私を呼んでいる。

「誰だ？」

私は動く事も出来ず、光に向かって問いかけた。此処は何処だ？ この声はまさか……

「フィーネですよ！ 私は、生まれ変わったんです」

「フィーネ、会いたかった！ でも、今私は動けない。こっちへ来てくれ！」

涙が止まらない！ 彼女に近寄りたいが、何故か体が動かない。やがて、ぼんやりした光は鮮明な線を描き、はっきりとフィーネの姿になった。

「私も会いたかったですよ。ずっと、ずっと。でも……、これ以上傍には行けません」

フィーネは俯き、雫がポロポロと零れ落ちている。どうしたのだ？

「フフ……、相変わらず馬鹿ね」

ジュディア！ 彼女が突如現れ、私とフィーネの間に立ちはだかる。

「貴様……、今すぐ此処から失せろ。さもなければ、息の根を止めてやる！」

私はそう叫びながらも、体に全く力が入らない。神術も使えそうに無い。

「獄界に墮としても戻って来るなんてね……。今度は魂を砕いてやるわー」

「止めてくれ！」

私の懇願は通じず、凄まじい光熱で視界が白に染まっていく。魂砕断だ！

「キヤアア……！」

光の刃は容赦無く、彼女の体を切り刻む！ 視界は、白くフェードアウトしていった。

「フィーネ！」

私は喉が潰れるぐらいに、彼女の名前を叫んだ。すると、徐々に白から見慣れた風景にフェードインしていく。此処は眠りの祠。そうか、私は眠っていたのだ。ならば、さつきのは夢か。最悪な寝覚めだった。冷や汗が背中を流れる。

「うーん……、おはようルナ。あれ、顔色が悪いんじゃない？」

私の叫びで、彼女も目を覚ましたらしい。暢気に欠伸あくびをしながら伸びをしている。

「おはよう。何だか……、胸騒ぎがするだけだ。それより、二百年は過ぎた。行こう！」

体は随分楽になった。精神を集中すると、簡単に光の翼を出す事が出来た。これなら戦えるだろう。急がなければならぬ。フィーネを見付けるのも、兄さんと共に戦うのも。そうしなければ、大変な事になるような予感がするのだ。

「うん、行きましょー！」

リバレスが肩に乗り、明るい声を出した。眠っていただけなので当たり前だが、二百年経っても、ちっとも変わっていないな。

私達は祠を出て、光の翼で空高く舞い上がる。気温は低い、久々に浴びる風が気持ち良い。時刻を確認すると、午前九時だった。朝陽が眩しい。

二百年経った、新しい世界。それはどんな表情で私達を迎えるのだろうか？

## 第二節 蠟書ろうしょ

ルナとリバレスは、「転送」でフィグル神殿の屋上に戻った。街の風景は二百年前と比較して随分変わっている。街の色が白亜な事と、神殿の外観以外は全て変わっていると言っている。街は大きくなり、家屋が増えた。しかも、どれもが三階以上の高層建築で、人口増加が夥しいのが解る。また、街は高さ十m程の厚い外壁に囲われ、百m毎に見張り台まで付いている。街の中央には民家とは桁違いの巨大な城がある。

「うわー……、随分変わっちゃったのねー！」

リバレスが目丸くして声を上げた。無理も無い。私も正直驚いている。

「まるで、戦時中だな」

見張り台には白い服を着た兵士、街の交差点にも「筒状の武器らしきもの」を持った兵が目を光らせている。一体、人間界に何が起きたと言うのだろうか？

「あっ！」

屋上を飛び回っていた彼女が、突然私の足元を指差す。これは……

「手紙か。兄さんからだ！」

彼は、私達が此処に戻って来る事を予期していたのだろう。蠟で封がされたこの手紙は、神術で保護されているが、長い年月を経ている為、変色している。私は急いで開封した。

「最愛の弟ルナへ

まずこの手紙を書いたのは、お前が眠ってから百八十年後に書いたものだ。この手紙を此処に残したのは理由がある。それは、この手紙が無いとお前は俺に会えないからだ。

現在、人間界は魔に脅かされるだけで無く、人間同士の争いも勃発し混沌としている。しかし俺一人の力では、全ての平和的解決は出来ないのが実状だ。

もう直ぐ、恐ろしい『計画』が実行されるといふのに――

これを見たら、急いで城まで来て欲しい。だが、城は兵で固めているから部外者は誰も入れない。城の上空にも俺の結果が張られている。だから、お前が来れるように地下水路を作った。詳しくは地図を見てください。話す事が山程ある。一刻も早くお前の力が必要だ！

兄であるハルメスより」

読み終えた瞬間、私は手紙を握り締めて神殿から飛び降りた。急がなければ！

「ルナ！ もう、待ってよー！」

私に追い付き、リバレスは指輪に変化する。高さ二十m程の屋上から飛び降り、尋常では無い速度で走る私は、人間からは異常に見えたのだろう。沢山の兵が追って来る。

「止まれ！ 止まらなければ撃つぞー！」

私は兵を無視し、地図通りに走る。水路は城に続くこの坂を登った先のようにだ。だが、坂の上には十数名の兵が居た。後ろには三十名程。一様に筒状の武器を私に向けている。

「私は、『ハルメス兄さん』の弟だ。邪魔をしないでくれー！」

白い戦闘服を着た兵が私を取り囲む。私の言う事など聞いてはいないようだ。

「ドンッ！ ドンドンッ……！」

突如、兵の筒が一斉に火を噴いた。筒の先端から、金属の破片が飛んで来る。

「キンキンッ……！」

咄嗟に私は剣を抜き、破片を叩き落とす。しかし幾つかは私に命中し、皮膚を軽く抓つかまれた程度の痛みを覚える。兵は一瞬呆気あっけに取られていたが、再び筒を私に向けた。

「私は敵じゃない。止めるんだ！」

私は、全ての兵を「衝撃」の神術で弾き飛ばした。誰も立ち上がれないようだ。

「(ルナー、やりすぎよ!)」

「(あれでも、限界まで力を抑えたんだ！ 制御されない力と言うのも問題だな……)」

その後、私達は地図通りに進み水路の入り口に辿り着いた。途中、城の外堀を潜る必要があったのには驚かされた。入り口の神術で作られた封印を、私が解除する。

地下水路は、地上からの光が殆ど射さず、膝の上ぐらいまで水が流れている。水路の幅、高さ共に二mと言った所だろうか。外敵の侵入防止の為か、道は入り組んでいる。

「水が冷たいな」

「うん、寒いわー。それにしても、この通路は暗いわね、えいっ！」

元の姿に戻ったリバレスが、「結界」に「焦熱」を封じ込めた球状の光源を作り出す。

「器用だな。これで、迷わずに済みそうだ」

暫く歩くと、水路が途切れて大理石の床に変わった。突き当たりにある扉の隙間から、僅かに光が漏れている。私は躊躇う事無く扉に手を掛けた。

### 第三節 幻夢

フィグリル城の厨房では、一人の少女が料理の下拵しつけえに追われていた。若干十九歳にして料理長を務める、「シエルフィア」である。

肩の下まで伸びる、金色で絹よりも滑らかな髪。後頭部に付けられた、水晶で出来た小さな花の髪飾りも目を惹く。華奢な腕にも関わらず、動きは力強く無駄が無い。

何より特徴的なのは、この世の闇を超越した純粹さと強さを秘めた、茶色で大きな瞳だ。

其処には、「宇宙の真理」さえも刻まれているかのようである。

彼女はふと、「何か」違和感を覚え、厨房の壁を凝視した。壁が動いている。

「あなたは、誰！」

壁の向こう側から、赤髪の男性と小さな妖精が入って来た。魔物でも、リウォールの兵でも無い。目を見る限り悪い人じゃ無さそうだけど、怪しいわ。

「私は敵じゃ無い！ 私の名はルナリート、ハルメスさんの弟だ」

彼の目は真剣だ。嘘を言っているようには見えない。でも安易に信じる訳にもいかない。

「皇帝の弟様ですか。確かに、目は皇帝と似ていますね。しかし、皇帝の弟ともあろう方が、どうしてこんな場所に居るのです？」

「兄さんは皇帝なのか！」

弟なのに、兄が皇帝なのを知らない筈が無いわ。

「やっぱりあなたは、侵入者！」

この厨房には他に誰も居ない。早く城の兵に伝えなくては。私は駆け出す。

「待ってくれ！」

左肩を掴まれた。凄い力！ こんな力は人間じゃ無い。怖い、涙が出て来た。

「放して下さい！」

侵入者は困惑した顔で、私を放す。私が駆け出そうとした、その時だった。

「動くな！」

壁の向こうから五体の魔物！ まさか、この侵入者が手引きしたの？

「魔物を連れて来るなんて……」

私は声を振り絞りながらも、足が竦んでその場から動けなくなつた。

「俺達は上級魔。お前ら人間がどう足掻いても、足元にさえ及ばん。俺達は、ハルメスを殺しに来たのだ！」

「ハルメスは、人間界を侵略するのに一番目障りだあ！」

黒い翼から不快な音を出しながら、魔物が叫んでいる。皇帝が危ない！ 早くこの場から動かないと。赤髪の侵入者が剣を抜く。一体、何をやる気なの。

「お前達は、私の事を知らないのか？」

侵入者の髪が銀色に変わった。目も蒼から赤へ。厨房に突如、旋風が巻き起こる。

「その容姿、力。貴様は、獄界を荒らし回ったルナリート・ジ・エファロード！」

「これは好都合だ！ ルナリートを殺せば、『あの方』より多大なる褒美が出るぞ」

魔物がどよめいている。獄界、あの方、解らない事だらけだ。でも、どうやら侵入者は魔物に命を狙われているみたい。と言う事は、侵入者は人間の敵では無いのかも知れない。

「君は早く逃げろ！ 此処に居るだけで、殺されるぞ」

この人は私を心配している。やっぱり味方だ。

「あなたは、どうするんですか！」

「私はこいつら如きに負けはしない。だから早く、私の帰還を兄さんに伝えてくれ。ルナリートが帰って来たと！」

彼に私は背中を押された。それで私の足はどうか動き、私は厨房を出る。でもこの人が心配で、厨房の出口からこっそりと見守る事にした。

「兄さんと私を殺すと言う以上、覚悟は出来ているだろうな？」

「覚悟するのは貴様等だ、死ね！」

ルナリートさんと、魔物の声が聴こえた直後には全員の姿が消えた。轟音と共に厨房の中が壊れていく所を見ると、目にも止まらぬ速度で戦っているらしい。

料理の下拵えは、諦めるしか無さそうだ。

「神光！」

ルナリートさんの声の後、厨房は真つ白な光に覆われた。暴風で私は後ろに倒れる。

「ギャアア……！」

耳障りな声、魔物は死んだの？ 私が再び厨房を覗くと、今度は黒い煙が厨房の中に充満している。その中で怪しく光る双眸！ 魔物が生きている。そう思った直後、双眸の主は私に飛び掛り、私の首を掴んだ。殺される……

「クククッ、この女を殺されたくなければ其処を動くな！」

「外道が……」

私は人質……。彼の言う通り逃げなかったから。この人は強いのに私が迷惑をかけてる。

「剣を放して其処を動くな！」

魔物が私の首に鋭い爪を突き付ける。初めからルナリートさんを信じていれば……

「言う通りにするから、その子を放せ」

彼は剣を床に放り投げた。「カシヤン」と言う金属音が耳に響く。

「ルナリートさん、私の事など構わず逃げて下さい。貴方はこの世界に必要な方です！」

私は魔物の爪を握る。直ぐに、掌から血が滴り落ちた。早く逃げて！

「人間の少女は皆、こんな風なのか？」

「ハルメスさんも、粋な計らいをするわねー」

ルナリートさんと妖精が喋っている。何の話をしているのかは解らないけれど。

「喋るな！ この娘を殺すぞ」

魔物の声で二人は口を閉じ、魔物を睨み付けた。研ぎ澄まされた刃物のような鋭い視線。

「それで良い。今から俺の炎で焼き尽くしてやるから、動くなよ！」

魔物が大口を開き、其処から赤黒い炎が滲み出す。熱い！

お願いだから、私の為に死なないで！ 嫌なの、誰かが「私の為に死ぬ」のは！

「死ねえええ！」

「嫌ああ……！」

厨房に居る二人に向けて炎が放射された！ でも……

「死角を増やしたのが命取りだ」

二人はいつの間にか魔物の後ろに居た。そして、ルナリートさんが掌から光を放つ！

「ファイアレス様ああ……！」

魔物は塵と化した。何だろう、この感覚は。私は、「以前にも」赤い髪の人が魔物と戦う所を見た事があるような気がする。ううん、それだけじゃ無い、私はルナリートさんを知っている！ 何度も夢の中に出てきた人だ。夢の中では、はっきりと顔が解らなかつたけれど、今はこの人だと確信出来る。

「おい、大丈夫か！」

「え？ は、はいっ！ あなたが無事で良かったです……」

上の空だった。そう言えば、私は手を怪我していたんだ。

「手を見せてくれ」

恐る恐る手を出す。痛い……。こんな手じゃ、もうピアノは弾けないかも知れない。でもそんな事はどうでも良い。この人が助かったのだから。

「何て無茶な事を……。これに懲りたら、二度と魔には近付くな！」

彼が私の手を握る。温かく「懐かしい手」。懐かしい？ さっきから私は可笑しい。どうしたんだろう。あれ、手の傷が塞がっていく。何て素晴らしい力なのだろう！

「あ……、ありがとうございます！ 申し遅れましたが、私はシエルフィアです。この城で料理長を努めています。さっきは、疑って本当に申し訳ありませんでした。貴方が皇帝の弟様である事、信じます！」

私がそう言うと、ルナリートさんは微笑んだ。胸が高鳴る。その後、皇帝の居場所を伝えると、彼は「光り輝く翼」を開いて飛び立った。皇帝は吹き抜けの一番上の部屋に居るからだ。

彼が飛び立った後も、私はその場を動けなかった。手の温かみを忘れなくなかったから。

#### 第四節 籌策

「ルナ、お帰り！」

部屋の前に立つと、兄さんが「バンッ」と扉を開け、私を抱き締めた。二百年前より少しやつれた顔。申し訳無い気持ちで一杯になる。

「兄さん、長い間お待たせしました！」

「ああ……、大変だったぜ」

兄さんは泣いていた。私にとっての二百年は眠りながら過ぎた刹那の時間。しかし、兄さんにとっては長い長い時間だったのだろう。私達は、暫く再会の喜びに浸っていた。

「ところで……」

兄さんはさっきの騒動に気付いていた。駆け付けようとした時には、既に私が魔を倒し

た後だったらしい。だから、私が扉を開く前に出てきたのだ。

「それはそうと、シェルフィアはなかなか良い子だろう？」

さっきの少女、否、女性と言うべきか。確かに良い子だが、何故今それを私に訊く？

「……そうですね。それがどうかしましたか？」

「はははっ！ そんな質問をするのが、やっぱりお前らしいな。彼女は戦災孤児だ。元々は家族でミルドに住んでいたんだが、一家でフィグリルに引越して来た。現在のミルドは金属工場から出る煙で空気が悪いから、両親がシェルフィアの健康の為に移住を決断したらしい。しかし、フィグリルで『戦争』に巻き込まれ両親は死んだ。彼女が七歳の時だ」

それを兄さんが引き取ったと言う事か。だがその話をする真意が汲み取れず、私は首を傾げた。すると、兄さんだけで無くリバレスまで笑い出す。

「ハルメスさん、ルナはずっと鈍いんですよー」

「そのようだな。その話はまた後にして、お前に話す事がある」

彼の目が鋭く光る。柔らかい表情は瞬時に消えた。手紙の内容について語るのだろう。

「はい、どんな話でも聞きましょう」

私達は兄さんの部屋の中に入った。豪華な部屋だ。金銀宝石で装飾された椅子、シルクのベッド、天井には硝子のシャンデリア。そして、穏やかな目をした美しい女性の彫像。大理石の円卓を私達は囲む。兄さんは深呼吸した後、話を始めた。

兄さんが、人間達に推薦されて「皇帝」になった事。人間界の文明が高度化した事について聞いた。その中で、武器も大いに発達したらしい。さっき兵士が私を攻撃した「銃」と言う武器もその一つだ。

「本題に入ろう。さっき俺は『戦争』と言う単語を発したが、これは『人間同士』の争いを意味する。強い武器を手にした人間が、富を掌握する為に『リウォル王国』を造った。その王国はこの『フィグリル皇国』に宣戦布告をし、今も攻撃が続いている。もう戦争は百年以上にも及ぶ」

兄さんは歯を食い縛り、円卓を叩いた。大理石に亀裂が入る。

「何故そんな事に？ 兄さんの力があれば、そんな人間を押さえつける事など容易でしよう。それに、人間どうしで争っている余裕など無い。戦うべき相手は魔の筈です！」

「……その通りだ。俺が力を使えば、一つの王国を滅ぼすのは容易い。しかしそれは根本的な解決にならないんだ。別の人間が同様の考えを持ち、戦争を起すだけだ。だからこそ全ての人間が納得いく形で、平和的解決をするしか無いんだ」

尤もだ。武力で押さえつけると、反発心を植え付け、いずれは報復される。それに、人間を愛する兄さんが、人間を滅ぼす事など出来はしない。

「悪い事を考える人間も居るもんねー……」

リバレスが項垂れた。私もつられて俯いてしまう。

「それだけならまだ良かった。戦争は、ルナが居れば必ず解決出来るからな。一番深刻な問題は別にある」

私が居れば？ その意味は後で聞くとして、深刻な問題、まさか。鼓動が早まる。

「……『計画』ですか？」

「その通りだ。計画、それは現在の神が打ち出した獄界との和平策……。それがどんなものか解るか？」

兄さんの声のトーンが下がる。瞳には暗い色が宿っている。

「……想像していた事とは違う事を願います」

私は祈るように目を閉じた。最悪の「光景」が脳裏に浮かぶ……

「恐らく、お前が思う最悪以上の事だ。百年と少し前から魔の侵略は小規模になった。皮肉にもそれが、人間同士の戦争を起こす一因にもなったのだがな。侵略の小規模化は、計画実現の為に力を温存しているからだ」

其処で兄さんは水を飲んだ。私は<sup>かたず</sup>固唾を呑んで続きを待つ。

「計画には全ての天使も参画する。これは、百年前に『死の司官ノレッジ』から知らされたものだから極めて信憑性が高い。計画は、今日から数えて約三ヵ月後の四月四日に実行に移される。天使、魔、そして神が動くこの計画の名、それは……」

空気が張り詰める。私達は呼吸さえも出来ない。

### 「新生・中界計画だ」

まさか……、否、司官になったノレッジが伝えに来たのだ。偽りは無いだろう。それに、神は私に「計画の指揮を担え」と言っていた。

「兄さん……、聞きたくはないですが、計画の詳細は？」

「……文字通り、人間界を中界として再生させる計画だ。人間界に居る人間が……、全て抹殺される！」

その言葉の直後、私達三人は同時に円卓を叩いた。轟音と共に円卓は砕け散る。

「そんな事は絶対に許さない！ 私が、否、皆で必ず阻止しましょう！」

私達の思いは一つだ。天界の為に生まれた人間を、天界の為に消すなど到底<sup>とって</sup>許容出来ない。人の命を何だと思っている？ 魂は、天使も人間も変わらないと言うのに。

「ルナ、そしてリバレス君。共に戦おう！ そして俺達が最後に目指す姿、解るか？」

崩れたテーブルの上で私達は手を取り合う。命を懸けて戦う証。

「解っています。私達が目指すのは、全ての者の幸せです」

「人間、天使、魔、神、獄王、天翼獣、隔たり無くねー！」

皆、同時に頷いた。今後の方針は決まった。後は……

「兄さん、リバレス。戦いの前に私は、どうしてもやるべき事が」

「解ってる。フィーネさんはちゃんと転生してるぜ！ 獄王が、気を遣って早めに転生させたのかも知れないな。転生してもう十九年が経ち、しかもこの街に居る」

その言葉が終わるや否や、私は部屋の窓を開き飛び出した。落下中に光の翼を開く。

「フィーネ、会いたかった！ 今行くからな」

空から捜せば見付かる、会えば解る。そう信じて、私は皇国の空を舞う。

## 第五節 傾慕<sup>けいぼ</sup>

懐中時計は午後十時を指していた。今日は一月十日、眠りに就いて丁度二百年が経過した事になる。だが私は、まだフィーネを見付けられずにいた。

二百年前は雪が降っていたな。私は、空で煌く月と糠星を見上げる。今日一日空から彼女を捜し、酒場で聞き込みをした。それでも有力な情報は得られていない。力を解放し感覚を研ぎ澄ましても、街の中に彼女の魂は感じられなかった。

私は一旦城に戻る事にする。何か見落としがあるのかも知れない。私は空を舞い、城の上空に差し掛かる。城の境界は消えていた。私がすんなり戻れるようにしてくれたのだろう。室内の明かりと、月影が交差するバルコニーが目に入ったので、其処に降下した。

「あつ……、お帰りなさいませ」

皎月こうげつの光を受けて、透き通るように白い顔……。バルコニーには、冷たい夜風に当たっているシェルフニアが居た。彼女は昼間のエプロン姿とは違い、フリル付きの白のブラウス、サイドに黒のリボンが付いたライトグレーのレーススカートを着ている。どうやら此処は彼女の部屋のようなのだ。別の入り口から入り直そう。

「ただいま。邪魔したな、直ぐに出て行くから」

私はバルコニーの手摺を掴み、再度翼を開く。すると、彼女が私の服を引っ張った。

「邪魔じゃありません……。此処に居れば、あなたに会えるような気がしたんです」

仄かに頬が赤い。彼女は俯く。滑らかな金の髪を揺らしながら。私は翼を消した。

「……そうか。何か私に用があつて待っていたのか？」

私は無難な質問を選ぶ。私にはフィーネが居るからだ。

「いえ……、もう一度ルナリートさんに会いたかったです。あつ、ルナリート様ですわね」

「朝の礼なら十分だ。私は、自分の思う通りにやっただけだからな」

早く此処から立ち去りたい。だが、彼女は顔を上げて私の目を直視する。

「私は、あれからずっと胸が高鳴っています。あなたに会いたくて、お話がしたくて……」

その事ばかり考えていたら、自然と此処に足を運んでいたんです」

彼女の体は小刻みに震えている。私は胸が痛むが、厳しい事を言うしか無い。気休めの優しさで傷付けるよりはマシだ。

「私の事を想うのは止めた方がいい。私には、二百年前に約束した人が居る」  
「えっ……」

震えが大きくなる。彼女は俯き、目からは綺羅星きらぼしのような雫が零れ落ちた。  
「……そう、ですか。でも、二百年も前ならその人は居ないんじゃないですか？」

「ああ、その人は死んでしまった。でも、また生まれ変わったんだ。だから私は、その人を見付けなければならない」

不思議と私は多弁だった。この少女には、さつき出会ったばかりなのに。何処と無く、雰囲気はフィーネに似ているからだろうか。

「早く……、見付かるといいですね。あなたが想う人、きっと素敵なんだろうなあ」  
「ありがとう。本当に済まない」

彼女の潤んだ瞳に月華が宿る。その儂い光に、胸を締め付けられる思いがした。

「いいんですよ、私の方こそごめんなさい。貴方は皇帝の弟様。そして、この世界にとって大切な方。私にとって『夢』の人……」

彼女は手摺を両手で掴み、遠くを眺めている。頬に流れる一筋の涙が煌く。私は暫くそれに付き合う事にした。私に出来るのはその程度だ。

「ふふっ、こんなに寒いと、ミルドの丘は雪で真っ白かも知れませんね」

そう言えば、彼女はミルドが出身だと兄さんが言っていた。まさか……

兄さんが彼女の話をした事、兄さんとリバレスが笑った事、街でフィーネを捜しても見付からない事、そして彼女が私に好意を寄せている事。それらが導く答えは一つ！

「フィーネ」

私はその名を呼ぶと、シエルフィアの顔色が変わった。目を丸くした、驚愕の表情。

「えっ……、何故あなたがその名前を？」

「フィーネ！」

私は彼女の手を取る。だがそれは直ぐに振り解かれた。

「止めて下さい！ フィーネは、私の夢に度々現れる女性。その名前を聞いたら、私の胸は壊れそうならい締め付けられるの！ 自分が自分で無くなってしまいたいそうで」

シエルフィアは頭を抱えて首を振る。彼女は間違い無くフィーネの生まれ変わりだ！

私は苦しむ彼女を抱き締め、「フィーネ」ともう一度呼んだ。

「ああ……！！」

一際高い声を上げ、彼女は糸が切れたかのように気を失った……

「しつかりしてくれ！」

私は彼女に、治癒の神術を施す。だが効果は無い。私はどうすれば良い？

「やっと気付いたか、ルナ」

右往左往する私の元に、兄さんとリバレスが現れた。私は兄さんに詰め寄る。

「シエルフィアはフィーネです！ でも私は、どうすれば良いのか解りません……」

「恐らく彼女の中には、シエルフィアとフィーネさんの魂が同居している。しかし、フィーネさんの魂は殆ど表に出て来なかった。唯一、夢の中だけは例外だったようだが。そして、お前はフィーネさんと呼んだ。だから彼女は葛藤している、と俺は考える」

葛藤により安定を失い、気絶したのか。ならば私は、彼女の為に何が出来る？

「ルナー、『永遠の心』を忘れたの？ 信じるしか無いでしょ！」

「それでも、必ず戻る保障なんて無いじゃないか！」

リバレスの言う事は正しい。だが、私は感情を抑えられなかった。不安なのだ。

「お前は、愛した女性を信じられないのか？ お前達が信じ合っていたから、フィーネさんの魂は戻って来れたんだろう」

兄さんが私の肩を強く叩く。そうだ、彼女はちゃんと戻って目の前に居るじゃないか。

「……はい、弱音を吐いてすみません。私は彼女の意識が戻るまで、ずっと傍に居ます」

二人が頷く。私は彼女を抱えて、ベッドに運んだ。魔まされている彼女の手をギュッと握り締める。熱い。

フィーネは、最後に「おやすみなさい」と言った。それは離別の言葉じゃ無い。だから、私は君が目覚めたら真っ先に「おはよう」と「お帰り」を言うんだ。それから二人で、もう一度時を刻もう。

## 第六節 錯綜

此処は何処なの。私は……、誰？

私は、何の明かりも無い暗闇の中を一人で歩いている。ううん、空間に浮きながら泳いでいると言った方が良いかも知れない。

私は「シエルフィア」の筈なのに、何故か違う気がする。正確には、それでは「不十分」なのだ。私は「シエルフィア」だけど、それが私の全てじゃ無い。

手探りで闇の中を進む。どれぐらい進んだかは解らない。いつの間にか手を伸ばせば届く位置に、「小さな光」が浮いていた。そっと触れて見る。光が強まり光景が映し出される。

「化け物……。ルナさん、あなたも魔物なんですか？ 魔法を使うなんて。それに、妖精？」

一人の少女が、洞窟の中でルナリートさんと妖精に叫んでいる。フィーネ。彼女が、何度も私の夢に現れるフィーネだ。でも今まで、こんなに鮮明な光景を夢で見た事が無い。

ルナリートさんも、以前の夢ではぼやけていた。

場面が切り替わる。今度は夕焼けの丘だ。これは、ミルドの丘。街並みは古いけれど、この丘は今も変わらない。あれ、丘の上にある「大樹」が無い。この頃には無かったのか。

「違います。私が……、魔物を倒しに行くんです！ 例え一匹でも倒せれば、その分誰かが救われるから」

いつの間にか、その言葉は私が発していた。目の前に居る、ルナリートさんに向かって。そうだ、お父さんが死んで、私はルナさんに頼んだのだ。戦って欲しいと。あなたは優しくかった。私の我儘わがままを聞いてくれて、一緒に旅をした。

違う！ 私はシエルファイアだ。そんな過去は知らない。心を蝕ほじむのは止めて！ 私はフイーネから離れる。また場面が変わった。今度は、共同墓地。

「例え脆くても……、この世界に生を受けるのは素晴らしい事なんです」

フイーネ。あなたは、父母の墓前でそう言った。悲しみに耐えながら。その気持ち、私は良く解る。でもあなたは私と違って強いわ。

『私は強くない。唯、私を大切にしてくれた人が居てくれたから。お父さんやお母さん、そして、ルナさん』

フイーネが私の方を見て、話し掛けて来た！ こんな事は初めてだ。

「私はシエルファイアよ。どうしてあなたは、私の心の中に居るの？」

周りの風景が闇に戻り、フイーネの姿だけが残った。この空間には二人以外に何も無い。

『私は二百年前に死んだ。でも、ルナさんのお陰でシエルファイアとして生まれ変わったの』  
悲しみが滲んだ双眸が私を見詰める。どうして？

「シエルファイアは私よ！ 私はあなたのものじゃ無い」

『そうね。私はあなたを所有している訳じゃ無い。でも私はあなたで、あなたは私なのよ。より正確に言うなら、フイーネの心が核で、それを包んでいるのがシエルファイアなの。だから私達は離れられない。二人で一つの魂だから』

彼女が微笑む。一点の曇り無く。そんな事を言われても、急に信じる事など出来ない！

「私は、私なの！ フイーネなんかじゃ無い。私から出て行って！」

『フイーネを拒めば、私達は消えるわ。落ち着いて。今からあなたに私の全てを見せる』

彼女がそう言って、私の中に入って来た！ 体内に熱湯が注がれたみたいに熱い！

熱と、頭痛で私の意識は混濁する……

何だろう、この感覚は。懐かしく、愛おしい。自分が、ようやく自分になった感覚。

「どうして……、どうして争いは無くならないの？ 何故殺し合わなくちゃいけないの？」

魔物によって廃墟と化した村で、私は泣いていた。理不尽に命が奪われたから。

「君はよくやってるよ。今直ぐに、争いが無くならないのは仕方無い。それを変える為に、

私達は此処にいるんだろ？」

ルナさん、あなたはそうやって、いつも私を慰めてくれました。それが凄く心強かったんです。思い出すと、心がどんどん満たされます。

レニーでの祝宴、私の作った「辛いトースト」を美味しいって言ってくれた事。本当に楽しくて、嬉しかった。

そして、あなたが心配で駆けつけたリウオルタワー。その屋上で私は死に直面して、やっと正直な気持ちを言えたんです。「あなたが大好きです」って。

シェルフィアとしての私が、ルナさんを好きになったのは偶然じゃ無い。二百年前からずっと大好きだったんだ。

でも私は、フィーネの全てを受け入れる覚悟が出来ていない。今までの自分を失いそうで怖いから。十九年生きたシェルフィアが、新しい人生を踏み出す事を躊躇っている。

それでもフィーネの記憶と心は、どんどん私に流れ込んで来る！

「私はフィーネを愛してる」

ルナさんがそう言ってくれた時、私は人生で一番幸せだった。大好きな人と心を通じ合わせる事が出来たから。でも、人間の私と天使のあなたの一生の長さは違う。それで私が困らせると、あなたは優しい「約束」をしてくれましたね。

「フィーネ、何も心配しなくて良いんだよ。命を失っても、『魂』は死なない。魂は記憶を無くした後、新たな生命へと生まれ変わるんだ。だから、君が私より先にこの世界から居なくなったら、私は君の生まれ変わりを捜す。それは、空で光る数多の星々からたった一つを選び出すぐらい難しいけれど、必ず捜し出す」

あなたは、その約束通り私を見付け出してくれました。獄界に、命を懸けて乗り込んで。

「グスン……。ふふ……。解りました。それなら私も、絶対にルナさんを見つめます。あなたは、その優しい瞳で私を待っていてくれる筈だから」

ルナさん、今あなたは私を待っていてくれるんですね。もう少しで必ず戻ります。

「生まれ変わる時は、『雪の降るミルドの丘』を再会場所にしたいです」

「ああ、そうしよう。二人共、決して忘れてはいけない『永遠の約束』だ」

そう、私は今こそミルドの丘に行かなければならない。約束を果たす為に。

「何も心配せず、いつも眠るように……。おやすみ」

あなたは最後にそう言ってくれました。

「おやすみなさい……。ルナさん、大好き……」

だから私も、安心して眠る事が出来たんです。

ルナさん……、私を連れて行って下さい。「永遠の約束」の場所へ。  
其処で私の心は、フィーネと一つになります。その時は、あなたの優しい笑顔で「おはよう」って言って下さいね。……絶対ですよ。

## 第七節 蕩揺

シエルフィアが倒れてから、もう直ぐ一日。窓の外は冬の短い夕紅に染まっている。  
「う……、ううん」

彼女は声を漏らし、体を振った。私は握った手を放し、立ち上がる。

「シエルフィア……、否、フィーネ！」

「……ルナさん」

少し衰弱した顔で微笑む。その笑顔にはフィーネが重なった。戻って来たのだ！ 私は彼女をゆっくりと抱き起こした。彼女の温もりが、じんわりと伝わって来る。

「……不思議な気持ちです。私の心の中には、フィーネだった自分と、シエルフィアとしての私が同居しているんです」

「記憶……、ううん、心は戻ったんじゃないのー？」

リバレスがシエルフィアの顔を覗き込む。彼女も、私と共にベッドの傍に居たのだ。

「……とても切なく、悲しい、そして強いフィーネの心は私と共にあります。でもそれが私の全てではありません。私達は二人で一つだから」

解っていた事だが、彼女はフィーネと完全に同じでは無い。それに、シエルフィアは決

してフィーネの代替でも無いのだ。私はどう接すれば良い？

「ルナさん、そんな顔をしないで下さい。フィーネとしての私が好きだったルナさん、シエルフィアとしての私が出会ったあなたは、もっと気高く優しい顔ですよ。心配は要りません。これは……、私の心の問題だから」

シエルフィアはそう言うと、私の頭をそつと撫でた。まるで母親が子供をあやすように。

私は、自分でも気付かぬ間に泣いていたのだ。何を迷う？ 彼女は此処に居る。

「思い出して下さい。私が『心』を失いかけたら、何処へ行くのか？」

彼女の茶色の瞳。其処にはフィーネの光がちゃんと輝いている。行くべき場所は唯一つ。

永遠の約束の場所。

「ああ、行こう。ミルドの丘へ！」

頷く彼女の手を引き、私達はバルコニーに立つ。間も無く日が沈むだろう。だが次に日が昇る頃には、私達は必ず二人で歩み出そう。

二人は手を固く繋ぎ、フィグリルから姿を消した。今こそ約束を果たす為に。

## 第八節 樹下

吐く息が白く、フィグリルより大分寒い。此処はミルドの丘の麓。丘の直ぐ傍には、黒煙を吐く工場と、鉄と石で造られた家々が並ぶ。建物と石畳は煤で黒く、溶鉱炉の熱気が時折風に乗って伝わって来る。鉱石の採掘を産業とし、緑に溢れていた二百年前とは全く違う光景だ。それもその筈。二百年間で、ミルドは大いに発展した。人工は八倍に増え、鉱石の採掘から加工までを、街がシームレスに行っている。しかし、唯一つ変わらないものがある。それがミルドの丘だ。

「変わってしまった、何もかも……。あの時の面影は何処にも」

街並みを見て、ルナさんはそう呟いた。確かにフィーネとしての記憶から見れば、変化は著しい。でもシエルフィアとして見れば、同じ「懐かしい故郷」だ。

「大丈夫です、丘は変わっていませんよ」

私達は連れ添って、丘を登り始めた。丁度中腹辺りでルナさんが足を止める。

「あれは……」

彼の視線の先にあるものを目掛けて、私は走り出した。そう、フィーネとしての私が。

お父さん、お母さん……。二百年振りですね。今まで来れず心配をかけてごめんなさい。

「此処は、フィーネのご両親の」

「はい、お墓です……。ようやく来れました」

私がフィグリルに移住する前、私にフィーネとしての記憶は無かった。だから、此処に来るのは本当に久し振りなのだ。

鮮明に思い出す。フィーネだった私が、どんな覚悟でこの墓の前に立ったか。私は辛さ押し殺し、胸が焼かれるような憎悪を抑えていた。憎しみは何も生まない。お父さんとお母さんからそれを教えて貰ったから。何があっても生きたい、苦しむ人を助けたい、そう願いながら私は花束を置いたのだ。

ルナさんは静かに待っていてくれる。時折、不安げに視線を落としながら。

「ルナさん、行きましょう。私は大丈夫です」

「ああ、行こう！」

丘の上から見る、落陽に照らされた景色は、フィグリルに引越す前と変わらない。うん、二百年前から変わらない。村が街になろうと、煉瓦の家が鉄に変わろうと、其処で懸命に暮らす人間が居る限り、「その場所」の美しさは変わらないのだ。

ルナさんが墮天して出来た窪みには、今は大樹が立っている。どんな風雨にも耐える樹。

「約束の場所……」

私達が同時に呟く。二人共泣いていた。手を繋ぎ、樹に寄り掛かりながら。

二人の全てが始まった場所。旅が、絆が、心が。

胸が一杯になる。雪は降っていないけれど、私達は約束通り此処に帰って来たのだ。  
「フィーネ」

ルナさんがそう言った瞬間、頭に激痛が奔る。全身が熱い！

「……ルナさん？ ああ、私が壊れそう！」

フィーネとシエルフィア、双方の記憶と心、そして感情が溢れ出して来る！

「大丈夫だ、私は此処にいる。だから……、安心して帰って来るんだ。二人で新しい未来を作る為に！」

ルナさんが私を抱き締めてくれる。

でも、「私」という奔流は止まらない！

フィーネとして生まれ、両親に愛された事。両親を失った事。ルナさんに出会い、恋に落ちた事。そして、永遠の約束を交わし、フィーネとしての生涯を終えた事。

シエルフィアとして生まれ、ミルドで暮らした後、フィグリルに引越した事。両親が戦争に巻き込まれ死んだ事。皇帝に引き取られ、料理を手伝いながら学校に行った事。学校を卒業し、料理長となった事。そして、ルナさんと再会した事。

二つの奔流は一つとなり、やがて光と化して弾けた。その時、唯一つの言葉が浮かぶ。

私の、ルナさんへの想いは永遠に。あなたに出会えて、本当に良かった。

## 第九節 雪華舞う

シエルフィアが私の膝の上で、深く呼吸を繰り返している。空は厚い雲で覆われ、月も星も見えない。だが此処から見える街の明かりは、燦然と輝く地上の星のようだ。

膝から伝わる彼女の温かみを感じていると、何の不安も湧かない。

髪を撫で続けていると、彼女はピクツと動き、やがて顔を上げた。

「ルナ……、さん」

まだ眠そうな顔。だがその目を見て、私は胸をキュツと締め付けられた。

「おはよう、フィーネ。そしてお帰り！」

目の光が、フィーネと同じだったのだ。靱さ、優しさ、純粹さ、全てが！

「ルナさん……、ルナさんっ！」

彼女が思いつ切り首に抱き付いて来る。私も彼女の背中を抱き締めた。

抑えていた感情が、堰を切ったように溢れ出す！

「んっ……」

私達は夢中で口付けを交わした。会いたかった、ずっと……、ずっと！

君の居ない世界なんて要らない。だからもう、君を離さない！

「会いたかった！ 私はずっと……、真っ暗で何も見えない闇の底に居たんです。でも、ルナさんが私を取り戻してくれました」

シエルフィア、否、フィーネが涙声で声を上げる。

「君はこうして戻って来てくれた！ 札の言葉なんて必要ないさ」

「でも……、どうしても一つだけ、伝えたい言葉があるんです！」

彼女の赤い頬を流れる涙が、焔く。私達は目を見詰め合った。伝えたい言葉は私も同じ。

「愛してる！」

「愛してます！」

声が重なる。私は彼女を抱き締めたまま、翼を開き空に舞い上がった。嬉しくてどうしようも無い！ 笑いたいのには、涙が止め処無く溢れる。

「あっ！」

フィーネが掌を開き、上空を見上げた。まさか……

「約束通りだな……」

私達を包むように、舞い落ちる寒花<sup>かんか</sup>。微光を受けて、花卉は丘へと降り積もる。

「はいっ！ ルナさん……、寂しい思いをさせたけど今帰りました。たっだいま！」

「ああ……、お帰り」

微笑む彼女が愛おしくて、私は頬を寄せて口付けする。フィーネを失って凍り付いた心が、一瞬で氷解するのを感じた。

「ええっと、ルナさん。あの、お願いがあるんです。聞いてくれますか？」

「何でも聞きます。今日は、君の心が戻ってきた記念日だからな！」

私は彼女に積もる雪を払い、優しく頭を撫でた。大輪の花のような笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます！ お願いは二つあります。一つ目は、ルナさんにとっては慣れないと思いますが、私の事は『シエルフィア』って呼んで欲しいんです。私の心はフィーネと一つになりましたが、シエルフィアとして生まれ今まで生きてきました。だから、生まれ変わった私は、新しい気持ちでルナさんと、もっともって幸せになりたいんです！」

彼女は十九年間、シエルフィアとして生きてきた。フィーネの心を持っていても、彼女はシエルフィアなのだ。

「解った。名前と姿は変わっても、心は変わらない。シエルフィア、宜しくな！」

私はシエルフィアにそっと口付けする。すると、彼女はとても嬉しそうに微笑んだ。

「良かったあ……。実は、シエルフィアとしての私もルナさんの事が好きだったんです。名前を呼んで貰えて幸せです！」

そうか、心が一つになったから、二人分の事が全て解るし想いも共有出来るのだ。

「一杯思い出がありますね……。私は全部覚えてますよ」

彼女が私の頭の雪を払いながら、私の胸に顔を埋める。狂おしい程に愛おしい。

「私も全部覚えてる。でも、今からもっと楽しくて幸せな思い出が沢山増えるから、忘れないようにな！」

「忘れませんよお！ ルナさんこそ、忘れたら怒りますよ」

彼女が胸の中で首を振った。彼女の温度が、世界の温かさの全てのような気がする。

「それはそうと、お願いがまだあるんじゃないか？」

「はい。えつと……」

彼女は耳まで真っ赤だ。この仕草は見覚えがある。最早、二度も言わせまい。

「今夜はずっと二人だけでいような。否、これから先もずっとずっと」

私達は雲を越え、天高く舞い上がる。蒼い月華の元、彼女は私の耳に口を寄せた。

「はいっ！ ルナさん、大好きです」

天空でたった二人で、何度もキスをした。地上に下りてからは、手を繋ぎ歩く。私達の未来の道は見えないが、信じていれば二人で歩んでいける。

これから先には険しい道が続くかも知れない。でもシエルフィアが居る限り、私は何処までも強くなれる。不可能なんて無いんだ。

だから、今夜は二百年届かなかった思いを届けよう。愛する君へ。

*Snow is forever poured, in order to bless the heart of eternity.*

## 第十節 永続

窓から真っ白な光が飛び込んで来る。その眩しさで、ルナの胸に頭を預けていたシエルフィアが目覚めた。彼女は微笑みながら、彼の鼓動を聞いている。

今日からが二百年前の続きだ。彼女は、ルナを目覚めさせぬよう頬に軽く口付けをして、ベッドから抜け出した。彼の為に、宿屋の厨房を借りて朝食を作るのだ。

「あつ、おはようございます！」

「おはよう！」

朝食を部屋に運んでいると、ルナさんが起きた。寝起きなのにパツチリと目が開いている。彼は直ぐに立ち上がり、私が持つ食器をテーブルに置いてくれた。

「ルナさん……、私は幸せです」

私は彼の背中に手を回し、頭を彼の胸に寄せた。彼はそっと私を抱き寄せ、髪を撫でる。

「私も幸せだよ。これから先もずっと一緒だ」

「はい……。私はもうあなたから離れません。だから、私から離れないで下さいね」

もう離れ離れは嫌だ。何があっても、絶対に。

「さあ、ルナさん。冷めない内に一杯食べて下さいね！」

余り時間が無かったから、手の込んだ料理は作れなかったけど、ルナさんは「美味しい」と言っただけで食べた。城に帰ったら私の本気の料理を見せなくちゃ。

ルナさんが朝食を一通り食べたのを見て、私は「あるものを」運んで来る。

「これは……！」

彼に渡したのは、思い出が詰まった一枚のトースト。

「辛くて美味しいな」

瞬く間にルナさんは「辛いトースト」を食べてくれた。思わず、涙が滲む。

「ありがとうございます。私は、そんなルナさんの優しい所が大好きなんですよ……」

そう言ったのは良いけれど、恥ずかしくて俯く。するとルナさんが、突然立ち上がった。

「私達の未来の為に、話す事がある」

彼は両手で私の肩に手を置き、真剣な眼差しを向けた。

「えっ、どんな事ですか？」

「今後、この世界に起こる事についてだ」

ルナさんは、「新生・中界計画」について私に話した。私は「驚く振りをしながら」それを聞いた。その計画については知っている。シエルファイアとして生まれる前、「魂界」で聞いたからだ。でも魂界については秘密にする約束なので、ルナさんにも言えない。

「ルナさん、今のお話を聞いて一つお願いがあるんです」

「ん？ 一体何のお願いだ？」

ルナさんが狼狽ろうばいしている。私が冷静過ぎるからだろうか。

「私も戦わせて下さい。もう私は、あなたに守られているだけじゃ駄目なんです！ 皇帝

もリバレスさんも、人間の為に戦ってくれるのに、人間の私が戦わないのは可笑しいです」

「何を言うんだ！ 君の力では戦う事は出来ない。天使や魔が、どれ程の力を持つかは知ってるだろう？」

尤もだ。私が「只の人間」ならば。でも私はもう弱くない。今こそ、それを見せる時だ。

「これでも、駄目ですか？」

私は目を閉じて意識を集中し、自分の体の周りを高等神術「滅炎」で覆った。

「君はどうしてそんな力を……？」

「私の心が一つになった瞬間、こんな力が扱えるようになったんです。きっとフィーネだった頃に、ルナさんに何度も力を貰ったから。そして、獄界に堕ちて再び転生する事が出来たから。こうなった理由は解らないけど、この力はあなたを助ける為にあるんです！」

満更嘘じゃ無い。この力が身に付いたのは、「魂界」のお陰だから。

「その力でも勝てない敵は沢山居る。だから……」

ルナさんは、私が心配だから戦わせた<sup>く</sup>無いのだ。でも私は、如何なる時もあなたの隣に居たいの。

「今の私には戦える力があります。これで、本当の意味で私はあなたから離れる必要がありません。私達はずっと一緒に居ると約束したじゃないですか。だから！」

これだけは譲れない。私は彼の目をジッと見詰める。束の間の逡巡の後、彼は口を開く。

「……解った。でも、私は君を最優先で守るからな」

「はいっ！ 私も、あなたを最優先で守ります」

ルナさんは苦笑しながら頷く。そして私達はもう少し二人で居てから城に戻る事にした。

## 第十一節 耳語

ルナがシェルフィアを連れてミルドに向かった晩、リバレスは城の屋上で一人、舞い散る雪を小さな掌に集めていた。彼女は確信する、二人が無事に「再会」出来た事を。

「ルナ、フィーネ。良かったわねー」

集めた雪で彼女は顔を覆った。目から滲み出るものが、<sup>あわゆき</sup>淡雪に吸い取られる。

彼女は寒さに身を震わせ、部屋に戻ろうと身を<sup>ひらがえ</sup>翻す。その時だった。城に戻る扉から、ハルメスが現れたのは。いつに無く真剣な顔。降り頻る雪には目もくれない。

「リバレス君、話がある」

「はい、何でしょう？」

ハルメスさんが、わたしに話？ ルナじゃ無くて。

「隣に座らせて貰うぜ」

彼はそう言っ<sup>て</sup>、街が見える低い壁に腰掛けた。そして、真っ白な息を吐きながら、話を始める。

話を要約するところだ。ルナとシェルフィアが、リウォルとの戦争を終わらせた後、私達は全員で「計画」阻止に向けて動く。そして、計画の実行日が間近になってから私達は二手に分かれる。ハルメスさんは、獄界からの侵攻を食い止め、わたし達三人は天界に行き「計画」を中止させるのだ。理に合った方法だ。二人で頷く。

そして彼は、私の耳元で囁いた。<sup>whisper</sup>「ある話」を。

その話は余りに衝撃的で、わたしは涙と震えが止まらなかった。ハルメスさんの悲壮なまでの覚悟、そしてわたしに起こる出来事……

彼は言った。「自身の未来を選ぶ権利がある」と。でも、わたしは迷う必要が無いわ。

「ルナー……、きっとこれがわたしの『生まれた意味』なのよ」

ハルメスが去った後に響いた彼女の声は、誰にも届く事無く、ひっそりと寒花に消えた。

## 第十二節 蹶起

城に戻ったルナとシエルフィアは、リバレスとハルメスから大いに祝福された。今宵は、今後の方針の話し合いを兼ねた、祝宴を開く事となる。

屋上にテーブル、椅子、そして水晶で作られた透明なピアノが運ばれた。シエルフィアは、最高の料理を作る為に腕を振るっている。そして、全ての準備が整った。

冷たく澄んだ空気、満天の星空と街の灯火の光が四人を包む。

「おめでとう、お帰り！」

兄さんとリバレスの声で祝宴は始まった。シエルフィアが作った料理は、今まで食べた物の中で最高の味だった。料理長の名は伊達じゃ無い。それに、彼女はピアノの腕前も素晴らしい。透明感のある音を出し、尚且つ穏やかな気持ちにさせる。彼女の心そのものが、音楽となって流れているようで心地良い。

ゆったりと時は流れ、話は核心へと迫っていった。

「計画まで三ヶ月、私達が行なうべき事は何でしょうか？」

私は椅子から身を乗り出し、兄さんの目を見据える。

「それは今から話す。だがその前にシエルフィアの力は、一体どうしたんだ？」

やはり兄さんも気付いていたらしい。彼女からは、只ならぬ力が滲み出ている。

「皇帝、私はルナさんとの約束の為に生まれ変わりました。だからきっと、私の魂がルナさんと共に戦う事を望んだのでしょうか？」

「そうかも知れないな……。だがお前から感じる力は、天使の力でも無く魔の力でも無い。

無論、ロードやサタンとも違う」

私には其処までは解らない。兄さんの言葉が正しいとすれば、どう言う事だろう。

「私の力が何故生まれたかは解りません。でもこれは、ルナさんを助ける為の力。悲劇を繰り返させない力。そして、平和を創り出す力なんです！」

彼女が目を開き、力強い声で断言した。兄さんは暫く無言を通した後、微笑んだ。

「シエルフィア、お前は強くなったな。この城に来た頃とは別人だ……。ルナを、そして俺達を助けて欲しい」

兄さんが頭を下げる。シエルフィアは慌てて首を振る。

「皇帝、私は貴方に感謝してもし尽くせません。貴方は私を、我が子のように大切に育てて下さいました。私はルナさんと作る未来の為に、そして皇帝の為に戦います！」

「兄さん、皆で勝利を収めましょう」

「わたしもお忘れなくー！」

私が手を差し出すと、全員がそれに手を重ねた。結束の証だ。

「そろそろ本題に入ろう。俺達の課題は三つだ。一つはこの人間界の戦乱を収めて、人間界の結束を強める事。次に、獄界からの侵攻を防ぐ事。そしてこれが最も重要な事だが、『神』に計画を中断させる事だ。人間界を中界にする計画は、神が示した計画。神の考えを変えさせない限り、この計画は止まらない。解るな？」

兄さんの顔は少し青褪めている。私は課題遂行の重さと困難さに身震いした。

「はい、私はどうすれば？」

「ルナ、お前はシエルフィアとリウォル王国へ行ってくれ。お前達が行けば、戦乱を終わらせる事が出来る」

「兄さんでも無理だった事を、私達に出来るのですか？」

「ああ、行けば解る。(余談だが、宝飾技術は世界一だ)」

余談は、わざわざ「転送」で伝えて来た。兄さんの真意は汲み取れないが、行こう。

「解りました。その言葉を信じて行って来ます。一月、否、一週間で戦争を終わらせませす」  
それぐらいの意気込みが無いと、計画を止める事など出来はしない。

「頼りにしてるぜ！」

私とシエルフィアが頷く。其処でリバレスが、私の肩に停まった。

「わたしは、ハルメスさんの元で修行よー」

私は耳を疑った。他にもっとすべき事があるのでは？ リバレスは確かに力を付ける必要があるだろう。だが、兄さんはリバレスを鍛える事だけに時間を費やすのか。

「兄さんは、それ以外にどうするのですか？」

私の質問の意図を瞬時に読み取り、彼は苦笑する。

「俺は彼女の修行に付き合う以外は、『ある調査』を行なう。世界の命運を左右する事だ」  
有無を言わせない、剣よりも鋭い眼光。其処には、鋼よりも固い意志が宿っている。

「……解りました。全員の健闘を祈りましょう！」

私達はお互いの目を見て大きく頷き、再び手を重ねた。私とシエルフィアの出発は明日と言う事で、今日は解散となった。

私とシエルフィアの寝室。其処にはリバレスも居て、夜遅くまで色んな話で盛り上がった。二百年前と私達は何ら変わっていない。

リバレスが別の部屋に移った後、私とシエルフィアは愛し合った。そしてシエルフィアが眠りに就くまで抱き締める。零れるように滑らかな髪を、ゆっくり撫で続けながら……

彼女が眠った後、私は彼女の唇にそっとキスをして、ベッドを抜け出した。

### 第十三節 磔柱けつちゆう

ハルメスは、自室の外に設けられたバルコニーに立っていた。冷たく澄んだ空気をゆっ

くりと吸い込む。すると、思考能力が研ぎ澄まされるのだ。彼は胸に手を当てる。自分の中に居る恋人と対話する為に。頬を撫でる風を感じながら、彼は目を閉じた。

「ティファニー、俺は決めたよ。最後は、弟の為に生きる事を」

俺は十分に幸せだった。ティファニーと暮らし、今も心は共にある。

星が流れた。お前は流れ星が好きだったな。その時部屋のドアを控え目に叩く音が響く。

「眠れないのか？」

俺はドアを開け、開口一番そう言った。ルナだ。こんな時間にどうしたのだろう？

「いえ、無性に兄さんと話がしたくなって……」

俺の意思をルナが知る筈は無い。だが、此処に現れたと言う事は何らかの「違和感」を察知したからでは無いか。否、考え過ぎだろう。

俺達は並んでバルコニーに立つ。眼下に見える街の明かりは疎<sup>まば</sup>らだ。時刻は午前三時。

「兄さん、私達が今此処にいるのは偶然では無く、運命のような気がしませんか？」

「そうだな。運命と言っても差し障りは無いが、『今』は過去の俺達が切り開いた未来だ。決して、誰かの力によるものじゃない」

運命と言う言葉は余り好きじゃ無い。運命は、自分の手の届かない所で定められ、自分の力ではどうにもならない事だ。その言葉を多用する事は、諦観と同義だと俺は考える。

「……確かにそうですね。天界に自由が訪れたのは、兄さんが戦い、それを私が受け継いだから。そして今の私達が存在するのは、過去の私達が何者にも屈せず戦ったからです。これからも私達は結束して戦い、未来を創るのですよう」

「ああ、それが俺達の絆だ。何よりも強く、掛け替えの無い……」

俺はルナの肩を叩く。ニツコリ微笑む弟。昔の面影がまだまだ残ってるな。

ティファニーとの事は、戦いが終わった後で話すと約束していたが、俺は「今」話す事にした。これは、俺とティファニー両方の意思だ。俺は彼女との出会いから話し始める。

そう、あれは墮天して三日後の事だった。彼女は、ガレット（煙草栽培で有名。後にフイグリルに吸収され、今はその名は存在しない）と言う村で魔への生贄として捧げられようとしていた。俺は、反射的に魔を倒し彼女を助ける。

その後俺は、食糧と寝床を得る代償に村を守った。それは生きる為には仕方無い選択で、人間を対等に見ていた訳では無い。だが村人達に接している内に、俺の人間に対する偏見は消えた。ティファニーは凛<sup>りん</sup>として美しく、正義感が強かった。俺は彼女の家の一部屋を借りて暮らしていて、彼女と接する時間が長かった。彼女に惹かれるのも無理は無い。

俺は彼女と結婚し、魔と戦いながらも幸せに暮らした。しかし、それは長くは続かなかつた。狡猾<sup>こつぱつ</sup>な魔が彼女を連れ去ったのだ。魔は俺の死と引き換えに、彼女を解放すると言った。俺がそれに応じようとすると、彼女は自らの命を断とうとした。予想外の出来事に

油断した魔を始末した後、俺は天使の指輪を使い彼女を蘇生した。その時に、俺のエファロードの力も覚醒する。その後は二人で、張りのある生活を送った。ティファニーが寿命で死を迎えた時、俺は彼女の魂を自分と同化させた。彼女が、「あなが死ぬまで、共にこの世界に居る」と言ってくれたからだ。

ルナ、お前とシエルフィアの幸せは俺が守る。だから心配するな。

「それが……、俺の背負うべき十字架だ」

思わずそう呟いてしまった。十字架……、それは古来の神と獄王にとって、献身の象徴。唐突な言葉でルナが首を傾げている。それで良い。お前は知る必要が無い。最後の時まで。

#### 第十四節 末裔

翌朝、ルナとシエルフィアは、リウオルの上空で冬の弱々しい陽射しを背に浴びていた。気温は低い、この街に雪は積もっていない。時刻は午前九時、住人は街の中を慌しく動き回っている。朝特有の忙しなさ、それが一日の始まりを告げていた。

リウオルに突入するのに特別な作戦は無い。体を「光膜」で覆い街に下りるだけだ。そうすれば、かつてリウオルを救った英雄であるルナを住民が確認する。街には彫像もあるので、彼が本物である事が解る筈だ。リウオルはルナを信奉しているので、王と話をするのも容易いだろう。ハルメスは、ルナにそう言っていた。

「思いつきの風景が残ってるな」

私は朝陽を反射して輝く湖を指差した。シエルフィアが微笑みながら頷く。

それとは対照的に街の変化は著しい。面積が倍近くに増え、その周りを厚く高い外壁が覆っている。住居の堅牢化と高層化も進み、先進都市である事が窺われる。

外壁には等間隔に見張り台が設けられ、それぞれに五人程度の兵が居る。向こうから此方を視認する事は不可能だろう。私と人間では視力が違う。

城にも街にも無数の武装兵。連射式の銃や大砲までもが見える。何処に下りるべきか？

「ルナさん、あの噴水広場はどうでしょう？ あの……、真ん中に銅像みたいな物がある。

あそこなら警備が薄そうですね！」

シエルフィアが指を差す。彼女も、尋常では無い視力を持っているようだ。

「ああ、そうしよう。今から私達の周り半径3mを光膜で包み降下する。絶対に私から離れないようにな！」

シエルフィアが私の肩に手を回し、ギュッとしがみつく。私は彼女の背中和膝裏を支えたまま、光膜を発動させた。この光は恐らく国中に見えている事だろう。

私達は急降下を開始した。

「もっとスピードを上げて下さい！ 私は大丈夫です」

返答代わりに私は更に加速した。噴水まで、五百m……、百m！

「ドンドンドントツ！」

「ドゴオオン！」

「ダッ、ダダダダダ……！」

大砲、爆薬、銃……。あらゆる兵器が私達を攻撃して来る！

「ルナさあーん！」

「大丈夫だ。この程度の攻撃なら、この膜には傷一つ付かないさ」

獄界で味わった、魔の集中砲火に比べればこんなものは子供のお遊びだ。

地面に下り、五分以上攻撃が続いた後に砂煙が晴れた。周りには数百名の武装兵が居る。

「厄介やっかいだな。光膜を解除せずに歩けば、兵を傷付ける事になる」

方策を考えていると、車輪の付いた一門の大砲が運ばれて来た。砲身が長く、口径も通常より大きい。威力が高そうだが、私にとっては問題無いだろう。

「あんなのを受けて大丈夫なんですか？」

「大丈夫だけど、砲弾が消滅する前に、膜ごと私達は遠くに飛ばされてしまうかもな」

私はそう言い残し、一人で光膜を出た。シェルフィアは膜から出さない。安全の為だ。

「ルナさん！」

「心配要らない。其処でゆっくり見てると良い」

私が彼女に微笑み兵の方を見ると、一人の男が近付いて来た。大砲と共に現れた男。年齢は恐らく三十台半ばだ。赤地に金の剣が刺繍ししゅうされた旗、リウオルの国旗を持っている事から、地位の高い人物であると推察される。男は旗を地面に刺し、私の目の前に立った。

「一人で出てくるとは良い度胸だ。俺はリウオル王国直属軍総指揮官だ。お前は何者だ？」

「私はルナリート。お前達『人間』を救う為に、再びこの地に現れた」

「ルナリート！ まさか……、伝説の？」

指揮官は、私達の後ろに立つ銅像を見て言葉を失う。全く……、よく似せて作ったものだ。しかし、何故フィーネが私の腕に抱き付いている？ かつての街長の仕業だろうか。

「ああ、この銅像は紛れも無く私を象っている」

「そんな筈は無い！ 伝説は二百年も前の話、『ルナリート様』が生きている筈は。お前は、魔物の術で俺達を騙そうとしている！」

指揮官が剣を抜き、私に切り掛かる！ 困ったものだ。「パキンツ」と言う音と共に、彼の剣が砕ける。私の素手によって。すると、突如彼は私から飛び退いた。

「撃てええ！」

指揮官が居た場所の、後ろにある大砲が火を噴いた！ 成程、剣は囷おとりか。向かって来る弾は余裕で避けられるが、避ければシェルフィアの居る光膜に直撃してしまう！

「うおお！」

私は瞬時にオリハルコンの剣を抜き、過剰なまでの力を乗せて振り抜いた。鋭い斬撃を受けた大砲の弾は唯の金属片となり、至る所に飛び散る。

「うわああ！」

指揮官を除く兵達が一斉に逃げ出した。私にはどんな兵器も通じない事を悟ったからだ。「俺はこの国を最後まで守り抜く。殺せ！」

立派なものだ。部下が逃げても、国の為に命を投げ出す覚悟があるとは。

「もう……、ルナさん。無茶し過ぎですよ！」

光膜を解いた途端、シエルファイアが私に詰め寄る。確かに少しやり過ぎだったか。

「ごめん、ごめん。ところで指揮官さん。私がいつ、敵だと言ったんだ？」

「は……？ まさか、貴方は本当にルナリート様？」

「二百年前、正確には二百一年前にリウオルタワーを崩壊させたのは私だ。鉄神殿で祝宴を開かれた事もある。それでも信じないか？」

男は動揺していた。事実が正確に伝説となっている証拠だ。

「ならば、街長から『あるもの』を贈られた筈！ これは、一般庶民は知らぬ事！」

将来私が現れた時、本人である事を確認する為に、街長はわざと「あるもの」については一部の者にしか伝承しなかったのだろう。その周到さに恐れ入る。

「宝石シェファだろ？」

私は、胸の内ポケットに入れた宝石袋から、それを取り出して見せる。兵は何度も私に謝った後、王の間まで案内してくれた。其処に着くまでに兵から色々な話を聞いた。

リウオルの民は、私を救世主として崇めているが、王は憎んでいる事。その理由は誰も知らない事。まあいい、本人に聞けば済むだろう。

## 第十五節 英傑

私の先祖、初代リウオル国王の日記にはこう書かれている。百年前の事だ。

「私はこの街に強大な軍事国家を造る事を決意した。その決意の元となった事件を此処に書き留めておく。」

リウオルの民なら、誰もが救世主ルナリート様の存在を信じている事は言うまでも無い。私の家族も当然、敬虔けいけんな信者だった。どんなに辛い日々でも、ルナリート様を信じていれば救われると教えられたものだ。

ある日、街に大規模な魔物の襲撃があった。私の家は貧しかったが、ルナリート様への信仰はどの家よりも厚い。丁度その時、私は学校へ行っていたが、大して心配する事も無く家へ帰った。だが、父も母も妹までもが魔物に殺されていた。街の人々は、「信仰が薄かった」と言い、幼い私を納得させた。しかしそれを覆す事実が判明する。

今回の襲撃では、私の家の周囲十軒の内、「ある一軒」を除いて皆殺しにされていた。その一軒は、魔物に「金品」を提供し、辛くも難を逃れたと言う。

生死を分けたのは、「信仰」では無く「財」だ。私は将来家族を持つだろう。その時、自分の愛する者の為に、「財」を蓄えねばならない。そう決意したのだ。

無心に働いた。誰よりも多くの財を得る為に。そして私は、国家を造った。国家に住まう者は皆私の家族だ。この国にはより多くの財が必要だった。その為にはどうするか？ 貿易分野で競合するフィグリルを潰せば良いのだ。愛する家族を守る為に」

私は日記を閉じ、謁見えっけんの間に向かう。今更現れた、英雄を追い払わねばならない。

彼がルナリート……。銅像の姿と同じだ。先祖を狂わせた、忌まわしき存在。隣に居る女性も、銅像の女とは目元以外は似ていない。

「私は、リウォル国王ルーニオン。かつての英雄が現れるなど、到底信じられないが」

「それでもこれが事実。貴方が信じようが信じまいが」

王に対する敬意は無いらしい。彼が本物なら、何故二百年間姿が変わらない？

「それで……。『ルナリート様』が何故此処に？」

声を尖らせて訊いてみた。すると、隣の女性が私の前に出て来る。

「単刀直入に言わせて貰います。三ヶ月後、人間達は皆殺しにされます」

言葉通り、何の前置きも無い。だが、そんな突飛な話を誰が信じる？

「はははっ！ 何を言うかと思つたら……。馬鹿馬鹿しい」

周りに居る兵も私と共に笑う。当然だ、この王国は年々武力が増している。魔物に対抗出来る兵器も増えた。なのに、突然滅ぼされる筈が無い。

「ルーニオン、これは紛れも無い事実だ。貴方は人間の王、人間を守るのが使命だろう？」

呼び捨て……。それより、ルナリオの目は本気だ。嘘を言っているようには到底見えない。事実だとしたら。

「本当なのか？」

「ああ。そもそも私や、皇帝ハルメスは人間じゃ無い。別の世界から来た者だ。その私達が人間の為に戦うのに、貴方は何もしないのか？ 事の重大さを知るんだ」

成程、皇帝の使いで来たのか。私を懐柔かいじゆうする為に。論外だ！

「フィグリルもハルメスも宿敵。皆の者、この二人を捕らえよ！」

百名程の兵が、ルナリートと女を取り囲む。だが全員が弾き飛ばされた。街中で我が軍の集中攻撃を受けても無傷と言うのは事実らしい。

「ルナさん、私に任せて下さい」

女がそう言った直後、私とルナリート、女を囲む炎の壁が床から発生した。厚く、高い壁。これでは、兵が私に近づく事さえ出来ない！

「わっ、私をどうするつもりだ！」

何が英雄だ！ 礼儀も知らず、暴力に訴えるだけの者が。

「手荒で済まない。だが落ち着いて、私の話を聞いて欲しい」

「どうやら私を殺すつもりは無いらしい。この状況では話を聞くしか無いだろう。」

途中までは半信半疑だった。だが話を全て聞いた上で、これだけは言える。彼は一切嘘を吐いていない。彼の目、声、話し方、辻褄の合う話、いずれも信頼に値するからだ。

ルナリートとハルメスは、元天使で人間の為に戦ってくれている事。ルナリートが百年前に、私の先祖を救えなかったのは、長い眠りに就いていたからである事。そして三ヵ月後、この世界は天使と魔物の総攻撃に晒される事が理解出来た。

財の為に、フィグリルと争っている場合では無い。だが、百年続いたこの戦争を即座に終わらせるのは無理だ。一週間、否、最低でも二日は掛かる。

「国王として、貴方の話を信じよう。明後日には、戦争の終結宣言を出す」

「人間の王も、なかなか見上げたものじゃないか。宜しく頼むぞ」

英雄は、私に握手を求めて来た。即座に、彼の手を握る。後一つ、この場でやらねばならぬ事がある。

「シエルフィア殿、貴方の両親の事は申し訳無かった」

私は彼女に深々と頭を下げた。家族を奪われた傷は癒えない。だが、少しでも遺族の気が晴れるなら、私は王としてでは無く、人として謝ろう。

「いいんです。もう戦争は終わりですから」

彼女は微笑みかけてくれた。救われた気持ちになる。もう、人間同士の争いなど私は二度と起こしはしない。そう誓った。

私は明後日の終結宣言までの間、二人に最高の客室を提供する事を申し出る。二人は快諾してくれた。さて、明後日まで目の回る忙しさだな。だが私の心は晴れ晴れしていた。先祖も、私の決断を認めてくれるだろう。財への執着は終わりだ。

## 第十六節 蒼の輝耀

王が終戦を決めた後、私達は豪華な部屋に案内された。十m四方で、床も壁も大理石。更にはバスにシャンドリアまである。シルクのカーテンにベッド、私達はそんな部屋に明後日まで滞在するのだ。

夜になり、私達は夕食会に主賓として招かれた。豪華な料理を食べながら、王や兵士、一般人と話をした。また、多くの人間が私を訪れ、その中には宝石商も多く居た。見事な細工が施された指輪や首飾りを見て、私は兄さんが言った言葉の意味をようやく理解した。一番腕の立つ宝石商に、宝石シェファを預ける。「明朝には出来る」らしい。

夕食会が終わった後は、シエルフィアと共に眠る。幸せを噛み締めながら……

準備は万端だ。後は明日の夜を待つのみ。

翌日、城で朝食を取り私達は部屋のバルコニーから街を眺めていた。少し寒いですが、天気も良く風が気持ちいい。

「今日は折角だし、街に繰り出そうか？」

私は彼女の頭を撫でて、少し照れながらそう言った。

「はいっ、行きましょう！」

至福を湛えた顔。幼さを残し、純粹さが滲み出た大きな目を輝かせている。背はフィーネとほぼ同じで、私より二十cm程小さい。その体一杯で喜びを表現する彼女が、私は愛しくて堪らない。今日は二百年振りのデート、そして記念日となる。

「ルナさん、ルナさあん！」

はしやぎながら、私の手を引っ張る。街に兵は殆ど居ない。既に王が通達を出したのだろう。一般人によって活気溢れる街は、見ていて清々しい。

「シエルフィア、そんなに走ると危ないぞ！」

彼女は私の言葉を気にせず唯、笑っている。再び手を繋いで歩ける、それだけなのに何故こんなにも幸せなのだろう？

夜、城に戻るまでの時間を、私達は目一杯楽しんだ。

服やペアの装飾品を購入したり、食べ歩きをしたり。一番驚いたのは、音楽隊が続いていた事だ。「リウオル軍楽団」と名を変えていたが、演奏は相変わらず素晴らしかった。

城に戻った後、私達は早速買った服に着替えた。シエルフィアは、白のシルクのワンピースに、薄桃色のコート。私は、黒のレザーパンツとジャケットで、赤いセーターも着ている。正直セーターは恥ずかしいが、彼女が「色んな服を着ているルナさんが見たい」と言うので仕方が無い。今日も夕食会があるので、私達は手を繋いで会場に向かう。

「シエルフィアはその服、よく似合ってる。でも、私の服装は可笑しくないか？」

「ありがとうございますっ。ルナさんも凄く似合ってますよ。ほら、周りの女の子も注目してるし」

私は言われた通り、周りを見渡す。確かに多くの視線を集めている。それが羨望の目なのか、奇異の目なのかは解らないが。

「……ルナさん、他の女の子に興味を持ったらダメですよ」

彼女が私の頬をつねる。顔は笑っているが、目は笑っていない。

「痛いっ！ 大丈夫だよ、絶対そんな事は無いから」

間違えても浮気などしないが、彼女を怒らせると怖いな……。炎で焼かれそうだ。

「冗談ですよっ、ルナさんはそんな人じゃないから」

シエルフィアが私の手をギュッと握る。フィーネの頃より、明るくなったな。

蒼い月光が射すバルコニー。其処に満ちているのは静謐。夕食会が終わり、私達は無言で遠くの潮騒を聴いていた。私には自分の胸の高鳴りも聞こえ、その音が彼女に届かないかと冷や冷やする。だが、時は満ちた。

「シエルフィア、目を閉じて」

「え、はい」

彼女は首を傾げながらも、素直に目を閉じた。

「いいって言うまで、目を開けないで欲しい」

ゆっくりと頷くシエルフィア。私は彼女の体を抱え、翼を開く。そして、蒼月と糠星が煌く空へと飛び立った。

「飛んでるんですか？」

「ああ、もう少しだけ辛抱してくれ」

私は「転送」も駆使し、数分後目的地に辿り着いた。

「目を開けてもいいよ」

「此処は……、あの時の湖」

そう、此処は私達の心が初めて通じ合った場所。二百年の時を経ても何ら変わりはない。鏡のような湖面は、光が敷き詰められた夜空と雄大な山々、そして私達を映している。時折吹く微風が森の木々を通り抜け、湖に漣を作り出す他に、動く者は私達だけだ。

私達は、ゆっくりと湖畔に降り立った。

「シエルフィア。今日、此処に来たのには理由があるんだよ」

「理由……？ 教えて欲しいです」

清澄な空気を伝って、彼女の柔らかな声が届く。

「これを渡したかったんだ」

私はジャケットの内ポケットから、そっと小箱を取り出す。

「え……、何ですか？」

「開けて見てくれ」

彼女が緊張しているのが解る。私の緊張感が伝わったらしい。

「……これは！」

「シエファで作った指輪だよ」

小箱に入っていたのは、虹色の淡い光が煌く宝石がセットされた指輪。私はそれを手に取り、シエルフィアの潤んだ瞳をじっと見詰める。

「私は、永遠に君を愛し続ける。約束するよ、君を必ず幸せにするって。だからこの先に待つ戦いが終わったら……、結婚しよう。この指輪はその約束の証なんだ」

「……はいっ、喜んで！」

彼女の目元が綺羅星の如く光る。私達はお互い、ギュッと抱き締め合った。そして、彼女の左手薬指に指輪を嵌める。幸福な未来を約束する指輪を。

「愛してるよ」

「愛してます！」

私達は湖の上を舞いながら、口付けを交わした。愛する人の存在を確認するように、長く長く。二人の目から涙が零れ落ち、湖に波紋を作る。波紋は、仄かに蒼く煌きながら広がり、やがて湖と同化した。

ようやく、結婚を約束出来た……。君に会うまで、こんなにも心が満たされる事は無かったよ。愛し合える事が、こんなにも幸福だとは知らなかった。

私達の「永遠の心」は、これからはずっと続いて行く。どんな苦難が訪れようとも。肉体の死さえも、私達を分かち事は出来ない。

戦いを終わらせたなら、結婚して幸せな家庭を作ろう。この戦いが、どんな結末を迎えるかは解らない。でも私は、絶対に君の隣に居る。

私には君だけが居ればいい。例え、他に何が失われようとも。エゴでも偽善でも構わない。私は一度君を失って解っているんだ。君が、私の生きる意味そのものだ。

二度と、悲劇は繰り返させない。

明日からはまた大変になるだろう。でも、「今」の積み重ねが「永遠」に至る。私は、君と過ごす刹那を大切にす。

それから、私達は甘く激しい時を過ごした。時間自体が湾曲している、そう感じた。

## 第十七節 奔星<sup>ほんせい</sup>

翌日、正式に戦争が終わった。リウオル王が、街の人間を城の前に集め宣言したのだ。同時に彼は、二ヵ月後の脅威に備えて人間達が一致団結する事も約束した。この日を境に、ハルメスやルナ達の存在が全世界に知られるようになる。

「よくやったな、お前達！」

兄さんの歓喜の声が響き渡る。彼の部屋で、リウオルでの事の顛末<sup>てんまつ</sup>を報告した際、彼は始終笑顔だった。百年に渡る確執が消えたのだ、無理も無い。

「はい、後は来るべき日に備えるだけですわね！」

「ルナー、シエルファイアお疲れ様ー！」

修行で疲労したのだろうか、リバレスはふらふらだ。

「ああ、ありがとう。お前もお疲れさん」

彼女は頷き、私の肩に止まった。そして耳元で囁く。

「ルナー、おめでとう！ シェルフィアにルナを独占されるのは寂しいけど、嬉しいわ」言葉が出ない、何て鋭い奴。顔が熱い……。どうやら兄さんもとくに気付いていたらしい。さっきの笑顔にはその意味もあったのか。私はシェルフィアと顔を見合わせ俯いた。

その晩、私とシェルフィアは今後の話を兄さんから聞いた。

今日は一月十五日で計画は四月四日、私達にはもう二カ月半程度の時間しか無い。その前提で兄さんが示した方針は驚くべきものだった。

今から二月末まで私とシェルフィア、リバレスは力を付ける為に、兄さんが作った「鍛錬場」に行く。其処には、剣術や神術などを強化出来る装置があるらしい。その間兄さんは、人間界の結束強化と「ある調査」を引き続き行なう。

三月一日、兄さんを除く私達三人は天界に行く為に「贖罪の塔」を上る。そして兄さんは「冥界の塔」を下るのだ。私達は神に計画を中止させる為、兄さんは獄界からの魔の侵攻を食い止める為……

人間を守るという観点から考えると、それが一番合理的なのは解る。私はエファロードの力を完全には使いこなせていないし、シェルフィアやリバレスも鍛錬が必要だろう。それに、計画が四月四日と決まっても、天使や魔はもっと早く来るかも知れない。

しかし、幾ら何でも無謀だと理性が告げる。私達三人が天界と、兄さんが獄界と戦うのと同義だからだ。だが、それを承知で私達は進むしか無いのだ。人間は私達の守りを突破した天使や魔と戦うが、実質計画中止の為に戦えるのは世界でたった四人なのだから。

兄さんの最終目標は、冥界の塔を破壊する事。「ある調査」とはこれに関係するらしい。そして私達三人は神を説得するが、神がそれに応じない場合は……、戦う事になるだろう。私と兄さんの父である神と。

「皇帝、貴方はたった一人で戦うのですか？」

兄さんが話し終えて、シェルフィアがポツリと呟いた。

「否、俺は戦う場所が違うだけだ。俺達四人は共に戦うんだぜ！」

兄さんの言葉に思わず胸が熱くなる。

「はい！」

私達は手を重ねた。進むしかない道ならば、何も言わず全力を尽くすだけだ。

翌日から二月末日まで、兄さんを除く三人は鍛錬を積んだ。私はより大きな力を効率良く使えるように、シェルフィアとリバレスは主にコンビネーションの訓練をしたのだ。その結果、当初の想像以上に成長したと言って良い。兄さんは毎日忙しそうだった。皇帝と言う立場で人々を導くのは並大抵の事では無い。特に民を混乱させず、計画の日に備えさせるのには苦心していた。

そして決戦の前夜、私達はフイグルル城の屋上に集まった。この上無く静穏な夜……。

冬の終わりを告げる、僅かに暖かな風が私達を包んでいた。空には白月と数多の星々。シエルフィアが作った料理と、兄さんが作ったワインがテーブルに並び、屋上の中央には水晶のピアノが置かれている。私達四人はワインが注がれたグラスを手に取った。

「集いし心に、乾杯！」

兄さんの合図で私達はグラスをぶつけ合い、ワインを飲み干した。

「やるだけの事はやりました。後はベストを尽くしましょう！」

「平和の為に。幸せな世界の実現の為に！」

「頑張りましょう！」

四人とも大きく頷いた。揺らぎの無い皆の瞳を見ると、私達が実現したい未来は絵空事などでは無く、確実に訪れるような気がする。

「人間達も一つに纏まり、この一月半で強固な守りを築いた。俺が驚く程のな。だから、俺達は俺達の責務を全うしよう。今日は『人間界』で行う最後の晩餐。しかし、俺達の作戦が成功した暁には『新世界』で最初の祝宴を開こう！」

新世界か、流星兄さんは上手い事を言う。計画を中断させ、冥界の塔が崩ればこの世界は確かに生まれ変わるだろう。

「はい！ 必ず、全員生きて再会しましょう！」

「ルナさんの言う通りです。約束ですよ！」

シエルフィアが全員の顔を見回す。兄さんとリバレスは、何故か二人で目を見合わせた。

「ああ、約束だ」

「約束するわー！」

二人共そう言ったが、何だったのだろうか？ 一瞬の間は。

「ところで、皆今日は何の日か知ってるか？ 空を見るといい」

空を見上げる。数え切れない程の星屑が、漆黒の天空を流れている。これは……

「流星群！」

「綺麗……」

シエルフィアとリバレスの視線が、流星に釘付けになる。

「この流星群は百年に一度現れる。俺はこれを『ティファニー流星群』と名付けた」

兄さんは微笑みながら、照れ臭そうにそう言った。私でも見た事の無い幸せな表情、其処から感じられるのはティファニーさんへの深愛。

「それじゃー、ティファニーさんにも成功を祈って貰いましょう！」

リバレスが流星の光を集めるように飛び回り、やがて私の肩に座った。シエルフィアがピアノ椅子に座り、自作の曲を奏で始める。タイトルは「永遠の心」。

物悲しく切ない、それでいて激しい曲。彼女の、否、私達の人生が集約されたかのような濃密な楽曲だ。曲に合わせるかのように、天空を星が奔る。

「ルナ、シエルフィアを不幸にするんじゃないぞ」

兄さんが私の背中を軽く叩く。私は「はい」と返答し、頷いた。

「ずっと仲良くするのよー！ 例え、わたし達が居なくてもね」

「え？」

私が肩に乗ったりバレスに問いかけようとした瞬間、彼女は飛び立ってピアノの上に座った。さっきのは聞き間違いだろうか？ それとも、二人だけの時も仲良くしろと。

だが結局彼女に問い詰める機会も無く、シエルフィアと二人で眠りに就いた。明日からの戦いへの恐れを打ち消すように、激しく愛し合いながら。

## 第十八節 雫

「さあ、出発だ！」

三月一日、出発の朝。日が昇った瞬間、ハルメスさんがそう叫んだ。わたし達は既に出発準備を済ませ屋上に居る。昨晚に比べて随分と寒いな。

「行きましょう！」

わたし達はハルメスさんの声に呼応する。その後、わたしは定位置に座った。そう、ルナの肩の上だ。彼の体温を感じられる、わたしの幸せな特等席。

「ルナ、頼むぜ。お前は……、最高の弟だ！ そしてシエルフィア、お前は俺の娘だと思ってる。ルナを支えてやってくれ」

ハルメスさんは俯き、右掌で顔を押さえながら光の翼を開いた。きっとルナとシエルフィアは気付かない。彼が何故今そうしているのかを。

「はいっ。ハルメス兄さん、貴方は、私に全てを教えてくださいました。貴方は師であり、最高の兄です！」

「皇帝、行って来ます！ どうか、ご自愛を！」

シエルフィアは表情を曇らせている。彼女は薄々気付いているのかも知れない。

ルナも翼を開き、わたし達は空へと舞い上がった。此処でわたし達は「転送」によって分かれるのだ。ハルメスさんが背を向けた。もう彼はわたし達を直視出来ないのだ。

「俺の心配は不要だ。お前達、何があっても……、前へ進むんだぞ！」

彼は拳を高く振り上げた。それと同時に、「雫」が朝陽を浴びて煌きながら落ちて行く。わたしだけがその意味を知っている。彼の涙の意味を。わたしも涙が溢れる。

最後なのよ、ハルメスさんの姿を見れるのは。ルナにそう言いたくて仕方無い。

「兄さん、約束通り新しい世界でまた会いましょう！」

ルナの言葉で、ハルメスさんは無言で頷く。その後彼は消えた。背中が目に焼きついて離れない。でも此処で立ち止まっちゃダメ。

「ルナー、私達も行きましょう！」

贖罪の塔は、「レニー」から北に飛ぶのが一番早い。ルナは意識を集中し、わたし達三人をレニーへと転送させた。此処からは、地道に塔まで飛ぶしか無い。「転送」では、行った事の無い場所には行けない。到達点をイメージ出来ないからだ。

「ルナさんっ！ 帰ったら、結婚式挙げましょうね！」

塔へ向かう途中、シエルフィアが指輪をギュッと握り締めてそう言った。

「ああ、皆に祝って貰おうな！」

「はいはい、ちゃんと祝ってあげるから頑張りましょうねー」

ルナ、ごめんね。わたしはきっと祝えない。でも二人の幸せは誰よりも強く願ってるから、許して。わたしの選択は大好きなルナに幸せになって貰う事。その為にわたしは……

正午を少し回った頃、わたし達は天高く聳える、神術に包まれた大理石の塔に辿り着いた。頂上は雲の上なので、様子を窺い知る事は出来ない。塔の入り口は、オリハルコンの扉で固く閉ざされている。ルナが剣を構えて扉を破壊しようとする、扉は勝手に開いた。

「開きましたね。行きましょう！」

塔に最初に入っていくのはシエルフィア。それを追うようにルナが走る。

「おい、待てよ！ 全く……、変わってないな」

「本当に。急ぎましょー！」

この二人は、ずっと仲良くやっていけそうね。わたしは一人で何度も頷いた。

## 第十九節 霹靂

真っ白な大理石の壁、上層に続く螺旋階段の手摺はオリハルコンで出来ている。天井から吊り下げられた、神術で灯っている燭台も白い光を放っているので、影になっている部分を除いて目に飛び込んでくるのは、殆ど白である。

「久しぶりだな」

一階の中央に佇む一人の男が声を上げた。金の髪、筋肉質の体、そして白い翼。「セルファス！」

彼は私を、強い意志を込めた瞳で見据えている。談笑しに来た訳では無いだろう。

「ルナ、お前は変わってしまった。俺が誰より尊敬する存在でライバルだったのに……。そしてお前はエファロードという立場でありながら、天界の為すべき責務を阻害しようとしている。俺は力の司官として、かつての友として、お前の愚行を見逃す訳にはいかない！」

彼は私から視線を逸らす事無く、司官のみに使用が許された「聖剣」を構える。私達の到来は予見されていたらしい。それより、まさか塔を上り始める前に「かつての友」と剣を交えなければならぬとは……

「私は自分の信じる道を進む。お前も知っているだろう？ 人間が生まれた意味を。生命の尊厳を踏み躪る天界の計画を、私は断じて許さない！ お前が私を阻むのなら、戦おう。例え、互いに友としての心が残っているととしても！」

私は剣を抜き、エファロード第三段階まで力を解放した。私とセルフアスの力が衝突し、フロアに暴風が巻き起こる。

「初めから人間の辿る道は決まっていた。神の計画は絶対だからな。天界に災いを齎すお前は、俺が倒す！ 覚悟しろ」

奴とは一対一で戦わねばならない。言葉で解り合えぬなら、剣で語るのみ。

「シエルフィア、リバレス！ 離れている、私一人で戦う」

私の声でリバレスは即座に退避し、シエルフィアも束の間の逡巡の後、私から離れた。

「行くぞ！」

次の瞬間には、剣同士が衝突し「ガキンツ」と重い音が響いていた。セルフアス、随分と成長したな。第三段階の私の剣を止めるとは。私達は交互に剣を振り、攻守が目まぐるしく入れ替わる。剣術は五角のようなのだ。だが、お前には力が足りない！

「その程度では、私には勝てないぞ！」

私は剣でガードするセルフアスを、力を込めた一撃で吹き飛ばした。奴は壁に激突し床に倒れる。どうした、もう諦めるのか？

「流石だな……。やっぱ、ルナは強いぜ！」

立ち上がりながら見せた、嬉しさが滲んだ不敵な笑み。やはりこいつは、友情を失ってはいない。私も一瞬口元が綻んだが、即座にしっかりと剣を構える。

「小細工は無しだ、全力で行くぜ！」

あれで本気じゃ無かったのか、恐ろしい成長だ。セルフアスは剣を天井に向かって突き上げて剣に、否、自分自身に雷を纏わせた。これは究極神術「雷光」！ だが自分を電撃で包めば、無事では済まない。一体何を？

「行くぜえ！」

「うああ！」

雷光を纏ったセルフアスが突進して来たので、咄嗟に剣は避けたが雷光が私の右腕に直撃した。皮膚が爛れる程では無いが、広範囲を火傷している。

「はあ、はあ……、思い知ったか！」

セルフアスは雷光を解除した後、剣を肩に乗せゆっくりと歩み寄って来る。全身の火傷を気に留める様子も無く。何と言う覚悟、死に瀕しても尚私と戦うのか？

「セルフアス、お前の決意はよく解った。お前が命を懸けている以上、私も全力を出す！」

私は剣を腰の鞘に収め、右手を奴に向ける。やがて右手前方の空間が萎縮して消滅する。直径一m程の禁断神術「滅」だ。戦意喪失させる為に、私は滅を低速で奴に放った。

「これが、ジュディアを傷付けた術……。確かにこれじゃ、どうしようもねえな！」

ジュディアに聞いたのか。ならば、この術の威力は存分に知っている筈。

「うおお……！」

セルファスは避けない。それどころか、滅に向かって疾走する！

「止める、死ぬぞ！」

「敵に情けかよ？ 相変わらずお前は甘いな。それに俺は、こんな術で死なねえ！」

聖剣を床に投げ捨て両手で滅を押さえる。絶対に無理だ、吞まれて死ぬ！

「解ったから止めるんだ！」

「ぐっ、うがあ……！」

苦しむセルファスを見て私は走った。一旦発動した滅は消せないが、セルファスを引き離す事は出来る。私が彼に手を掛けようとした瞬間、「パァァ……ン」と空気を入れた袋が破れるような音が響き、滅が消えた。セルファスは……、生きている！

「やったぜ……。俺の勝ちだ」

彼は目を閉じて、その場に倒れ込む。私は、彼が地に伏す前に両腕で支えた。

「セルファス、お前は……」

「……ジュディアがお前の恋人を殺した時、俺がその場に居たら、お前の術を、あいつの代わりに受けてやれたかも知れないって思ってたんだ。あいつは、本当に酷い事をしたな。許せないだろうが、俺が謝る。……済まない」

セルファスは呼吸すら辛そうだ。奴の左手の指輪が煌く。そうか……

「お前達は結婚したんだな。だがお前が謝っても、私がジュディアを憎む心は消えない。もし私がジュディアを殺せば、お前は私を憎むだろう？ ジュディアは、それ以上の事をフィーネにしたんだ。幸い彼女は戻って来て此処に居る。しかしこれから先、私が進む道で、彼女を傷付ける者、私の道を阻む者が居るなら、相手が誰であろうと倒す。お前が心からジュディアを愛するのなら、私達の前にあの女の姿を晒すんじゃない」

「確かに、ジュディアを殺されれば俺はお前を憎む。しかしあいつは神術と命の司官。お前達から逃げる事は出来ないんだ。……だから頼む、あいつを殺すのだけは止めてくれ。どうしても殺すと言うなら、俺を殺せ。俺にはその覚悟がある」

セルファスはそう言うと、聖剣を自分の胸に当てた。何の躊躇いも感じさせない目。

「ルナさんっ、私はあなたの隣に居ます。だから、あの人を殺す必要なんてありません！許せとまでは言わないけれど、私達と同じ悲しみを増やすのは……、苦しいです」

何もかも見透かしたような、澄んだ瞳。全ての真理が其処にあるような気さえする。

「……解ったよ、君がそう言うならな。セルファス、私達は天界へ向かう。異論はあるか？」

「ルナ……、そしてシエルフィアさん、ありがとう。そして改めて済まない！ ルナ、俺は動けないし行くんなら行けよ。お前が考えてる事なんだ、何か世界が変わるような重大な事なんだろう？」

「ああ、変えてみせる。今は、お前を友とは呼ばない。だが私が世界を変えられたら……、もう一度友に戻るう」

「うおお……、ルナ！ お前って奴は」

フロアに響き渡る程の男泣き。こいつとは心の根底で結び付いている、そう思えてならない。私はシエルフィアとリバレスを促し、階段を上り始めた。

「やっぱり、セルファスはセルファスねー」

先を飛ぶリバレスが笑う。私は苦笑を浮かべて頷いた。

その後私は翼を開き、シエルフィアを抱えながら上層を目指した。十五時間程で塔の千階に着く。流星に全員疲労していたので、其処で食事を摂り仮眠する事にした。

## 第二十節 慧智<sup>けいち</sup>

眼い。三時間の仮眠じゃあ、わたしの体力は回復しない。でもルナもシエルフィアも起きてるし頑張らないとね。

ルナの肩に乗り更に上層を目指す。六時間程で、千五百階に着いた。さっきより随分ペースが上がってる。心なしかルナはしんどそうだ。

「来ましたね、愚かな脱落者が！」

細身の、何より眼鏡が似合う秀才ノレッジ！ 相変わらず性格が悪いわねー。

「お前まで、私の道を閉ざそうとするのか？」

「君のような屑<sup>くず</sup>を通す理由が、僕には見当たらない。神の名を受け継ぐ者でありながら、天界を背く愚かさに言葉も有りませんよ」

見下したような笑みを浮かべ、ノレッジは首を振る。この男はもう友達なんかじゃない。

「そうか……。お前はさぞ嬉しいだろう。私が天界から消えて、念願のトップになる事が出来たのだからな」

ルナの声が刺々<sup>とげとげ</sup>しい。何だかんだ言って、友達だと信じていたのだから仕方が無いけど。「いいえ！ 元々、僕の方が優れた頭脳の持ち主だったので。君が居ても僕はいずれ天界一になっっていた。それを見せられなかったのが残念ですよ。それに……。これから先もそれを見せる事は出来ない。何故なら、君は此処で力尽きるのだから！」

ノレッジが、かつて神官ハーツが使っていた豪壮な杖を掲げる。ルナも渋々剣に手を掛けた。ダメ、こんな奴相手にルナが力を使うなんて。勿体無いわ。

「ルナー、ノレッジの相手はわたしがするわ。ルナは休んでいいわよー！」

「リバレス、お前には無茶だ！」

案の定止められた。でも鍛錬を積んだわたしは、ノレッジに負けたりしない。

「大丈夫よー！ 友情を裏切った奴の相手なんてわたしで十分。いつも守られてばかりだから、たまにはいいとこ見せるわー！」

ルナが右手中指と薬指を額に当てる。考えている仕草。一秒足らずの沈黙があった。

「…：解った。無理そうなら言えよ。直ぐに助けるからな！」

そう言っつて、ルナとシエルフィアはわたしから遠ざかった。

「馬鹿にするのも大概にして下さいよ！ 僕は『死の司官』、天翼獣如きが僕の相手をするなんて。リバレス君、君を倒した後人間界もろとも全員を滅ぼしてあげますよ！」

「人間界は滅びない。滅びるのは寧ろ『天界』の方よー！」

わたしの言葉を無視し、ノレッジが杖に力を込める。空気がピンツと張り詰め、無音が空間を支配した。さて何が来るの？

「高等神術『拘束』！」

「いきなりそれは卑怯なんじゃないのー？ これで消えちやえ。高等神術『光刃』！」  
拘束と光刃の衝突、硝子が砕けるような音と共に両方の神術が消えた。

「天翼獣が高等神術を使うなんて、聞いた事がありませんよ！ まあ、それで丁度いい。僕の相手をするのですから！」

「そりゃそうね。わたしは普通の天翼獣じゃ無い。お父さんは天翼獣の最高峰、「聖獣」なのだから。わたしの為に死んでしまったけれど。」

「今度はこっちの番よ、『滅炎』！」

「くっ、『氷壁』！」

わたしが出した直径3m程の火球は、ノレッジの氷壁に当たって消えた。

「ははは、その程度ですか！」

「あんまり油断しない方が身の為よー！」

わたしは全速力で飛び回り、同時に八つの火球を放った。これで氷壁では防げない！

「うっ、うわああ！」

炎がノレッジに炸裂する。倒した？

「今のは危なかったですよ…：。本気を出さないと駄目そうですね！」

くっ、究極神術「光膜」で体を覆っている。これは高等神術では破れない。試しに「拘束」を複数放つが、全て掻き消された。どうしよう？

「動きを止めたいのならば、これぐらいじゃないと！」

ノレッジが杖を高く掲げる。ルナが「逃げる！」と転送で伝えてくる。何？

「究極神術、『不動』！」

「キヤアア！」

何て神術なの！ これは、ジュディアがルナを封じたものと同じ。全く動けない！ わ

たしは飛ぶ事も出来ず、床に落ちた。

「さあ終わりです。ルナリート君、早く来ないと大切な『愛玩動物』が死にますよ！」

酷い扱いね……。その言葉、後悔させてやるわ。

「(ルナー、聞こえる？ わたしはまだ大丈夫。唯、一つお願いがあるの)」

わたしはルナに意識を転送した。ノレッジを倒す為の秘策を思い付いたからだ。

「(ああ、何でも言ってくれ！)」

「『あれ』の術式を教えて欲しいのー)」

そう、「あれ」はあの神術だ。禁断の……

「何をしているんです？ 君が来ないのなら、『魂砕断』でこいつの魂ごと砕きますよ！」

ルナは躊躇ったが、やがて言葉を伝えてくれた。

「(ruinだー)」

「(ありがとー！) 禁断神術、『滅』！」

「えっ……！ 何だ？」

わたしの全身の力と、精神力が思いつ切り削られ、何とか神術は発動した。わたしの倍程の大きさだが、油断していたノレッジに直撃する！ 光膜と杖を消し去り、彼の力を全て奪った上で「滅」は消えた。

「そんな……、馬鹿な」

ノレッジがその場に崩れ落ちるのを確認し、わたしも意識を失った。やっぱり、エファロードだけが使える神術を使うのには、無理があったみたいね……

次に目覚めた時、わたしはルナの胸ポケットの中に居た。どうやら、また上層に向かっているみたいだ。わたしはルナに、戦いの後の話を聞いた。

ノレッジは倒れてから直ぐに意識を取り戻し、ルナにこんな事を言ったらしい。

「僕の完敗です。でも今は、妙にスッキリした気分です。僕が……、間違っていましたね。僕は君が羨ましくて、追いかけて、それでも届かずに悔しかった。君を尊敬していたのに、段々それが憎しみに変わっていったんです。

子供の頃から君と一緒に、劣等感を抱いていました。それで、君が居なくなると僕は優越感に浸りました。でも僕は虚しかった。何故でしょうね？ 僕は今解ったんです。僕は、君に認めて欲しかったのだと。僕は最低です……。セルフアス君と君が夜中に競った時も、天界での裁判の時も僕は逃げ出してばかりだった。君達は、僕にとっての大切な大切な友達だったのに！」

その後彼は、わたしを回復させる為に、「高濃縮されたESG」をルナに渡した。今わたしがこうして元気なのは、ノレッジのお陰だと言っても良い。

ルナはノレッジを許し、この戦いが終わればまた友達になる事を約束した。ノレッジは

ずっと泣いて謝っていたらしい。わたしも、彼を許す事にした。  
この後にはジューディア、そして天界と衝突するだろう。其処でルナが選ぶ未来は、わたしにはよく解る。

生まれてから「最後の刻」まで、わたしは彼の傍に居るのだから。

## 第二十一節 氷華

塔を上り始めて二日と数時間が過ぎた頃、私達は最上階つまり三千階に辿り着いた。一階層の高さは十mなので、此処は高度三万mという計算になる。幾ら塔が神術で覆われているとは言え、空気が薄く気温が低い。私がもしフィーネのままだったなら、生きては居られないだろう。

見上げると太陽、眼下には雲。足元がフワツと感じる程壮大な眺めだ。屋上の中央には何らかの装置があり、その前には肩と翼に痛々しい傷を持つ一人の女性。あれは……

「ジューディア！」

ルナさんから、ピリピリした空気が伝わって来る。そう、あれは私を殺した女性。

「此処に来たって事は、セルフアスもノレッジもやられたのね……」

彼女は悪びれた様子も無く溜息を吐く。ルナさんは剣を抜き、今にも走り出しそうだ！

「……その娘、私が獄界に送ったのに戻って来たのね。ルナ、貴方はエファロードであると言うのに人間なんか恋をして、獄界を荒らしまわった挙句、今度は天界を壊すつもりなの？ 唯の馬鹿ね」

「セルフアスに頼まれていたが、余程死にたいらしいな！」

「まずい、今のルナさんは本当に殺しかねない！ 私は彼の左手を掴んだ。」

「ルナさん、あの人は私に任せて下さい。今のあなたが戦えば、憎しみしか残りませんよ」

「何故だ？ あいつは君を殺した上に獄界に送ったんだ。許せる筈が無い！」

ルナさんが凄い力で私の手を振り解こうとする。その時リバレスさんが加勢してくれた。

「ルナ！ ちゃんと、シェルフィアの言う事を聞いてあげて」

ようやく彼は剣を収めた。私は胸を撫で下ろし、ジューディアさんに歩み寄る。

「へえ……、人間の娘如きが私に何の用かしら？」

相変わらず、人を蔑むような視線。私はこの人を「救う」必要がある。

「貴方は可哀想な人。ルナさんを思うばかりに、私を殺してまで取り戻そうとした。でも私はその気持ち解る。私だって、ルナさんが誰かに奪われたら絶対に許さないから」

その瞬間、彼女は私の服を掴み、目に憎しみの炎を宿らせた。

「お前なんか何解るって言うの？ 私の気持ちが解るですって！ 人間如きに愛する人が奪われた私の気持ち」

彼女の体から、屋上全てが凍り付くようなエネルギーが迸る。

「貴方はそうやって、外見の美しさや神術の力を示す事しか出来ない。大切なのは『心』なのに！」

「黙りなさい！ お前を見ていると、気が狂いそうになる。私の前から消えるがいいわ」

彼女は精神を集中し始めた。ルナさんには及ばないけど、凄いい力。

「貴方に理解して貰うには、戦うしかないみたいね」

「止める、シエルファイア！ 君の力で対処できる相手じゃない！」

そうですね、ルナさん。あなたに見せていた力じゃ太刀打ち出来ない。

「ルナさん、ごめんなさい。私、まだ本当の力を隠してました」

私は目を閉じ、自分の中に眠る全ての力を解放した。人と天使の力、魔物の力、そしてロードとサタンの力……。私にはその全ての力が少しずつ宿っているのだ。

「お前は一体……、何者なの？」

「私は転生する時に、様々な力の加護を受けた。その中には、神と獄王も含まれている」  
彼女が一步後退る。ルナさんもリバレスも驚いているようだ。

「そんな事は有り得ない！ 死になさい、高等神術『絶対零度』！」

「本当の冷たさを知ってる？ 魂が愛する人から離れて、一人ぼっちになる冷たさを！」

私は、彼女の氷を遥かに超える氷壁を生み出した。高さは数十mにも及ぶ。

「くっ、私は司官。天界のリーダー的存在よ！ 究極神術を受けるがいいわ！」

「それで貴方の気が晴れるなら、好きだけ神術を使うといいわ」

私は究極神術ぐらいなら幾らでも防げる。気が済むまで彼女に攻撃をさせよう。

「お前の指図は受けない！ 究極神術『不動』、『神光』！」

「シエルファイア！」

眩い光と共に、ルナさんとリバレスさんの声が響く。心配しなくても大丈夫です。私は彼女の神術の到達前に対策を打っているのだから。

「これが究極魔術、『暗幕』」

私は、カーテン状の防護膜で彼女の神術を打ち消した。これで終わり？

「そんな……、私が人間如きに」

彼女がその場に座り込む。どうやら、さっきのが彼女の全力だったらしい。

「人間も天使も、魔物だって魂の価値は変わらない。唯、貴方がそれを受け入れようとしてないだけ……」

私は「暗幕」を解除し、彼女に近付く。私は「仕上げ」をしなければならぬ。

「私は、死んでもお前の言う事なんて聞かない。殺すがいいわ！」

「それじゃあ、一度死んでみるのもいいかも知れないわね」

私は彼女に向かって微笑んだ。彼女は大きく目を見開き、呼吸を止める。

「（シエルファイア、止めるんだ！ 君がそいつを殺しても意味は無い）」

「大丈夫ですよ。唯、この人を心の闇から救うだけです。」

私はルナさんの「転送」に「転送」で言葉を返した。そしてジュディアさんを見下ろす。

「確か、『不動』と、『墮獄』よね。私に使ったのは」

私はそう言いながら、彼女を「不動」で動けなくした。彼女の顔が引き曇る。

「な……、何をやるの？ 嫌、私は死にたくない！ セルフアスー！」

結局貴方は死を恐れるのね。それが当然の反応。

「禁断神術、『墮獄』！」

これで終わりよ。私は、空間に「漆黒の剣」を生み出し彼女の胸に突き立てた。

「キヤアア……！」

彼女の絶叫が響く。全てが終わったのだ。

剣は偽物だ。だから、彼女の体に当たった瞬間粉々に砕けていた。

「少しは解ってくれた？ 貴方がやった事がどれ程恐ろしい事か。死ぬ前に、愛する人の顔が浮かぶでしょう？」

私はジュディアさんに手を差し伸べた。彼女は私の手をギュッと掴む。泣いていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい！ うわああ……ん！」

「解ってくれたらいいのよ。私はルナさんの所に戻ってくる事が出来たんだし、もう誰も貴方を責めないから」

彼女は何度も何度も謝り、泣き続けた。これで、余計な憎しみを増やさずに済んだ。私は彼女に殺されたけれど、憎んではない。もう彼女は、人を見下したり傷付けたりする事は無いだろう。痛みを知ったのだから。そしてルナさんも彼女を憎む事は無くなる筈。

私は彼女が泣き止むまで、抱き締め背中を撫でてあげた。

## 第二十二節 皎月（こうげつ）

三人は天界の地下通路を駆けている。ジュディアが贖罪の塔屋上の転送装置を起動させ、転送してくれたのだ。地下通路に敵はおらず、最終到達地点は封印の間に近い。

「本当にこの道で辿り付けるのかしらねー？」

「大丈夫ですよ。ジュディアさんの目は、嘘を吐いているようには見えなかったから」

シェルフィアの言う通りだ。泣き腫らした彼女の目に偽りの色は無かった。

「それはシェルフィアのお陰だ。先を急ごう！」

私は二人に声を掛け、速度を上げて通路を走った。

通路を通って数時間後の午後八時、私達はようやく出口の明かりを見た。最後の階段を一気に駆け上がる。視界が、全方位に大きく広がった。

遙か頭上には皎々と輝く満月が上り、私達を照らしている。南の方には薄っすらと神殿が見え、北には山々が連なる。目の前には、月華と同色の花が密に咲く草原が広がり、その奥には封印の間、そして門前の噴水がある。

「懐かしいわねー……」

「ああ」

二百年振りに見る故郷は、旅立ちの前と変わっていない。大理石の道、建造物、整えられた自然。何故かその風景は、私達の帰郷を喜んでくれているように見えた。

「此処が、ルナさんとリバレスさんの故郷……。とても綺麗な世界ですね」

シエルフィアが天界に見入っている。手の入っていない自然も美しいが、人工的に作られたものにも幾何学的な美があるのだ。私達は、風景を見ながら封印の間へと歩を進めた。

「可愛らしい花が咲き誇っていますね」

シエルフィアがしゃがみ込み、草原に咲く一輪に顔を寄せた。儂く可憐な花卉。

「この花は……」

「ルナ草ねー」

二百年前、こんな所にルナ草は無かった。なのにこの草原は全てルナ草だ。天界でしか生息せず、しかも個体数が少ないこの花がこれ程咲くとは。

「(ルナリート様、お久し振りです……)」

何処からともなく頭に直接響く、聞き慣れない声。だが暖かく、優しい、何処かで聞いた事があるような声。誰だろう？ 私は周囲をクルクルと見回す。

「(私は足元にあります、どうかお姿を良く見せて下さいませ)」

「まさか……、私が天界を去る前夜に、窓から飛ばしたルナ草か？」

一際大きく、そして誇らしげに咲き揺れる花に私は問い掛ける。

「(はい、その通りです。貴方様のお帰りを心待ちにしておりました。お元気な様子で安心致しました。見て下さい、周りの花達を。みんな私の子供なのですよ……)」

二百年でルナ草は、根を張り、花を咲かせ、実を結びこれ程数を増やしたのだろう。それより植物が意思を、否、魂を持つのは極めて稀だ。エファロードの記憶を辿って見ても、過去に数度しか無い。色々と話をしたい所だが、私達は先を急ぐ。

「良かったな、これからも元気に花を咲かせるんだぞ」

私は神術で大気中の水を集め、花に注いだ後走り出した。

「(お待ち下さい！ 私在此処でお待ち申していたのは、貴方の力となる為です)」

「お前は……、一体？」

「(私の魂、『神剣ルナリート』として捧げましょう。この先で必ずお役に立ちます！)」

神剣、それは魂を剣に変えたもの。神のみが扱う事を許され、しかも神剣の魂は扱う者を深く信頼していなければならぬ。その分神剣の力は凄まじい。オリハルコンの剣が、注がれた精神力の一部を破壊力に変換出来るのに対して、神剣は全てを破壊力に変える。

「お前も、私と共に戦ってくれるんだな。ありがとう！」

ルナ草が、神々しい剣に変化する。それを手に取ると、途方も無い力が刀身に宿るのが解った。これがあれば、どんな武器にも負けはしないだろう。

私はオリハルコンの剣をシエルフィアに渡し、封印の間の門を開いた。後は扉を開けば、其処は「神の領域」。外観は小さな塔だが、内部の空間は湾曲しており途轍も無く広い。

「ルナー、危ない！」

突如扉が開き、其処から出て来たものは……、槍！

「ガキイイ……ン！」

リバレスのお陰で、「光膜」での防御が間に合った。私は扉の向こうを覗む。

「くくく……、遂にこの日が来ましたねえ！ 私の人生を砕いた愚者に対し、破滅を齎す時がああ！」

真つ白な頭、痩せこけた顔と体、狂気が滲み出た目元。奴は……

「元神官ハーツ、私はお前に用は無い。此処を通して欲しくないか？」

「私は神官ハーツ様だああ！ 逆らう者は魂を砕かれるがいい！」

私の声を上手く認識出来ていないらしい。精神の一部が破綻しているのか？ 何にせよ、通してくれそうに無い。私達は大理石とオリハルコンで出来た「間」に飛び込む。

「リバレス、シエルフィア、奴の神術は強力だ。だが油断せずに、『拘束』と『魂砕断』にさえ気を付ければ大丈夫だ！」

二人は頷き、私から離れた。そして私達は、ハーツを三角形状に包囲する。

「全て消えるがいい！」

光、熱、氷、そして魂砕断が奴の掌から放たれる！ 私達はそれを打ち消し、躲した。

「昔よりも、力と殺意に満ちているな。ならば動きを止めてやる！」

私は奴に向かって、「不動」を発動させた。だが奴は容易くそれを避ける。

「甘いすねええ！ 動きを止めるならこうしないと！」

数百の「拘束」がリバレスを囲む！ これでは避けられない。

「リバレス！」

「リバレスさんっ！」

私達は、同時にリバレスに駆け寄ろうとしたが、彼女に制止された。

「あんまりわたしを見縊らないでよねっ。究極神術『重圧環』！」

かつて神官が、夜に外出した私達を捕らえるのに用いた神術だ。この環の中に居る者は、十倍もの重力が加わる。重圧環によって拘束は消え、ハーツは地に伏した。

「ぐうっ、体が重いい！」

「シエルフィア、今よ！」

「解りました。行きますよ！」

二人が何をするのかは解らない。だが私は、いつでも動ける準備だけはしておく。  
「究極神術『不動』！」

「うがああ！」

シエルファイアがハーツを動けなくした。そしてリバレスが、雷の神術を連続で放つ！  
「私は、神官ハーツ様だああ！」

とつくに意識を失ってもいい筈なのに、ハーツは尚も叫び続ける。

「ハーツ、負けを認めるんだ。このまま攻撃を受け続ければ死ぬぞ！」

「私は、ダ・レ・ニ・モ、負けは、しなあいいい！」

不気味な甲高い絶叫。その直後、奴の体が真っ白に光る！ 閃光は私達を呑みこみ、部屋中へと拡がった。

「ドオオ……ン！」

「キヤア……！」

爆音、続いてシエルファイアとリバレスの叫び！ 一体何が起こった？

閃光が消えて、初めて気付いた。自分が血塗れになっている事に。ハーツは、自分の命と引き換えに、禁断神術「爆」を使ったのだ。これは、肉体と魂の全てを爆発させる神術。

出血の割に、私の傷は深くない。全身を軽く火傷した程度だ。だが……

「シエルファイア、リバレス！」

二人は倒れていた。火傷ではなく、爆風の衝撃で壁に叩きつけられたようだ。二人共全身打撲に、複数個所の骨折。私は直ぐに治療を開始した。

「ハーツ……。お前は最後まで救えない奴だったな」

私は、風に揺れるハーツの服の破片を見てそう呟いた。

二人の治療には一時間程掛かり、それを終えると今度は私に眠気が襲って来た。疲労による、抗いようの無い睡魔。私は眠りに落ちる。

この先に待ち受けるものは何だろうか？ 平和、それとも戦争だろうか。唯一つ確かなのは、次に会おうのは『神』である私と兄さんの『父』だと言う事。

其処で全てが始まり、全てが終わる。

例えこの先に待つ運命が過酷だったとしても、私は立ち向かう。『永遠の心』を持って。君と創る未来の為に。そして、今を懸命に生きている者の為に。

## 第二十三節 孤高の双極

ルナ達が天界に到着した数時間後、ハルメスも冥界の塔の最下層に到達した。塔を下る間、彼は魔に遭遇せず楽に下る事が出来た。だが彼はそれを「嵐の前の静けさ」と認識し、より警戒を強めている。獄界への転送装置、つまり闇を模した球体の彫像の前に座り込み、

彼は胸の内ポケットを探り始める。程無くして、其処から出て来たものは、古びた、だが丁寧に保管されていた紙箱だった。

「ティファニー、お前が死んでからずっと止めていたが……」

彼はそう呟き、紙箱を開けて一本の煙草を取り出す。ティファニーから最後に貰った煙草だ。彼女は、彼が煙草を吸う姿を特に愛していた。

「これを吸うと、あの頃を思い出すよ」

久々の煙草にぎこちなく点火した後、ゆっくりと胸一杯に吸い込み、吸うのと同じ時間をかけて吐き出す。紫煙は張り詰めた空気に染み渡り、彼の緊張をも和らげた。

「……よし。大事な弟の為だ、戦うぜ！」

彼は立ち上がり、オリハルコンで作った剣を抜いた。

俺の直感が魔の到来を告げている。計画実行までは一ヶ月と少しあるが、四月四日に塔を上り始めては遅い。獄王は計画の前に、全ての魔の人間界への配備を終えるだろう。即座に人間を殺す為に。

臨戦態勢に入り待つ事二時間。転送装置が妖しく蠢き始めた。俺は「光膜」で体を覆う。

「グワアア……！」

次の瞬間数百体、否、最下層を埋め尽くす程の魔が眼前に現れた！

「なかなかの団体様だな……。行くぜ！」

「エファアロードハ死ネエエ！」

剣や槍、斧や弓を持った大軍が一斉に俺に襲い掛かる！

「お前達には悪いが、此処は一步も通さんぞ！」

俺はそう叫びながら、究極神術「神光」を発動させる。魔は断末魔と共に消え去った。しかし……

「エファアロードオオ！」

次の一群が間髪置かずに現れた。根競べと言う訳か。俺は、魔が現れる毎に「神光」で撃退し続けた。

「はあはあ……。一体どれだけ来るんだ？ これで五十六回目だぞ！」

一万体以上は倒しただろう。幾ら俺がエファアロードでも、これだけの魔を「第二段階」で相手するのは辛い。消耗は激しいが、「第三段階」にすべきかもな。しかし、予想に反して五十七回目に現れたのはたった一人だった。漆黒の体毛を持った、巨大な狼の魔。

「ハッハッハ……。貴様が、あのルナリートの兄か！」

こいつ……。第二段階の俺より強いな。今まで倒した魔とは桁違いだ。司令官クラスか？ 「何故ルナの事を知っている？」

「奴には世話になったからのう。此処に奴が居ないのは残念じゃが、まずは貴様から死ぬが良い！」

フロアが闇の螺旋へと姿を変える。そうか、こいつが「側近フアング」。ならば……

「禁断魔術『死闇』如きで俺を殺すだと？ 舐められたものだ」

俺は一瞬で「第三段階」の力を解放し、俺の身長の数倍はある巨大な「滅」を発動させる。滅は死闇を呑み込み消えた。ルナにこいつの話聞いておいて助かったぜ。

「待て！ ワシを殺してはならない」

剣の切っ先をフアングに向けると、奴は前足を上げて首を振る。もう降参か？

「フアング、お前は役に立たないね」

奴の背後から聞こえる少年のような声。誰が、いつの間に！

「フィアレス様、どうかお許しを！ ……ギヤアア！」

フアングの胸から、漆黒の剣が突き出て来たので俺は咄嗟に後ろへ飛ぶ。飛びながら声の主を確認した。間違い無い……、王子フィアレス！

「エファサタンが、わざわざこんな所に何の用だ？」

俺は王子を睨み付けながら「第四段階」、つまり俺の全力を解放する。そうで無ければ瞬殺されるからだ。王子はフアングから剣を引き抜き、俺に向かって歩み寄る。

「無能な部下が失礼したね、ハルメス・ジ・エファロード。僕の事を知っているようで光栄だよ。僕はルナリートを殺しに来ただけで、もう一人のエファロードが此処に居るなんてね。好都合だよ」

「まさか、サタンが直接人間界に向かうとは思わなかったぜ……」

「そう？ 僕が行く方が計画はスムーズに進むでしょ。それより、僕は早くルナリートに会いたいんだ。けど君も邪魔だから、弟より先に殺してあげるよ！」

その言葉の直後、奴の姿が消えた！ 「パアアン」という音と共に、俺の光膜が破壊される。俺は何とか奴の剣を受け止めたが、重い一撃に腕が痺れる！

「容赦の無い剣だな。だが、俺がお前に負けなければ人間界は滅びるだろう。だから俺は命を懸けてお前を倒す！」

「そう来なくちゃね！ それでこそ殺し甲斐があるよ」

俺達は互いに、瞬きより早く離れた。次の一手を思考する。殺す気で行かねば。

「禁断神術『滅』！」

「ふーん……。『滅』なら僕も使えるもんね」

俺の放った滅が、フィアレスの滅に衝突し呑み込まれる。眼前に奴の滅！ 俺は辛うじて「転送」で逃げた。奴はルナの指輪から神術の情報を引き出したのだろう。厄介だな。

「逃げちゃダメだよ」

突如左から奴の声が響く。不味い！ 俺は咄嗟に、右に飛んだ。だが、その時には既に奴の剣が俺の胸に届いていた。「ブシュツ」と言う、肉を裂く嫌な音が響く……

「其処まで転送を使いこなすとは。ぐっ……」

俺は脇腹を押さえる。骨には到達していないが、傷はかなり深く出血が止まらない。オ

リハルコンの帷子かたびらを着ていなければ、俺は両断されていただろう。

奴の放った滅が、壁を二十m程抉り取って消える。凄まじい威力だ……

「よく避けたね。真つ二つだと思っただけど」

王子の表情は若さ故か、解り易い。悔しさと嬉しさが滲んだ双眸が俺を見据えている。

「今まで生きて来て、お前のような強敵に会ったのは初めてだ。俺は、獄界から無事に帰って来たルナを誇りに思うぜ」

此処で死ぬつもりは無かった。俺にはもう一つの役目があるから。だがそんな悠長な事も言っていられない。刺し違えてもサタンを倒す！ 大切な弟達、そして人間を守る為に。

ティファニイ、これが「俺達」の最後の戦いだ。力を貸してくれ！ 俺は目を閉じ、彼女の魂に語り掛ける。彼女は、俺の願いを聞き入れてくれた。オリハルコンの剣が輝き出し、彼女の魂が宿る！

「へえ……、何？ その剣は」

『神剣ハルメス』。俺の最愛の女性が変化した姿だ」

「そんな剣で僕を倒せると思ってるの？ もう茶番は終わりだ。死んでしまえ！」

奴が消えた。また死角から俺を攻撃するつもりだろう。

「ザシュツ！」

剣が胸を縦に裂く！ ファイレスの胸を。ティファニイが反射的に攻撃してくれたのだ。

「ぐっ、そんな馬鹿な！ 剣が勝手に動くんなんて」

「この剣は、俺とティファニイの意思で自由に動かせる。直接腕を振る必要も無くな。此処からが本当の戦いだぜ！」

俺達は睨み合いながら、不敵に笑った。刹那の後、俺達は宙を舞い全力でぶつかる！

炎、氷、光、闇、あらゆる神術と魔術がフロアを飛び交い、剣戟の火花が散った。俺も奴も、生傷が無数に増えて行く。ロードやサタンの回復力でも間に合わない！

「はあはあ……、そろそろ人間界を諦めてくれないか？」

俺は左脇腹を抉られ、右肩を斬られ、右大腿を刺された。出血で眩暈がする。

「ハア、ハア……、君こそ早く死んで僕を通してくれよ！」

奴は左頬と左目を炎によって焼かれ、右腕が折れている。次が互いの最後の攻撃……

「もう終わりにしようぜ！ 創始の神術『光 (sunlight)』――」

「……そうだね。これで終わりだ、終焉の魔術『闇海 (darksea)』――」

フロアの半分が光に、もう半分が闇の波動で埋め尽くされる！ この空間では最早、ロードとサタン以外の生物は生存不可だ。

「決着を付けようではないか、サタンよ！」

「消えるのはロードである！」

俺達の過去の記憶が、反射的に言葉を紡ぎ出す。奴もまた、記憶の継承が済んでいるの

だろう。増幅する力で塔は激しく振動を始めた。転送装置を残して塔が融解していく。下層百階程は既に消滅した。俺達の周囲には空洞が出来、眼下には溶岩が流れる！

「ティファニー、俺に力をお……！」

「僕はサタンの末裔、負ける筈が無い……！」

俺達は既に限界を超えていた。傷口からは血が噴き出し、翼も皮膚も消失しようとしている。だが、俺は絶対に負けない！

「ザクッ！」

俺は「転送」を使い、剣でフィアレスの胸を貫いた！ だがそれを読んでいた奴も、剣を突き出し俺の胸を貫く。相打ちか……？

進む二人の血液が溶岩に吸い取られていく。光と闇は消え去った。二人は同時に、僅かに残る地面へと落ちる。

「ぐああ……！ 俺の、勝ちだな。これで魔は人間界に来れまい」

「ウグウウ……！ 無駄さ。転送装置さえあれば、僕が戦えなくとも計画は中断されない。

だから……、僕の勝ちだ」

俺達は地面を這いながらも、相手を睨み付ける。俺は心臓と肺を損傷した。長くは生きられないだろう。フィアレスも同様のダメージを負った筈……

「転送装置も含め……、この塔を丸ごと消してやるぜ」

「ふん、戯言を……。君の人生はもう直ぐ終わりだ。未来の心配など要らないだろ。今度  
は、必ず、ルナリートを、殺してやる」

強がり……。お前も死に掛けの癖に。フィアレスは姿を消した。傷を癒す為、獄界に帰還したのだろう。帰還したとて、奴が生き永らえるとは限らないが。

「ルナ……、何とか追い払う事が出来たぜ。後は……」

俺は剣を支えに立ち上がり、自分自身を「転送」させた。ある遺跡へと。

血を吐き、足を引き摺り、歯を食い縛りながら、俺は「階段」を下る。出血量は既に致死量を超え、意識を保つ事も危ういが、それでも俺は歩を進める。一歩ずつ、ゆっくり。

自分が生まれた意味を完遂させる為に。

## 第二十四節 始終

眠るルナを五人が囲んでいる。彼の目覚めを待ち、何度も呼び掛けながら。そして精神エネルギーを彼に注ぎ込みながら。やがて、彼は薄目を開けた。

「良かった、気付きましたね！」

シエルフィア……、だけじゃない。リバレス、セルフアス、ノレッジ、ジュディアが私を見ている。

「そうか……、皆で私を治癒してくれたんだな」

私は皆の目を見る。一様に頷く五人。

「ルナ、お前を回復させるのは大変だったぜ！ 皆へトヘトだ」

セルフアスが私の肩を叩く。私は嬉しかった。先刻まで敵だった三人が此処に居る事が。

「済まないな。セルフアス、ノレッジ、そしてジュディア。私達は今から神の元へ向かう」  
私は立ち上がりながら三人に微笑む。

「ルナリート君、僕達はこの先で何が起ころうとも、君の選択に従う事にしたんです。だって君はエファロード、いいえ、友達だから！」

「ありがとう。私もお前達の事を信じる」

差し伸べた私の手を三人は固く握った。

「ルナ……、本当にごめんなさいね。私が昔貴方に苦しみを負わせた分、いいえ、それ以上で貴方達を助けるから！」

「ああ。この戦いが終われば、皆元通りの友達だ。行ってくる！」

目尻に涙を浮かべるジュディアを背に、私とシエルフィア、リバレスは歩み出した。

「良かったわねー！」

リバレスが耳元で囁き、私の顔を飛び回る。私は頷き、シエルフィアと手を繋ぎながら階段を一段飛ばしで駆け上がる。早く、無益な争いを終わらせよう。

「此処は……？」

「真っ暗ねー！」

シエルフィアとリバレスが声を漏らす。無理も無い、第二階層は何の光も無い闇だ。後ろを振り返っても階段は消えており、近くに居る二人の姿さえも見えない。

「これがエファロードの力だ。空間を自在に操る事が出来る」

「どうやって先に進めばいいんですか？」

シエルフィアの怪訝な声けげんが聴こえるが、私の中にはその答えがある。神の記憶だ。

「石版を探すんだ。それを読めば、自動的に上層に転送される筈だ」

「でも、何も見えないわよー！」

尤もだ。明かりを付ける事が先決。石版を捜す事は記憶にあっても、石版の在り処あまでは思い出せないのだから。私は空間を照らす為に、究極神術「神光」を放つ。だが消え掛の松明のような光が一瞬灯っただけで、空間は暗いままだった。

「封印の間は、エファロードのみが進む事を許された場所だとすれば……」

私は目を閉じ、自分に眠る全ての力を解放する。そして創始の神術「光」を発動させた。

その直後、目が眩む閃光が闇を切り裂き、後には真っ白な床と石版が残った。私達は、恐る恐る石版に近付く。其処に書かれていたのは、「神だけが読める文字」だった。

「ロード、サタンは一代で約三十三万年生き、死の直前に『子』を遺す。子は、親の死と同時に全ての力と記憶を継承するが、親の死よりも前に『第四段階』までは覚醒する事が

ある。子は親の複製であるが、僅かに変異する余地が残されている」

頭を鈍器で殴られたような衝撃が奔った。気が遠くなる程の寿命、そして「第四段階」以上の存在、何より私と兄さんは「複製」であると言う事実が書かれていたからだ。

石版の内容を吟味する暇も無く、私達は上層へと転送された。目が灼かれるような閃光で瞳を閉じるが、瞼を貫通して真っ白な光が飛び込んで来る。

「眩しいわー！」

リバレスは、少しでも目に飛び込む光を軽減させる為に、私の胸ポケットに隠れた。

「此処は私の出番ですね」

「シエルフィア……、まさか！」

第二階層は「光」、ならば第三階層は「闇」で道を切り開くと言うのか？

「ルナさんっ、リバレスさん。力を貸して下さい！ 私一人では発動させられません」

シエルフィアが私の手を握る。彼女に、「魔術発動」の兆しが顕れる。止める！

「終焉の魔術、『闇海』！」

嘘だろ？ 獄王のみが使える魔術を彼女が！ 否、本当に発動させようとしている。私の精神力が一気に吸い取られているからだ。鼓動が早く、大きくなる！

「キヤアア……！」

リバレスの声！ 彼女も同様に力を奪われたのだ。気絶したのか、彼女の動きが止まる。

「シエルフィア、止める！ 君が死んでしまう！」

「ダメです、こうしないと先に進めないでしょう？ 私を信じて下さい！」

確かにそうだ。先に進むには彼女に頼るしか……

「ゴオオ……！」

シエルフィアの力が尽きると同時に、小規模ながら「闇海」は発動した。光が消える。

「シエルフィア！」

私は彼女を抱き締める！ 強く……、強く。

「ほら……、道が出来ましたよ」

「無茶な事ばかりするなよ！」

彼女は精神力をほぼ失っている。一歩間違えれば死んでいた所だ……

「ふふ……、大丈夫ですよ。でも、リバレスさんと一緒に少し休みますね」

彼女はそう言って、私の腕の中で眠りに落ちた。満足な笑みを浮かべて。私はそっと、自分の目尻に溜まった涙を拭いた。黒い床の上に石版があるが、これを見るのは二人が目覚めてからにしよう。今は、二人をぐっすり眠らせてあげたい。

「……ルナさん」

「……ルナー」

シエルフィアとリバレスは私の名を呼びながら目覚めた。眠りに就いて六時間後だ。  
「二人共おはよう。大丈夫か？」

二人は目を擦りながら頷く。私は一人ずつ頭を撫でた。微笑みを湛えた二つの顔。  
「私があ石版を読めば、戦いが始まり後戻りは出来ないかも知れない。二人は此処で休んでいてもいい。……どうする？」

答は解っていた。だがもしも、彼女達が傷付かずに済むならそれに越した事は無い。  
「行きましょう！ あなたと共に、何処までも」

「私もルナと最後まで一緒よー！」

予想通りの返答。僅かに目元が潤む。私はシエルフィアと手を繋ぎ、リバレスを肩に乗せ石版へと近付いた。

「ありがとう、シエルフィア、リバレス。私が此処までやって来たのは二人のお陰だよ。私は二人を誇りに思う……。この先に何が待っているかは解らないけど、これから先も宜しく頼めるかな？」

「私は死さえも乗り越え、あなたの元に帰って来ました。ずっと一緒にいる為に！ だから、この戦いが終わっても私はあなたの傍に」

シエルフィアが私の手をギュッと握り締めて私を見詰める。曇り一つ無い強い決意の瞳。私も手を握り返す。いつもはひんやりした彼女の手が、熱を帯びている。

「ルナは私の親同然。例えこの戦いで何があっても、ずっと一緒だからねー！」  
穏やかな笑みの中に、刹那浮かんだ「哀しみ」。彼女は何を考えている？

「リバレス、お前は……」  
「何でもないわよー。それより、早く石版を読みましょう」

確かにリバレスの小さな双眸に雫が溜まっていた。理由を訊くべきかも知れない。だが私は、中空を飛び回る彼女にそれ以上追及出来ず、石版に目を通した。

「エファロードの最終段階は、『神の継承』。それはロードとサタンの合意により行なわれる。全ての『生命』はこの先で始まり……、そして終わる。神と獄王の意思だけが、果て無き歴史を紡ぐのだ。だが、『定められし運命』からは誰も逃れる事は出来ない」

やはり、このフロアを越えるには獄王の力が必要だった。それよりも、その後の語句が私は気に入らない。新生・中界計画が「定められし運命」ならば、誰も逃れられない事になるからだ。それなら私を変えてやる。運命を変え、新たな歴史を刻むんだ！

小刻みに震えるシエルフィアの肩を私の体に寄せ、肩に乗って来たリバレスの頭を指で撫でる。そして私は静かに目を瞑った。

「行こう、この星に生まれた事を『幸せ』と言えるように！」

私達は、「高速回転する光の膜」に包まれた。これは、かつて私達が神から墮天を受けた時と同じ力。私達は神の元へ運ばれているのだ。

三人で体を寄せ合い、生きている温かさを確認する。此処から帰る時も三人一緒だ。

## 第二十五節 心魄の衝撞

何処までも続く蒼穹<sup>そうきゆう</sup>。だが地面も海も存在しない。此処は、全方位が空なのだ。しかも重力が通常の世界とは異なる。空でありながら、下に落ちる事も無く歩く事が出来る。

遙か頭上にはS・U・N。眼下には僅かな千切れ雲。温かな微風が肌を撫で、衣服が衣擦れの音を奏でる。この空間を満たしているのは、光と静寂。そして私達に背を向けた、白い十字架が嵌めこまれた黒い椅子と、其処に座る銀髪の男。

「待っていたぞ、ルナリートよ」

椅子がゆっくと振り返る。私は其処に座る男の顔を見て、言葉を失った。

「ルナにそっくり！」

その通りだ。彼は、私をそのまま老化させた姿と言っても差し障りは無い。

「貴方が……、シエドロット・ジ・エファロード。神なのですか？」

彼は椅子に座り微動だにしないが、凄まじい威圧感が私達に押し掛かる。呼吸する事さえ躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>われる程の……。やがて神は、座ったまま空間を滑るように此方へ向かって来た。

「その通りだ。ルナリート・ジ・エファロードよ。一体お前は、何の為に此処に来たのだ？」

私が黙っていると、シエルフィアが威圧感を跳ね除け、先に口を開いた。

「私はシエルフィアと申します。私達は貴方に申し上げたい事があり、此処に参りました」

「我は、人間の言葉に耳を傾ける気など無い。天翼獣と共に黙っておるがいい！」

神が掌を彼女に向ける。危険を察知し、私が間に割り込もうと動き出した時には、既に彼女とリバレスに「不動」が掛けられ、遠くへ飛ばされていた。何と言う高速な神術の発動！二人は傷を負った訳では無いが、私は有無を言わせない遣り方に憤りを覚える。

「何をするのです！ 単刀直入に申し上げましょう。私達は『新生・中界計画』を中止して頂く為に来ました」

「不可能だ、計画は私の責務。獄界との和平策はこれしかない」

感情の籠<sup>かご</sup>もらない低く荘厳<sup>そうごん</sup>な声での即答。冷たい光が宿る真紅の目が揺らぐ様子も無い。「何故なのですか？ 人間界は、天界の存続の為に生まれました。そして人間達は皆、厳しい境遇を苦にせず、私達と変わらない魂を持って懸命に生きています。天界の生命が生きる代償として生まれた人間を、また天界の都合で滅ぼすと言うのですか！」

「……お前が、其処まで人間に傾倒しているとはな。人間という生物は、かつての神が創り出した『物』であり、神を継承した我がそれをどうしようが勝手だ。我こそが、現在の歴史を紡ぐ者なのだから。お前が我に口出しする事など、赦<sup>ゆる</sup>されはしない」

話し合いの意味は無いと言うのか？ 否、私には考えがある。

「私は人間を贖<sup>ひきかへ</sup>している訳ではありません。唯……、正当な判断をしているだけです！ 人間界が、獄界との和平で邪魔だというのなら、もう一つ別に『中界』を創れば良い。そ

れを獄界に与えれば、この星は『四界』になり安定する筈です」

現在の人間界を半分に分割し、それを獄界に渡す事も考えたが、それではやはり人間と魔の衝突が起こる。だからこそ私の案が最良だ。だが神は、眉を「ピクツ」と動かす。

「エファロードでありながら、人間に心を奪われたお前に、我の何が解るといふのだ？ 我の考えは絶対であり不可侵なのだ。もうこれ以上、お前の駄弁だべんに付き合う暇は無い！ だが我の責務を阻むのならば、全力を以って相手をしよう！」

初めて神が見せる感情的な姿。「中界」の創造が、余程気に障ったと見える。

「ルナさんっ！」

「ルナー！」

其処に「不動」を自力で解除した二人が戻って来た。私達が進む道は一つ。戦う道！

「私は自分の信じる道を進む。後悔しない為に、そして未来の為に！ 例えこの道が神、否、『父』である貴方に反するものであったとしても！」

私は神剣を構え、切っ先を神に向ける。シエルフィアとリバレスも私に続く。

「私の道はルナさんと共に！ 幸せを創り、理不尽な悲しみを無くす為に戦います！」

「わたしは、生まれた時からルナに育てられた天翼獣。凄く感謝してる。だからこの命尽きるまで戦うわー！」

私達の声が響いた後、不気味な沈黙が空間を支配する。……風が止んだ。

やがて神は無言で笑みを浮かべ、ゆっくりと椅子から立ち上がる。その瞬間、空間自体が激しく振動を始め、晴天は「嵐」へと変化した。篠突しよつく雨、目を開けるのも辛い烈風、そして止め処無く響く遠雷。何よりも恐ろしいのは、立ち上がった神が纏うエネルギー。かつて戦った獄王の「影」とは比べ物にならない。これが、ロードの全力！

「我は絶対神シエドロットとして、ルナリート、お前達の道を砕かねばならない。来るが良。怒り、悲しみ、苦しみ、喜び、憎しみ、慈しみ、愛、信念、お前達の全てを懸けて！」

一際巨大な雷霆らいていが神の右手に降り注ぎ、其処から長さ二mはある大剣が現れる。神剣！  
「シエルフィア、リバレス。行くぞ！」

「はいっ！」

「行くわよー！」

二人に迷いは無い。この瞬間から、未来を賭けた最後の戦いが始まる！

「禁断神術、『滅』！」

私は有りつ丈の力を込めた。直径百mにも及ぶ「滅」が神を捉える！

「なかなかの力だ」

神は微動だにせず、滅を待ち構える。幾ら神でも無傷では済むまい。「シユウウ……」、

滅が神を呑み込む。だが滅が通り抜けたにも関わらず、神は無表情で立っていた！

「無駄だ。私の体には、どのような神術も届かぬ」

神の体が鎧の形をした「滅」で覆われている！ これなら神術だけで無く、物理攻撃すらも掻き消すだろう。だがシエルフィアとリバレスは、それに構う事無く攻撃態勢に入る。

「禁断魔術、『闇』！」

「連続、『滅炎』！」

二人の攻撃もやはり無効化された。神は腕を組み、シエルフィアを注視する。

「まさか人間の娘が、記憶も心も残したまま転生した上に、魔術を使いこなすとはな。愛を主題として生み出したルナリートの恋人だからか、それとも女自体の素質か」

「貴方は何故そんな事まで知っているのです？」

私は神の前に立ち、睨み付けた。神は人間界の事象まで知っているのだ！

「我が知らぬ事は何も無い。この空間から、獄界を除くあらゆる場所を見られるからだ」

「ならば、貴方は人間達を良く知っている筈です！ それでも滅ぼすのですか？」

「我は、神としての責務を遂行するのみ。其処に感情など必要ではない」

全てを知りながら、尚も責務を遂行する。それが神の、父の生まれた意味なのか？ 悲し過ぎる。否、それは私の価値観での判断であって、神の信念とは異なる。何にせよ、私は父を超えるしか無いのだ！

「星を司る力を受けるが良い」

神が静かに口を開いた。その刹那、閃光と衝撃が私達を包む。何が起きた？ 閃光が消え、周囲を確認する。……血塗れだ。私達三人共、全身に切り傷を負って！

「これが、本来の高等神術『光刃』だ」

高等神術なのにこの威力……。それよりも、早く二人を助けなければ！

「シエルフィア、リバレス！」

二人共何とか無事のようにだ。私より僅かに神から離れていたシエルフィアが、ギリギリで「暗幕」を発動させたからだ。暗幕が無ければ、二人は致命的なダメージを受けていただろう。私は直ぐに二人の所に向かう。

「とんでもない威力ですね……。私の魔術で防ぎきれレベルじゃない」

苦笑を浮かべるシエルフィアと、彼女の肩に伏しているリバレス、そして自分自身に対して、私は全力で「治癒」を施し始める。

「戦いの最中に、我に背を向けるとは愚の骨頂だ」

「邪魔をするな！」

私は振り向きざまに剣を振り抜く！ 何故かそれは、途轍も無く重い一撃になった。神の剣と滅の守りを崩し、神自体を遠くへ弾き飛ばす程の。私の精神力を超えた一撃のような気がするが？ 何はともあれ、この隙に「治癒」を終えなければ。

数秒で治癒が完了し、私は二人に声を掛ける。

「もう大丈夫だ。だが神の力は強大で、私にしか相手は出来ないだろう。二人共少し離れていてくれないか？」

「嫌ですよ！ 私はあなたと共に戦えます」

「わたしもよー！ シェルフィア、『あれ』で行きましょう」

リバレスが、シェルフィアの背中に移動し「純白の翼」に変化する。

「これで足手纏いにはなりません、行きましょう！」

「……ああ、行こう！」

二人の力を信じ、私は戦いに専念しよう。そう思った直後、神が再び目前に迫る。

「我に手傷を負わせるとはな。『これ』を受けて見るが良い」

背筋が凍る様な感覚、途轍も無い「力」の集約。これは……

「シェルフィア、『滅』が来る！ 上空へ回避だ」

私達は同時に舞い上がった。出来るだけ遠く、速く！ 上昇しながら見下ろすと、直径数kmに渡って空間が消えていた。其処には雨も風も、空気さえも残っていない！

「ザアア……」

消えた空間とシェルフィアを除いて、視界には斜雨だけが映っている。神の姿が無い。

「此処だ」

背後！ 「ガキーン！」、鈍い音と共に、後ろに振った剣が「固いもの」に止められた。

「何だ、その剣は？ 先刻の一撃は奇跡か」

神が素手で私の剣を止めている！ 掌には掠り傷すら付けられていない。

「くっ、私は貴方には負けない！」

剣に精神力を込め、連撃を浴びせる！ 攻撃力は上がったが、神の守りを破った一撃には全く及ばない。

「お前は神剣の使い方を知らぬようだ。神剣は、こうして使うのだ！」

力の集約……、また「滅」が来る！ 私は咄嗟にシェルフィアを抱えて、神から離れたが「滅」は発動しない。否、それは正確な表現では無い。「滅」のエネルギーがそのまま神剣に吸収されたのだ。神が剣を振るう。

『滅』剣ー！

私はシェルフィアと共に、神の背後に「転送」で逃げた。私の全身を、悪寒が奔ったからだ。その直後、悪寒と自分の行動が正しかったと知る。振られた剣の延長上、数kmの範囲が「消滅」していたからだ。

神剣は、精神エネルギーだけで無く「神術」を吸収する剣。私の一撃が神に届いた時には、「治癒」の力の一部が剣に注がれ、攻撃力の増加に繋がったのだ。

「ルナさんっ、危ない！」

え？ 「ズシャッ！」、何かが引き裂かれる音。

「キヤアア！」

シエルファイアの叫び！ 彼女は私を庇い神に斬られた。肩から腹部にかけて容赦無く！  
「貴様ああ！」

私は、渾身の力と「滅」を込めた剣を神に突き出す！ だが「転送」で避けられた。  
「シエルファイアー！ 傷は深い。わたしが治癒するから、ルナは神を食い止めて！」

私は領き、上空に居る神の元へ飛ぶ！ 彼女を傷付ける者は、絶対に許さぬ！ 自分の中で何かが弾けた。神の記憶、力が完全に自分と融合しているような感覚。

雨と風が止んだ。違う、私が止めたのだ。神を倒すのに邪魔だから。

「創始の神術『光』を剣に乗せる」

私は剣を両手で持ち、意識を集中する。この空間全てを白く染め上げる程の光が生まれ、それが剣に吸収された。剣を持つ手から汗が滲み出る。この一振りは至高の一撃となろう。

「そうだ、それでいい。我も死力を尽くして迎え撃とう」

神の剣にも「光」が宿る。私と神の間には、最早誰も近寄る事は出来ない。如何なる生物でも瞬時に消滅する超空間。「キィイ……！」、剣が発光し高速で振動している。

「行くぞ！」

互いの剣が振られ、光が奔る！

「ゴゴゴゴゴオオ……！」

エネルギー同士の衝突、そして爆発！ 規模は数km、否十km以上。波動があらゆるものを焦がし、溶かし、焼き尽くす！

「余程、あの娘が大事らしいな。「継承」も行われていないのに此処まで強くなれるとは」  
神は立っている！ 左腕が潰れて、上半身は激しい火傷を負っているのにも関わらず。

「私は、彼女の為ならば何処までも強くなれる。父よ……、私は今こそ貴方を超える！」  
気丈にそう叫ぶが、自身の傷も深い。右腕は半分融解して剣を握む事は出来ず、左目も焼かれて視力を失っていた。

「ルナー、大丈夫なの？ シェルファイアは回復したから安心して！」

「ルナさんっ、私達の力の全てを送ります！」

二人の声と「力」が転送で届く。有り難い、これでまだ戦える！

「ルナリート様、これが最後の一振りとなります。我が魂、貴方の為に！」

神剣となった「ルナ草」の声。そうだな、次で最後だ。その一撃の後は、人間界は救われる。愛するシエルファイア、大好きなリバレス、兄さん、友人達と仲良く暮らそう。

「（シエルファイア、帰ったら結婚式を挙げような。リバレス、私の世話をまた焼いてくれよ）」

「（ルナさんっ、必ず。約束ですよ！）」

「（ルナー、世話なら幾らでも焼いてあげるから頑張って！）」

左手一本で握る剣に、「光」を込める。シエルファイア、リバレス、兄さん、そして自分の思いを込めて！

「これが時の変わり目だ、我が息子よ。全てを懸けて、行くぞ！」

「キユイイ……！」

光り輝く二つの神剣。雷も止み、辺りは夕紅に染まっている。紅が白光に変わり、もう直ぐ互いの剣は交差するだろう。だがその後新しい日の出を見るのは……、私だ！

「うおお……！」

精神力を注ぎ込み過ぎて、頭が割れそうだ。意識を保つ事も困難。私を突き動かしているのは、未来を信じる想い！

「我は負けぬ。運命は変えられないのだ！」

神の剣がより眩く輝く！ 私は兄さんの顔を思い浮かべる。力を貸して下さい！

私は剣を振った！ その刹那、神が何故か私に微笑み掛ける。

『第二万三千二百六十四代神。その名はシフトロット・ジ・フンマロード。我の力を借りて、  
【歌名 (Sacred Life)】を伝へて！』

神は剣を投げ捨て、右掌を私に向けた。攻撃じゃ無い。ならば、何をしよう？

「ピカッ……！」

私の剣の波動が神に届く！ 光に包まれる神。轟音の後、訪れる静寂……

「見事だ、ルナリートよ……！」

神が、否、父が夕陽を背に受け倒れる。全身を焼かれ、両目の視力も失っているようだ。

それなのに私は、全ての傷が完治している。父は、最期に私に力を託したのだ。

## 第二十六節 The Heart of Eternity

「何故……、何故なのですか！」

私は父に駆け寄り、その体を支える。力を失い、抜け殻のような痛ましい体……

「これが、『神の継承』だ……。今から、お前が神となる」

「私は、貴方の計画を阻止する為に来ました！ それなのに何故？」

呼吸すら止まりそうな父を、私はギュッと抱き締める。生まれて初めての親子の抱擁ほうよう。伝わって来る温かみは、初めてなのに懐かしく胸を締め付け、涙が溢れて止まらない。

「我は……、孤独だった。我だけでなく、以前の神も同様に。我は……、孤独に生きた自分の代わりに、誰かを愛し、幸せと感じて生きて欲しいと願い、お前達を産んだのだ」

見えない目を薄く開け、私の顔を触りながら微笑み掛ける。初めから貴方は、私に倒される事を願っていたと言うのですか？

「父さん、直ぐに治すから動かないで下さい！」

「無駄だ……。『神の継承』を行った今、我を救う手立ては最早無い。お前達は『愛』を求

め生きてくれた。それだけで、私の人生には意味があったと言える。だが、ハルメスに死ぬ前に一度だけ会いたかった……。息子と親が同時に死ぬなど、親不孝の極みだ」

何を……？ 死ぬ、誰が。まさか！ 紅の空に、「遺跡」が映し出される。これは「輝水晶の遺跡」の最深部。祭壇の前に佇むのは……、兄さん！

「ふ……、親父も、最後に俺の姿が見たかったのかい？」

兄さんの足元には巨大な血溜まり！ 兄さんは胸から血を流しているのだ。深い深い傷、いつ死んでも可笑しくないだろう。どうして？

「ルナ、悪いな。約束は守れないぜ……。後の事は宜しく頼んだ。冥界の塔は、人間の魂の代わりに、俺の命で封鎖させる。シエルファイアといつまでも……、仲良くな」

「兄さん、止めて下さい！ お願いだから」

帰ったら、四人で「新世界」を祝うって約束したじゃないか！ 私は喉が張り裂ける程に声を上げるが、兄さんは微笑むだけだ。

「ルナ……、そんな悲しい顔をするなよ。もう目も見えないが、お前の顔ぐらい俺には解るんだぜ。俺の命はこの装置の作動と共に散るが、魂は消えない。ティファニーと共に、『魂界』へ行くだけだ。だから心配するなよ。唯……、会えなくなるだけだ。これが俺の生まれた意味。ティファニーを愛し、獄界を閉ざす事が」

想いが無数に顕れて来るが、どれも言葉にならない。私は涙を拭う事も出来ず、唯兄さんを見詰める事しか出来ない。

「ルナ、シエルファイア。またな……」

「兄さん、兄さああ……ん！」

私は兄さんの下まで飛んだが、映し出された兄さんは空から消えた……

泪で何も見えない。私はその場に崩れ落ちた。シエルファイアとリバレスが近寄って来る。

「ルナさん、泣かないで下さい。きっと……、皇帝が悲しみます。私達は前を見ないとダメなんです」

彼女も辛い筈なのに、私の背中を擦ってくれる。私は手の甲で涙を拭い立ち上がった。そして、父の元へと走る。呼吸も拍動も弱々しい……

「……お前達は良くやったな。我に、『もう一つの中界』を創る余裕は無かった。神が子を遺すのは、己の死の間際なのだから。我は当然、人間達の直向きひたむきを知っている。それでも表向きは計画を実行させる必要があった。そして計画実行の前に、ルナリートとハルメスが自分を倒しに来ると信じていたのだ。事実、お前達は勝利した」

やはり……、父は最初から自分を犠牲にするつもりだったのだ。神としての責務を果たしながらも、私と兄さん、人間達の幸せの為に！

「父さん……、今更そんな事はどうだっていい。死んじゃ駄目だ！」

温かい手が、私の頭を撫でる。また目から雫が零れ始めた。……止まらない。

「……心配するな、ルナリート。我々の事は、心の片隅で覚えておくだけで良い。その心は『永遠』だからな。……この後、世界をどうするかはお前が決める。まずは、あの椅子に座るかどうか」

父が座っていた椅子。神の継承を受けた自分には解る。あの椅子の意味が。あれは、天界にエネルギーを送る椅子。神はあの椅子に座り、S・U・Nのエネルギーを受けるのだ。

「あの椅子はもう必要ありません。天界は、本日を以って人間界と同化します」

天使も人間も同じ魂を持つ。冥界の塔も、兄さんが命を懸けて封じてくれた。だから、天界を維持する理由は何一つ無い。

「そうか、運命を変えるのだな。それも良かろう。今日が歴史の変わり目となる。ESGを撰取出来ない天使は、やがて力を失い人間と同化していく事だろう。それでも、お前とシエルフィアは力を失わない。二人で人間界を支えてくれ。そろそろ……、時間だ。我もハルメスの元へ……」

父さんが腕の中で、砂塵と化し消えていった。私の涙を吸い取りながら……。最期に見せた顔は、紛れも無く一人の父親の優しく穏やかで、気高い顔だった。

「必ず、良い世界を創ります！」

シエルフィアが私の手を握り締める。私は、それに優しく微笑んだ。

「これから大変になるだろうけど、シエルフィア、君が居れば大丈夫だと思う。全ての人々の幸せの為に、何より私達の幸せの為に生きよう！ 帰ったら、式を挙げような」

彼女は久々に見る満面の笑みで、私に抱き付いた。私は彼女の髪を何度も撫でる。

「リバレス、お前もこれからずっと宜しく頼むよ」

何気無く、宙に浮かぶりバレスの顔を見て、私は言葉を失った。長年の付き合いの中で、一度も見つた事のない表情……。とても穏やかで、風の無い水面のような微笑み。

「良かったわねー。ルナ、シエルフィア……」

「そんな顔をしてどうしたんだ？」

彼女は、緩やかに私とシエルフィアの周りを舞った後、私の顔の前で止まった。

「……今までありがとう。ルナと一緒に生きられて良かった。そして、ルナには大切な人が出来たから、わたしは笑ってサヨナラ出来る……」

「何を言ってるんだ！ 変な冗談はよせよ」

私はリバレスを捕まえようと手を伸ばすが、彼女は飛び回って逃げる。

「わたしは『天翼獣』。天界で生まれ、天界と共に消えるの。わたしはその事を知ってたわ。ハルメスさんと約束したの……。ルナとシエルフィアを幸せにしようって」

ずっと前から二人は死ぬつもりだったのだ。なのに、私は何も気付かなかった！

「リバレスさん、行かないで！」

「私がああ椅子に座れば、お前は救われるんだろ？」

私は椅子に向かって歩き出した。だが、リバレスが私の顔に張り付き動きを止める。

「そう言うと思った。だからわたしは、あの椅子の破壊方法をヘルメスさんに教わったの」

リバレスが特殊な神術を発動させ、椅子は跡形も無く消えた。

「ルナは優しいからねー……。でもこれで、ルナは此処で独りになる事はないわ」

「リバレス……。お前は最高のパートナーなんだ。行くなよ！」

お前が生まれた時から、私達はずっと一緒だった。なのに、いきなり別れなんて！

「ルナー、ありがとう。今まで楽しかったわ。私は、ルナの事死んでも忘れない。だから少しだけ……。肩の上に座ってもいい？」

「……ああ。お前の好きなだけ、座ってるといいよ」

私とリバレスは、二人で同じ方向を見た。互いの泣き顔を見ないように。

「わたしは、此処が一番好きなのー。でも……。今度生まれ変わる時は人間がいいな」

「リバレス……。さよならは無しだ。必ず、また会えるからな」

指で彼女の頭を撫でようとすると、指が彼女を通り抜けた。消え掛かっている……

「うん、それじゃー起こしてくれるのを待ってるから……。おやすみなさい」

彼女と目を合わせる。まるで、眠っている赤子のような安らかな顔だった。

「おやすみ……」

やがて、私の肩が軽くなったのを感じた時……。それが暫くの別れだと気付いた。

「うわああ……!!」

辺りは夜闇に包まれ、私とシエルフィアはぼんやりと、全方位で瞬く糠星を眺めていた。手を繋ぎ、肩を並べ、言葉を発する事も無く。失ったものは余りに大きく、心にはポツカリと穴が開いたようだ。……。それでも、私達は生きる。愛してくれた人達の為にも。

「シエルフィア……。愛してるよ。誰よりも幸せになろうな」

兄さんも父さんも、リバレスも私達の幸せを願ってくれたんだ。私はシエルフィアを優しく、それでも強い想いを込めて抱き締めた。

「はいっ。ルナさん、大好きです。思い描いて来た夢を、これから叶えていきましょね！」

私は彼女を抱き上げて、口付けをする。淡く儂げな蒼い月華を浴びながら。

淡雪が静かに私達に舞い落ちる。まるで、心の隙間をそっと埋めるかのように。

夢を抱き、夢の為に全てを捧げる覚悟があるならば、必ず叶う日は訪れる。

私は迷わず舞へ舞へ。永遠の心を持って。大切な人の想いを背負って。

人に「心」がある限り、私達の物語は終わらなぬ。

## Epilogue

心、それは自分を強くするもの、そして時に脆いもの。人は一人では孤独だ。だから心を持ち、誰かと寄り添うのかも知れない。「永遠の心」、それを持つ事が出来た私は幸せだ。

リバレス、兄さん、父さんと離れてからもう二年の歳月が流れた。天界は人間界と同化し、天使達も力を失いつつある。人間界は、兄さんに代わって私が治める事になった。

初夏の陽射しが降り注ぐフィグリル城。その玉座に私はそわそわしながら座っている。

「皇帝、ミルドを治めているセルフアス様とジュディア様がお見えになっておりますが、如何致しましょう？」

「ああ、通してくれ」

私はフィグリル皇帝となり、セルフアス達には主要な街を守って貰っている。兵が走り、二人を招き入れた。二人の顔を見る限り、相変わらず元気で仲良くやっているみたいだな。

「ルナ、久し振りだな。と言っても、一ヶ月振りだが」

「おめでどう！ 主役のシエルフィアの姿が見えないみたいだけど？」

二人共、随分気が早い。私は俯いて照れ隠しに頭を掻いた。

「そろそろ……、だから今はゆっくり休んで貰ってるんだ」

二人が顔を見合わせ頷く。その直後、もう一人見知った友が駆け込んで来た。

「ルナリート君、おめでどうございます！」

「まだ早いよ、ノレッジ！ 皆も、今日はこの城でゆっくりしていつてくれ」

自分の顔が火照っているのが解る。三人共、笑いながら客室へと向かった。

「さてと……、シエルフィアの所に行かないとな」

私は王座を離れ、寝室へと急いだ。

「ルナさん、心配掛けてごめんね」

シエルフィアが目元を潤ませながら私の手を握る。この二年で彼女はもう敬語を使う事は無くなったが、「ルナさん」だけは直らない。

「気にする事はないさ。シエルフィアはゆっくりしていればいいよ」

「うん……。でも、今日はずっと此処に居て欲しいの」

私は頷き、彼女の頬にキスをする。彼女は不安なのだ、初めての事だから。彼女の髪をそっと撫で、幾度も励ましている内に、彼女は眠ってしまった。穏やかな寝息と共に。

夜が訪れ、私は風に靡くカーテンを開いた。仄かな月明かりの下、彼女の手を握る。

「ルナさん……、うっ！」

突然、シエルフィアが呻き声を上げた。遂に待ち焦がれた瞬間が訪れるのか？

「シエルフィア、大丈夫だ。頑張れ！」

ギョツと手を握り締めた後、私は待機していた数名の女性を呼んだ。その後は彼女達の

邪魔をせぬよう、傍で見守っているしか無い。気が遠くなるような時間が過ぎて行く。

朝陽が昇り始め、光が窓から零れ出した。その時、新しい生命の聲が世界に響く。

「おぎやあ、おぎやあー!」

私とシエルフィアに待望の子供が生まれたのだ。可愛い女の子……。長い歴史の中で、エファロードと人間との間に生まれた最初の子だ。

「シエルフィア、よく頑張ったな。ありがとう!」

私は思わず涙を零した。だがシエルフィアは、喜びに満ち溢れた最高の笑顔だ。

「永遠の心が、形になって現れたの。大切な宝物、ずっと一緒に育てていこうね!」

私は泣きながら何度も頷く。愛しくて仕方が無い、シエルフィアも我が子も。助産師の女性が、我が子に柔らかい布を着せてシエルフィアに抱かせた。シエルフィアは微笑みを絶やさずに、優しく擦っている。

「私にも触らせてくれよ」

そう言っ、私は自分の子に触れた。今にも溶けそうな程柔らかい。そして、とても不思議な気持ちになった。私はもう父親なのだ。

「シエルフィア……」

シエルフィアが、私の耳にそっと囁いた。一体？

「この子の名前よ。ずっと……、考えていたの」

彼女は私の方を見てニッコリ笑う。もう名前を考えていたんだな、私には内緒で。少し驚いたが、嬉しい。それにその名前は……。念の為訊いてみるか。

「いい名前だな。でも、その名前の由来は？」

「それは、自分で考えて下さい!」

彼女は少し脹ふくれている。やはり思った通りか。私は彼女の耳に、答えを囁く。

「……当たり前! やっぱリルナさんっ、大好き!」

シエルフィアが私の頬にキスをした。周りに大勢の人が居ると言うのに……。きっと、私の頬は夕陽よりも紅く染まっている事だろう。

「おめでとー!」

皆が祝福してくれる。

もう「悲劇」は終わったのだ。後は幸福に生きるだけだ。「永遠」と共に――